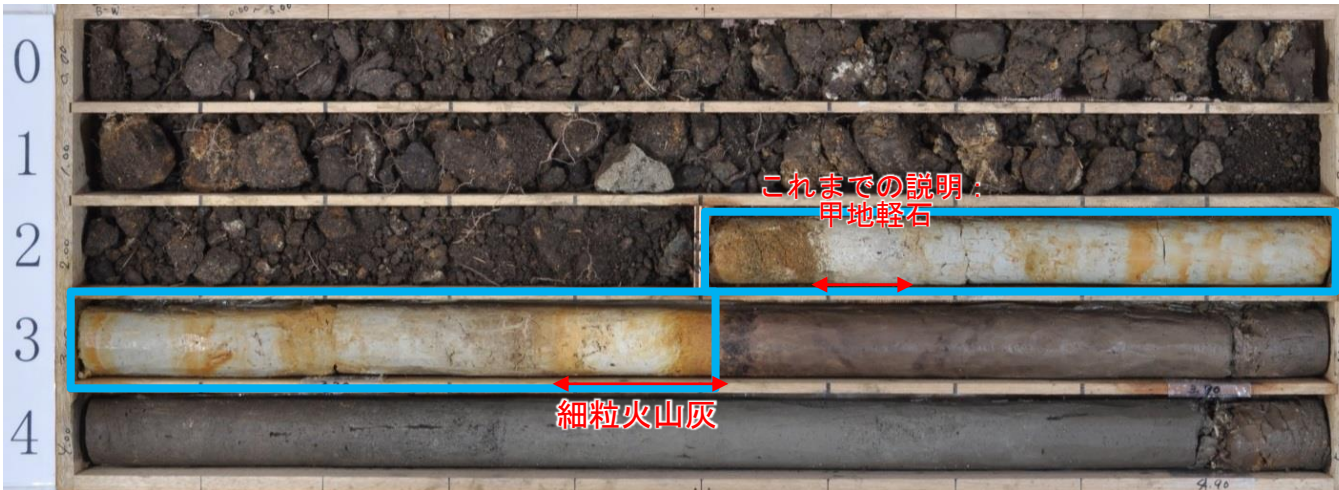


4.2 降下火砕物の層厚

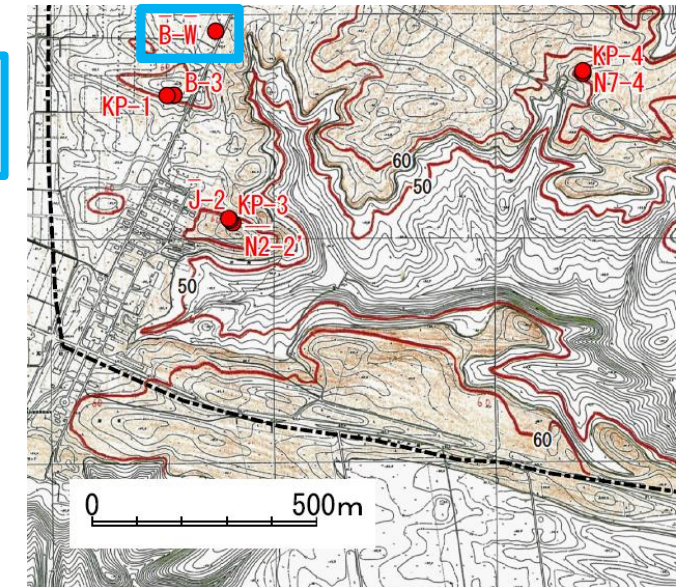
4.2.2 甲地軽石⑳

($\bar{B}-\bar{W}$ 孔のコア観察結果)

$\bar{B}-\bar{W}$ (掘削深度 : 0.00~5.00m, 孔口標高 : 54.99m)



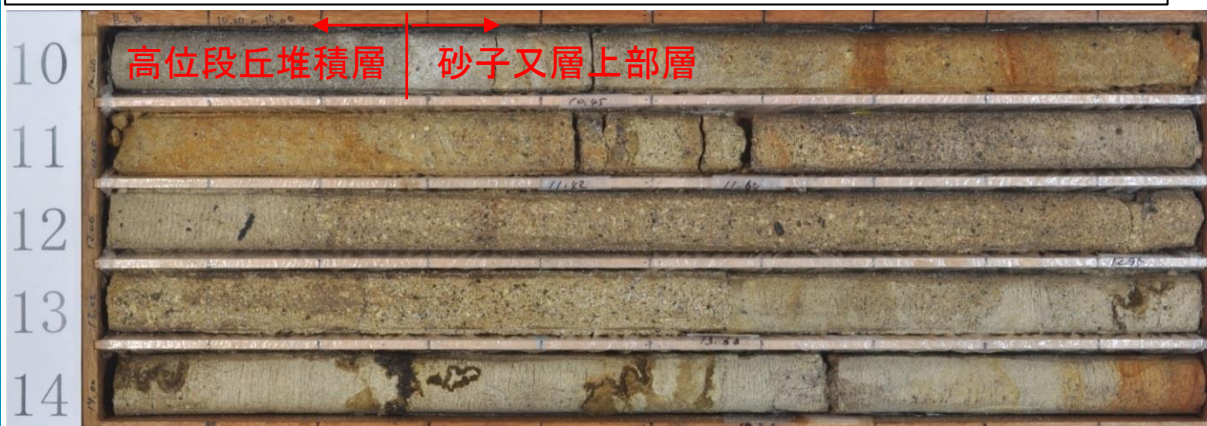
第290回審査会合
コメントの範囲



$\bar{B}-\bar{W}$ (掘削深度 : 5.00~10.00m, 孔口標高 : 54.99m)



$\bar{B}-\bar{W}$ (掘削深度 : 10.00~15.00m, 孔口標高 : 54.99m)



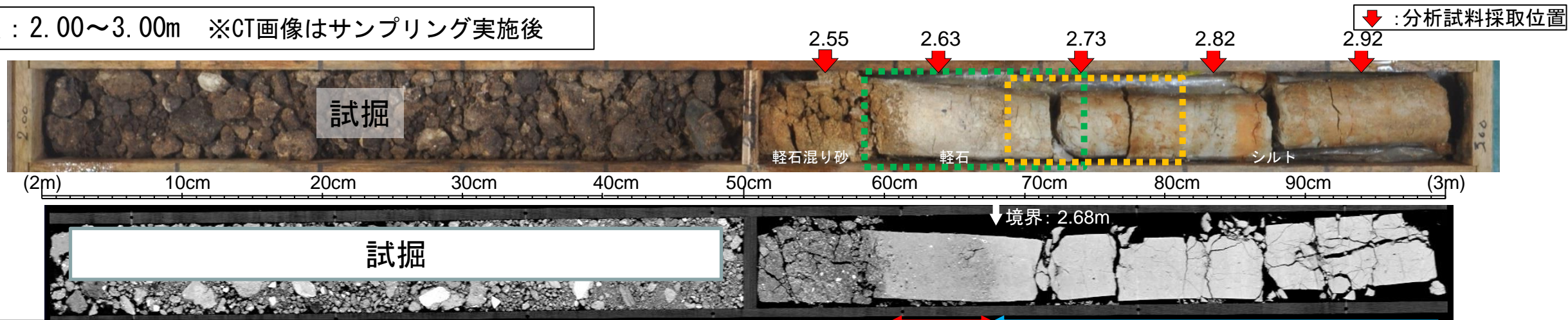
- 深度2.60m~2.68m
: 灰白色の風化した軽石からなる。
- 深度2.68m ~3.36m
: 灰色のシルトからなる。一部褐色を呈する。
- 深度3.36m ~3.52m
: 灰白~褐色の細粒火山灰からなる。

4.2 降下火砕物の層厚

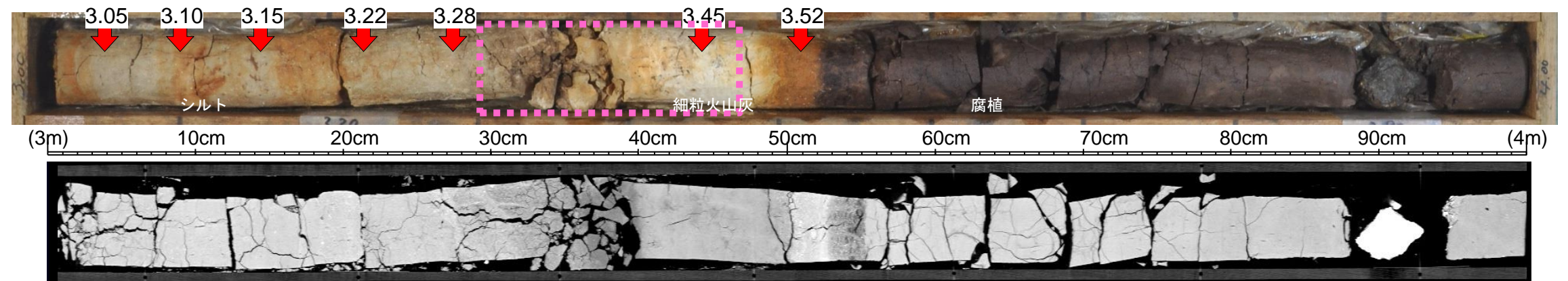
4.2.2 甲地軽石⑳

(B-W孔のCT解析結果)

深度：2.00～3.00m ※CT画像はサンプリング実施後



深度：3.00～4.00m ※CT画像はサンプリング実施後



- 肉眼によるボーリングコア観察では、強く風化した軽石層とシルト層、その境界が確認される。
- シルト層下部と細粒火山灰層の境界はコア崩壊により不明瞭となっているが、層相が両者で異なる。
- CTスキャンを実施した結果でも、CT画像において深度2.68mを境に軽石層とシルト層の密度差が存在する。また、深度3.40～3.50m(細粒火山灰)はそれより上位のシルト層と比べ低密度である。

CT画像設定
WL:300 WW:2500
スライス厚:0.5mm

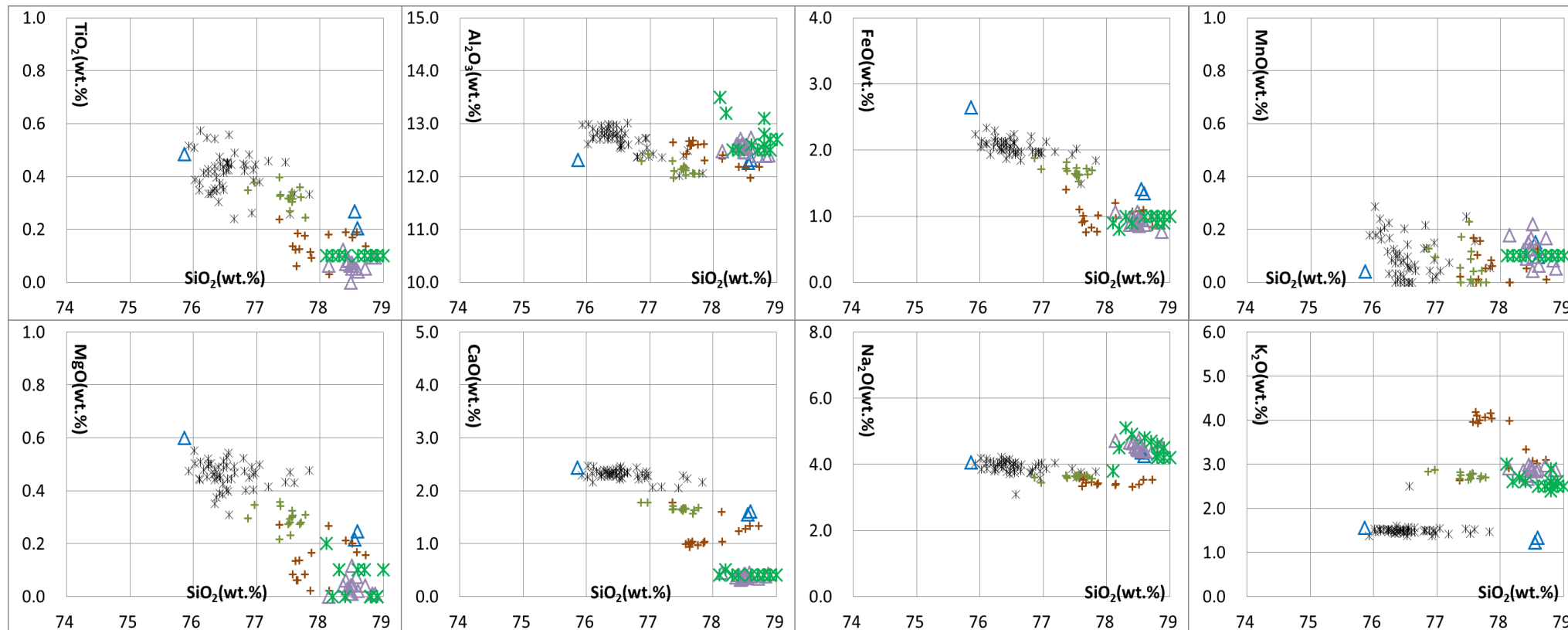
4.2 降下火砕物の層厚

4.2.2 甲地軽石^②

(B-W孔の火山灰分析結果)



深度 (m)	柱状図	試料名称	テフラ名	顕微鏡観察結果			屈折率測定結果		
				鉱物構成 (300 粒子中) (個数)	鉱物構成 (岩片等を除いた割合) (%)	特記事項	火山ガラス (nd)	斜方輝石 (γ)	ホルンブレンド (n2)
		B_-W_2.63	軽石 (風化)			わずかに火山ガラス, 斜方輝石, 単斜輝石含む	(含有量極少)		(含有なし)
		B_-W_3.45	細粒火山灰			角閃石 わずかに含む		(含有量極少)	
		町田・新井 (2011)	洞爺火山灰			斜方輝石, 単斜輝石, 角閃石, 石英			



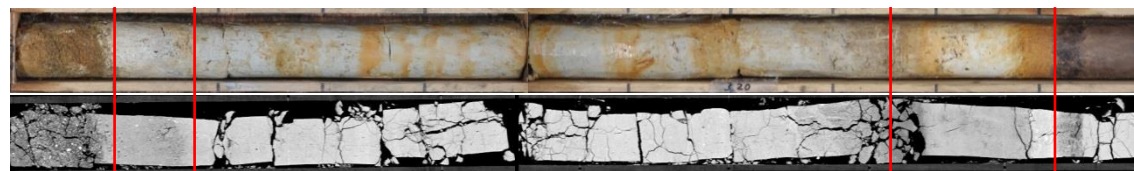
- 深度2.63mでは斜方輝石と単斜輝石を含み、ホルンブレンドを含まない。
- 火山ガラスは、強く風化を受けており、屈折率測定は実施できなかった。主成分化学組成では、組成が広く分離した。
- 深度2.60m～2.68mの軽石層は、強く風化を受けており既知テフラとの対応関係は不明である。
- 一方、深度3.45mの細粒火山灰の分析結果は洞爺火山灰(町田・新井, 2011)の分析結果と概ね整合的である。
- 従って、洞爺火山灰より上位に位置する深度2.63mの軽石は甲地軽石とは異なると判断した。

4.2 降下火砕物の層厚

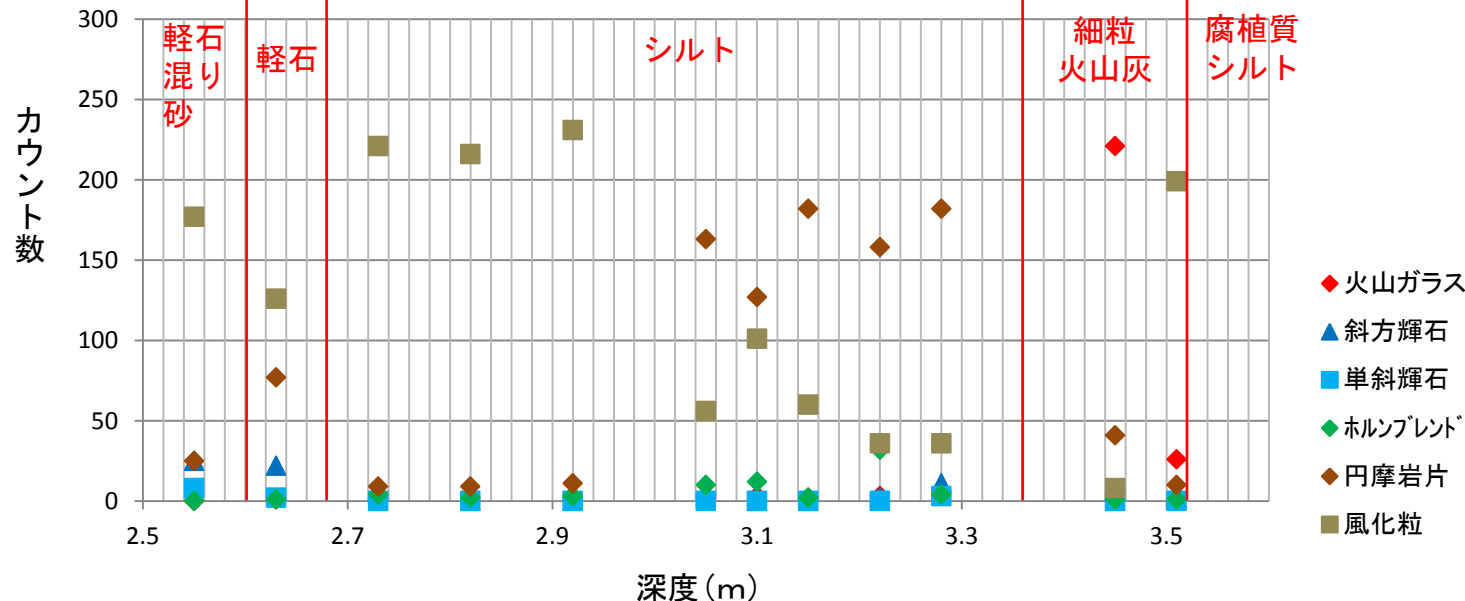
4.2.2 甲地軽石②⑥

(B-W孔の顕微鏡観察による構成粒子判定)

採取深度 単位：m		(軽石混り砂)	(軽石)	(シルト)	(シルト)	(シルト)	(シルト)	(シルト)	(シルト)	(シルト)	(シルト)	(細粒火山灰)			
		2.55	2.63	2.73	2.82	2.92	3.05	3.10	3.15	3.22	3.28	3.45	3.51		
粒子構成 ／ 鉱物組合せ	甲地軽石に 含まれる本 質的（初生 的）な粒 子	火山ガラス	0	1	1	2	2	3	3	2	3	6	221	26	
		長石	50	61	44	53	34	36	33	25	31	24	22	34	
		斜方輝石	25	22	0	0	0	3	0	0	2	11	0	1	
		単斜輝石	8	2	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0
		不透明鉱物	8	5	2	3	2	3	1	1	4	3	0	3	
		新鮮で 角ばった 火山岩片	5	4	1	0	0	0	0	0	0	0	0	2	1
	甲地軽石の 噴火に直接 由来しない 異質粒子	石英	1	1	13	11	15	24	22	25	29	24	5	23	
		ホルンブレンド	0	1	4	2	3	10	12	2	32	4	1	1	
		その他鉱物 及び円摩さ れた鉱物	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	
		円摩された 岩片	25	77	9	9	11	163	127	182	158	182	41	10	
		風化粒	177	126	221	216	231	56	101	60	36	36	8	199	
		生物由来粒 子	0	0	5	4	2	2	1	3	5	7	0	2	
合計		300	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300	300		



WL:300
WW:2500
スライス厚:0.5mm



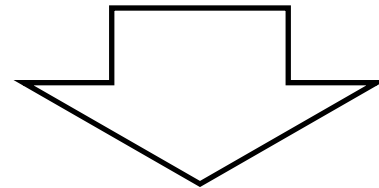
- 顕微鏡観察結果によれば、全体に渡り風化粒が多い。
- 2.63mの軽石層には風化により火山ガラスを殆ど含まないが、斜方輝石および単斜輝石を含み、石英およびホルンブレンドは殆ど含まない。
- これに対し、2.73m以深では、斜方輝石および単斜輝石は殆ど含まず、石英・ホルンブレンド・生物由来粒子を有意に含む。
- 3.45mおよび3.51mの分析結果は、火山ガラスに富む。

4.2 降下火砕物の層厚

4.2.2 甲地軽石⑳

(B-W孔のまとめ)

- ご指摘の2.50m～3.51mの範囲のボーリングコア観察およびCT画像では、強く風化した軽石層とその直下のシルト層、下位の細粒火山灰とそ直上のシルト層は、その境界が層相および密度の違いから識別可能である。加えて、顕微鏡観察の結果、軽石層とシルト層と細粒火山灰はそれぞれ異なる粒子構成からなる。
- 本孔において、深度2.60m～2.68mの甲地軽石と認定していた箇所では火山灰分析を実施した結果、強く風化を受けており既知テフラとの対応関係は不明である。
- 深度3.36m～3.52mに挟在する細粒火山灰を分析した結果、洞爺火山灰に対比され、これより上位の軽石層は甲地軽石には対比されないことが分かった。



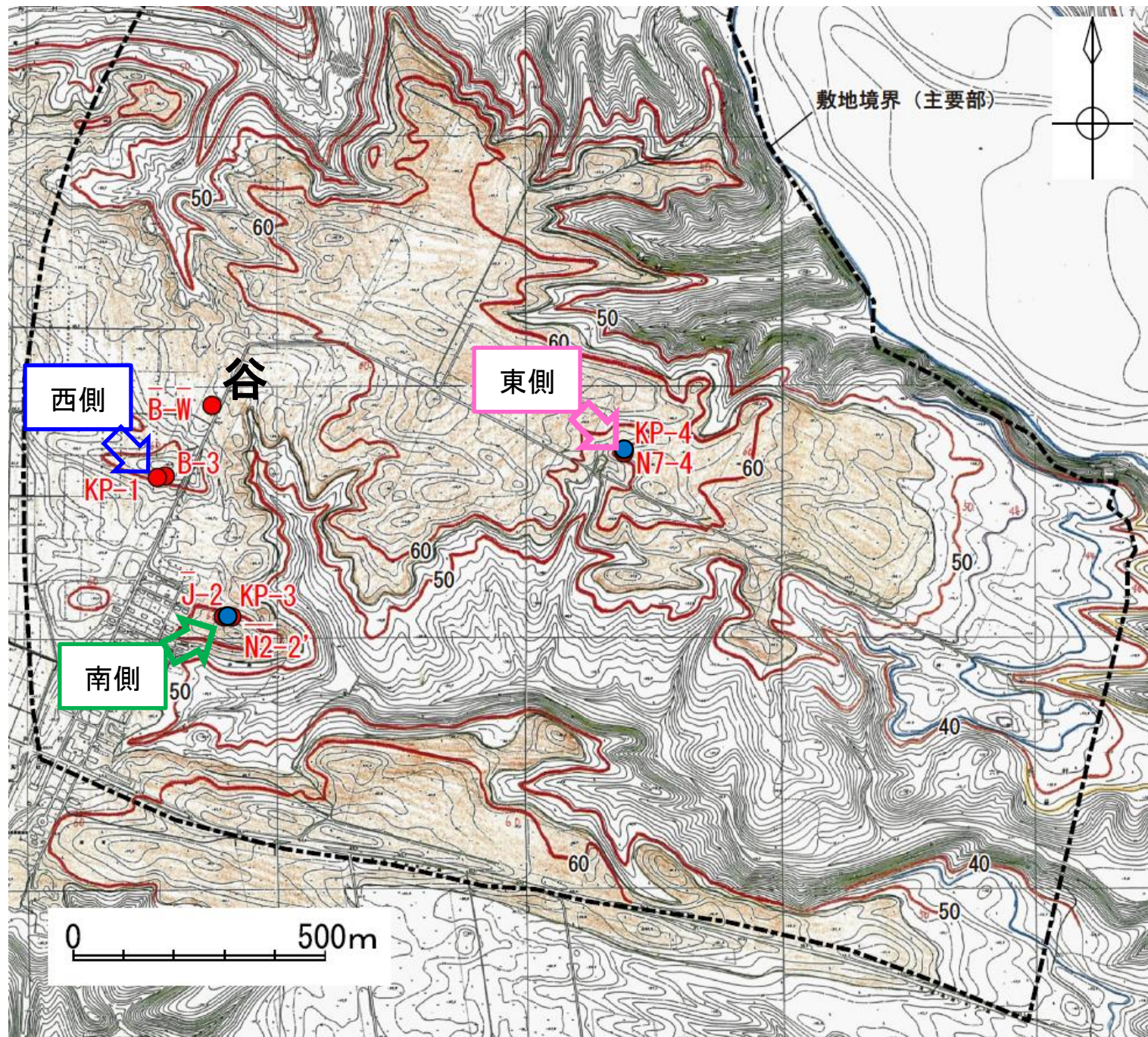
- 甲地軽石は認められなかった。

余 白

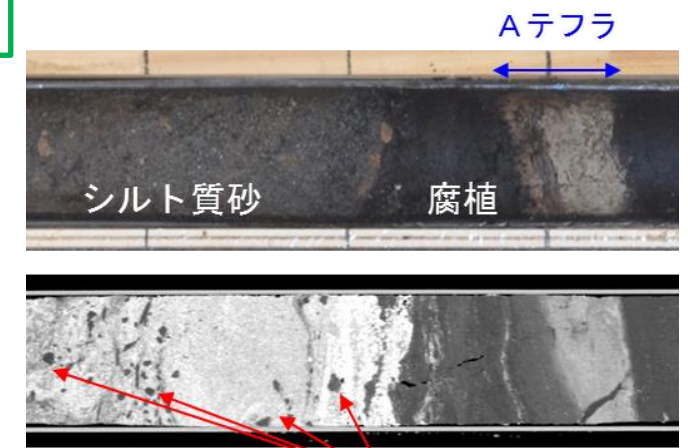
4.2 降下火砕物の層厚

4.2.2 甲地軽石⑳

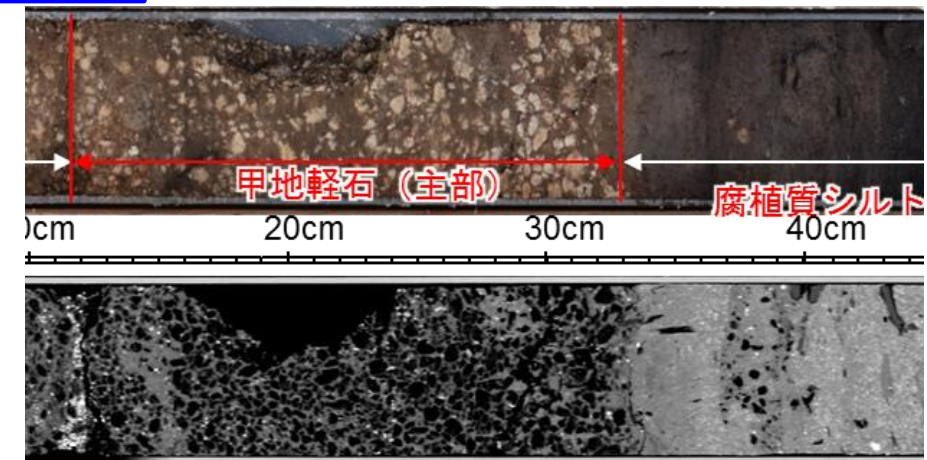
(各ボーリング孔における甲地軽石の堆積環境)



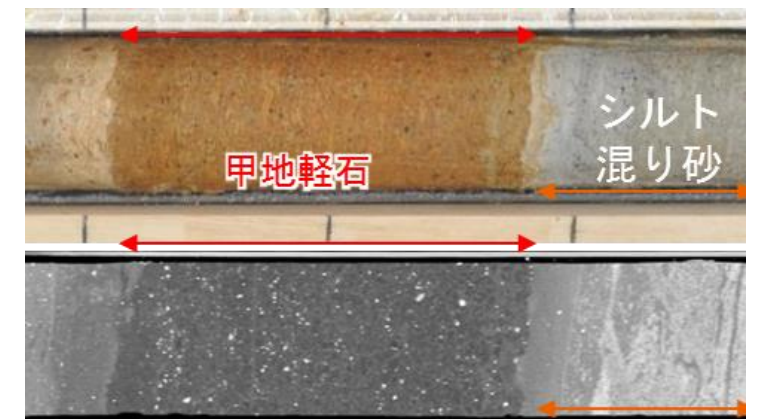
KP-3



KP-1



KP-4



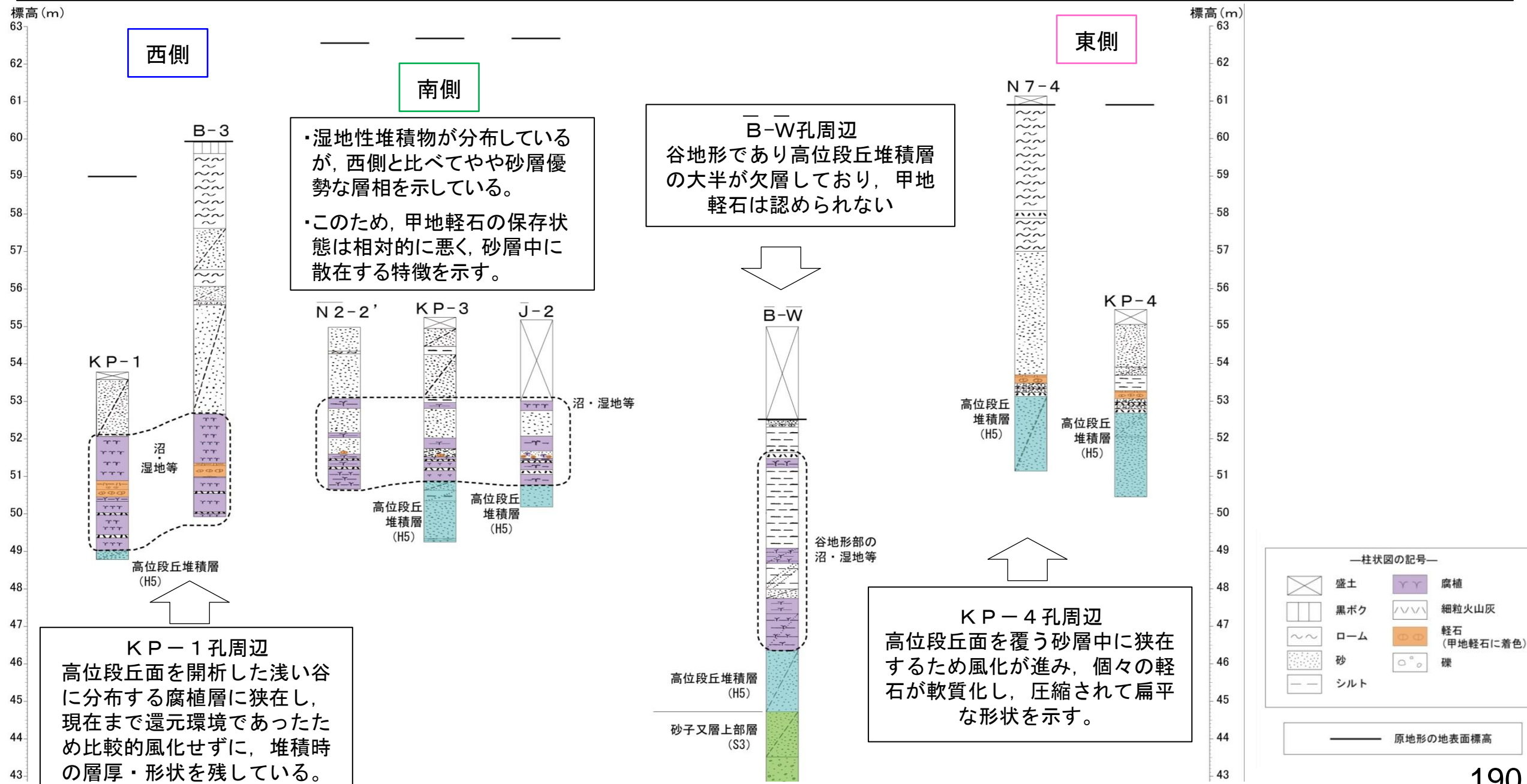
敷地内ボーリング位置図
(敷地造成前の原地形, 着色部はH₅面)

4.2 降下火砕物の層厚

4.2.2 甲地軽石^②

(各ボーリング孔における甲地軽石の堆積環境)

- 敷地東側のN7-4孔・KP-4孔周辺では、甲地軽石はその上下の堆積物との層序関係から、高位段丘堆積層(H₅面堆積物:砂層)堆積後の離水した環境で堆積したことが示唆される。このため、敷地周辺陸域の露頭において広く観察される性状と同様、甲地軽石は通常の風化の影響により酸化が進行し、褐色化・軟質化するとともに軽石が潰れて扁平な形状を示している。
- 敷地西側のKP-1孔やB-3孔周辺では、甲地軽石は腐植層中に挟在していることから、後背湿地等の環境下で堆積したことが示唆される。このため、還元的环境によって酸化による風化が進行せず、初生的な粒子形状を維持しているものと推察される。
- 敷地南側でも、敷地西側で確認される腐植質な湿地堆積物が分布しているが、西側と比べてやや砂層優勢な層相を示している。このため、甲地軽石の保存状態は相対的に悪く、砂層中に散在する特徴を示す。
- B-W孔周辺は高位段丘堆積層を浸食する谷地形をなしており、甲地軽石は認められない。



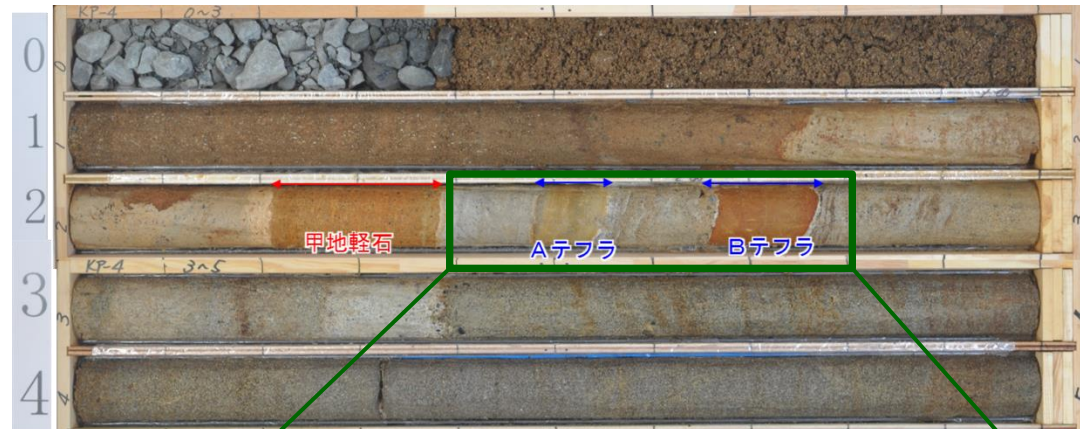
4.2 降下火砕物の層厚

4.2.3 甲地軽石以外の降下火砕物

〔給源不明な降下火砕物Aテフラ, Bテフラの産状〕

R1.7.12
資料1-1
p169 加除修正

【KP-4孔(Aテフラの最大層厚を確認した地点)】

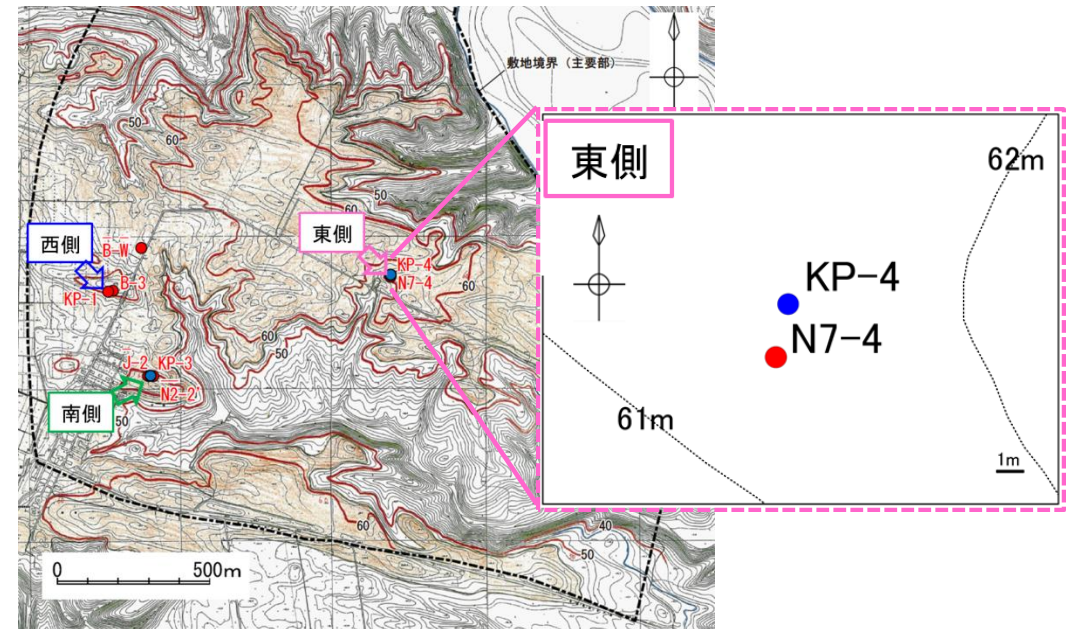


※N7-4孔の近隣(1m北)でボーリング調査を新たに実施(敷地造成により甲地軽石の出現深度が異なる)

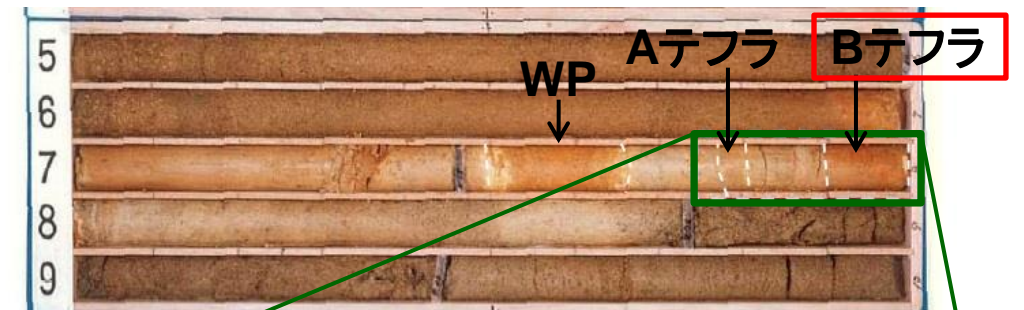


＜Aテフラの産状＞

- ・WP(甲地軽石)の下位に確認される
- ・確認標高は約52.9m
- ・層厚は約7cm
- ・細粒火山灰層である



【N7-4孔(Bテフラの最大層厚を確認した地点)】



＜Bテフラの産状＞

- ・WP(甲地軽石)の下位に確認される
- ・確認標高は約53.0m
- ・層厚は約11cm
- ・著しく粘土化した火山灰層である

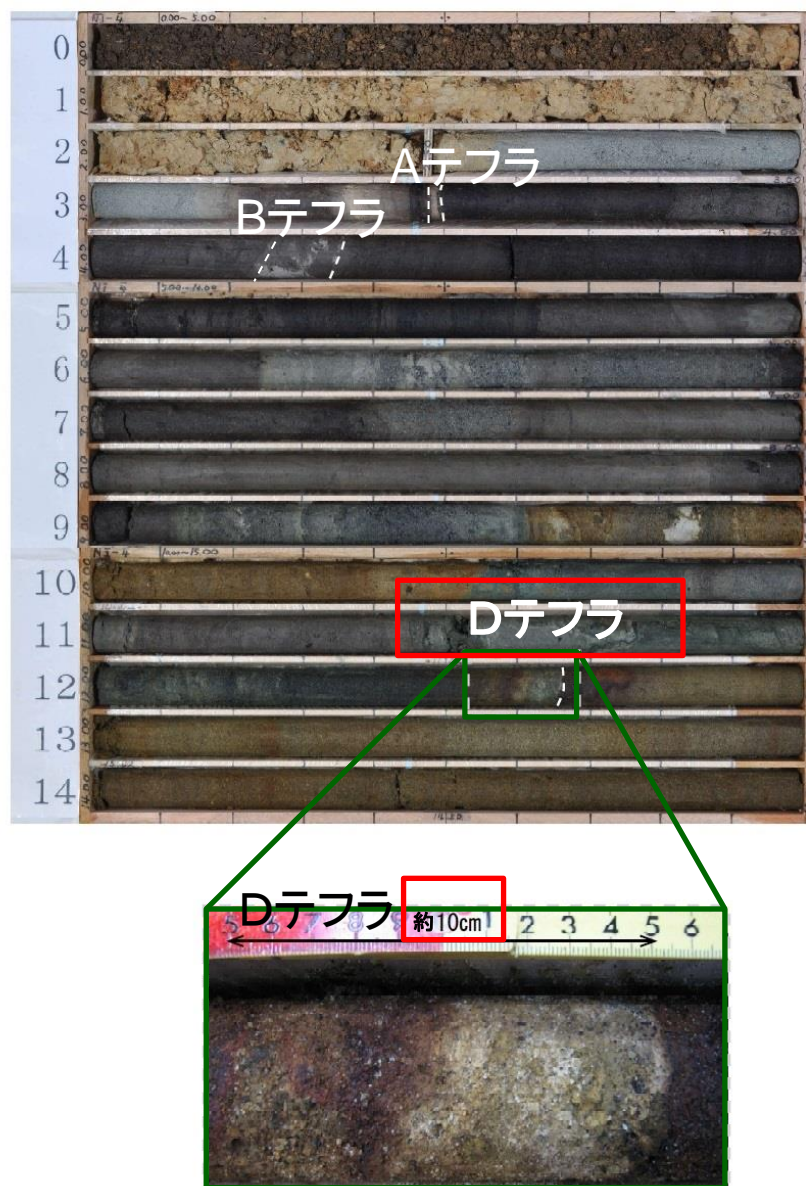
4.2 降下火砕物の層厚

4.2.3 甲地軽石以外の降下火砕物

〔給源不明な降下火砕物Cテフラ, Dテフラの産状〕

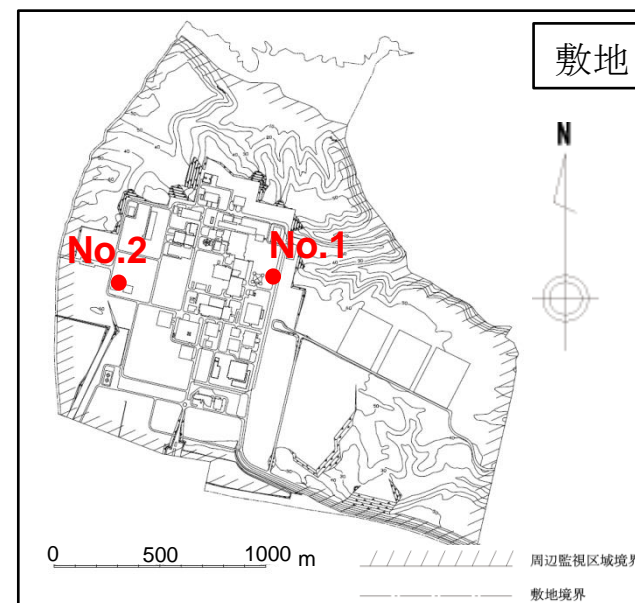
R1.7.12
資料1-1
p170 加除修正

【No.2地点(Dテフラの最大層厚を確認した地点)】

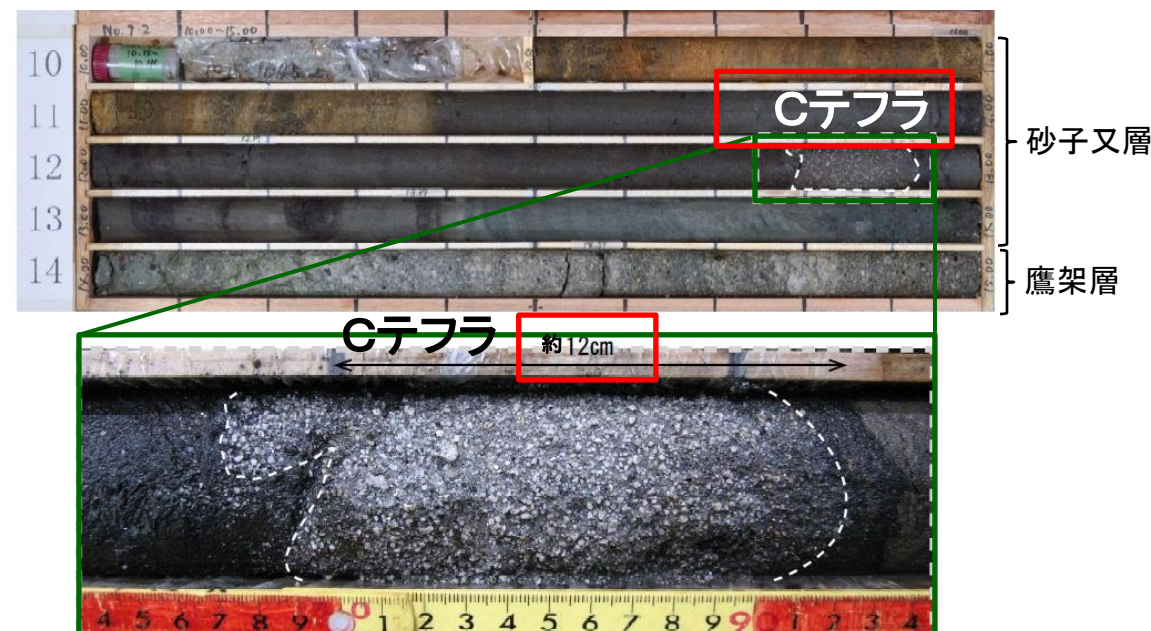


＜Dテフラの産状＞

- ・AテフラとBテフラの下位に確認される
- ・確認標高は約42.0m
- ・層厚は約10cm
- ・粘土化した軽石層



【No.1地点(Cテフラの最大層厚を確認した地点)】



＜Cテフラの産状＞

- ・砂子又層中に確認される
- ・確認標高は約42.3m
- ・層厚は約12cm
- ・軽石質粗粒火山灰からなる

4.2 降下火砕物の層厚

4.2.3 甲地軽石以外の降下火砕物 (支笏カルデラ)

R1.7.12
資料1-1
p171 加除修正

支笏カルデラに関する評価

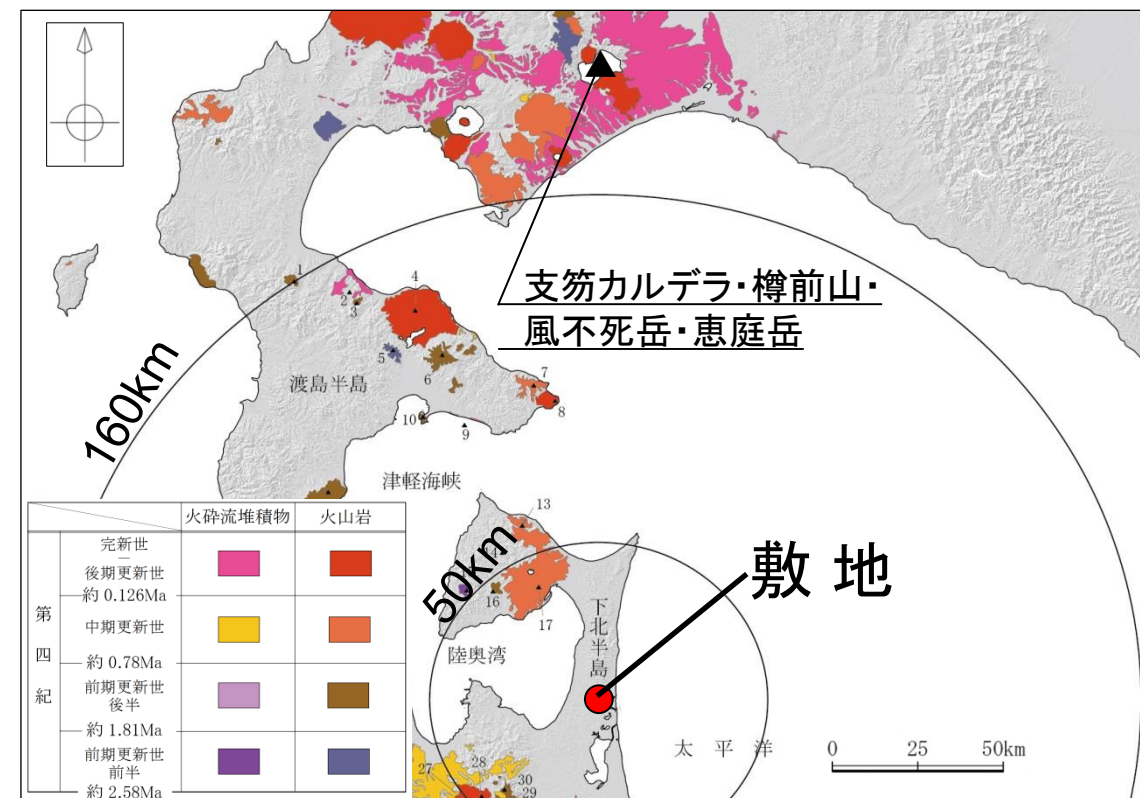
火山名	・カルデラ火山 支笏カルデラ ・後カルデラ火山 樽前山, 風不死岳, 恵庭岳
敷地からの距離	約201km(支笏カルデラ), 約192km(樽前山), 約195km(風不死岳), 約204km(恵庭岳)
火山の形式	カルデラ, 火砕流, 火砕丘, 溶岩ドーム, 複成火山
活動年代	支笏カルデラ 5 ~ 4万年前 風不死岳 4 ~ 0.46 or 0.45万年前 恵庭岳 1.5 ~ 0.02万年前 樽前山 0.9万年前 ~ AD1981

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

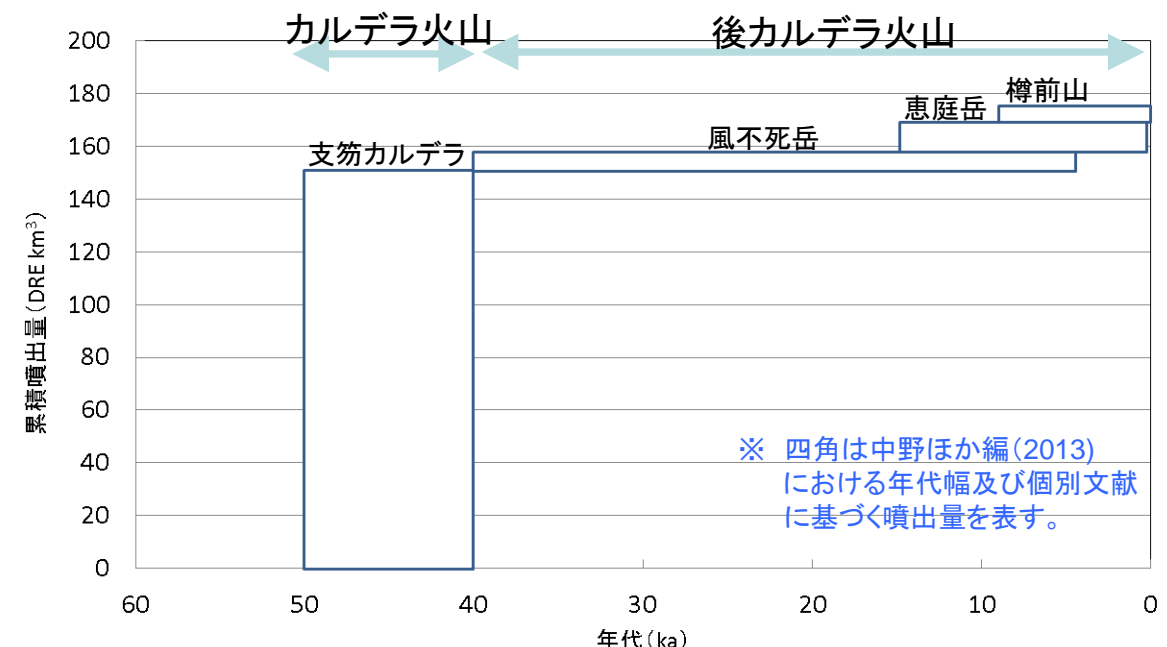
支笏カルデラ・風不死岳・恵庭岳・樽前山の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
AD.1981	後カルデラ火山	樽前山	1981年噴火 Ta-d 等	古川・中川(2010) 山縣(2000) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 古川・中川(2009) 古川ほか(2006) 中川(1998) 土井(1957)
9 ka		恵庭岳	オコタンペ湖溶岩 En-a 等	
15ka		風不死岳	Fp4 大崎集塊岩 等	
40ka	カルデラ	支笏カルデラ	支笏火砕流 (Spfl) 支笏降下軽石 (Spfa) 等	
50ka				

- 現在は後カルデラ火山の活動が継続していることから, 巨大噴火に伴う支笏第1テフラ (Spfa-1) と同規模の噴火の可能性は十分小さい。
- また, 町田・新井(2011)によると, 後カルデラ火山の活動に伴う敷地周辺における降下火砕物の分布は示されていない。



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



支笏カルデラ・樽前山・風不死岳・恵庭岳の噴出量一年代階段ダイアグラム

4.2 降下火砕物の層厚

4.2.3 甲地軽石以外の降下火砕物 (洞爺カルデラ)

R1.7.12
資料1-1
p172 加除修正

洞爺カルデラに関する評価

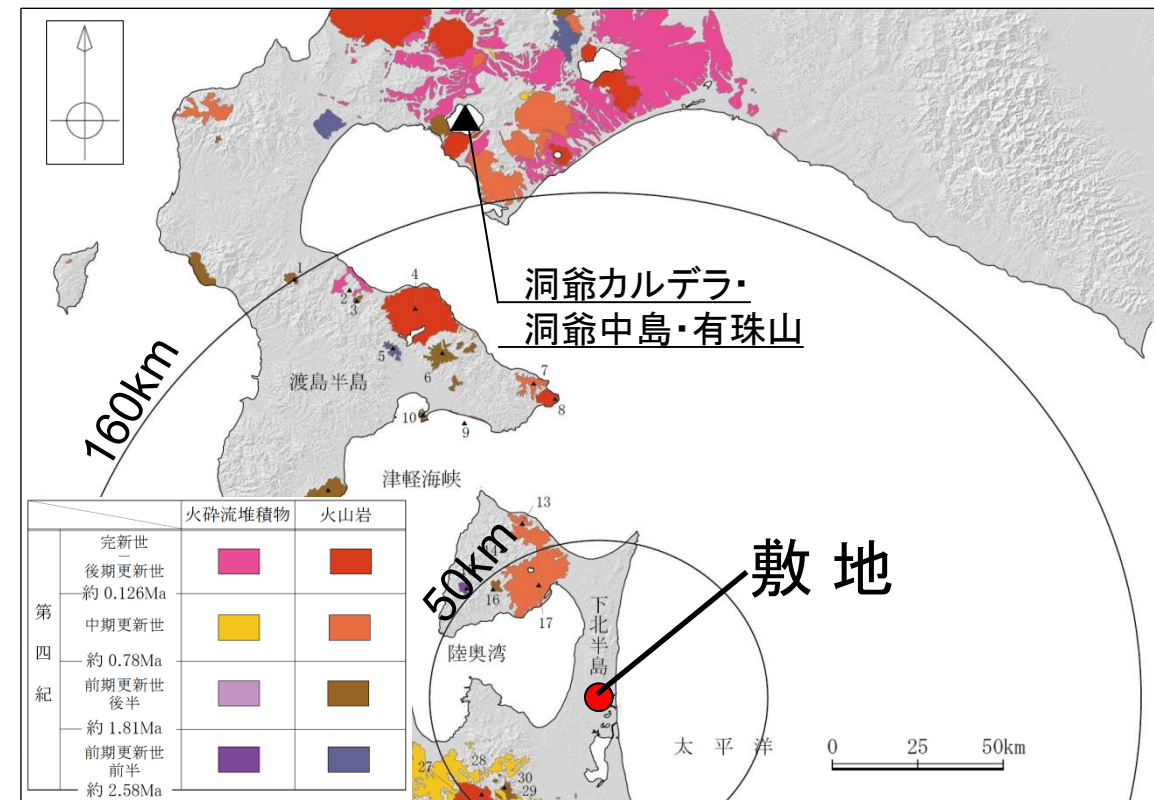
火山名	・カルデラ火山 洞爺カルデラ ・後カルデラ火山 洞爺中島, 有珠山
敷地からの距離	約188km(洞爺カルデラ), 約187km(洞爺中島), 約181km(有珠山)
火山の形式	カルデラ, 火砕流, 溶岩ドーム, 複成火山
活動年代	洞爺カルデラ 14万年前 洞爺中島 4 ~ 3万年前 有珠山 2.0 ~ 1.5万年前 ~ AD2000年

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

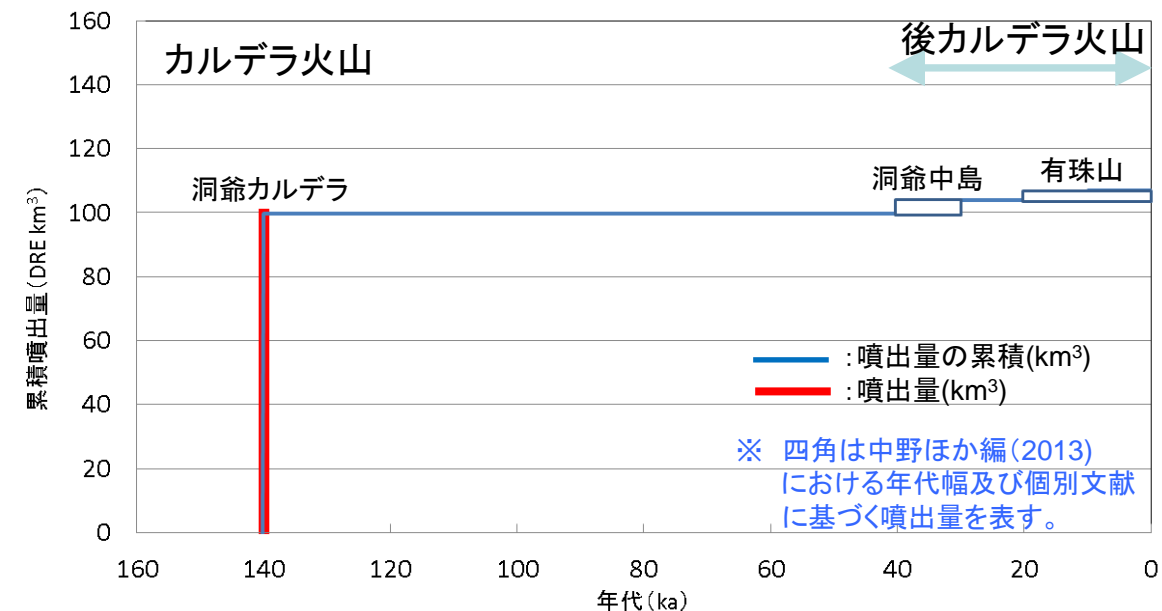
洞爺カルデラ・洞爺中島・有珠山の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
AD.2000	後カルデラ火山 有珠山	2000年噴火	3.0	町田・新井(2011) 曾屋ほか(2007) 中川ほか(2005) 第四紀火山カタログ委員会編(1999)
20ka 30ka 40ka		1663年噴火(Us-b) 有珠外輪山溶岩 等		
	洞爺中島	中島火山噴出物	4	
140ka	カルデラ 洞爺カルデラ	洞爺火砕流	100	
		洞爺火山灰		

- 現在は後カルデラ火山の活動が継続していることから, 巨大噴火に伴う洞爺火山灰と同規模の噴火の可能性は十分小さい。
- また, 町田・新井(2011)によると, 後カルデラ火山の活動に伴う敷地周辺における降下火砕物の分布は示されていない。
- なお, 申請時は, 文献調査から, 洞爺火山灰を敷地に到達した最大層厚(20~30cm)の降下火砕物と考え, 敷地における層厚を30cmとしていたが, 上記理由により, 評価対象外とした。



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

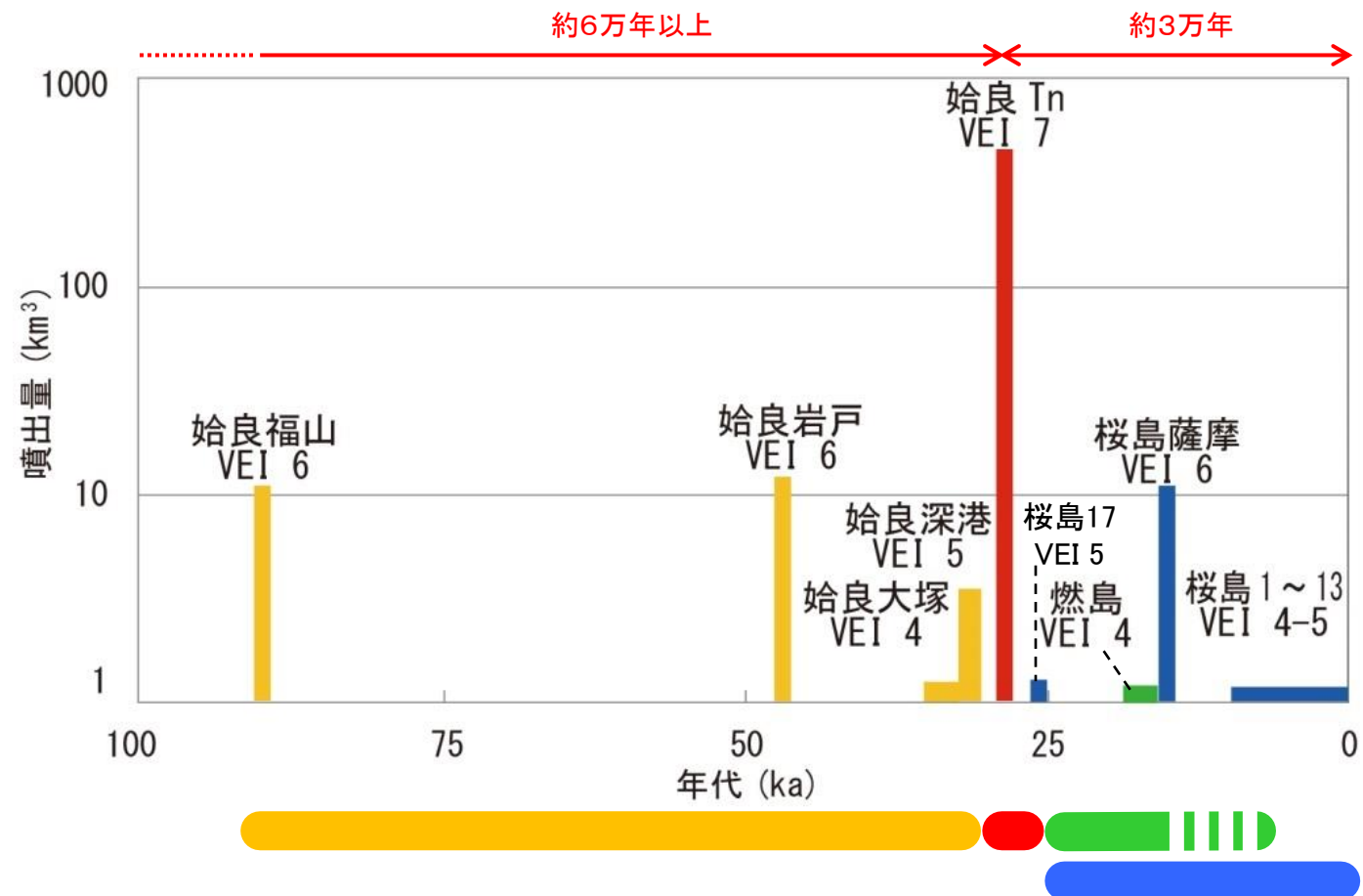


洞爺カルデラ・洞爺中島・有珠山の噴出量一年代階段ダイアグラム

4.2 降下火砕物の層厚

4.2.3 甲地軽石以外の降下火砕物 (始良カルデラ)

- 巨大噴火の活動間隔(約6万年以上)は、最新の巨大噴火からの経過時間(約3万年)に比べて十分長いこと、現在、巨大噴火に先行して発生するプリニー式噴火ステージの兆候が認められないことから、巨大噴火までには十分な時間的余裕があると考えられる。
- 始良カルデラにおける現在の噴火活動は、桜島における後カルデラ火山噴火ステージと考えられる。
- したがって、始良Tnと同規模の噴火の可能性は十分小さい。

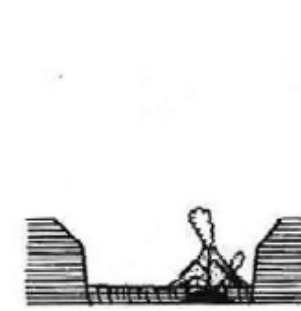
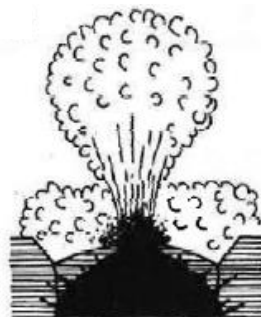


プリニー式噴火ステージ

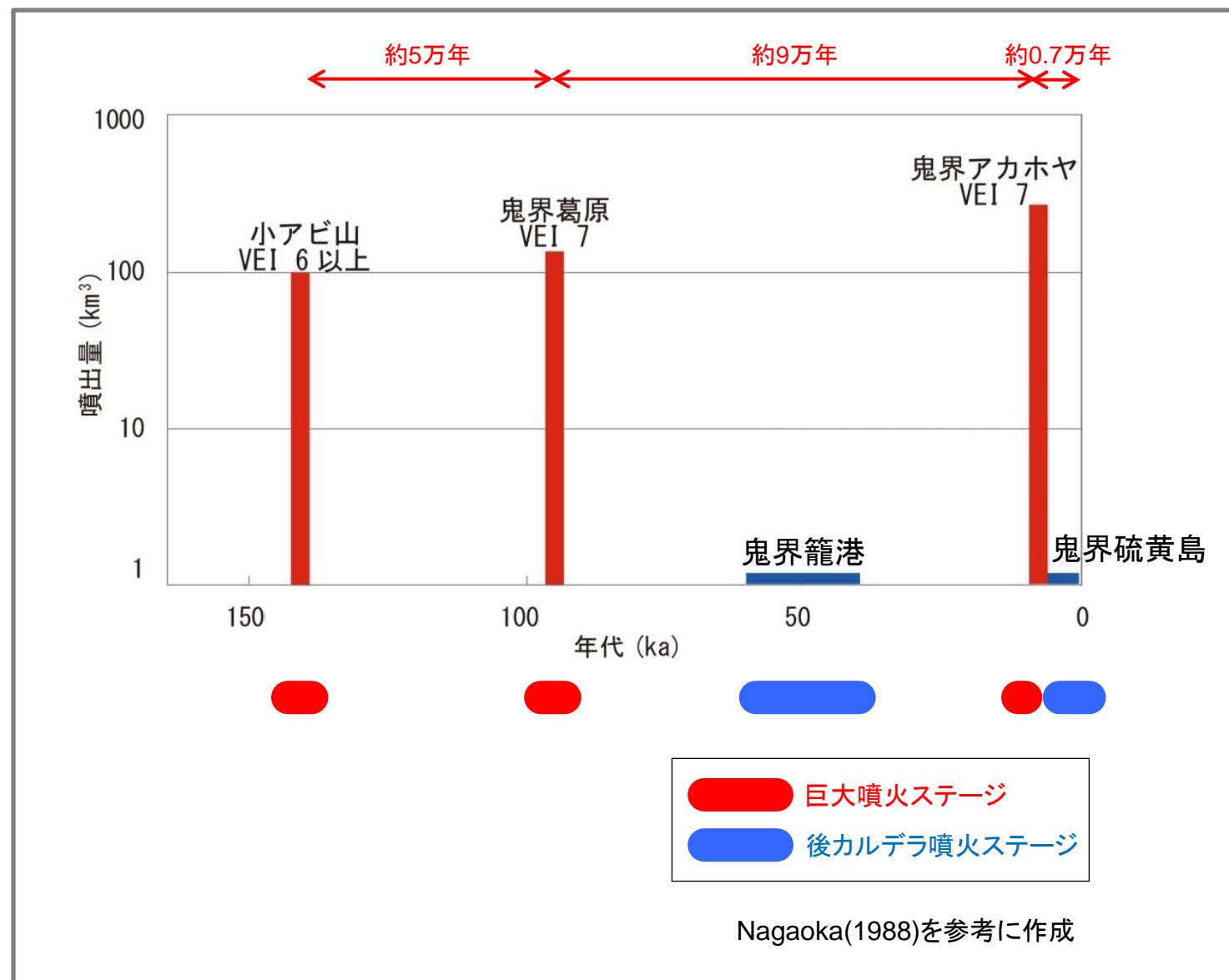
巨大噴火ステージ

中規模火砕流噴火ステージ

後カルデラ火山噴火ステージ



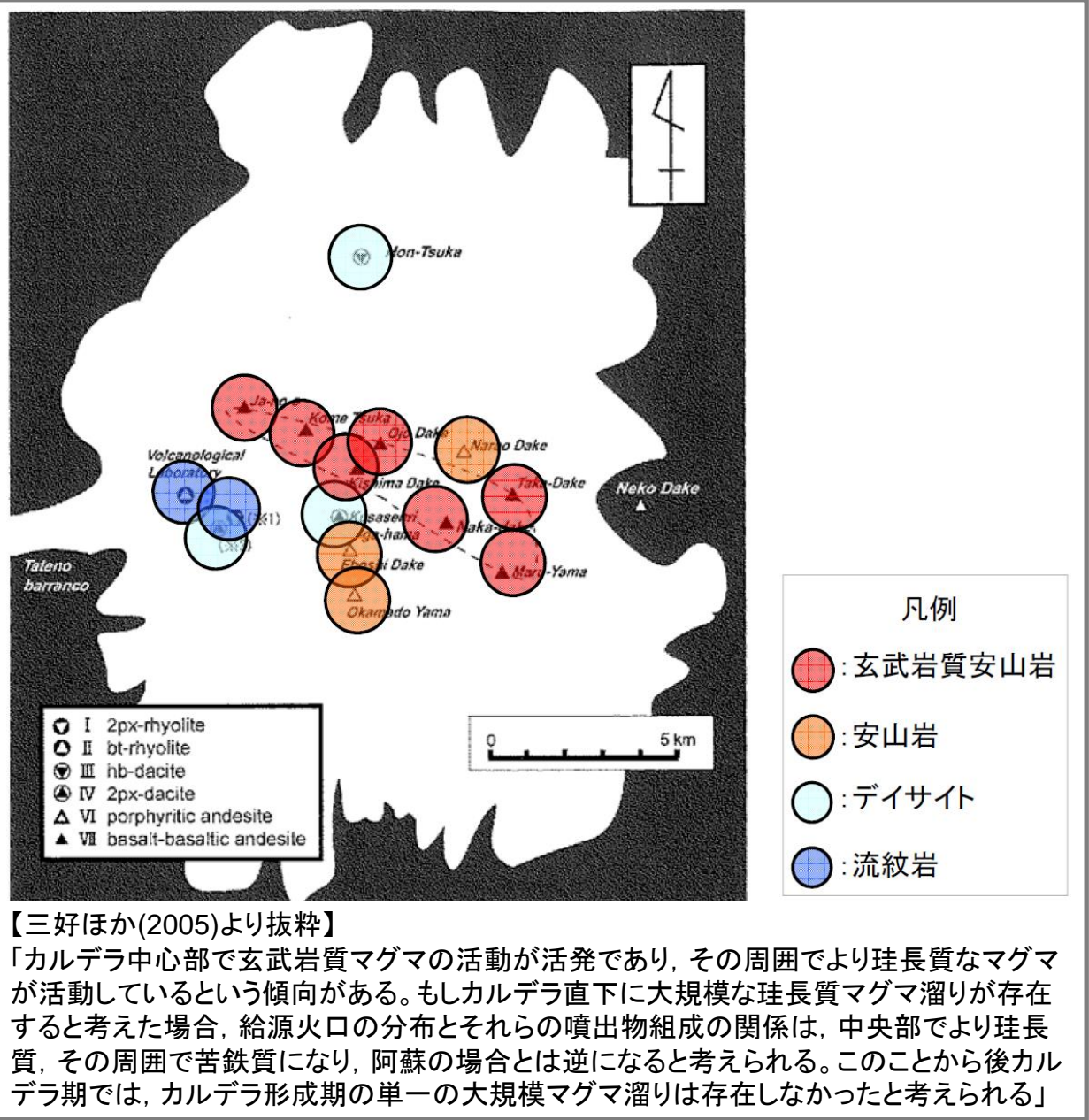
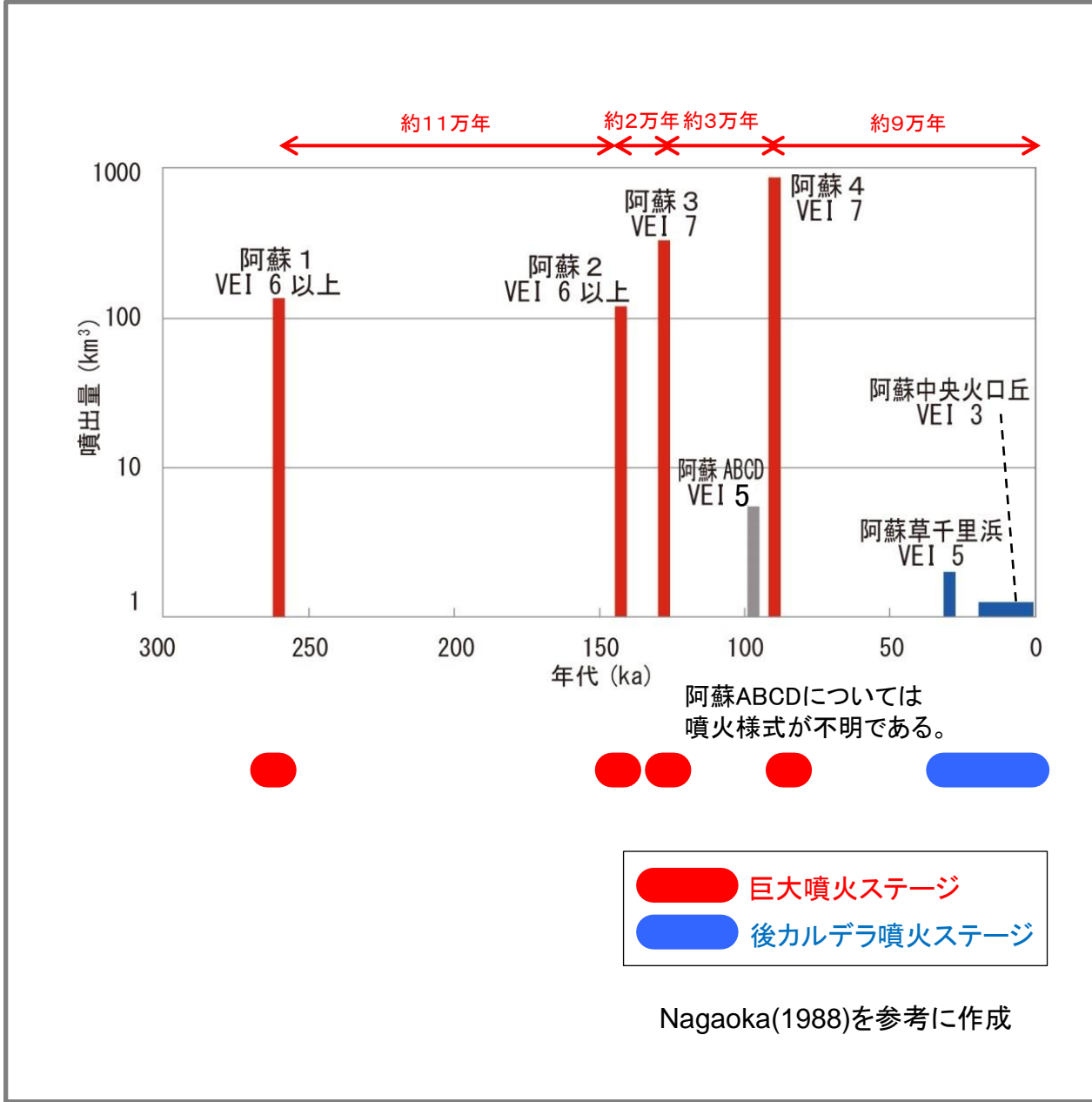
- 巨大噴火の最短の活動間隔(約5万年)は, 最新の巨大噴火からの経過時間(約0.7万年)に比べて十分長いことから, 巨大噴火までには十分な時間的余裕があると考えられる。
- 鬼界における現在の噴火活動は, 薩摩硫黄島における後カルデラ火山噴火ステージと考えられる。
- したがって, 鬼界葛原や鬼界アカホヤと同規模の噴火の可能性は十分小さい。



4.2 降下火砕物の層厚

4.2.3 甲地軽石以外の降下火砕物 (阿蘇カルデラ)

- 巨大噴火の最短の活動間隔(約2万年)は、最後の巨大噴火からの経過時間(約9万年)に比べて短いため、巨大噴火のマグマ溜まりを形成している可能性、巨大噴火を発生させる供給系ではなくなっている可能性が考えられる。
- 阿蘇カルデラにおける現在の噴火活動は、最後の巨大噴火以降、阿蘇山において草千里ヶ浜軽石等の多様な噴火様式の小規模噴火が発生していることから、阿蘇山における後カルデラ期の活動と考えられる。
- 苦鉄質火山噴出物及び珪長質火山噴出物の給源火口の分布から、大規模な珪長質マグマ溜まりが存在する可能性は十分小さいと考えられる。
- したがって、阿蘇4と同規模の噴火の可能性は十分小さい。



4.2 降下火砕物の層厚

4.2.4 降下火砕物シミュレーション①

〔対象降下火砕物の検討①:八甲田山より敷地に近い原子力施設に影響を及ぼし得る火山の想定される最大規模の降下火砕物〕

R1.7.12
資料1-1
p177 加除修正



火山名	敷地との離隔(km)	現状における火山活動	現状において想定される最大規模の降下火砕物	見かけの噴出量	
				規模(VEI)	体積(km ³)
北八甲田火山群	51	※1	甲地軽石(WP)	5※2	8.25※2
恐山	39	熱水活動期	宮後	(水蒸気噴火)	—

※1: 北八甲田火山群は八甲田カルデラの後カルデラ火山に相当。巨大噴火以降(北八甲田火山群)の最大規模の噴火を対象に評価。
 ※2: 工藤ほか(2004)による体積(3.3DRE km³)と密度(堆積物密度: 1.0g/cm³、岩石密度: 2.5g/cm³)に基づき、見かけ体積・VEIを算定。

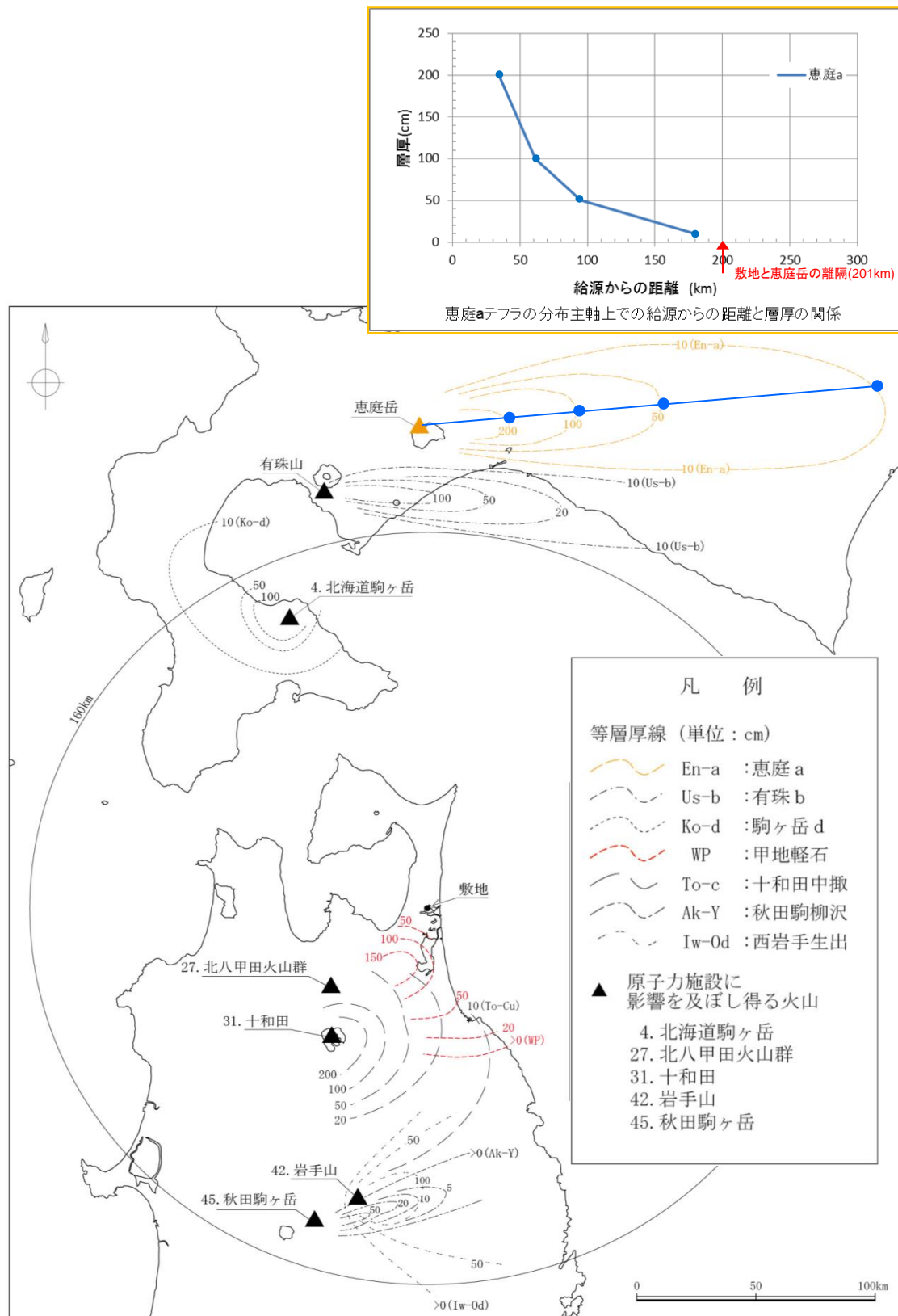
- 現状における同規模の噴火の可能性、地質調査結果(最大層厚)及び噴出量等を踏まえ、甲地軽石(WP)を降下火砕物シミュレーションの対象としている。
- これについて、念のため、八甲田山より敷地に近い原子力施設に影響を及ぼし得る火山の想定される最大規模の降下火砕物の確認を行った。
- その結果、甲地軽石に比べ施設に与える影響が十分に小さいと判断できる。

第四紀火山の位置及び名称は中野ほか編(2013)による
降下火山灰の名称及び等層厚線は工藤ほか(2004)、リサイクル燃料貯蔵株式会社(2007)による

4.2 降下火砕物の層厚

4.2.4 降下火砕物シミュレーション②

〔対象降下火砕物の検討②：八甲田山以遠の火山の想定される降下火砕物〕



第四紀火山の位置及び名称は中野ほか編(2013)による。
降下火山灰の名称及び等層厚線は町田・新井(2011)、工藤ほか(2004)による。

	火山名	敷地との距離 (km)	現状における火山活動	現状において想定される最大規模の降下火砕物	見かけの噴出量		備考
					規模(VEI)	体積(km ³)	
【八甲田山以遠 ～160km以内】 原子力施設に影響を及ぼし得る火山のうち町田・新井(2011)に降下火砕物の分布が示されている火山	北八甲田火山群	51	※1	甲地軽石	5 ^{※2}	8.25 ^{※2}	
	十和田	66	後カルデラ期	十和田中掬	5	6.68 ^{※3}	
	岩手山	126	注)	西岩手生出	5 ^{※4}	3.88 ^{※4}	
	北海道駒ヶ岳	134		駒ヶ岳d	5	2.3 ^{※5}	
	秋田駒ヶ岳	141		秋田駒柳沢	4～5	0.17 ^{※6}	
【160km以遠】 敷地及び敷地近傍で確認される降下火砕物を噴出した火山	洞爺カルデラ	188	後カルデラ火山の活動	有珠b	5	2.5 ^{※7}	噴出量はサージを含む
	支笏カルデラ	201	後カルデラ火山の活動	恵庭a	5	8.9 ^{※8}	

VEIは町田・新井(2011)に基づき作成
(対象降下火砕物の検討①で確認した降下火砕物及び敷地との距離が1000kmを超える火山の降下火砕物は除く。)

注) 想定される噴火規模を考慮せず、町田・新井(2011)に分布が示されている降下火砕物を整理

※1: 北八甲田火山群は八甲田カルデラの後カルデラ火山に相当。
巨大噴火以降最大(北八甲田火山群の全活動期間を含む)を対象に評価

※2: 工藤ほか(2004)による体積(3.3DRE km³)と密度(堆積物密度: 1.0g/cm³, 岩石密度: 2.5g/cm³)に基づき、見かけ体積・VEIを算定。

※3: Hayakawa(1985)より引用

※4: 体積を須藤ほか(2007)より引用し、VEIを想定

※5: 吉本・宇井(1998)より引用

※6: 須藤ほか(2007)より引用

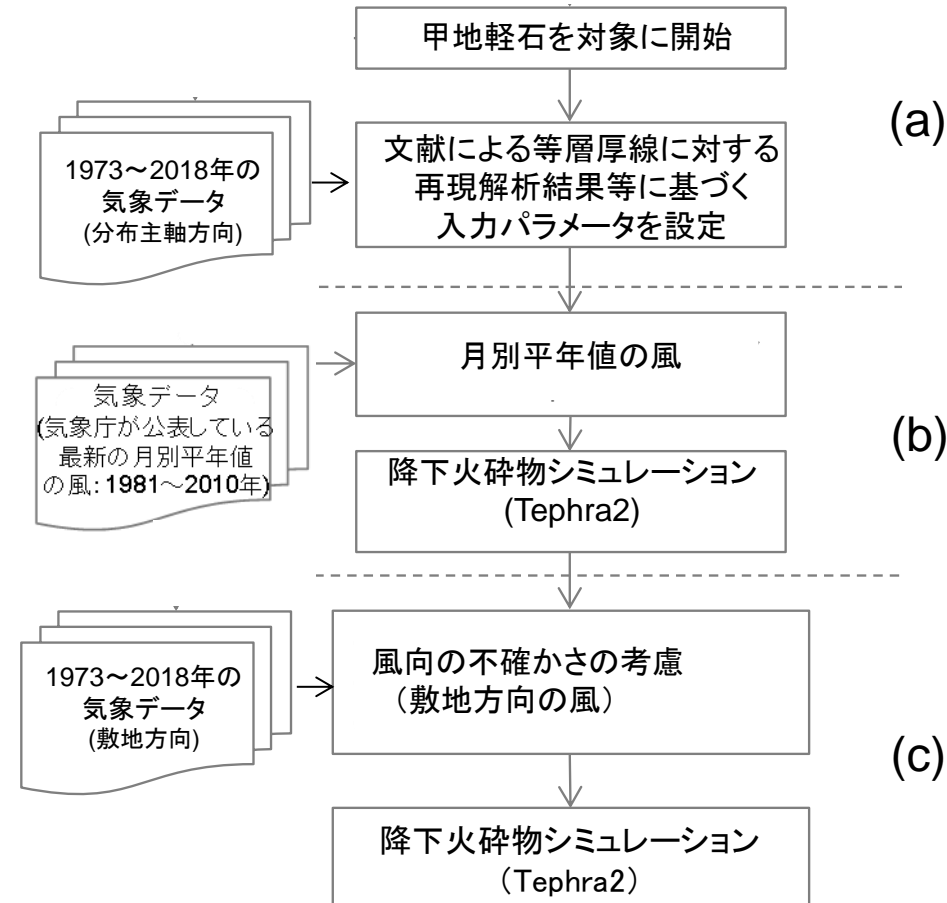
※7: 菅屋ほか(2007)より引用

※8: 第四紀火山カタログ委員会編(1999)より引用

➤ 現状における同規模の噴火の可能性、地質調査結果(最大層厚)及び噴出量等を踏まえ、甲地軽石を降下火砕物シミュレーションの対象としている。これについて、念のため、八甲田山以遠の原子力施設に影響を及ぼし得る火山で、町田・新井(2011)に分布が示されている各火山における最大規模の降下火砕物及び敷地・敷地近傍で確認される降下火砕物を噴出した火山の想定される最大規模の降下火砕物の確認を行った。

➤ その結果、恵庭aの噴出量8.9km³(見かけの噴出量)は甲地軽石の噴出量8.25km³(見かけの噴出量; 工藤ほか(2004)に基づき算出)に対し大きくなるものの、当該火山と敷地との距離が八甲田山に比べ約4倍あり、十分な離隔があることから、甲地軽石に比べ施設に与える影響が十分に小さいと判断できる。

- 北八甲田火山群を起源とする甲地軽石規模の噴火を想定したシミュレーションを実施し、堆積物の分布、敷地における堆積量を推定した。
- 解析コードは、南フロリダ大学のHP上で公開されている「Tephra2」を用いた。
- 「Tephra2」については、日本火山学会2016年秋季大会にてバグがあることが指摘されたことから、当社が修正し、解析した。
- Tephra2によるシミュレーションのフローを、下図に示す。
- (a)の再現解析結果等に基づく入力パラメータの設定については、甲地軽石が18～28万年前の噴火と非常に古く、噴火に係るパラメータの情報が乏しいため、再現解析を行った上で、入力パラメータの設定した。
- (c)の不確かさの検討については、参考14に示す中楯テフラのシミュレーション結果より、対象火山の北東方向に位置している当社敷地では、風速、風向、噴煙柱高度の不確かさのうち、敷地方向の風を考慮した風向の不確かさが最も層厚が大きくなることが分かったことから、八甲田山の不確かさの検討では、風向の不確かさのみを考慮した。



Tephra2の概要

- 「Tephra2」は移流拡散モデルを用いたシミュレーションプログラム
- 移流拡散モデルとは火山灰の挙動を、重力による落下、風による移動(移流)及び空中で火山灰が自発的に散らばる現象(拡散)で計算するものである。
- 風は高度毎に水平な一方向に吹くものとされ、拡散も水平方向のみが考慮されている。
- 火山灰は火口上に仮定された均質な噴煙柱から放出される。

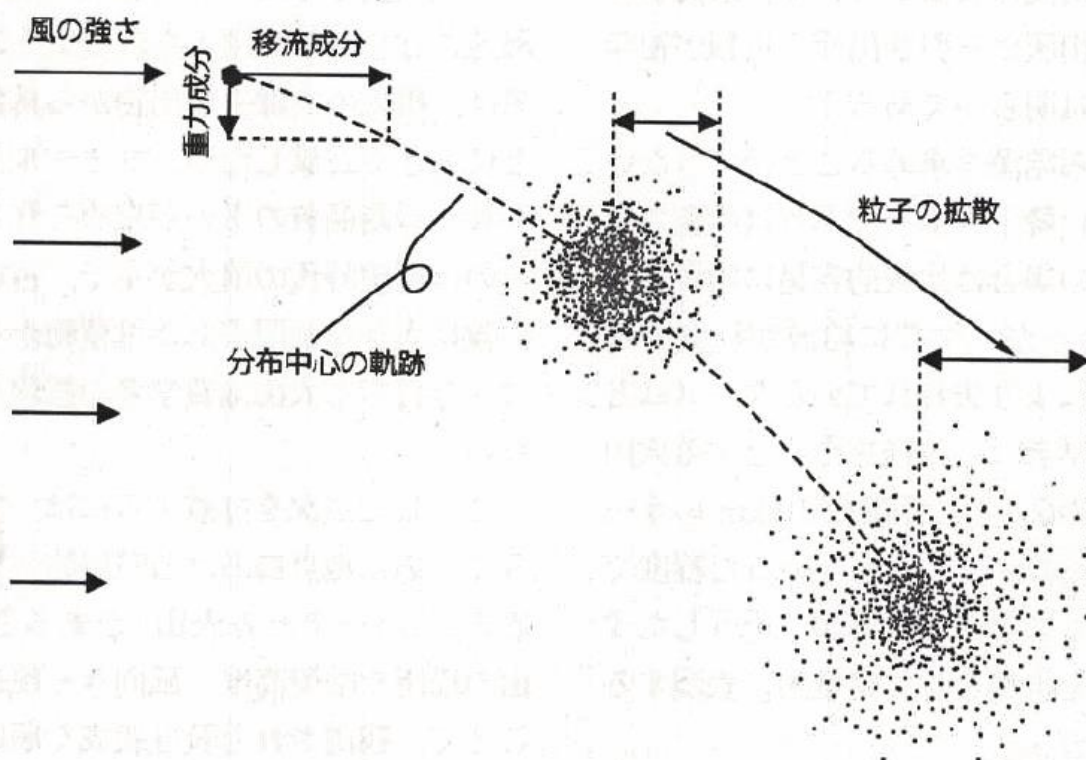


図1 移流拡散モデルの概念図

粒子の分布中心の軌跡は、重力による落下と風による移流によって決まる。粒子の一団は時間0の時に点で表されるが、時間の経過とともに拡がっていく。

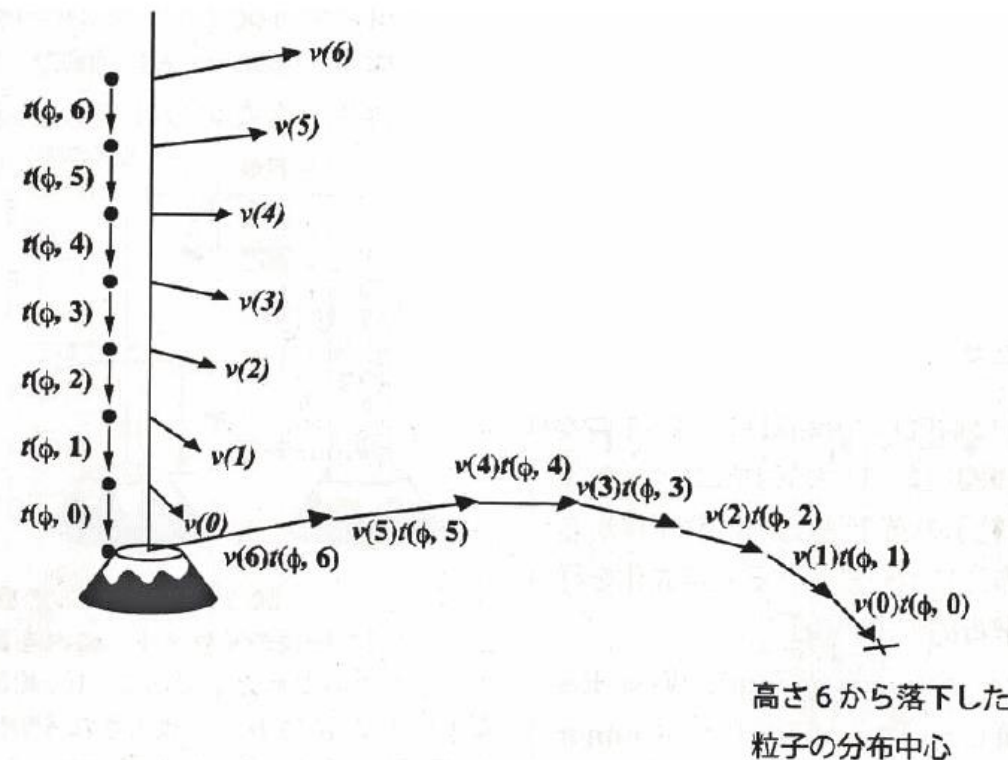


図3 移流の概念図

火口直上の風が、高さ0から6までそれぞれベクトル $v(0) \sim v(6)$ で表されるとする。各高さ区間 n を落下する間に粒子が流されるベクトルは $v(n)t(\phi, n)$ で表されるので、高さ6から放出される粒子はこれら全ての積算が分布の中心のベクトルとなる。

4.2 降下火砕物の層厚

4.2.4 降下火砕物シミュレーション⑤

〔気象データ〕

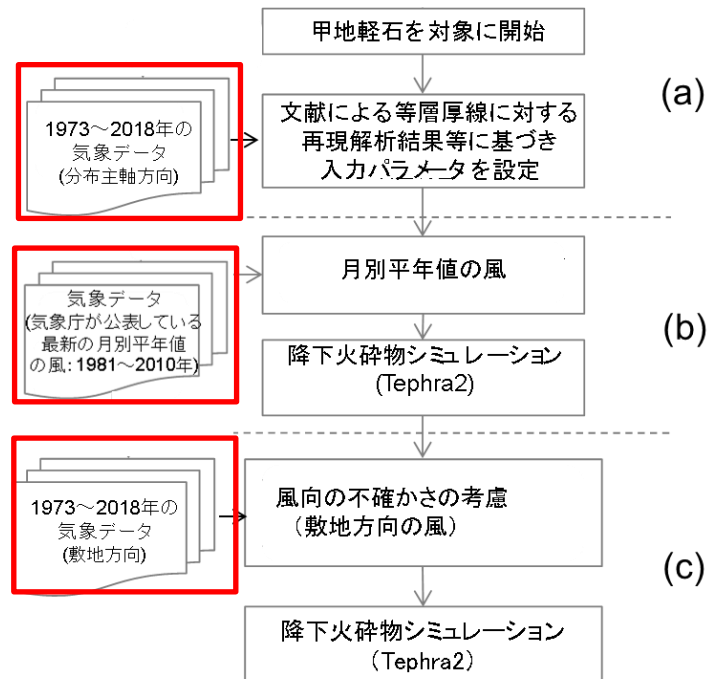
- 気象庁では、1日2回(9時, 21時)ラジオゾンデを用いて、地上から高度約30kmまでの大気の状態を観測している。
- 敷地に最も近い秋田地方気象台の観測記録をシミュレーション解析に用いた。

使用する気象データ

- ・ 月別平年値による解析には、気象庁による1981～2010年の平年値を用いた。
- ・ これに対し、文献による等層厚線に対する再現解析及び風向の不確かさの検討(敷地方向の風)においては、より長い期間のデータ※(1973～2018年)により検討を行った。

※ワイオミング大学のDepartment of Atmospheric ScienceのHPより秋田地方気象台の高層気象観測データをダウンロード(2019年3月30日)。その際、1973年～2018年までの観測記録を月ごとにダウンロードし、記録されている9時・21時の全日時の風データを用いた。

ワイオミング大学HP (<http://weather.uwyo.edu/upperair/sounding.html>)



解析フロー



ラジオゾンデによる高層気象観測実施官署(気象庁HPより当社が作成)

4.2 降下火砕物の層厚

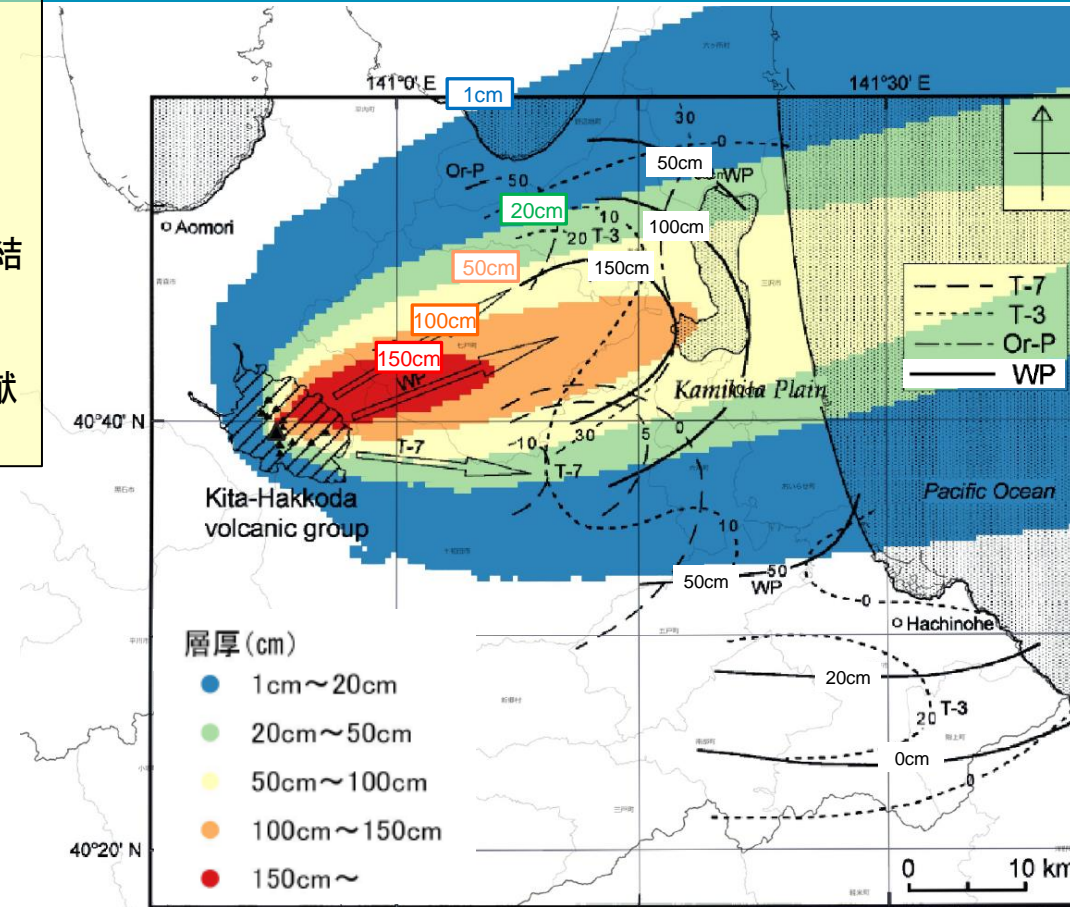
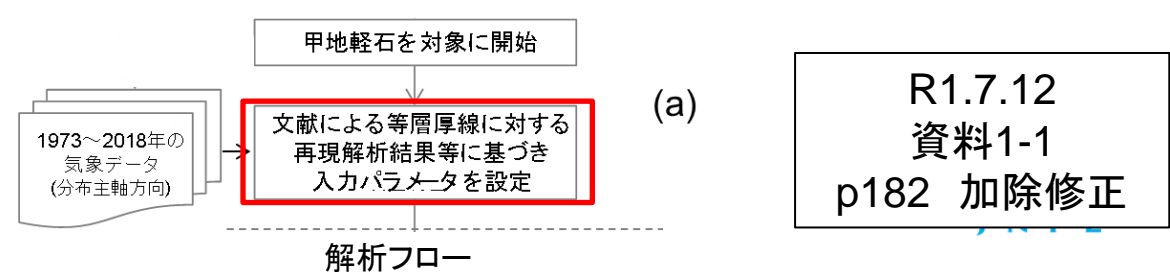
4.2.4 降下火砕物シミュレーション⑥

〔再現解析結果等に基づく入力パラメータ設定〕

- 甲地軽石の入力パラメータ設定に係る検討を実施した。
- 検討に用いた風は、文献(工藤ほか(2004))の等層厚線の分布主軸に向く風を抽出・平均した風を用いた(次頁参照)。
- 初めに、同じVEI5の噴火である十和田中掬テフラと同じ下表のパラメータ(参考14参照、ただし噴出量は甲地軽石、給源は大岳山頂とした)での分布を確認したが、右図のとおり、実績に比べ解析の分布範囲は狭く(細く)、また等層厚線150cm及び100cmを大きく下回る結果となった。
- したがって、入力パラメータの検討として、設定根拠となる文献等での記載に幅があるパラメータ(②噴煙柱高度、⑥⑦粒径、⑪拡散係数)について、パラメータスタディを実施し、文献の等層厚線を再現できる入力パラメータを検討した。

想定噴火規模: 甲地軽石(WP)

パラメータ	単位	値	設定根拠等	
① 噴出物量	kg	8.25×10^{12}	工藤ほか(2004)に基づいて設定(噴出量: 3.3km^3 (DRE), マグマ密度 2.5t/m^3)	
② 噴煙柱高度	m	25,000	同程度の規模の噴火(VEI:5)の一般値(Newhall and Self, 1982による)に基づいて設定	
③ 噴煙柱分割高さ	m	100	萬年(2013)より設定	
④ ⑤ ⑥ ⑦ 粒径	最大	ϕ ($2^{-\phi}\text{mm}$)	-10 ($1.02 \times 10^3\text{mm}$)	Tephra2推奨値
	最小	ϕ ($2^{-\phi}\text{mm}$)	10 ($9.77 \times 10^{-4}\text{mm}$)	Tephra2推奨値
	中央	ϕ ($2^{-\phi}\text{mm}$)	4.5 ($4.42 \times 10^{-2}\text{mm}$)	同規模の噴火(Mt. St. Helens 1980年噴火: VEI=5)の事例に基づいて設定
	標準偏差	ϕ	3	同規模の噴火(Mt. St. Helens 1980年噴火: VEI=5)の事例に基づいて設定
⑧ 岩片密度	t/m^3	2.6	Tephra2推奨値	
⑨ 軽石粒子密度	t/m^3	1.0	Tephra2推奨値	
⑩ 渦拡散係数	m^2/s	0.04	萬年(2013)より設定	
⑪ 拡散係数	m^2/s	10,000	萬年(2013)より設定	
⑫ Fall Time Threshold	s	3,600	萬年(2013)より設定	
⑬ ⑭ ⑮ 給源	X座標(UTM: 54N)	m	489,622	大岳山頂のUTM座標
	Y座標(UTM: 54N)	m	4,500,900	
	標高	m	1,584	大岳山頂の標高



十和田中掬テフラと同じパラメータ(ただし噴出量は甲地軽石、給源は大岳山頂とした)の解析結果および文献の等層厚線
※工藤ほか(2004)に当社の解析結果等を重ね合わせて作成

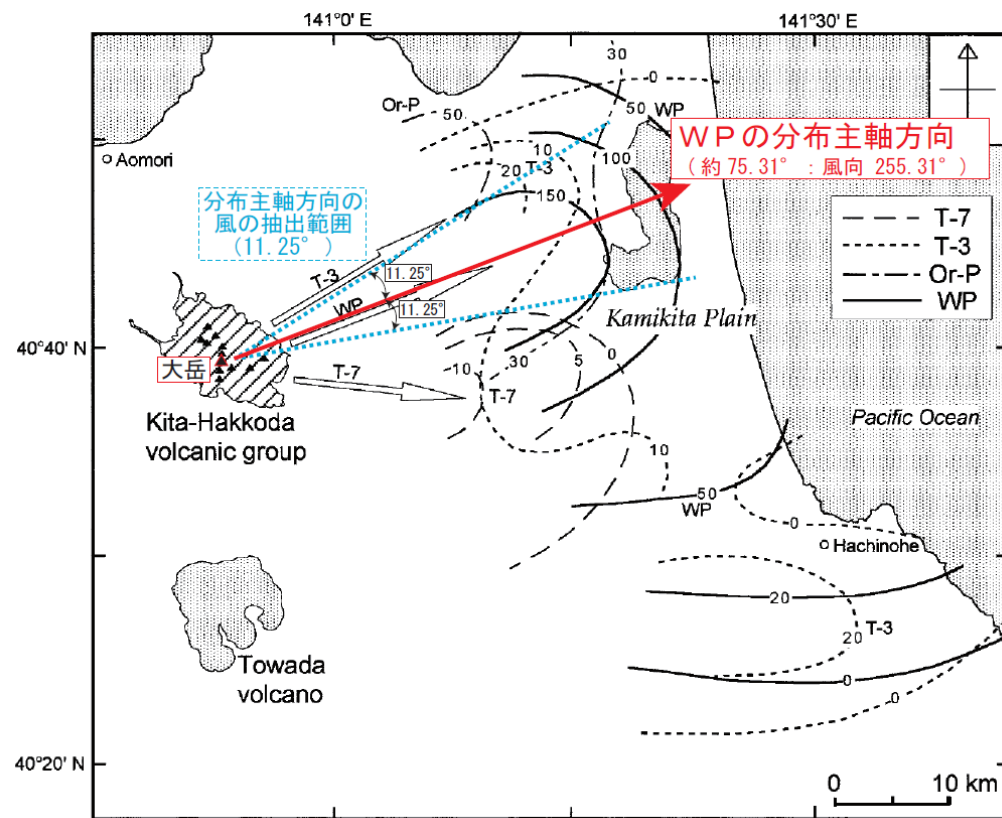
4.2 降下火砕物の層厚

4.2.4 降下火砕物シミュレーション⑦

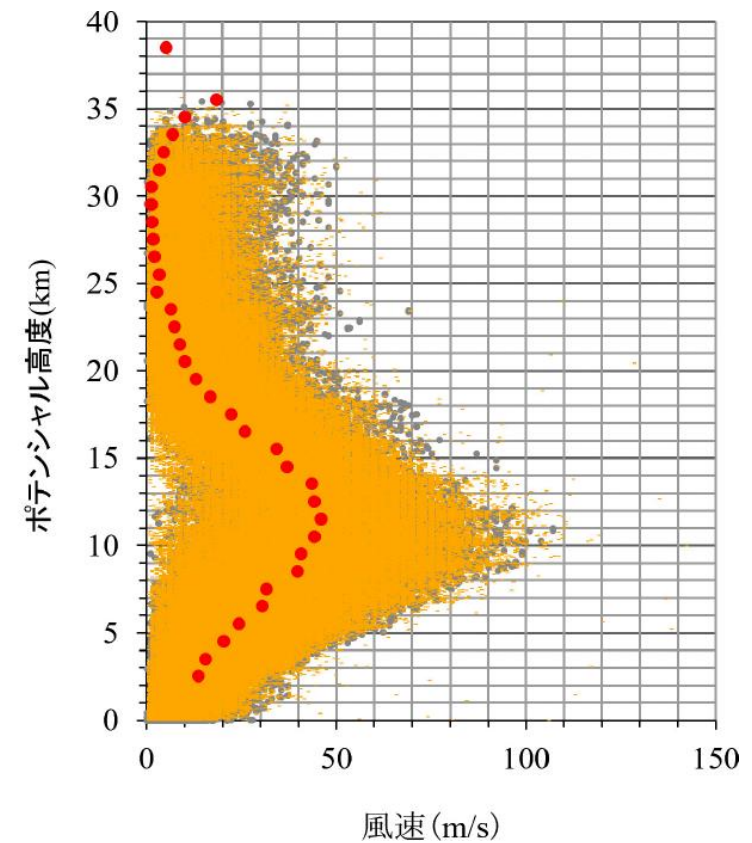
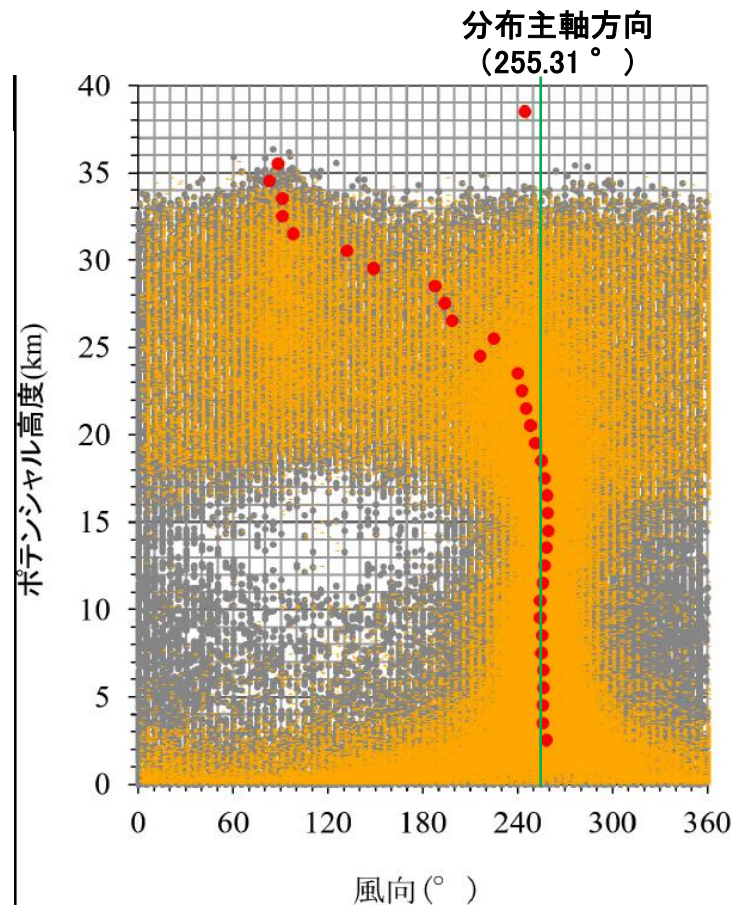
〔分布主軸方向の風の抽出条件〕

➤ 分布主軸方向の風を抽出・平均して分布主軸方向の風(合成風)を作成。

※観測値のうち高度2km~18kmにおける風向の平均値が抽出範囲内
〔分布主軸方向の風向(255.31°)を中心とし、16方位の1方位分の角度:±11.25°〕に入る風を抽出し、その高度別平均値を用いて解析



工藤ほか(2004)に加筆

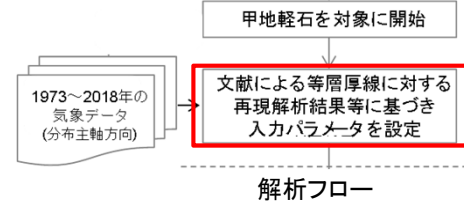


- 観測値(全データ)
- 観測値(分布主軸方向の風)
- 分布主軸方向の風(合成風) (1973~2018年の高層気象観測データ)

4.2 降下火砕物の層厚

4.2.4 降下火砕物シミュレーション⑧

[再現解析結果等に基づく入力パラメータ設定]



(a)

R1.7.12
資料1-1
p184 加除修正

○パラメータスタディの範囲

➤ 噴煙柱高度, 粒径(中央粒径及び標準偏差), 拡散係数の3種のパラメータについて, パラメータスタディ範囲設定の根拠に基づき, 564ケースのパラメータスタディを行った。

●パラメータスタディ範囲設定の根拠

		パラメータスタディ範囲の根拠																	
②	噴煙柱高度	Newhall and Self(1982)のVEI5の一般値(25km以上)を踏まえ, 25,000m, 30,000mの2ケースで実施																	
⑥	中央 粒径	Tephra2のconfigfileに示されている以下の事例のとおり, 中央粒径が小さい(φが大きい)ほど標準偏差が大きい特徴を踏まえ,																	
		<table border="1"> <thead> <tr> <th></th> <th>単位</th> <th>事例①</th> <th>事例②</th> <th>事例③</th> <th>事例④</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>中央粒径</td> <td>φ</td> <td>0</td> <td>1</td> <td>3.5</td> <td>4.5</td> </tr> <tr> <td>標準偏差</td> <td>φ</td> <td>1</td> <td>1.5</td> <td>2</td> <td>3</td> </tr> </tbody> </table>			単位	事例①	事例②	事例③	事例④	中央粒径	φ	0	1	3.5	4.5	標準偏差	φ	1	1.5
	単位	事例①	事例②	事例③	事例④														
中央粒径	φ	0	1	3.5	4.5														
標準偏差	φ	1	1.5	2	3														
⑦	標準 偏差	事例④未満の範囲: 中央粒径(-3~4φ), 標準偏差(1~2.5φ) 事例④以上の範囲: 中央粒径(4.5~6φ), 標準偏差(3~5φ) の範囲でそれぞれパラメータスタディを実施。 ※事例④は, 十和田中振テフラの設定値と同じ粒径																	
⑪	拡散係数	萬年(2013)の「傘型領域からの落下が卓越している場合, 拡散係数がおそらく数千から数万といった数字でようやく再現できる。」との記載から, 前々頁の解析結果を踏まえ, より広がりを表現できる10,000~100,000m ² /sでパラメータスタディを実施。																	

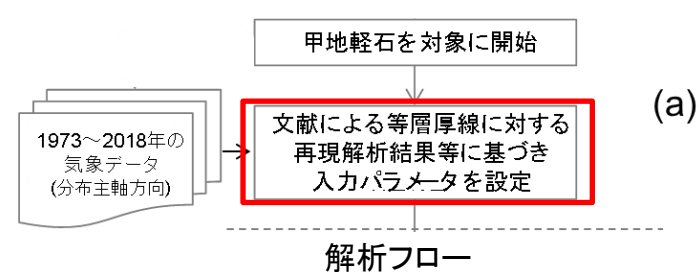
●パラメータスタディ範囲

		単位	パラメータスタディ												ケース数	
噴煙柱高度		m	25,000						30,000						2	
粒径			事例④未満(中央粒径大)						事例④以上(中央粒径小)						32	15
	中央	φ (2 ^{-φ} mm)	-3 (8mm)	-2 (4mm)	-1 (2mm)	0 (1mm)	1 (0.5mm)	2 (0.25mm)	3 (0.125mm)	4 (6.25×10 ⁻² mm)	4.5 (4.42×10 ⁻² mm)	5 (3.13×10 ⁻² mm)	6 (1.56×10 ⁻² mm)			
	標準偏差	φ	1.0		1.5		2.0		2.5		3.0	3.5	4.0	4.5		
拡散係数		m ² /s	10,000		20,000		30,000		50,000		75,000		100,000		6	
															384	180
															計 564	

4.2 降下火砕物の層厚

4.2.4 降下火砕物シミュレーション⑨

〔再現解析結果等に基づく入力パラメータ設定〕



○パラメータスタディの結果

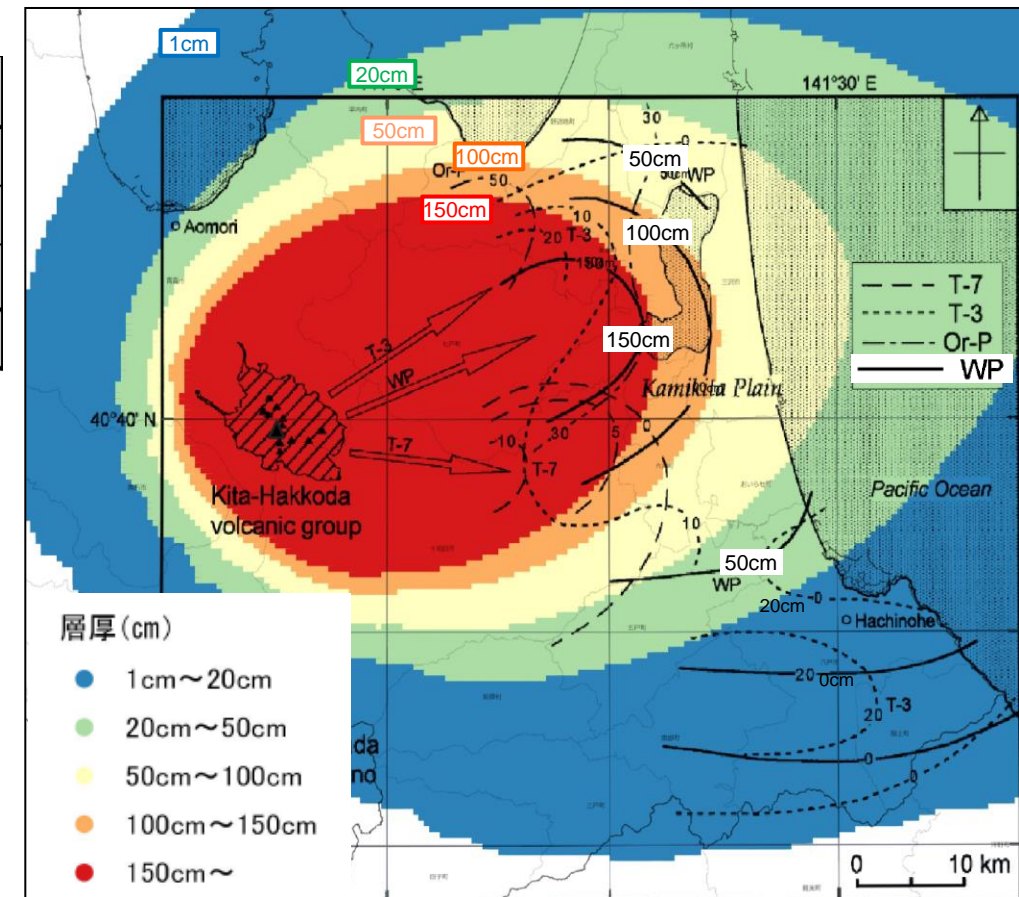
- ▶ 黄色に着色したパラメータの組み合わせの解析結果(右図)が文献の等層厚線の150cm~50cmと概ね整合し、再現性が最も良い。
- ▶ したがって、パラメータスタディ結果も踏まえた下表に示す入力パラメータで、以降の降下火砕物シミュレーションを行った。

●パラメータスタディの最良再現ケース

パラメータ	単位	パラメータスタディ										最良再現ケース		
噴煙柱高度	m	25,000										30,000		
粒径	中央	φ	-3	-2	-1	0	1	2	3	4	4.5	5	6	
	標準偏差	φ	1.0		1.5		2.0		2.5		3.0	3.5	4.0	4.5
拡散係数	m ² /s	10,000	20,000		30,000		50,000		75,000		100,000			

●パラメータスタディ結果を踏まえた入力パラメータ

パラメータ	単位	値	設定根拠等
① 噴出物量	kg	8.25×10^{12}	工藤ほか(2004)に基づいて設定 (噴出量: 3.3km ³ (DRE), マグマ密度2.5t/m ³)
② 噴煙柱高度	m	25,000	パラメータスタディの結果に基づき設定
③ 噴煙柱分割高さ	m	100	萬年(2013)より設定
④ ⑤ ⑥ ⑦ 粒径	最大	φ (2 ^{-φ} mm)	-10 (1.02 × 10 ³ mm) Tephra2推奨値
	最小	φ (2 ^{-φ} mm)	10 (9.77 × 10 ⁻⁴ mm) Tephra2推奨値
	中央	φ (2 ^{-φ} mm)	-3 (8mm) パラメータスタディの結果に基づき設定
	標準偏差	φ	2.5 パラメータスタディの結果に基づき設定
⑧ 岩片密度	t/m ³	2.6	Tephra2推奨値
⑨ 軽石粒子密度	t/m ³	1.0	Tephra2推奨値
⑩ 渦拡散係数	m ² /s	0.04	萬年(2013)より設定
⑪ 拡散係数	m ² /s	75,000	パラメータスタディの結果に基づき設定
⑫ Fall Time Threshold	s	3,600	萬年(2013)より設定
⑬ ⑭ ⑮ 給源	X座標(UTM:54N)	m	489,622
	Y座標(UTM:54N)	m	4,500,900
	標高	m	1,584



最も再現性が良い解析結果および文献の等層厚線
 ※工藤ほか(2004)に当社の解析結果等を重ね合わせて作成

4.2 降下火砕物の層厚

4.2.4 降下火砕物シミュレーション⑩

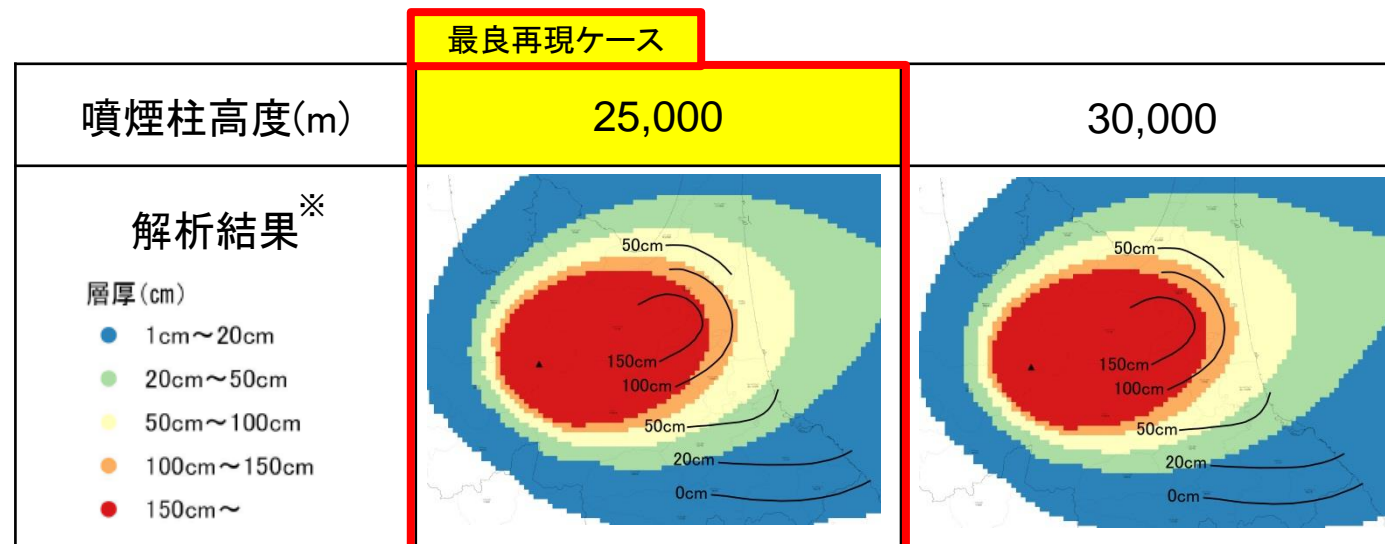
参考〔再現解析に用いる各パラメータの感度解析結果〕

再現解析に用いた各パラメータが解析結果に与える傾向を把握するため、最も再現性が良かった右表の入力パラメータによる解析結果(最良再現ケース)に対して、1つのパラメータのみを変えた場合の解析結果を確認する。

最良再現ケースの入力パラメータ

パラメータ	単位	値	
① 噴出物量	kg	8.25×10^{12}	
② 噴煙柱高度	m	25,000	
③ 噴煙柱分割高さ	m	100	
④ ⑤ ⑥ ⑦ 粒径	最大	ϕ	-10
	最小	ϕ	10
	中央	ϕ	-3
	標準偏差	ϕ	2.5
⑧ 岩片密度	t/m ³	2.6	
⑨ 軽石粒子密度	t/m ³	1.0	
⑩ 渦拡散係数	m ² /s	0.04	
⑪ 拡散係数	m ² /s	75,000	
⑫ Fall Time Threshold	s	3,600	
⑬ ⑭ ⑮ 給源	X座標(UTM:54N)	m	489,622
	Y座標(UTM:54N)	m	4,500,900
	標高	m	1,584

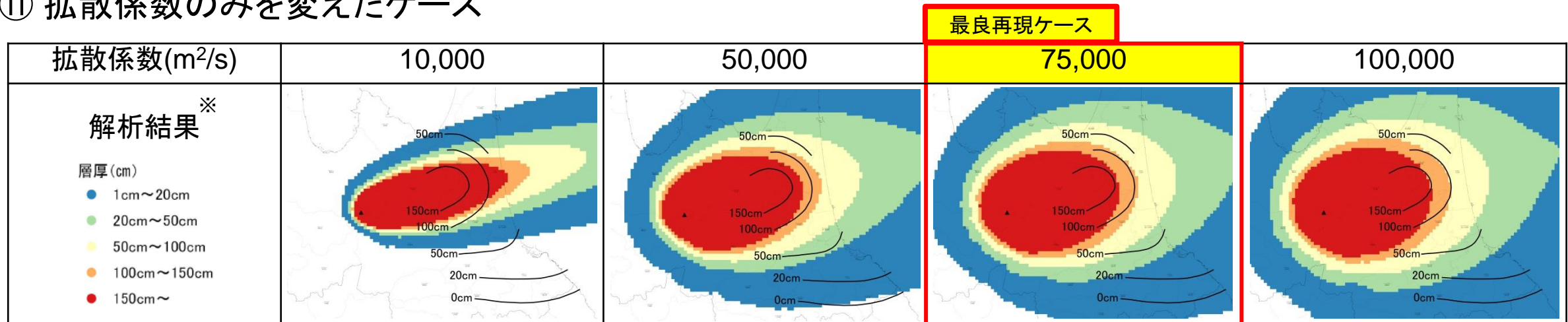
② 噴煙柱高度のみを変えたケース



※当社の解析結果に工藤ほか(2004)の等層厚線を加筆して作成

噴煙柱高度が高いほど、分布が広がる傾向であり、文献の等層厚線に対して層厚が過大。

⑪ 拡散係数のみを変えたケース



※当社の解析結果に工藤ほか(2004)の等層厚線を加筆して作成

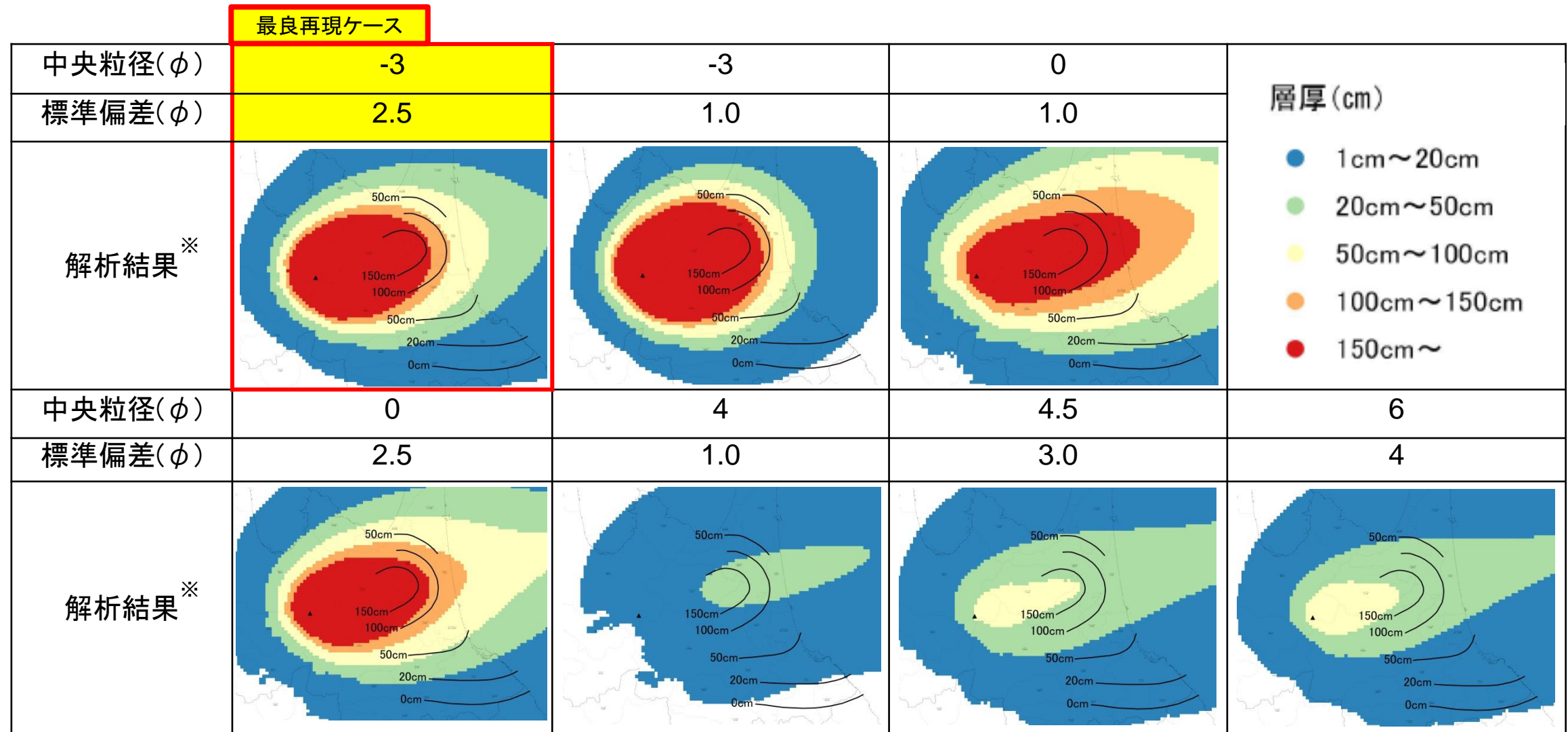
5万~10万m²/sは同様な傾向であるが、分布主軸方向の傾向は5万m²/sでやや過大であり、10万m²/sはやや過小。なお、7.5万m²/sと大きな拡散係数で最も再現性が良いことから、傘型の噴煙柱を形成したことが想定できる。

4.2 降下火砕物の層厚

4.2.4 降下火砕物シミュレーション⑪

参考〔再現解析に用いる各パラメータの感度解析結果〕

⑥⑦ 粒径のみを変えたケース



※当社の解析結果に工藤ほか(2004)の等層厚線を加筆して作成

- 最良再現ケースの中央粒径 -3ϕ 、標準偏差 2.5ϕ の場合を除いて文献の等層厚線と整合せず、また、中央粒径を $0, 4, 4.5, 6\phi$ とした場合には、分布傾向が大きく変わることが分かった。
- さらに、粒径の影響に係る更なる検討のため、最良再現ケースの中央粒径 -3ϕ とは異なる中央粒径($0, 4, 4.5, 6\phi$)とした場合の最も再現性が良いケース解析結果を次頁のとおり確認した。
〔中央粒径以外のパラメータ(粒径の標準偏差, 噴煙柱高度, 拡散係数)を変化させて再現解析を実施〕

4.2 降下火砕物の層厚

4.2.4 降下火砕物シミュレーション⑫

参考〔再現解析に用いる各パラメータの傾向検討(中央粒径を固定した場合の再現解析結果)〕

○各中央粒径での最も再現性が良い解析結果

			中央粒径0φとした場合	中央粒径4φとした場合	中央粒径4.5φとした場合	中央粒径6φとした場合
粒 径	中央	φ	0	4	4.5	6
	標準偏差	φ	2.5	2.5	3.5	5
噴煙柱高度		m	25,000	25,000	25,000	25,000
拡散係数		m ² /s	100,000	10,000	10,000	10,000
<p>最も再現性が良い 解析結果※</p> <p>層厚(cm)</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 1cm~20cm ● 20cm~50cm ● 50cm~100cm ● 100cm~150cm ● 150cm~ 						

※当社の解析結果に工藤ほか(2004)の等層厚線を加筆して作成

- ・ いずれのケースも、中央粒径が3φである最良再現ケースに比べ再現性が劣る。
- ・ したがって、最良再現ケースの中央粒径3φ、標準偏差2.5φの粒径の組合せを除いて、良好な再現が出来ない。

余 白

4.2 降下火砕物の層厚

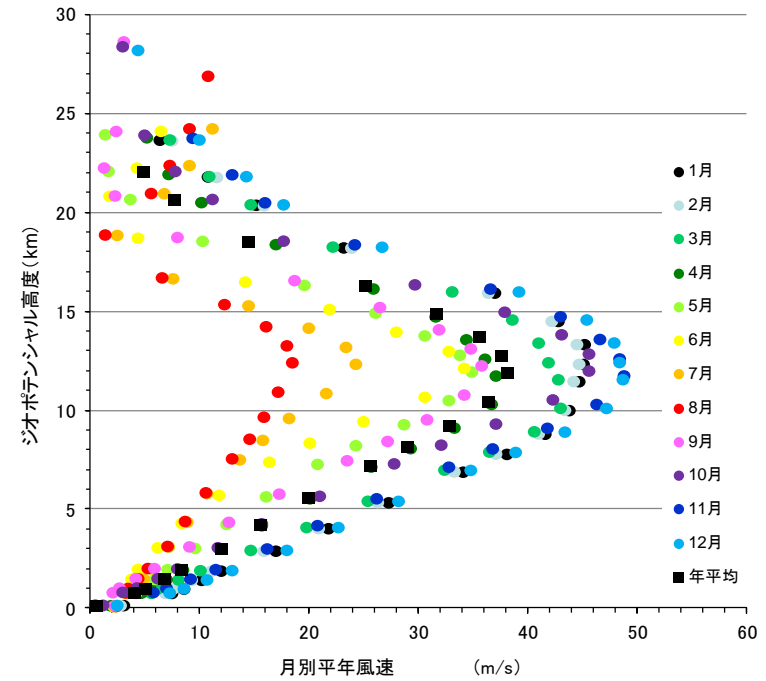
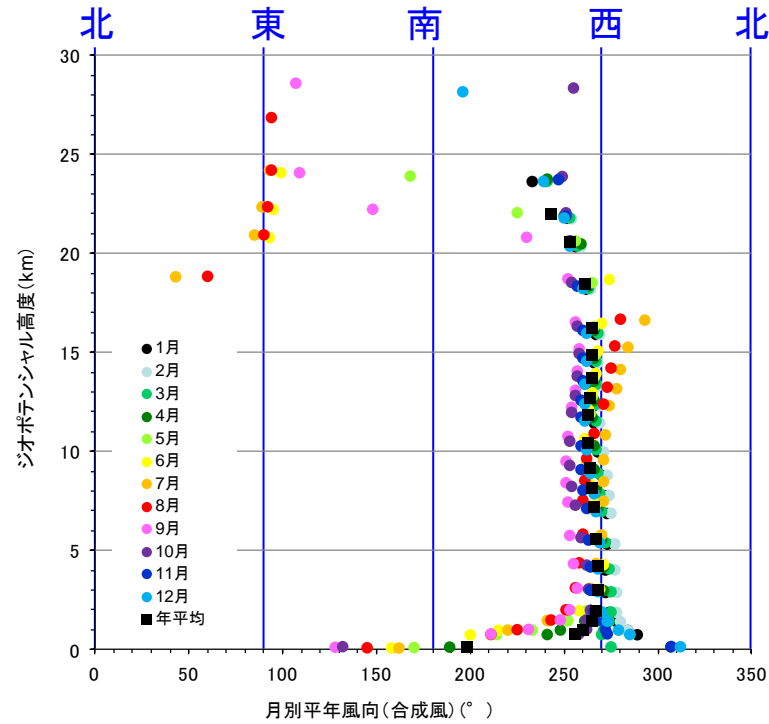
4.2.4 降下火砕物シミュレーション⑬

〔月別平年値の特徴〕

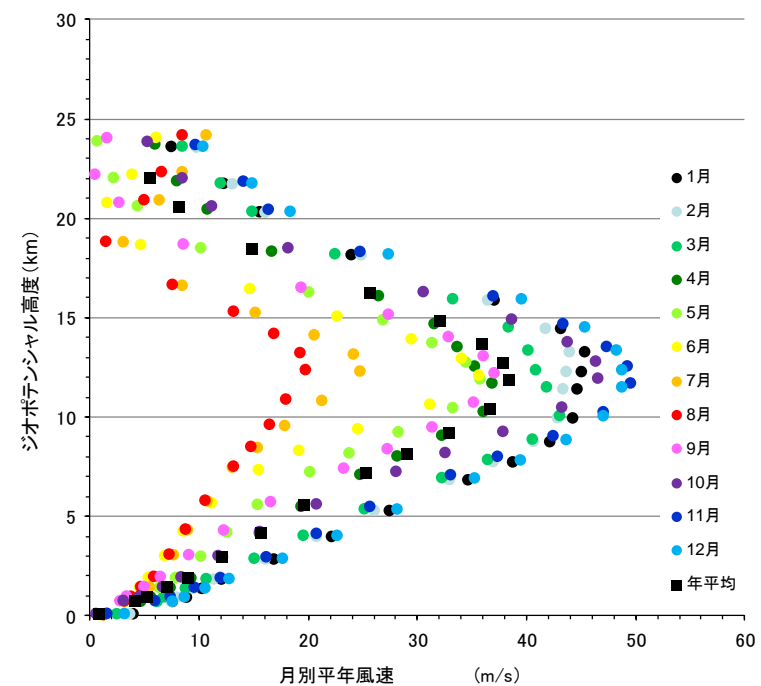
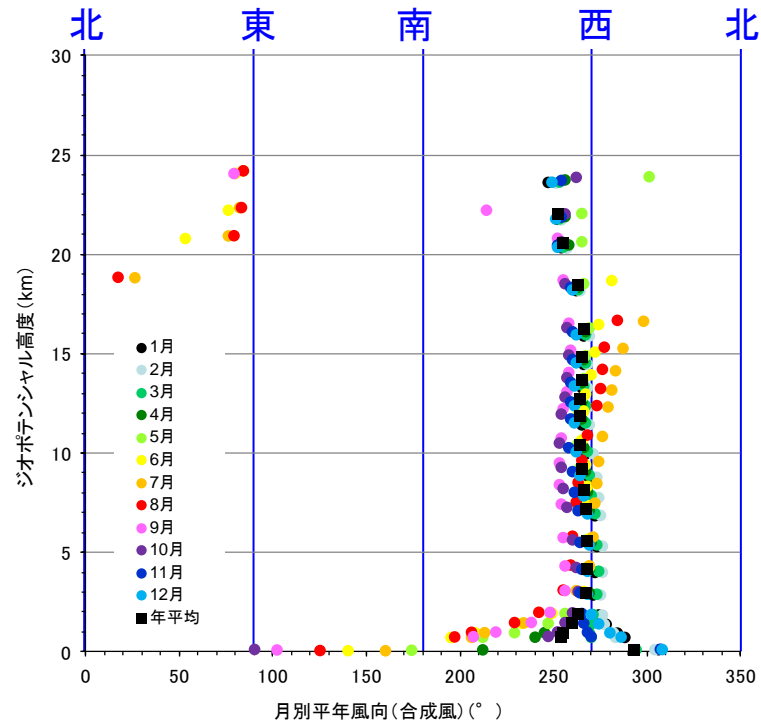
- ▶ 季節的な偏西風の変動の影響を考慮し、気象庁による高層気象観測データの月別平年値(1981~2010年の風向・風速)を用いた。
- ▶ 風向は、各月とも2km~18kmでは西風が卓越する。18km以上では、月によるばらつきがあり、6月~9月では東風が卓越する。
- ▶ 風速は、ジェット気流の影響で各月とも高度12km付近が最も大きい。また夏季に小さく、冬季に大きい傾向があり、8月が最も小さい。

月別平年値
(1981~2010年)

9時



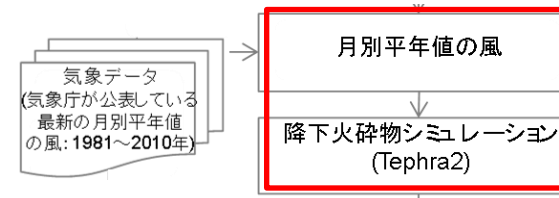
21時



4.2 降下火砕物の層厚

4.2.4 降下火砕物シミュレーション⑭

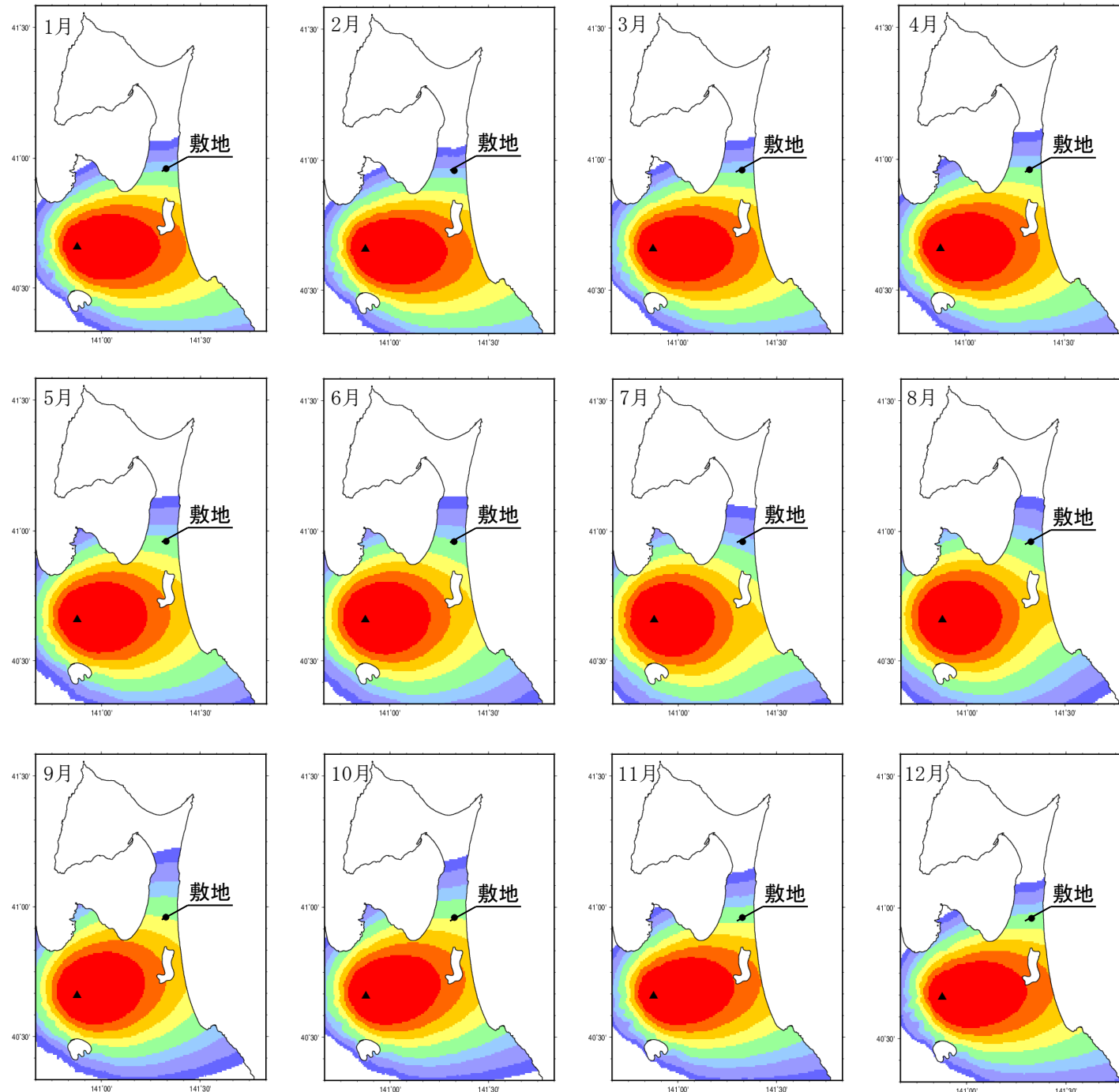
[月別平年値:9時]



(b)

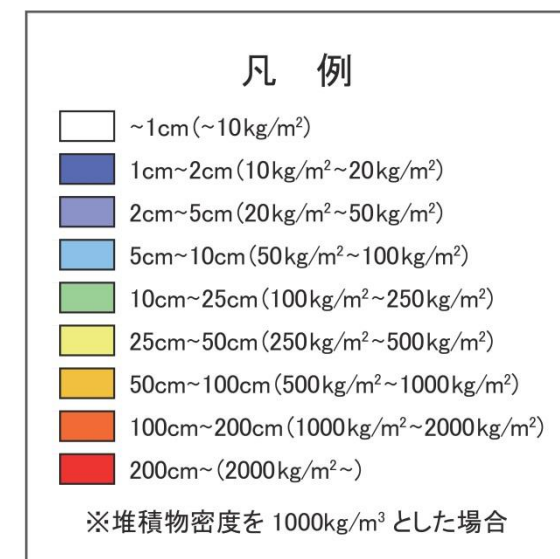
R1.7.12
資料1-1
p189 再掲

- 甲地軽石相当の噴火について月別平年値の風を用いた降下火砕物シミュレーションの結果(9時)を示す。
- 敷地における火山灰厚さは6.1cm~25cmと評価。



	質量 (kg/m ²)	層厚 (cm)
1月	8.4×10^1	8.4×10^0
2月	6.1×10^1	6.1×10^0
3月	8.8×10^1	8.8×10^0
4月	1.1×10^2	1.1×10^1
5月	1.3×10^2	1.3×10^1
6月	1.1×10^2	1.1×10^1
7月	6.7×10^1	6.7×10^0
8月	9.3×10^1	9.3×10^0
9月	2.5×10^2	2.5×10^1
10月	2.5×10^2	2.5×10^1
11月	1.9×10^2	1.9×10^1
12月	1.3×10^2	1.3×10^1

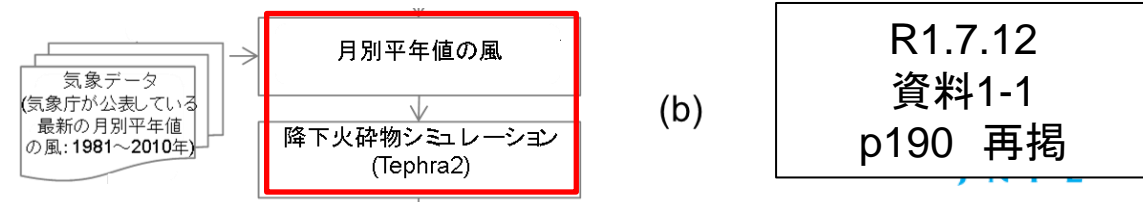
月別平年値(9時)の風の際の敷地での層厚(1981~2010年)



4.2 降下火砕物の層厚

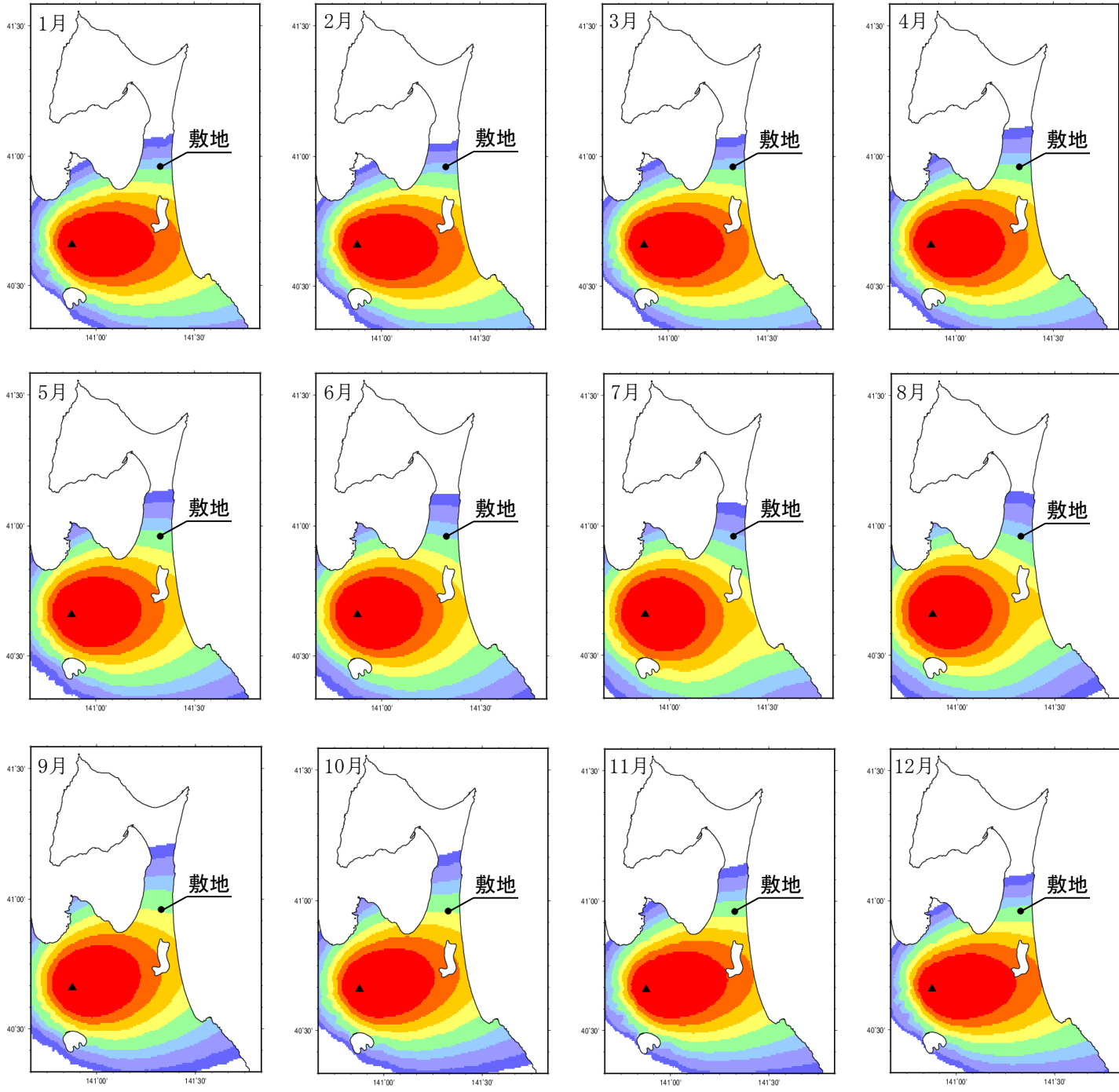
4.2.4 降下火砕物シミュレーション⑮

[月別平年値:21時]



R1.7.12
資料1-1
p190 再掲

- 甲地軽石相当の噴火について月別平年値の風を用いた降下火砕物シミュレーションの結果(21時)を示す。
- 敷地における火山灰厚さは6.0cm~24cmと評価。



	質量 (kg/m ²)	層厚 (cm)
1月	8.9×10^1	8.9×10^0
2月	6.5×10^1	6.5×10^0
3月	8.6×10^1	8.6×10^0
4月	1.1×10^2	1.1×10^1
5月	1.3×10^2	1.3×10^1
6月	9.9×10^1	9.9×10^0
7月	6.0×10^1	6.0×10^0
8月	9.0×10^1	9.0×10^0
9月	2.3×10^2	2.3×10^1
10月	2.4×10^2	2.4×10^1
11月	1.8×10^2	1.8×10^1
12月	1.3×10^2	1.3×10^1

月別平年値(21時)の風の際の敷地での層厚(1981~2010年)

凡例

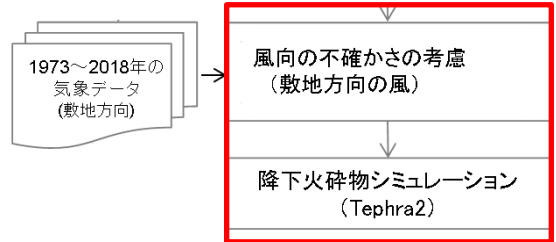
- ~1cm (~10kg/m²)
- 1cm~2cm (10kg/m²~20kg/m²)
- 2cm~5cm (20kg/m²~50kg/m²)
- 5cm~10cm (50kg/m²~100kg/m²)
- 10cm~25cm (100kg/m²~250kg/m²)
- 25cm~50cm (250kg/m²~500kg/m²)
- 50cm~100cm (500kg/m²~1000kg/m²)
- 100cm~200cm (1000kg/m²~2000kg/m²)
- 200cm~(2000kg/m²~)

※堆積物密度を 1000kg/m³ とした場合

4.2 降下火砕物の層厚

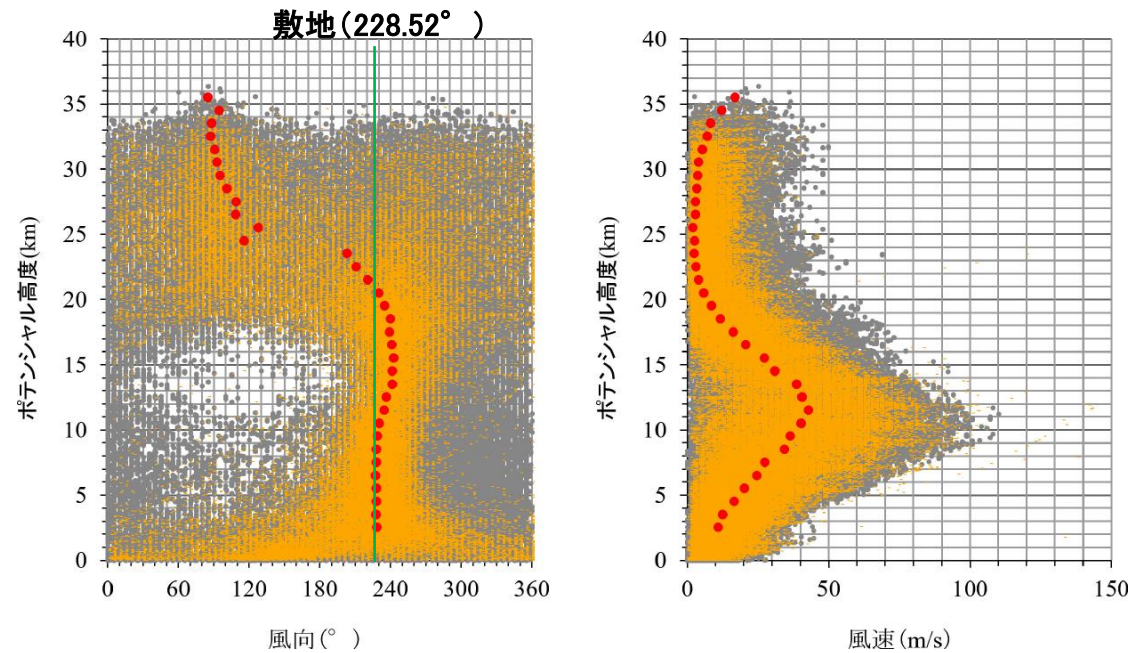
4.2.4 降下火砕物シミュレーション①⑥

[風向の不確かさの検討]

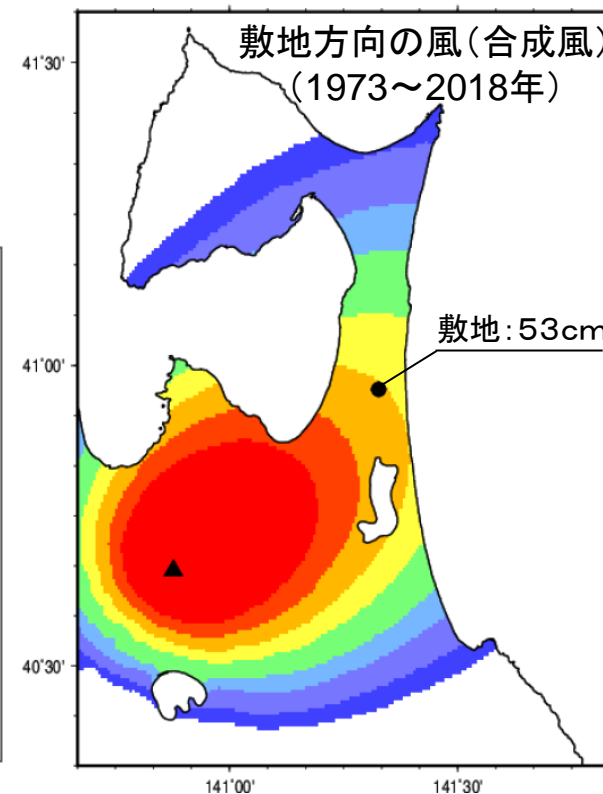
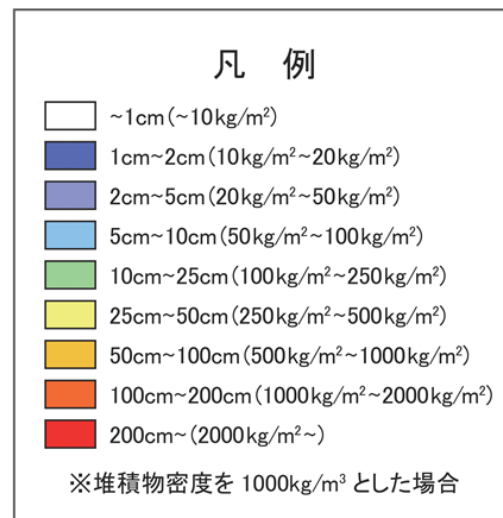
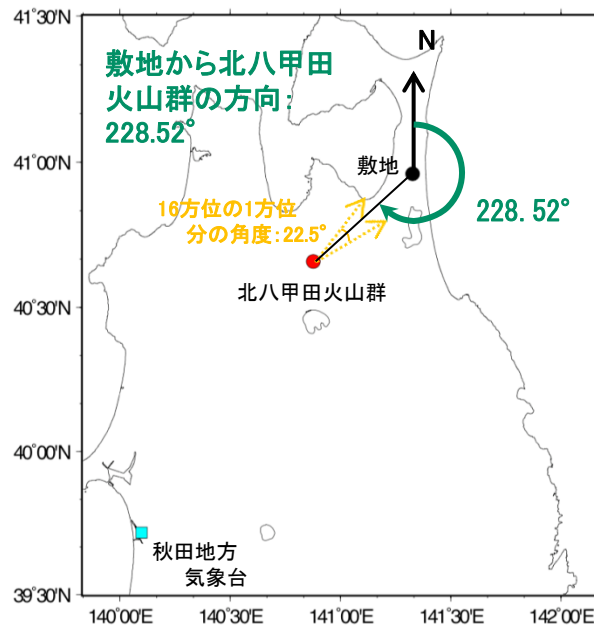


- 敷地は八甲田山の北東方向に位置しており、風向の不確かさとして、敷地方向の風を考慮した場合に最も影響を受けると考えられる。
- したがって、敷地方向の風を抽出・平均して作成した風を用いて検討した結果、敷地における火山灰厚さは53cm。

※観測値のうち高度2km～18kmにおける風向の平均値が抽出範囲内
[敷地(228.52°)を中心とし、16方位の1方位分の角度:±11.25°]に入る風を抽出し、その高度別平均値を用いて解析



- 観測値(2015～2018年のデータのみ記載)
- 観測値(敷地方向の風)(1973～2018年のデータ)
- 敷地方向の風(合成風)(1973～2018年のデータ)



4.2 降下火砕物の層厚

4.2.5 設計に用いる降下火砕物の層厚

➤ 敷地及び敷地近傍で確認される主な降下火砕物

○給源を特定できる降下火砕物

- ・ 地質調査によると甲地軽石が最大で、その層厚は再堆積を含み43cm。
- ・ 文献調査によると甲地軽石が最大で層厚20～50cm。

○給源不明な降下火砕物

- ・ 地質調査によるとCテフラが最大で層厚約12cm。

➤ 降下火砕物シミュレーション

○対象降下火砕物の検討

現状における同規模の噴火の可能性、地質調査結果(最大層厚)及び噴出量等を踏まえ、甲地軽石を降下火砕物シミュレーションの対象とした。なお、抽出に当り、その他の降下火砕物が、甲地軽石に比べ施設に与える影響が十分に小さいことを確認した。

○降下火砕物シミュレーション結果

- ・ 文献の等層厚線に対する再現解析等から、降下火砕物シミュレーションに用いる入力パラメータを設定した。
- ・ 降下火砕物が全て降下するまで、一定方向に同じ風速の風が吹き続けるという保守性を考慮した上で、風向の不確かさ(敷地方向の風)を考慮した解析を実施した結果、敷地での層厚が**53cm**となった。

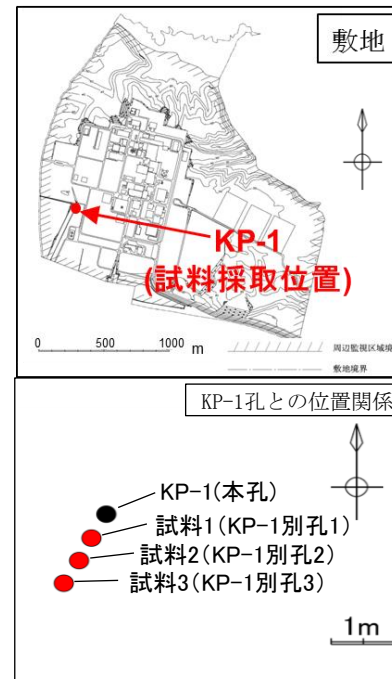


設計に用いる降下火砕物の層厚は、甲地軽石の55cmとする。

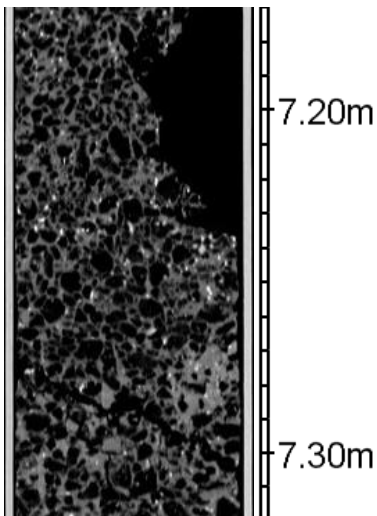
4.3 降下火砕物の密度

当社の甲地軽石の密度試験結果

試料名		試料1	試料2	試料3	平均
乾燥密度	g/cm ³	0.36	0.50	0.42	0.43
湿潤密度	g/cm ³	1.14	1.20	1.14	1.16
飽和密度	g/cm ³	1.21	1.30	1.25	1.25



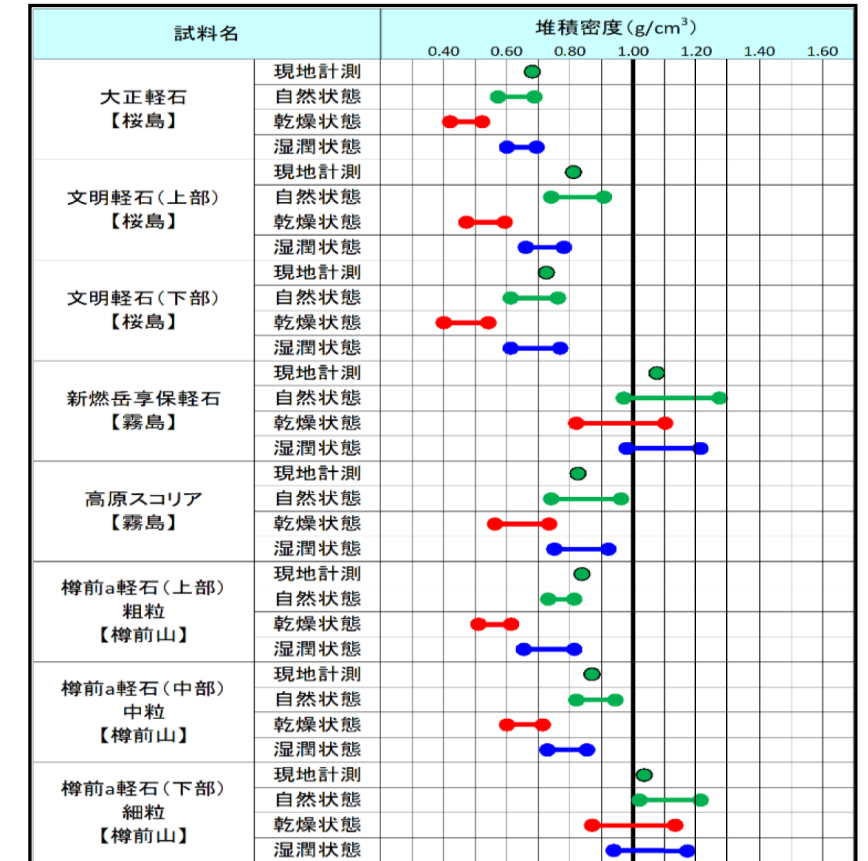
KP-1孔甲地軽石
(主部) CT画像



密度試験試料(KP-1別孔の甲地軽石(主部))

層厚が最大となるKP-1孔の甲地軽石(主部)の密度試験の結果、乾燥密度は0.43g/cm³、湿潤密度は1.16g/cm³、飽和密度1.25g/cm³である。

小尾ほか(2019)における軽石の堆積密度測定結果



- ▶ 宇井編(1997)によると、「乾燥した火山灰は密度が0.4~0.7であるが、湿ると1.2を超えることがある。」としている。
- ▶ 新版地学事典(2007)によると、軽石を「火山砕屑物の一種で、多孔質でみかけ密度が小さく淡色を呈するもの」としている。
- ▶ 小尾ほか(2019)において、細粒火山灰との比較検討として有史以降の噴火の軽石を対象とした堆積密度を計測しており、乾燥状態では約0.4g/cm³~約1.2g/cm³、自然状態では約0.5g/cm³~約1.3g/cm³、湿潤状態(試料を2日間浸水させて計測した密度)で約0.6g/cm³~約1.3g/cm³の測定結果を示している。

コア観察およびCT画像より甲地軽石は軽石が主体であり、密度試験結果並びに軽石の文献調査結果を踏まえ設計に用いる降下火砕物の密度は、湿潤状態※1.3g/cm³とする。

※飽和状態(降下火砕物の空隙に水が満たされた状態、飽和密度)を含む値として1.3g/cm³とした。

4.4 まとめ

- 設計対応可能な火山事象として降下火砕物を抽出した。
- 敷地及び敷地近傍で確認される主な降下火砕物
 - 給源を特定できる降下火砕物
 - ・ 地質調査によると甲地軽石が最大で、その層厚は再堆積を含み43cm。
 - ・ 文献調査によると甲地軽石が最大で層厚20～50cm。
 - 給源不明な降下火砕物
 - ・ 地質調査によるとCテフラが最大で層厚約12cm。
- 降下火砕物シミュレーション
 - 対象降下火砕物の検討
現状における同規模の噴火の可能性、地質調査結果(最大層厚)及び噴出量等を踏まえ、甲地軽石を降下火砕物シミュレーションの対象とした。
 - 降下火砕物シミュレーション結果
 - ・ 風向の不確かさ(敷地方向の風)を考慮した解析の結果、敷地での層厚は53cmとなった。
- 降下火砕物の密度 (甲地軽石の試験結果)
 - ・ 密度:乾燥密度 0.43g/cm^3 , 湿潤密度 1.16g/cm^3 , 飽和密度 1.25g/cm^3



施設において考慮すべき火山事象は、降下火砕物のみである。
設計に用いる降下火砕物の層厚及び密度は、最大層厚である甲地軽石から以下のように設定。
層厚:55cm, 密度(湿潤状態※): 1.3g/cm^3

※飽和状態(降下火砕物の空隙に水が満たされた状態、飽和密度)を含む値として 1.3g/cm^3 とした。

参考

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)

(参考2) 噴火規模に関する参考資料

(参考3) 十和田及び八甲田地域におけるカルデラ火山の活動の時空間分布

(参考4) 施設の運用期間について

(参考5) 十和田周辺の地震活動に関する知見

(参考6) 地殻変動の管理基準の倍数の過去への適応

(参考7) 地震の管理基準に係る検知能力の考え方について

(参考8) 水準測量の実施に向けた水準点の設置状況

(参考9) 火山ガスに関する知見について

(参考10) 敷地及び敷地近傍で確認される降下火砕物(文献調査)

(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況

(参考12) 甲地軽石の分析結果

(参考13) 十和田中掇テフラの火山から敷地にかけての堆積状況

(参考14) 十和田中掇テフラの降灰シミュレーション

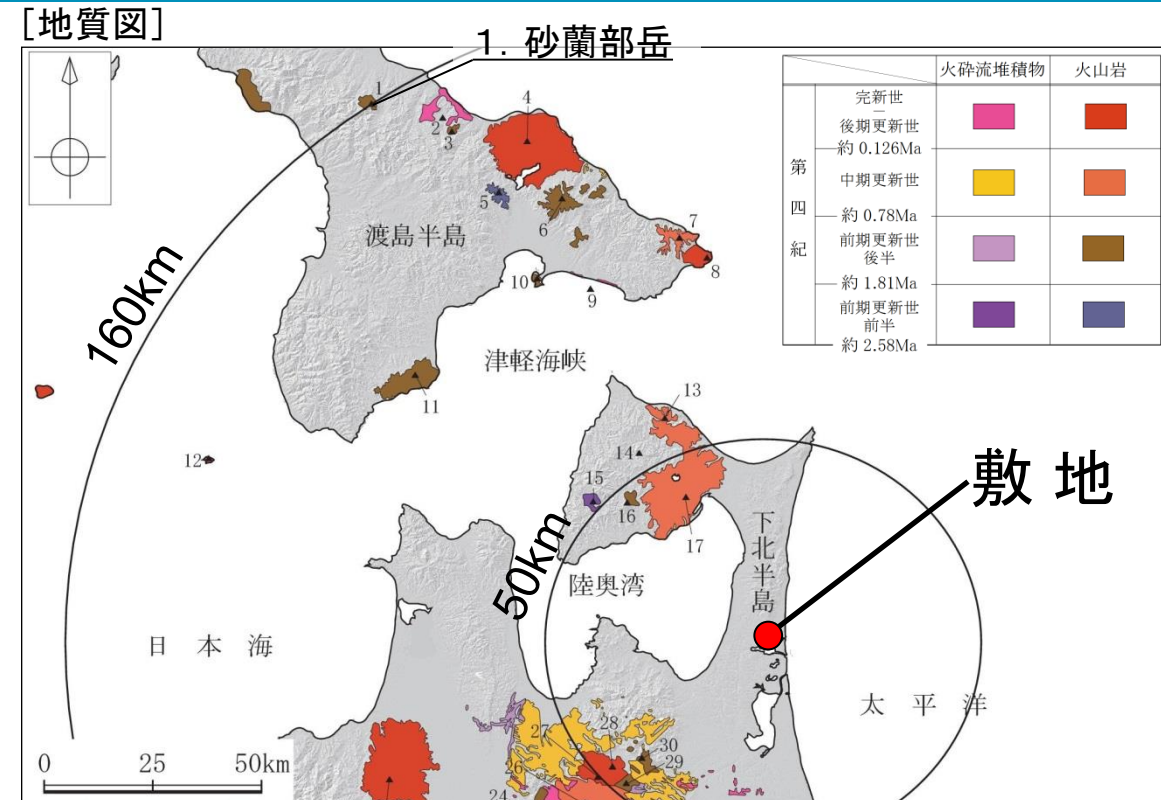
(参考15) Tephra2のバグ修正に伴う設計層厚の変更

(参考16) 十和田火山防災協議会の降灰想定等の評価への影響について

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【 1. 砂蘭部岳】

火山名	砂蘭部岳
敷地からの距離	約160km
火山の形式	複成火山
活動年代	約180万年前

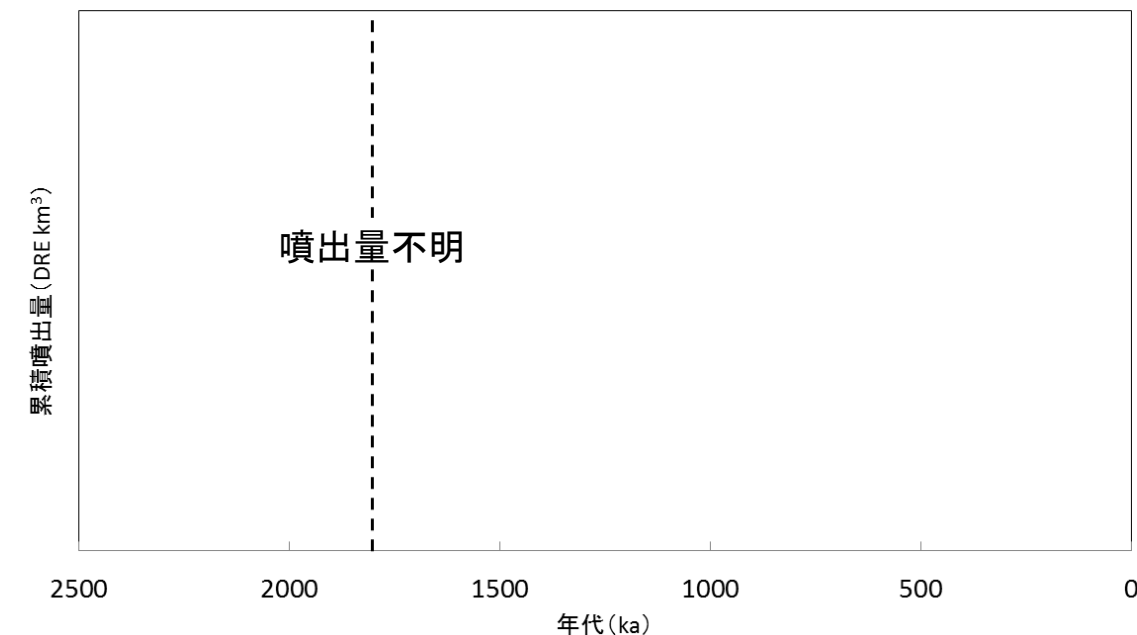
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく



砂蘭部岳の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1800ka	砂蘭部岳	砂蘭部岳安山岩	不明	NEDO(1990) 沢村・秦(1981) 松下ほか(1973) 西来ほか編(2014)

※中野ほか編(2013)では, 明瞭な活動期間が示されておらず, 十分に長い活動期間は有さないと考えられる。



砂蘭部岳の噴出量一年代階段ダイアグラム

※ 破線部は中野ほか編(2013)における年代を表す。

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【2. 濁川カルデラ】

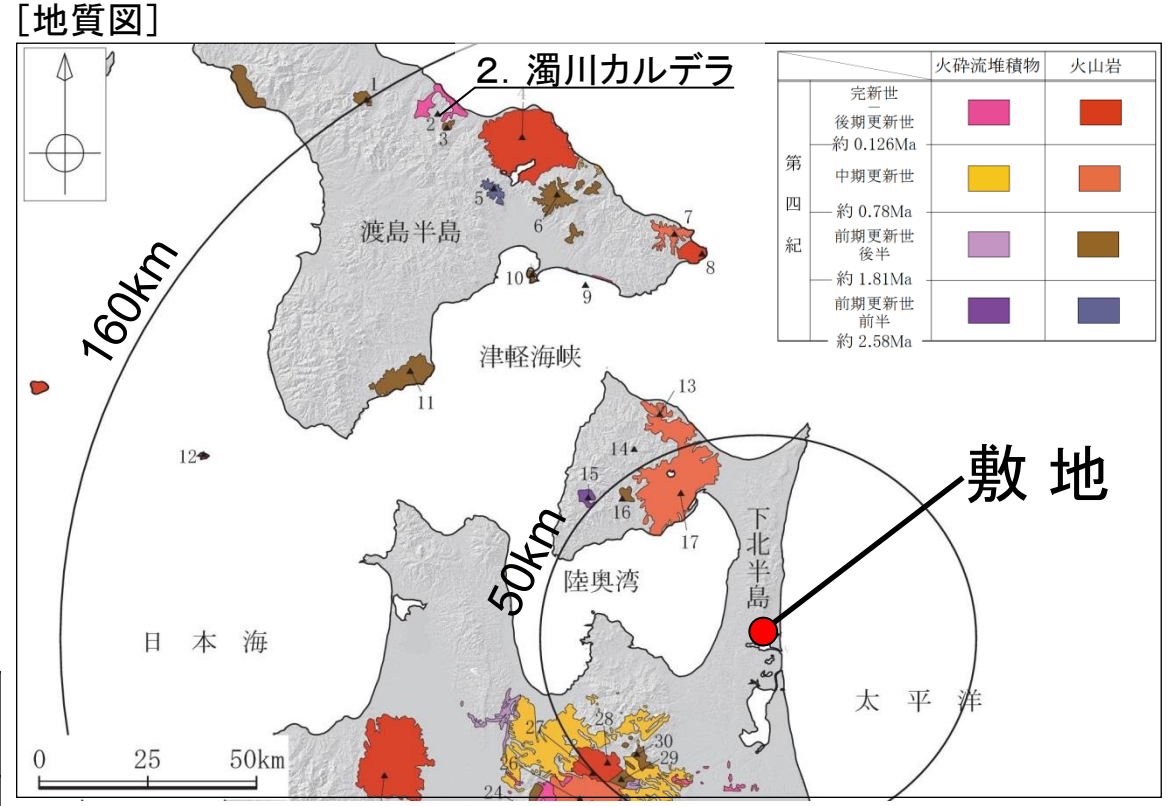
火山名	濁川カルデラ
敷地からの距離	約148km
火山の形式	カルデラー火砕流
活動年代	1万5000年前にカルデラ形成

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

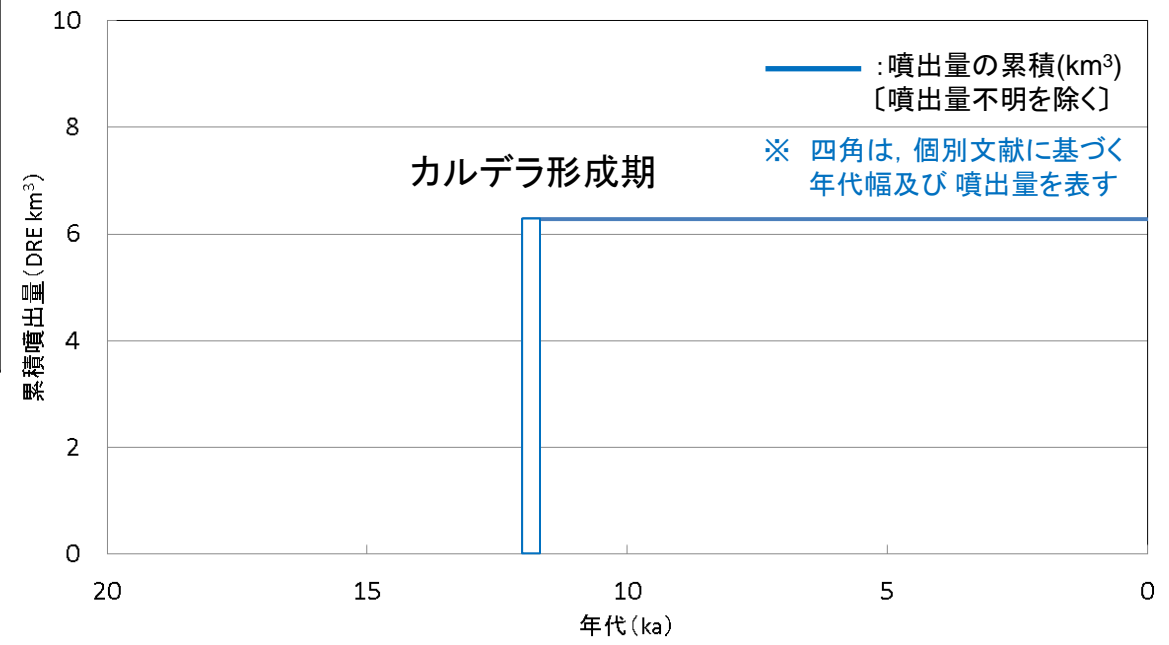
濁川カルデラの活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
(10,190yBP)	後カルデラ活動期	貫入岩(溶岩ドーム) <small>(湖成堆積物(10,190yBP)に覆われる)</small>	不明	柳井ほか(1992) 黒墨・土井(2003) 西来ほか編(2014)
11,670yBP		Ng-c軽石流 Ng-d火砕サージ, 降下軽石	5.1	
15ka	カルデラ形成期	Ng-e降下火山灰	1.0	
		Ng-f降下火山灰	0.2	
12,020yBP				

・青: 個別文献年代値(活動期間が非常に短く, 最近100万年間に活動した火山について, 個別に文献を確認)
※島弧の火山の平均的活動期間: 数十万年程度(兼岡・井田, 1997)
・濁川カルデラは気象庁によると, 活火山に含まれていない。
(気象庁の活火山の定義: 概ね過去1万年以内に噴火した火山及び現在活発な噴気活動のある火山)



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



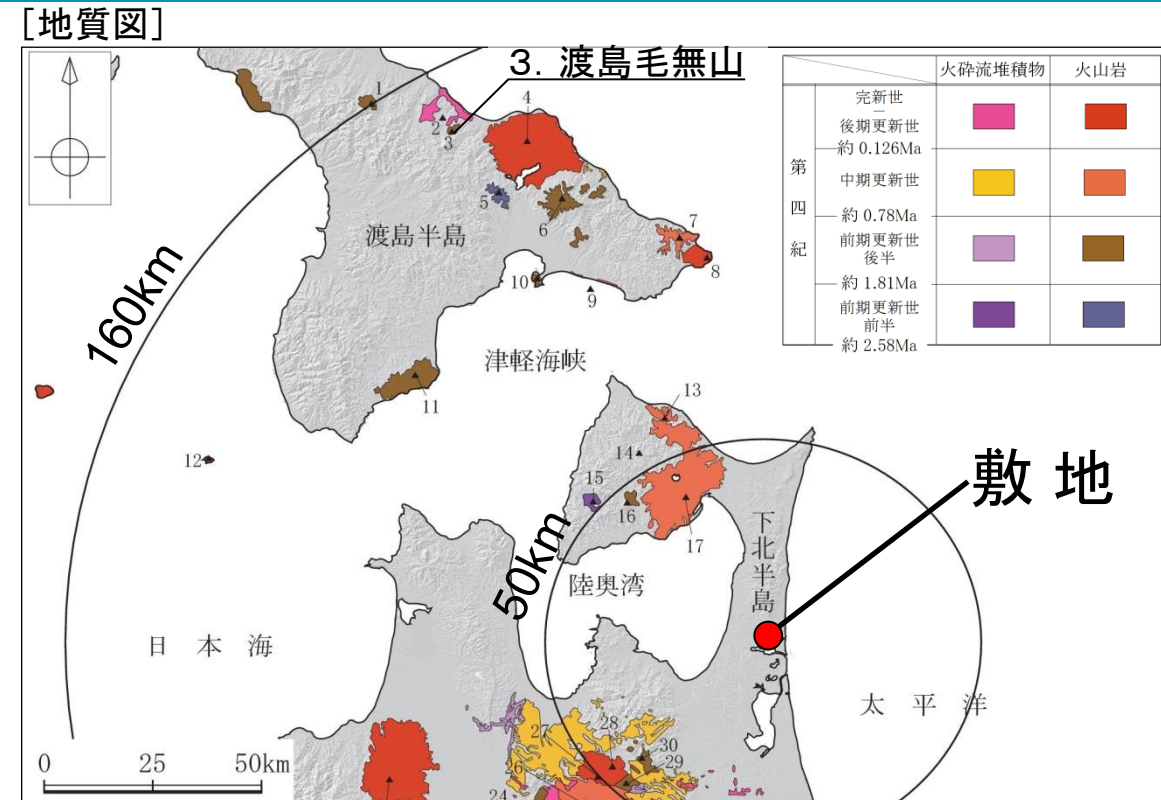
濁川カルデラの噴出量一年代階段ダイアグラム

全活動期間よりも最新活動からの経過時間が長いことから,
原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【3. 渡島毛無山】

火山名	渡島毛無山
敷地からの距離	約144km
火山の形式	溶岩流
活動年代	前期更新世前半 もしくは 前期更新世

注)火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく



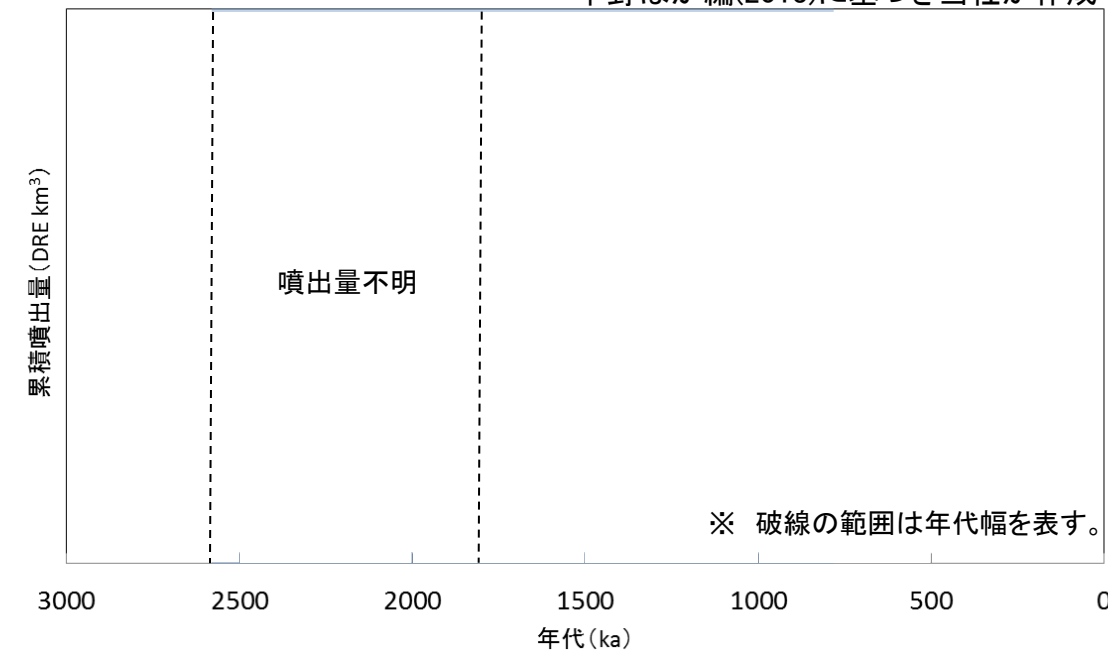
中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

渡島毛無山の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
(780ka)	渡島毛無山	毛無山溶岩	不明	松下ほか(1973) 西来ほか編(2014)
1810ka				
2580ka (2580ka)				

・青: 個別文献年代値

※中野ほか編(2013)では, 明瞭な活動期間が示されておらず, 十分に長い活動期間は有さないと考えられる。



※ 破線の範囲は年代幅を表す。

渡島毛無山の噴出量一年代階段ダイアグラム

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【4. 北海道駒ヶ岳】

火山名	北海道駒ヶ岳
敷地からの距離	約134km
火山の形式	複成火山
活動年代	約3万年前もしくは3万年前以前～最新噴火:AD.2000

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

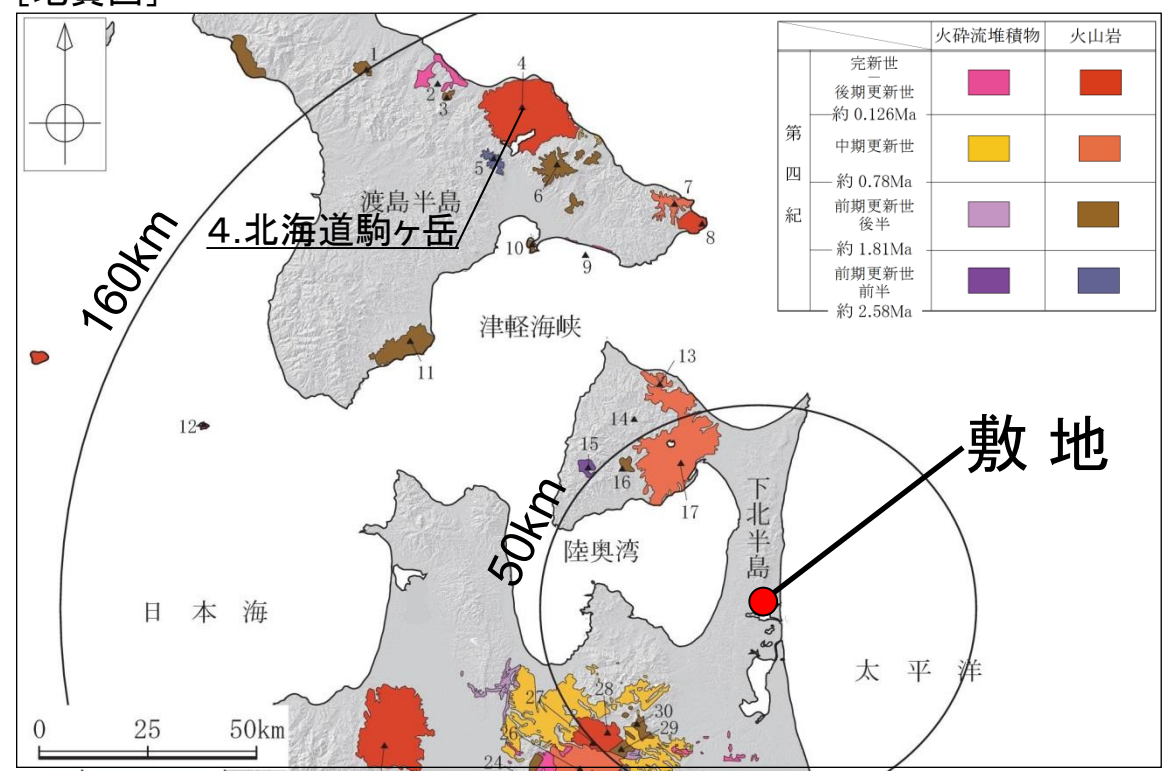
北海道駒ヶ岳の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
AD.2000	Stage IV	2000～2001年噴火	1.401	吉本ほか(2008) 吉本ほか(2007) 古川ほか(1997) 雁澤ほか(2005) 勝井ほか(1989) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 町田・新井(2011) 西来ほか編(2014)
AD.1640	Stage IV	クルミ坂岩屑なだれ, Ko-d 等	1.401	
6.3 ka	Stage III	Ko-f	1.4	
6.8 ka	Stage III	Ko-g 等	1.4	
12.8 ka	Stage II	P3～7	1.03	
20 ka	Stage II	Ko-h1 等	1.03	町田・新井(2011) 西来ほか編(2014)
30ka	Stage I	Ko-I	6.7	
39 ka	Stage I	剣ヶ峰溶岩	6.7	
110 ka		E-x 等		

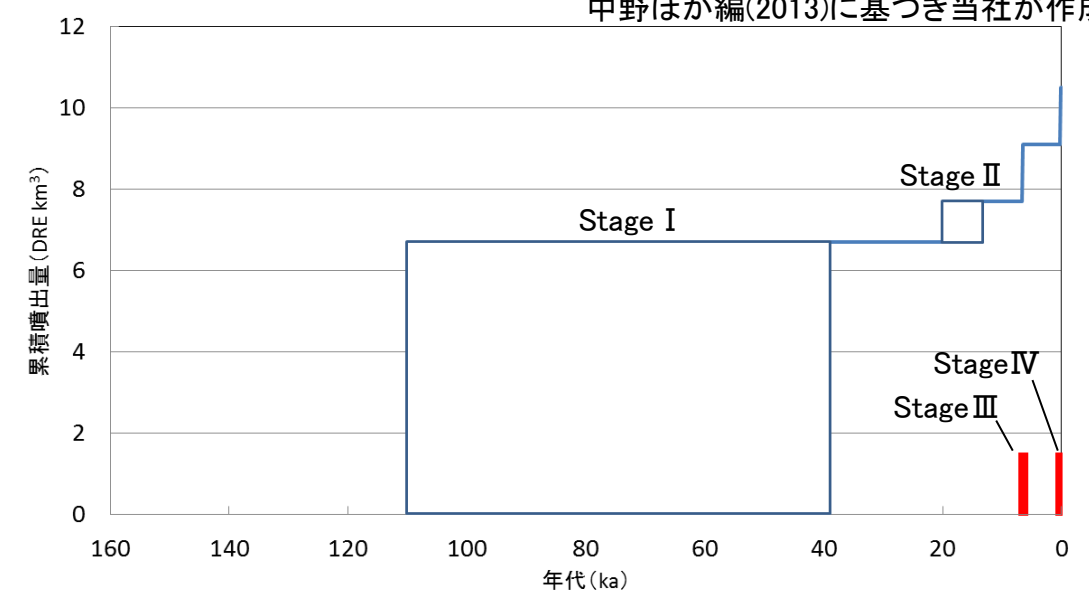
・青: 個別文献年代値

完新世に活動を行った火山であることから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



北海道駒ヶ岳の噴出量一年代階段ダイアグラム

— : 噴出量の累積(km³)
— : 噴出量(km³)
※ 四角は, 個別文献に基づく年代幅及び噴出量を表す。

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)
【5. 木地挽山】

火山名	木地挽山
敷地からの距離	約126km
火山の形式	複成火山
活動年代	約190万年前もしくは190万年前以降

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

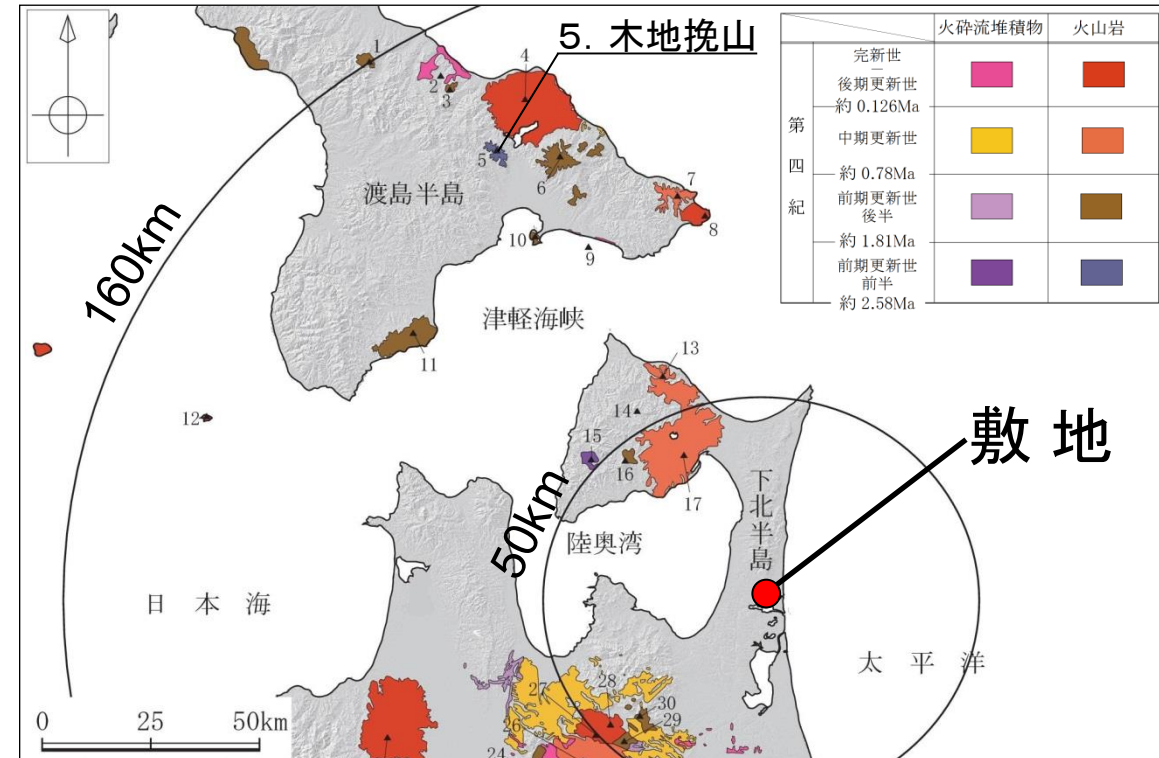
木地挽山の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1900ka	木地挽山	木地挽山溶岩	1.5	広瀬ほか(2000) 三谷ほか(1966) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 西来ほか編(2014)

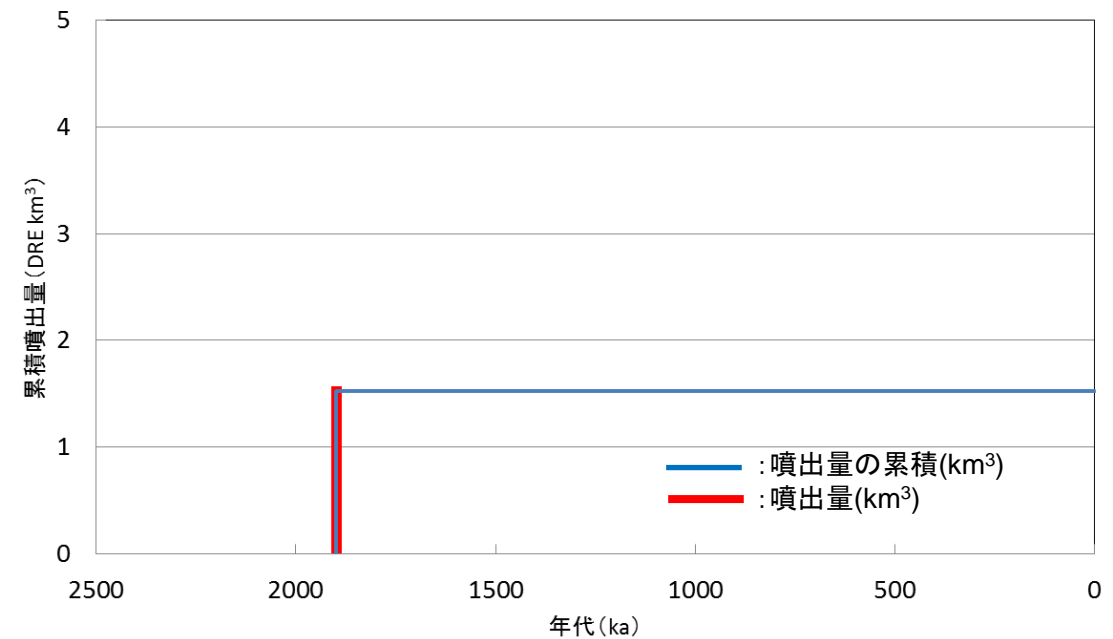
※中野ほか編(2013)では, 明瞭な活動期間が示されておらず, 十分に長い活動期間は有さないと考えられる。

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



木地挽山の噴出量一年代階段ダイアグラム

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)

【6. 横津岳】

火山名	横津岳
敷地からの距離	約118km
火山の形式	複成火山
活動年代	約110万年前もしくは110万年前以降

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

横津岳の活動履歴

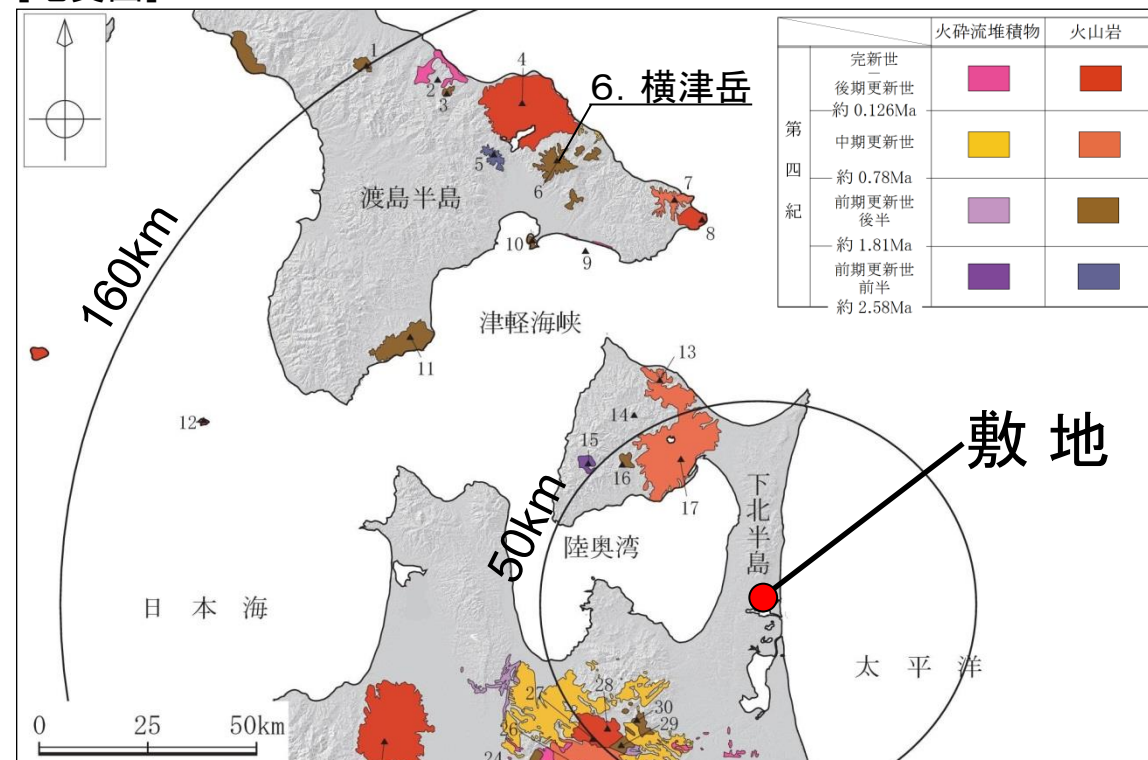
年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
140 ka 320 ka	グループ3	熊泊山北部, 泣面山	2.28	高田・中川(2016) NEDO(1988)
780 ka	グループ2	横津岳	4.56	
1050 ka 1710 ka	グループ1	七飯岳, 袴腰岳など	7.6	

青: 個別文献の年代値

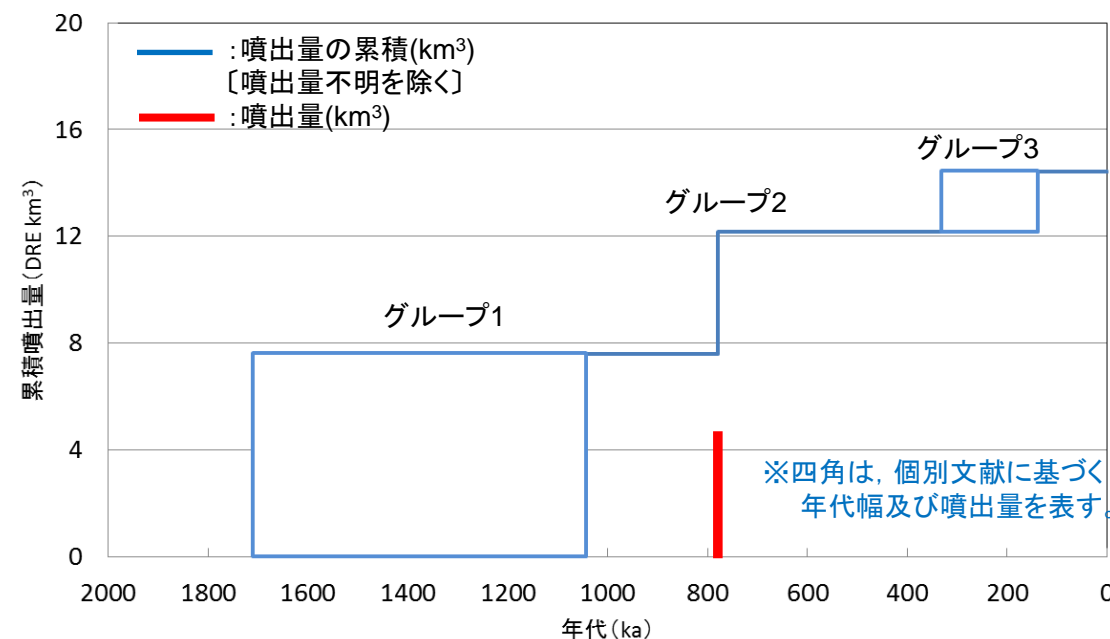
最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも短いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価*

* 申請時は、中野ほか編(2013)に基づく活動年代から最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いとし、将来の活動可能性のない火山としていたが、申請後の知見(高田・中川(2016))を踏まえ、横津岳を原子力施設に影響を及ぼし得る火山とした。

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

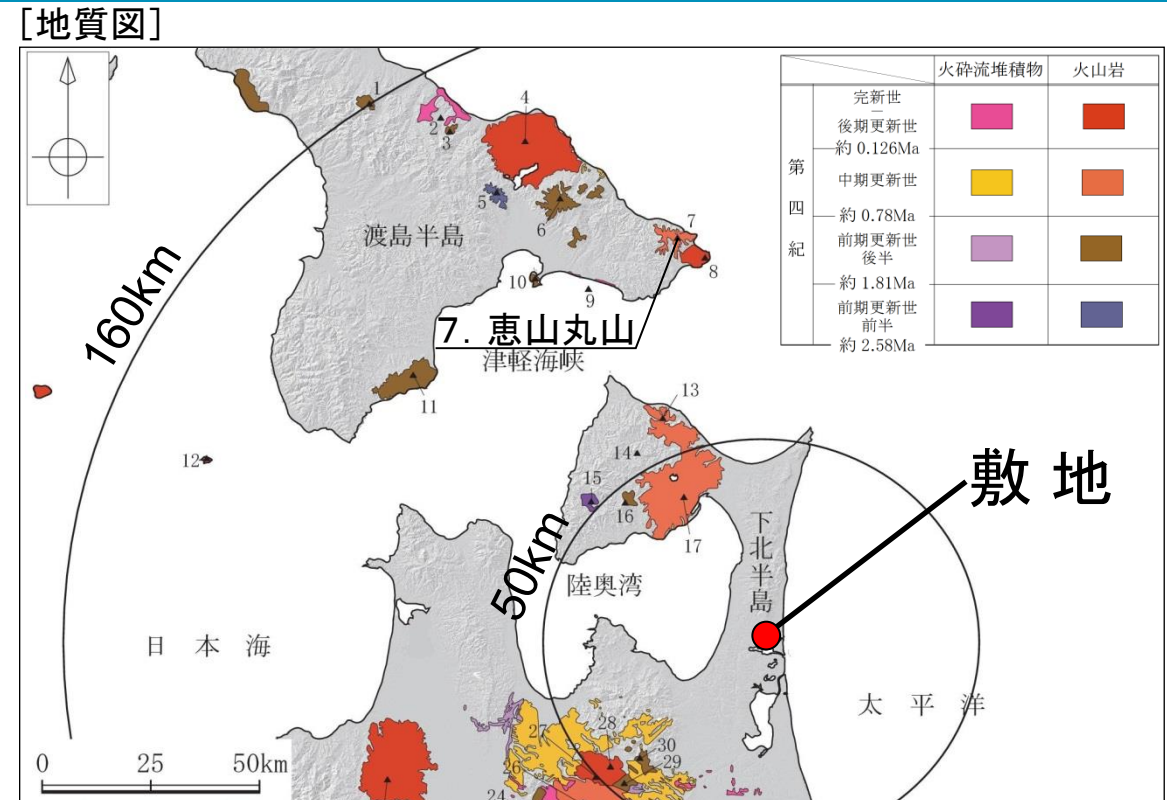


横津岳の噴出量一年代階段ダイアグラム

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【7. 恵山丸山】

火山名	恵山丸山
敷地からの距離	約101km
火山の形式	複成火山
活動年代	20万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく



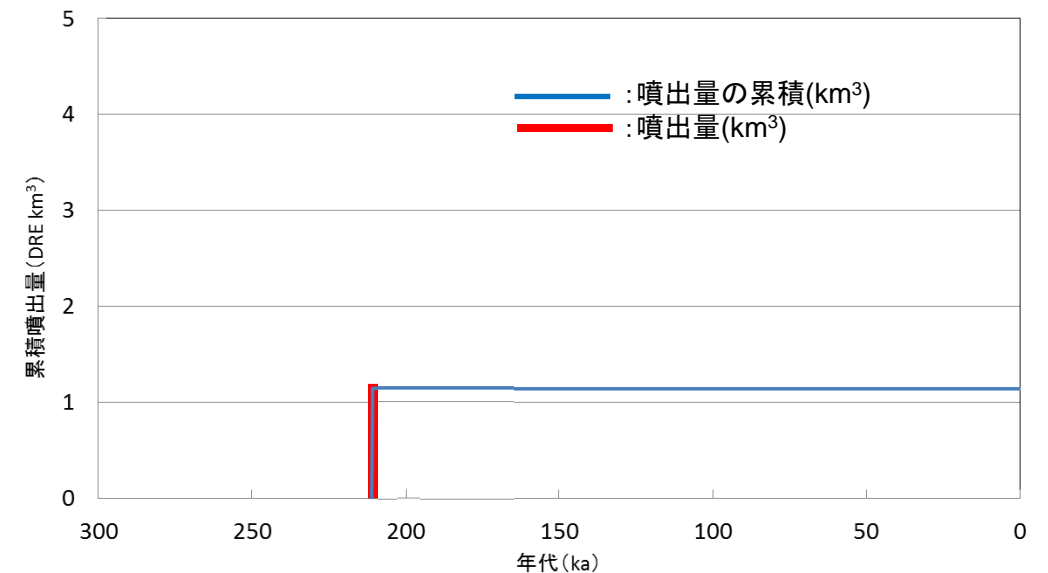
中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

恵山丸山の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
200ka - 210ka	恵山丸山	丸山火山噴出物	1.1	庄谷・高橋(1967) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 西来ほか編(2014)

- ・青: 個別文献年代値(活動期間が非常に短く, 最近100万年間*に活動した火山について, 個別に文献を確認)
※島弧の火山の平均的活動期間: 数十万年程度(兼岡・井田, 1997)
- ・中野ほか編(2013)では, 明瞭な活動期間が示されておらず, 十分に長い活動期間は有さないと考えられる。

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価



恵山丸山の噴出量一年代階段ダイアグラム

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【 8. 恵山】

火山名	恵山
敷地からの距離	約95km
火山の形式	複成火山, 溶岩ドーム
活動年代	約5万年前～最新噴火: AD.1874

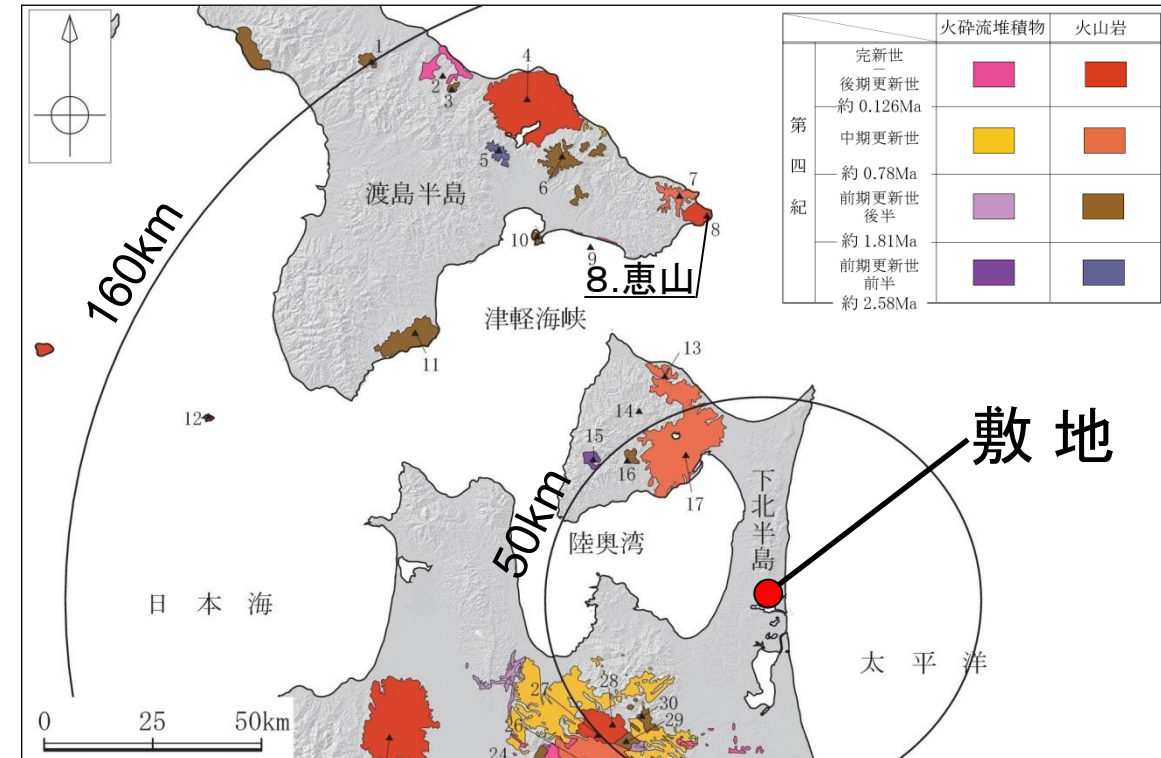
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

恵山の活動履歴

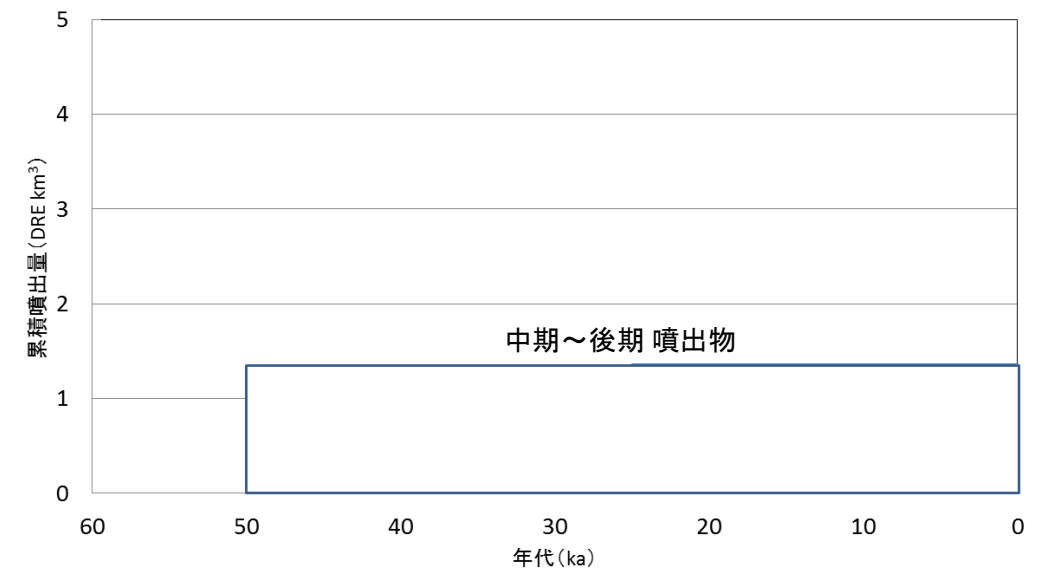
年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
AD.1874	後期	Es-6 Es-MP 等	0.484	Miura et al. (2013) 恵山火山防災協議会 (2001) 荒井 (1998) 安藤 (1974) 西来ほか編(2014)
	中期	EsHD1 EsHD4 等	0.796	
50ka	初期	Es-P2pfl Es-P1pfl	不明	

完新世に活動を行った火山であることから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



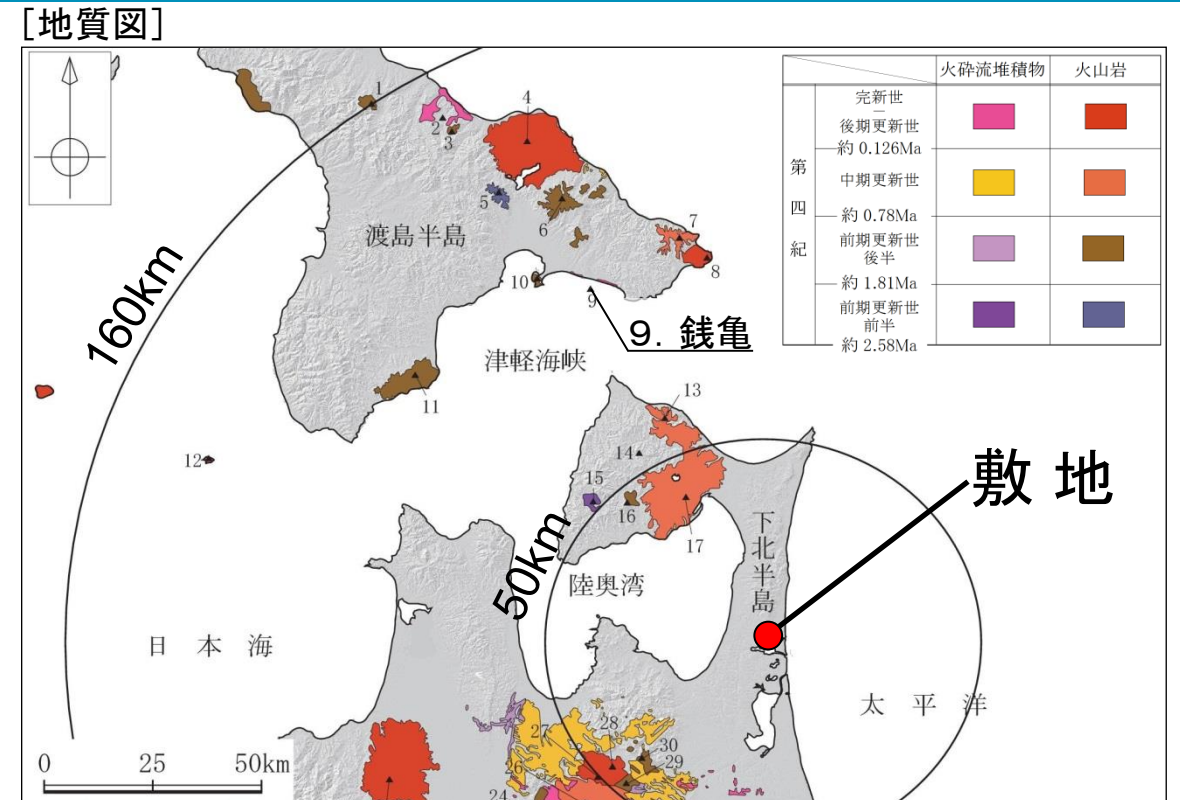
恵山の噴出量一年代階段ダイアグラム

—: 噴出量の累積(km³) ※ 四角は, 中野ほか編(2013)に基づく年代幅及び個別文献に基づく噴出量を表す。

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【9. 銭亀】

火山名	銭亀
敷地からの距離	約95km
火山の形式	カルデラー火砕流
活動年代	約4万5000年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

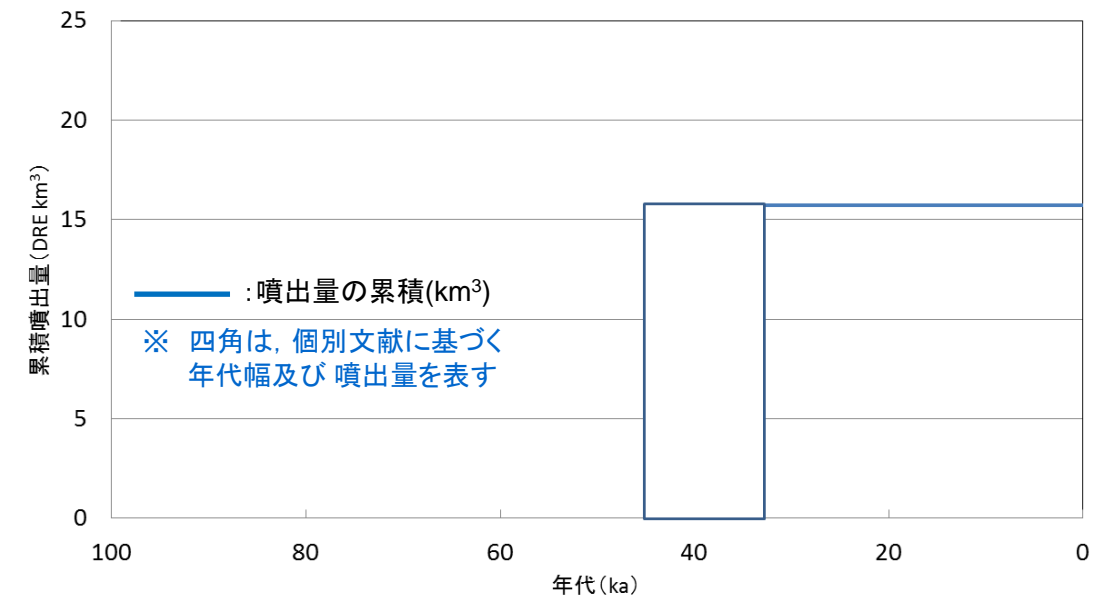


中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

銭亀の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
45ka	銭亀カルデラ (カルデラ形成期)	銭亀沢火砕流 女那川降下軽石	16	山縣ほか(1989) 西来ほか編(2014)

・青: 個別文献年代値(活動期間が非常に短く, 最近100万年間*に活動した火山について, 個別に文献を確認)
※島弧の火山の平均的活動期間: 数十万年程度(兼岡・井田, 1997)



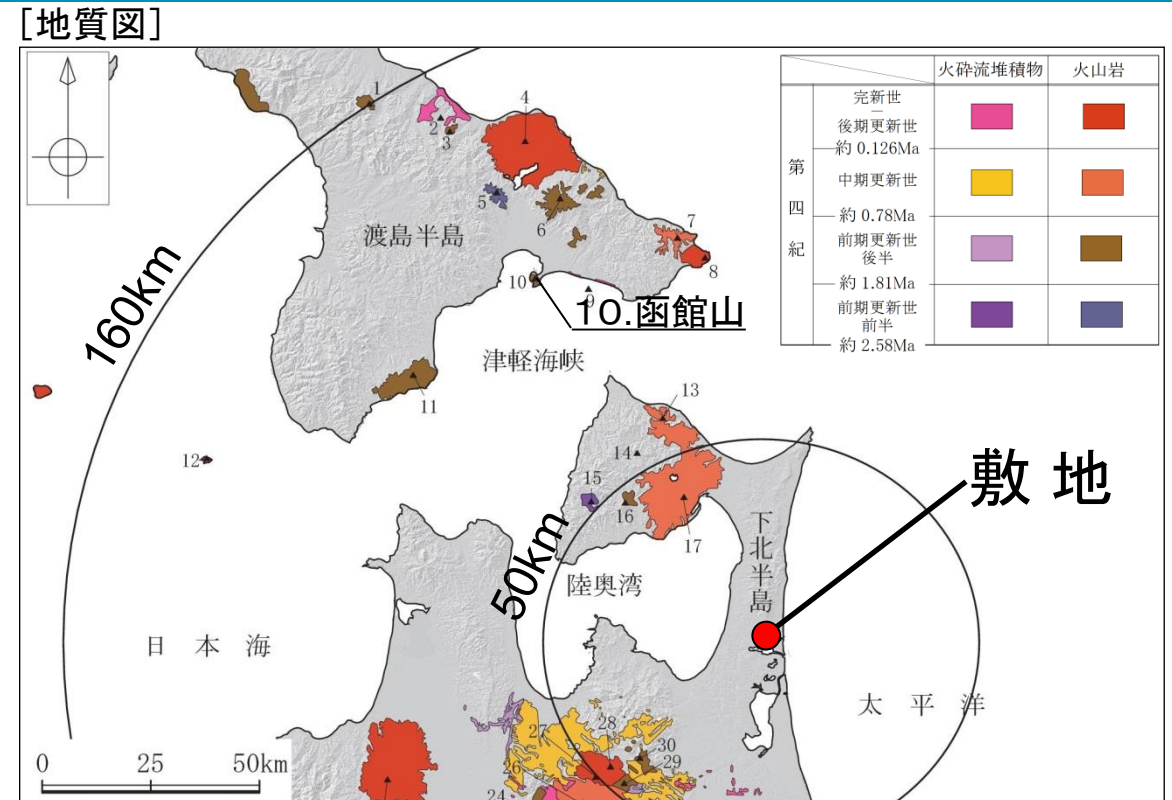
最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

銭亀の噴出量一年代階段ダイアグラム

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【10. 函館山】

火山名	函館山
敷地からの距離	約103km
火山の形式	複成火山
活動年代	約120万年前～90万年前

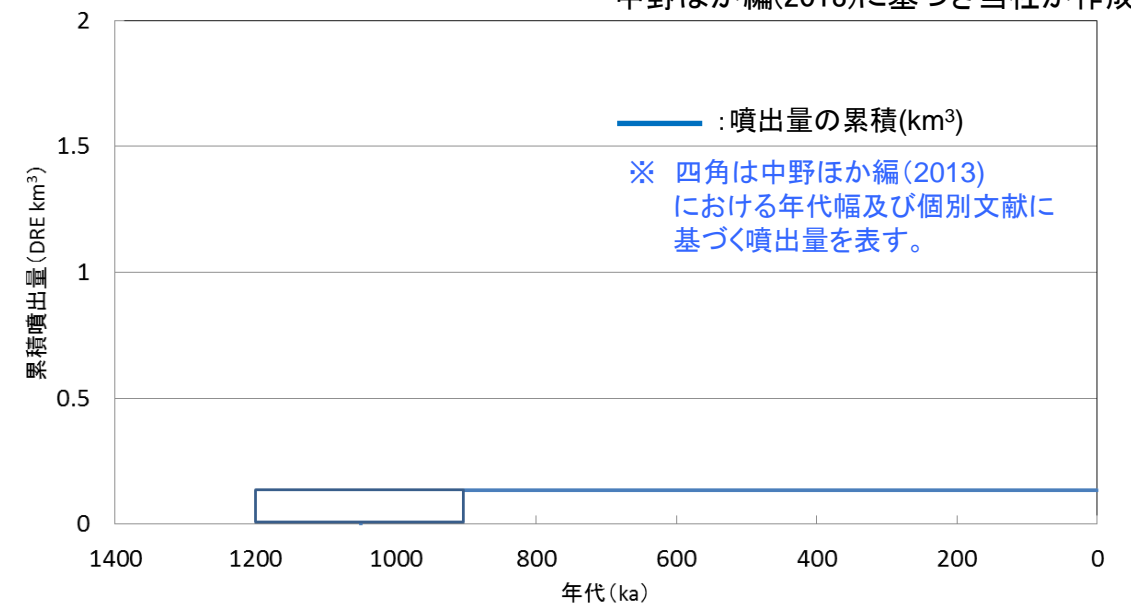
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

函館山の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
900 ka	函館山火山岩類	御殿山溶岩	0.13	雁澤(1992) 三谷ほか(1965) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 西来ほか編(2014)
1200 ka		立待岬溶岩 等		



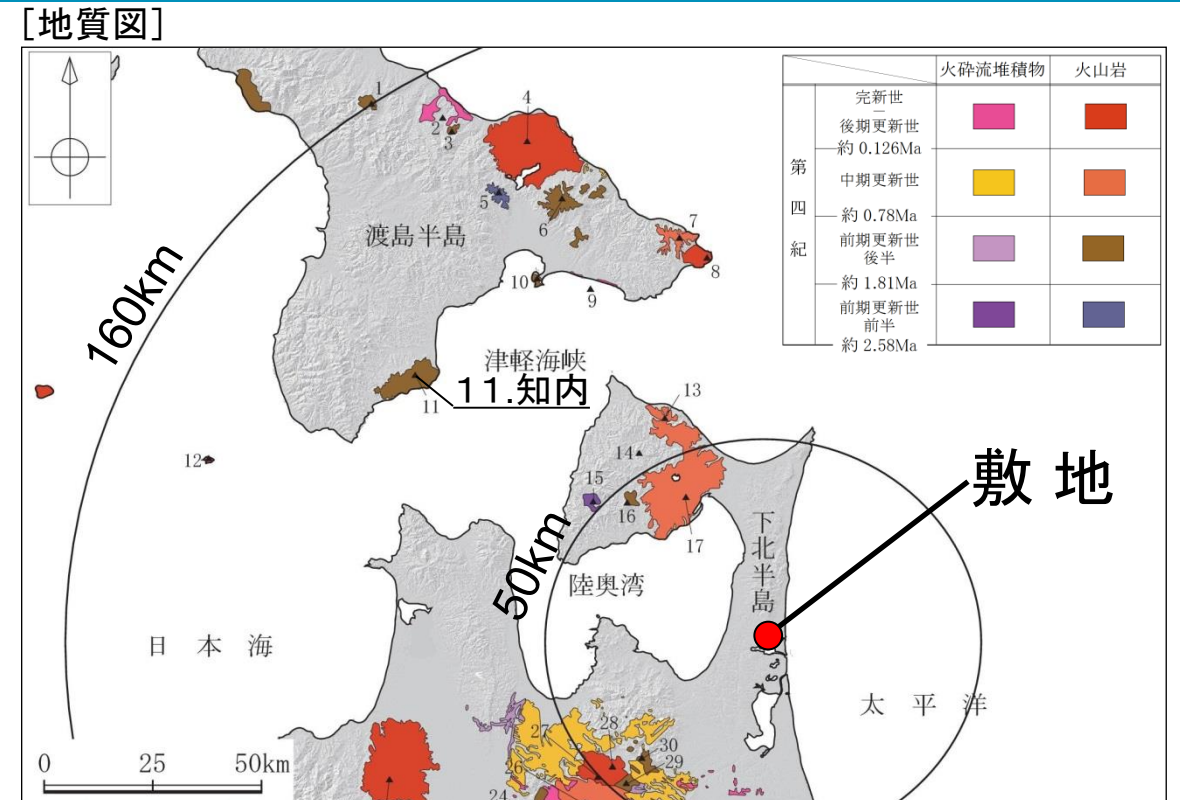
函館山の噴出量一年代階段ダイアグラム

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【11. 知内】

火山名	知内
敷地からの距離	約103km
火山の形式	複成火山, 溶岩ドーム
活動年代	約250万年前～140万年前

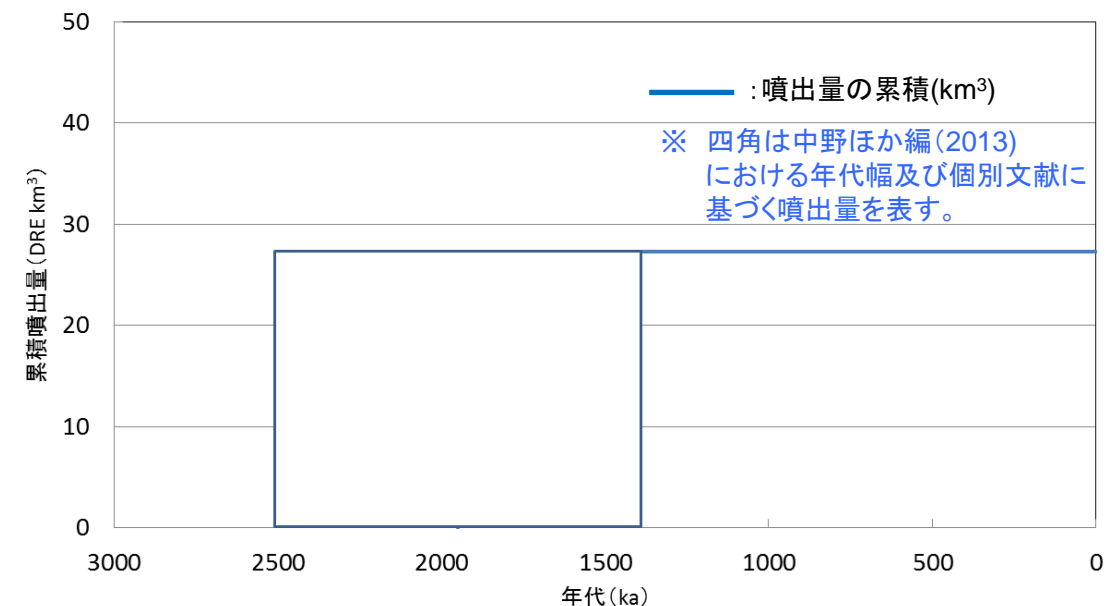
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

知内の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1400 ka	溶岩円頂丘及び岩脈	角閃石石英安山岩 等	27.3	広瀬ほか(2000) 山口(1977) 山口(1978) 第四紀火山カタログ委員会編(1999)
2500 ka	知内火山岩類	丸山安山岩 浦和石英安山岩 等		



知内の噴出量－年代階段ダイアグラム

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【12. 渡島小島】

火山名	渡島小島
敷地からの距離	約135km
火山の形式	複成火山
活動年代	約16万年前～11万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

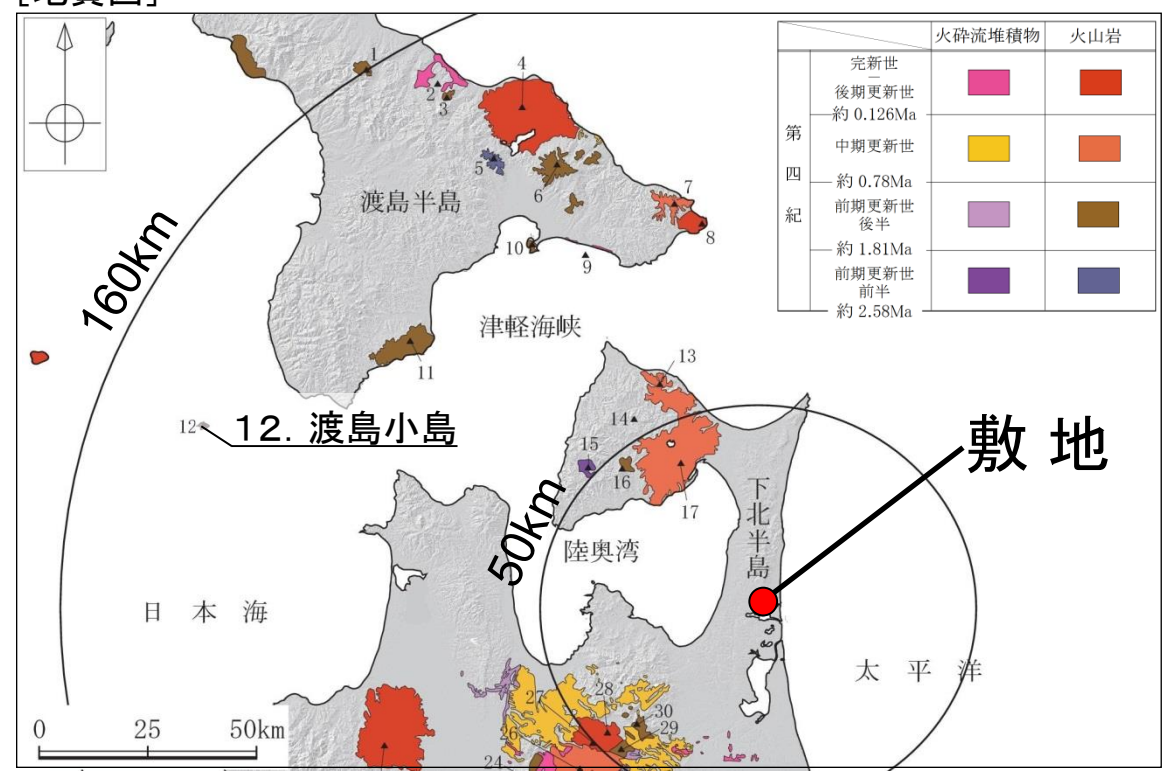
渡島小島の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
160ka	ステージ3	弁天ノ鼻溶岩	0.08	小杉ほか(2013) 吉井(1966) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 西来ほか編(2014)
		北風泊溶岩		
		東風泊溶岩 (岩脈)		
ステージ2	滝ノ間火砕岩類			
110ka	ステージ1	ゴメ岬火砕岩類		
		大ヒヤク島貫入岩体		

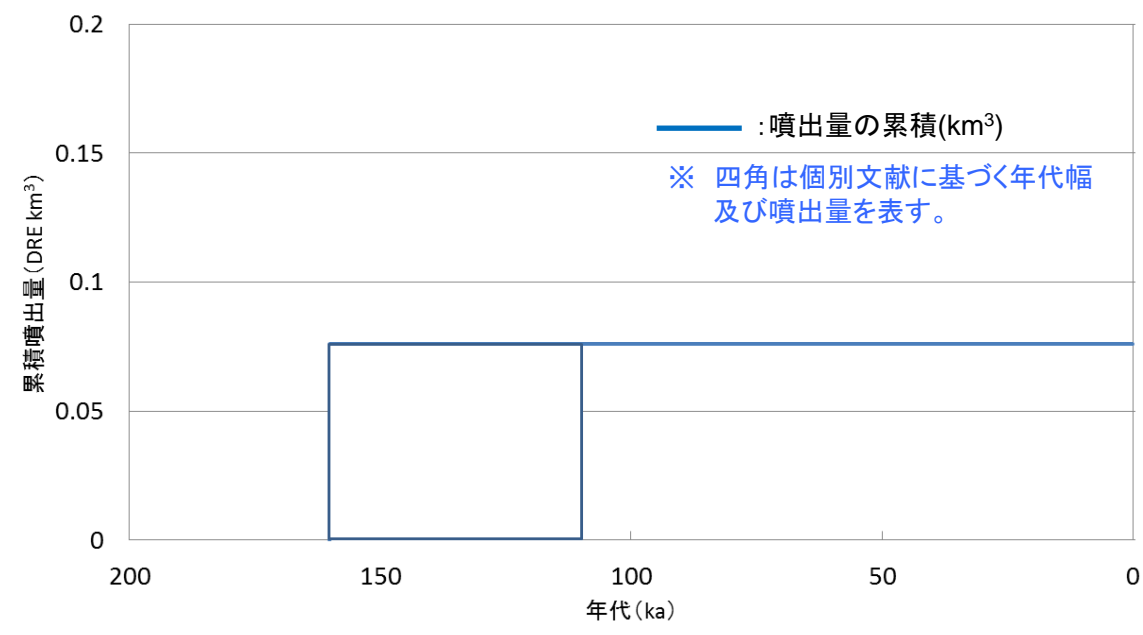
注) 個別文献調査に基づき, 噴出物の層序を優先して活動履歴を整理した。

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



渡島小島の噴出量一年代階段ダイアグラム

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)
【13. 陸奥燧岳】

火山名	陸奥燧岳
敷地からの距離	約58km
火山の形式	複成火山
活動年代	約120万年前～50万年前

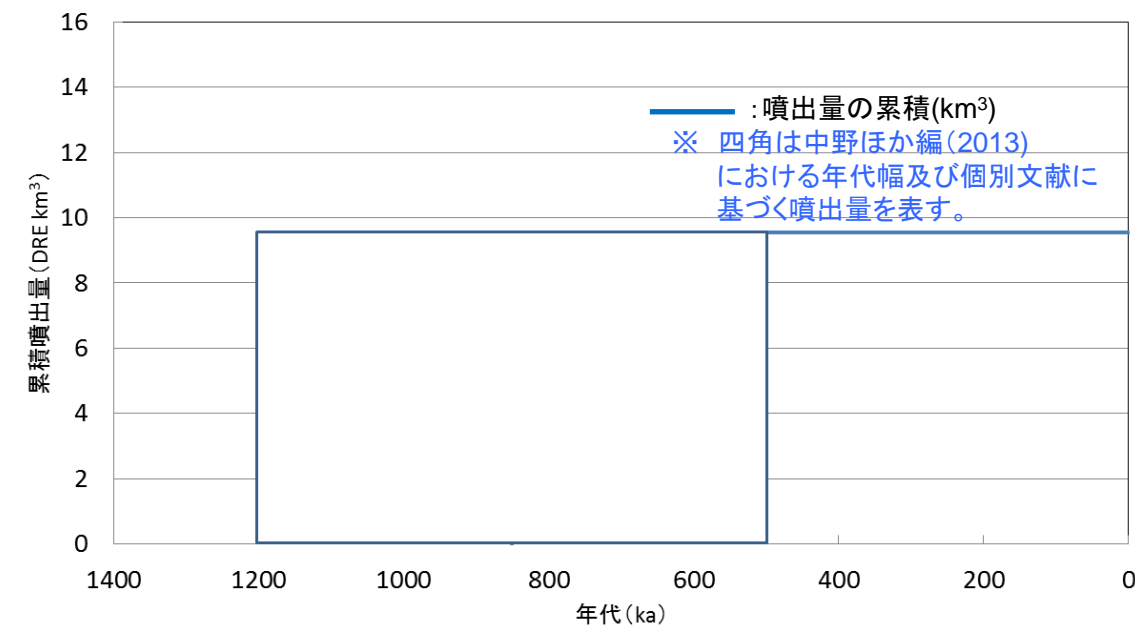
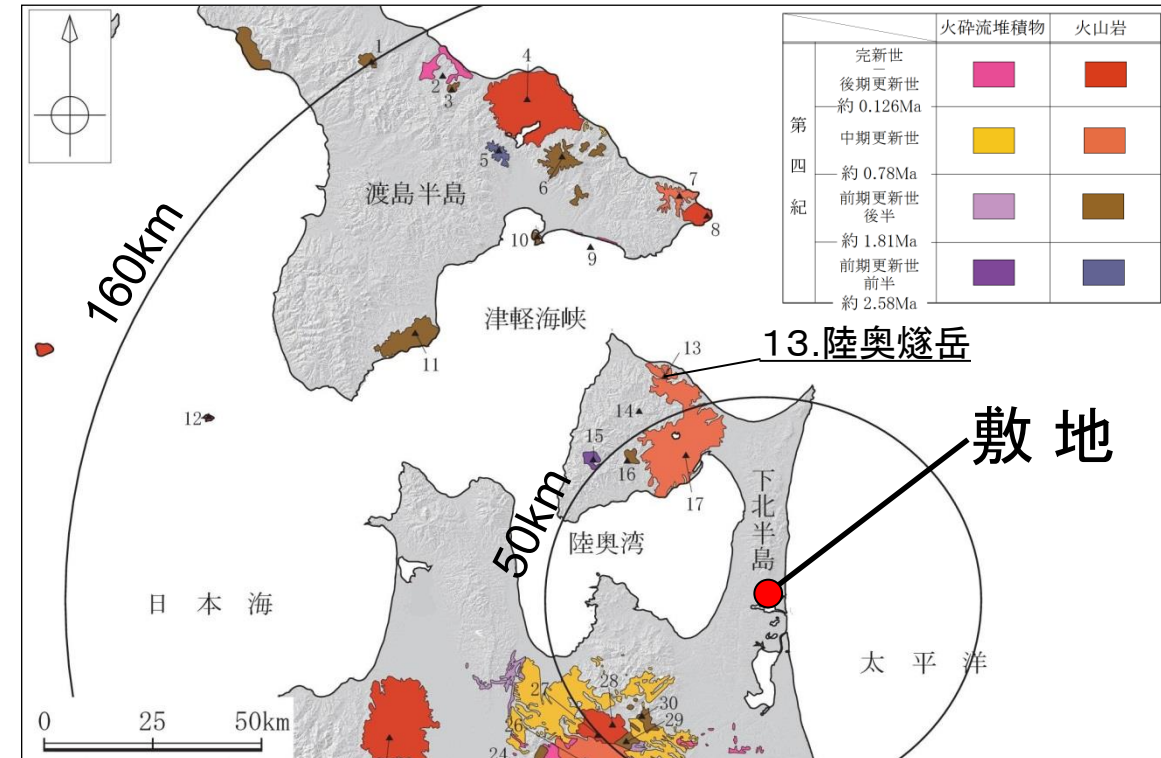
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

陸奥燧岳の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
500 ka	新期	第3期噴出物 燧岳溶岩 Mhi-3-ol 等	0.05	Umeda et al.(2013) 梅田・檀原(2008) 梅田・古澤(2004) 梅田・古澤(2003) 梅田(1992) 伴ほか(1992) 西来ほか編(2014)
		第2期噴出物 及び 第1期噴出物 佐藤ヶ平火砕流堆積物 矢筈山溶岩 大畑火砕流堆積物 等	3.6	
	旧期	小西股沢火砕流堆積物 日和崎溶岩 等	5.9	
1200 ka				

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも短いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

[地質図]



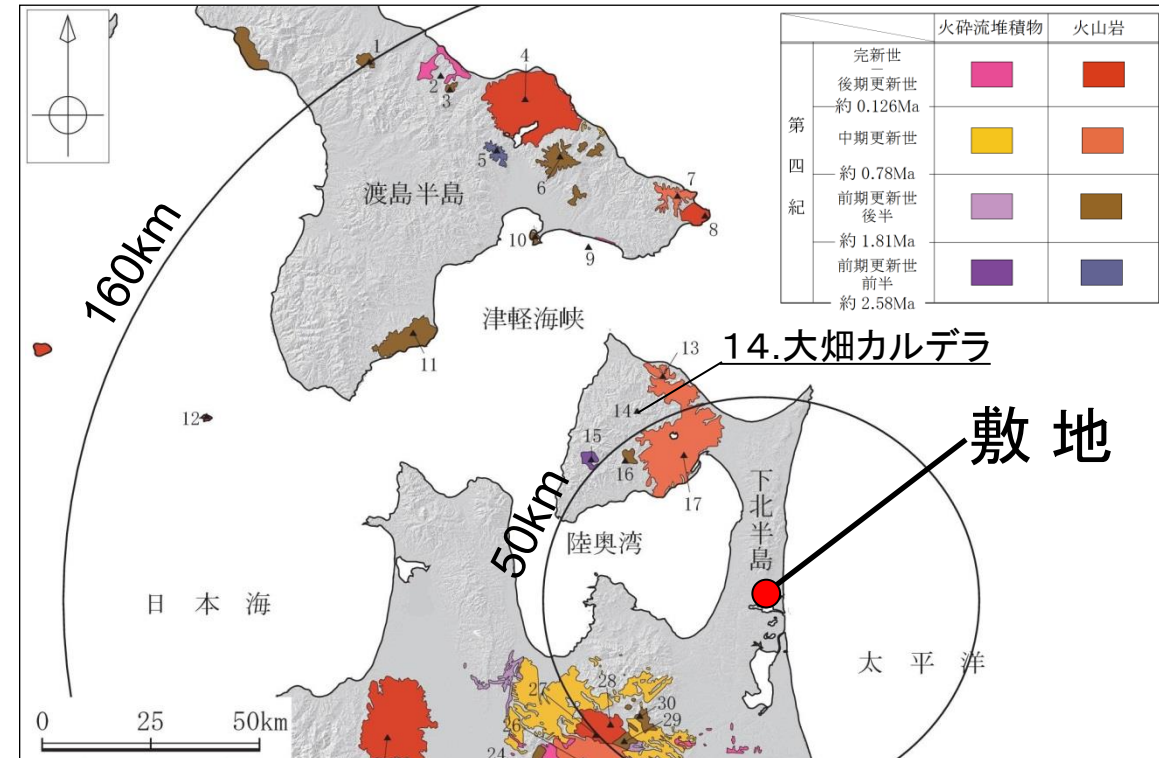
(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)

【14. 大畑カルデラ】

火山名	大畑カルデラ
敷地からの距離	約54km
火山の形式	カルデラ
活動年代	約300万年前～180万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

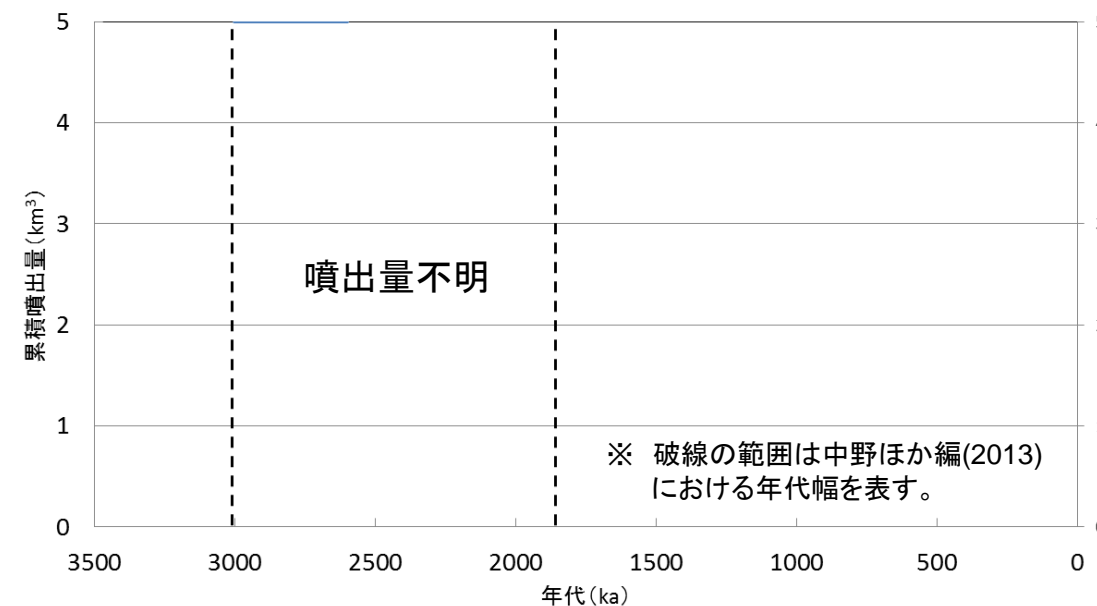
[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

大畑カルデラの活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1800 ka	大畑カルデラ	大畑層	不明	戸田ほか(2011) 梅田・檀原(2008) 資源エネルギー庁(1993) 上村・斎藤(1957) 西来ほか編(2014)
3000 ka		易国間層		



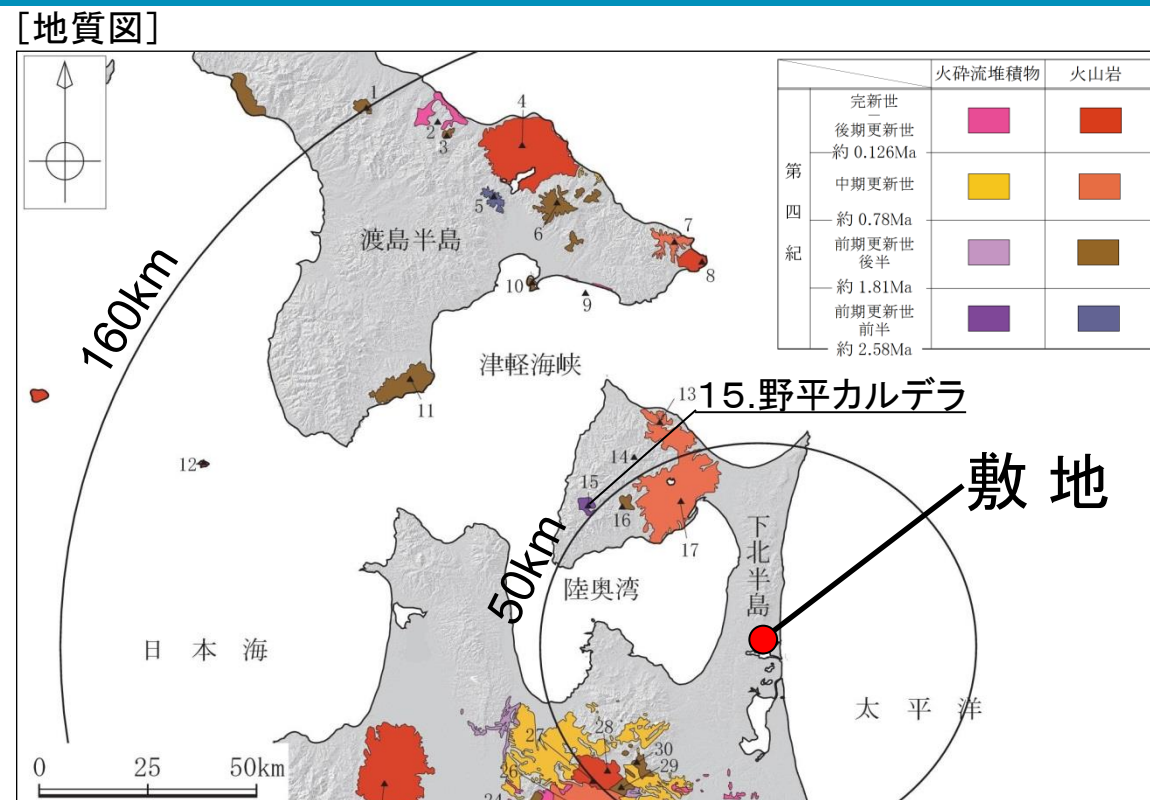
大畑カルデラの噴出量一年代階段ダイアグラム

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)
【15. 野平カルデラ】

火山名	野平カルデラ
敷地からの距離	約51km
火山の形式	カルデラ
活動年代	約190万年前

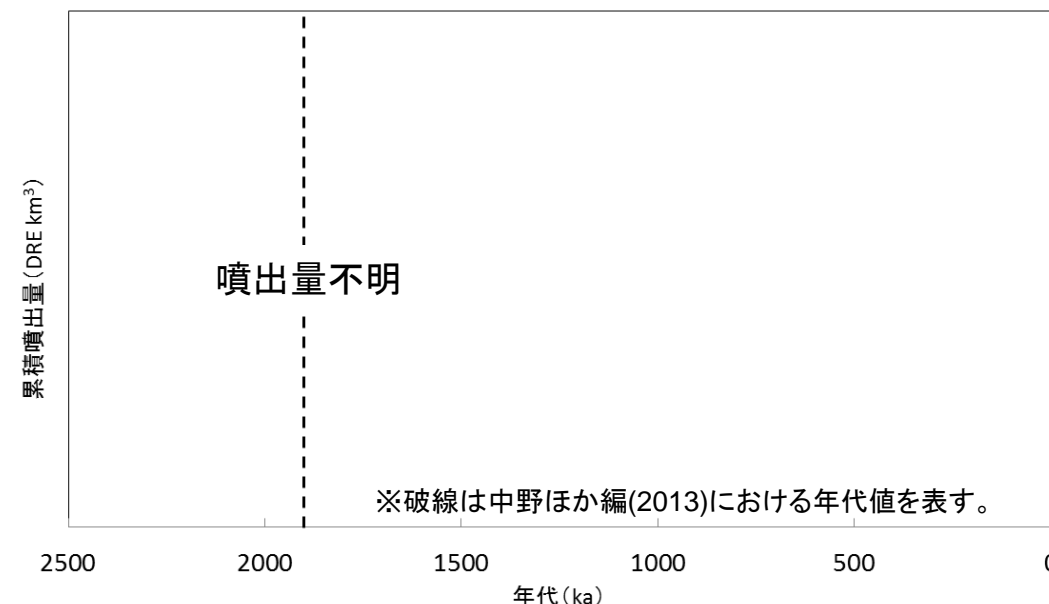
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

野平カルデラの活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1900ka	野平カルデラ (カルデラ形成期)	半太郎沢層 (半太郎沢溶結凝灰岩層)	不明	青森県(1998) 上村(1975) 西来ほか編(2014)



野平カルデラの噴出量一年代階段ダイアグラム

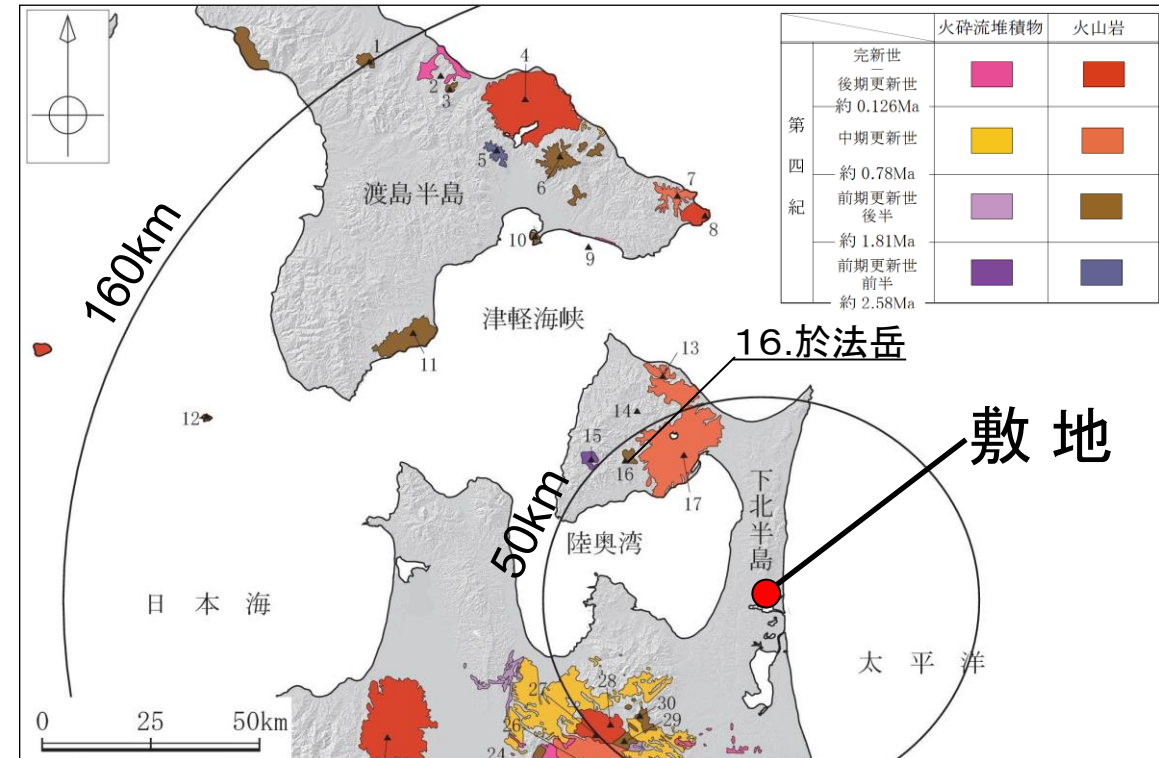
最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【16. 於法岳】

火山名	於法岳
敷地からの距離	約46km
火山の形式	複成火山
活動年代	約160万年前～130万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

[地質図]

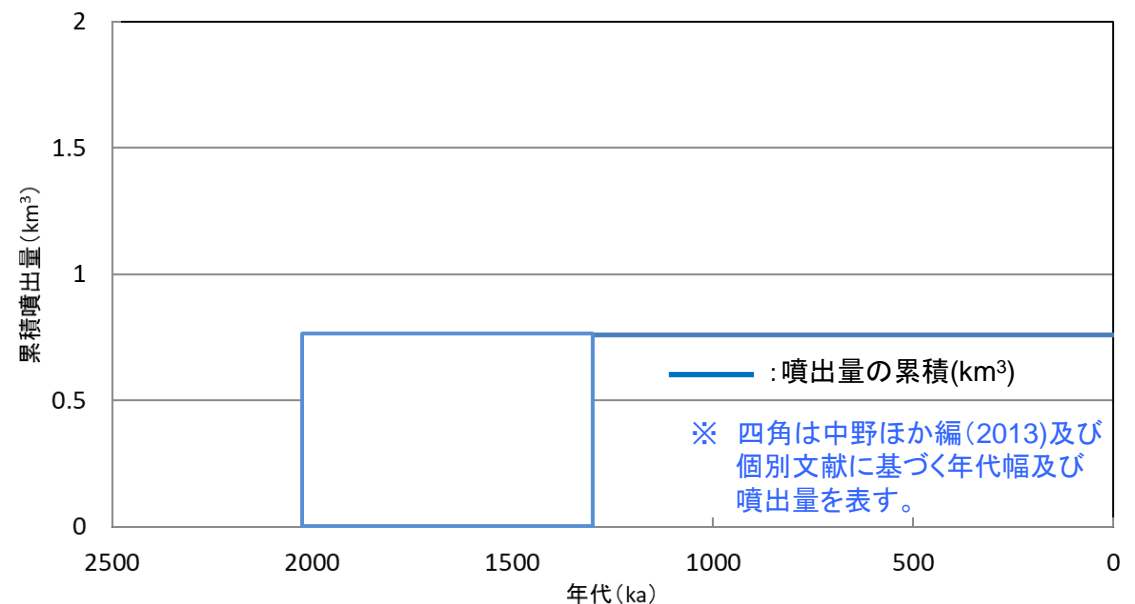


中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

於法岳の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1300 ka 1600 ka 2030 ka	於法岳	於法岳安山岩類 (於法岳火山噴出物)	0.76以下	上村(1975) 西来ほか編(2014) 安住ほか(2019)

・青: 個別文献年代値(読み取り値含む)



於法岳の噴出量一年代階段ダイアグラム

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【17. 恐山】

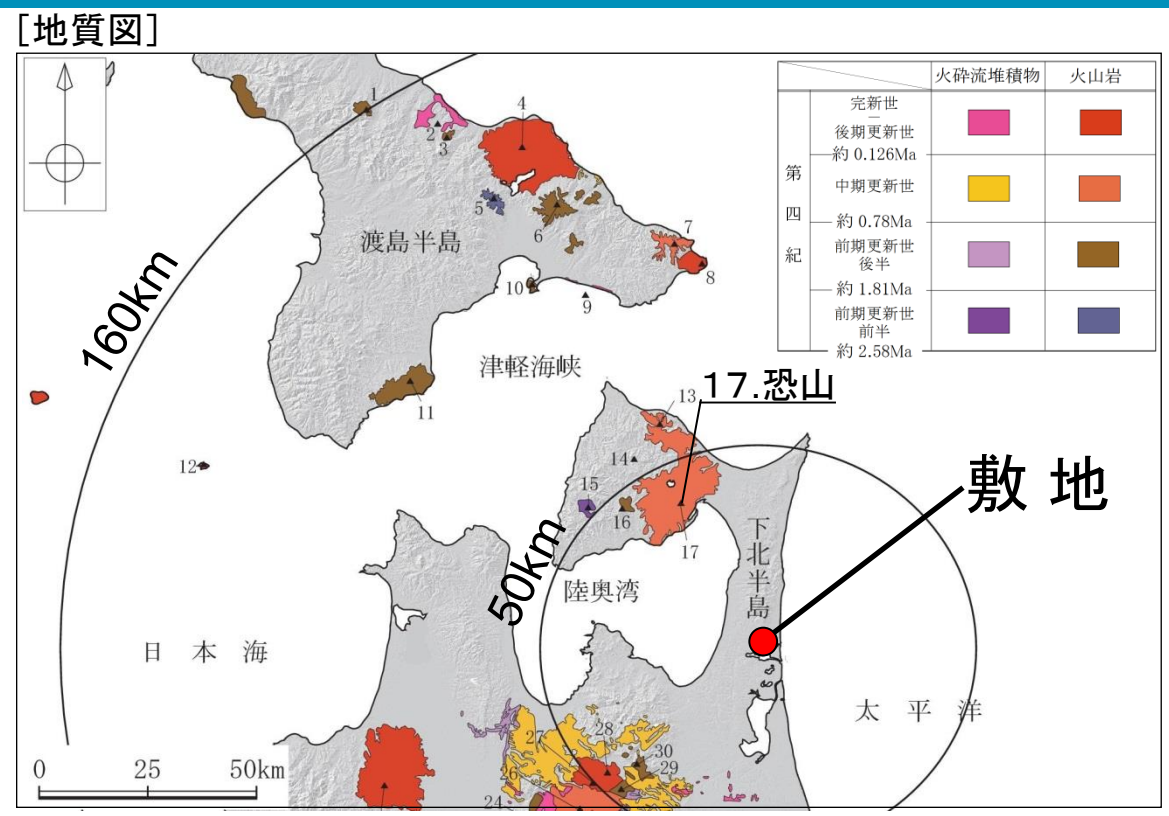
火山名	恐山※
敷地からの距離	約39km
火山の形式	火砕丘-カルデラ, 溶岩ドーム
活動年代	約130万年前~2万年前。噴気活動あり。

※気象庁(2013)によると活火山とされている。
注)火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく
恐山の活動履歴

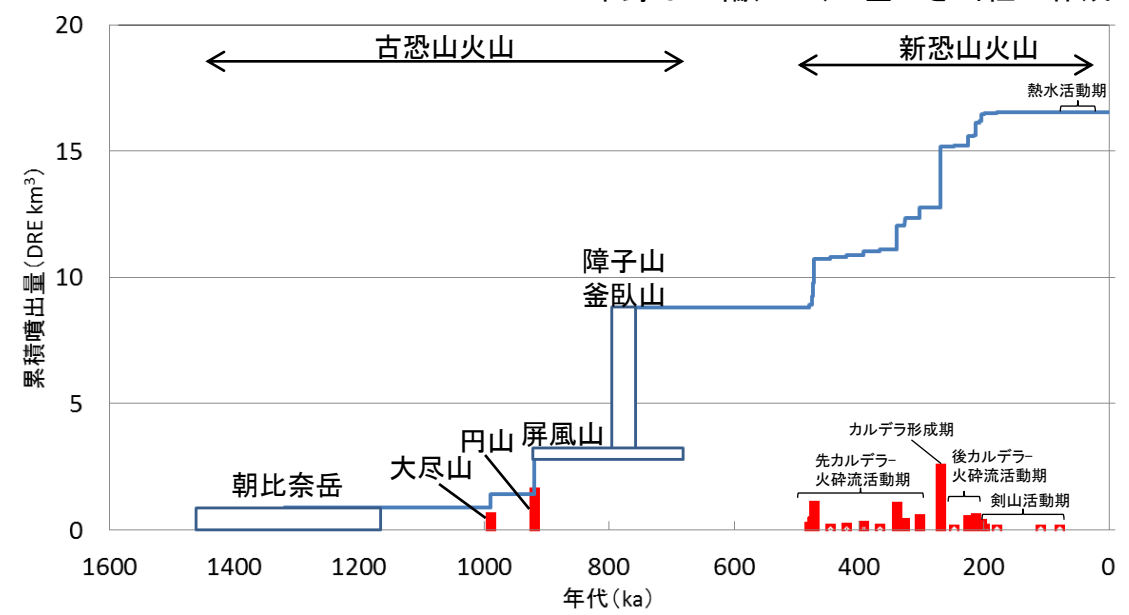
年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
20ka	熱水活動期	鬼石テフラ 宮後テフラ	-	小林ほか(2012) 西来ほか編(2014)
200~80ka	剣山活動期	剣山・地藏山溶岩ドーム 南鷓頭山溶岩ドーム 等	0.1	
200~248ka	後カルデラ-火砕流活動期	関根第2火砕流 二又沢火砕流 等	1.3	
270ka	カルデラ形成期	Os-2 正津川火砕流	6.4	
303~480ka	先カルデラ-火砕流活動期	出戸川第3火砕流 戸沢川火砕流 等	6.4	
760~800ka	釜臥山活動期	障子山, 釜臥山	5.6	
680~920ka	屏風山-朝比奈岳活動期	屏風山	3.2	
朝比奈岳 1,180~1,460ka 1300ka		朝比奈岳 等		

・青: 個別文献年代値(読み取り値含む)

完新世に活動を行った火山であることから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



恐山の噴出量-年代階段ダイアグラム

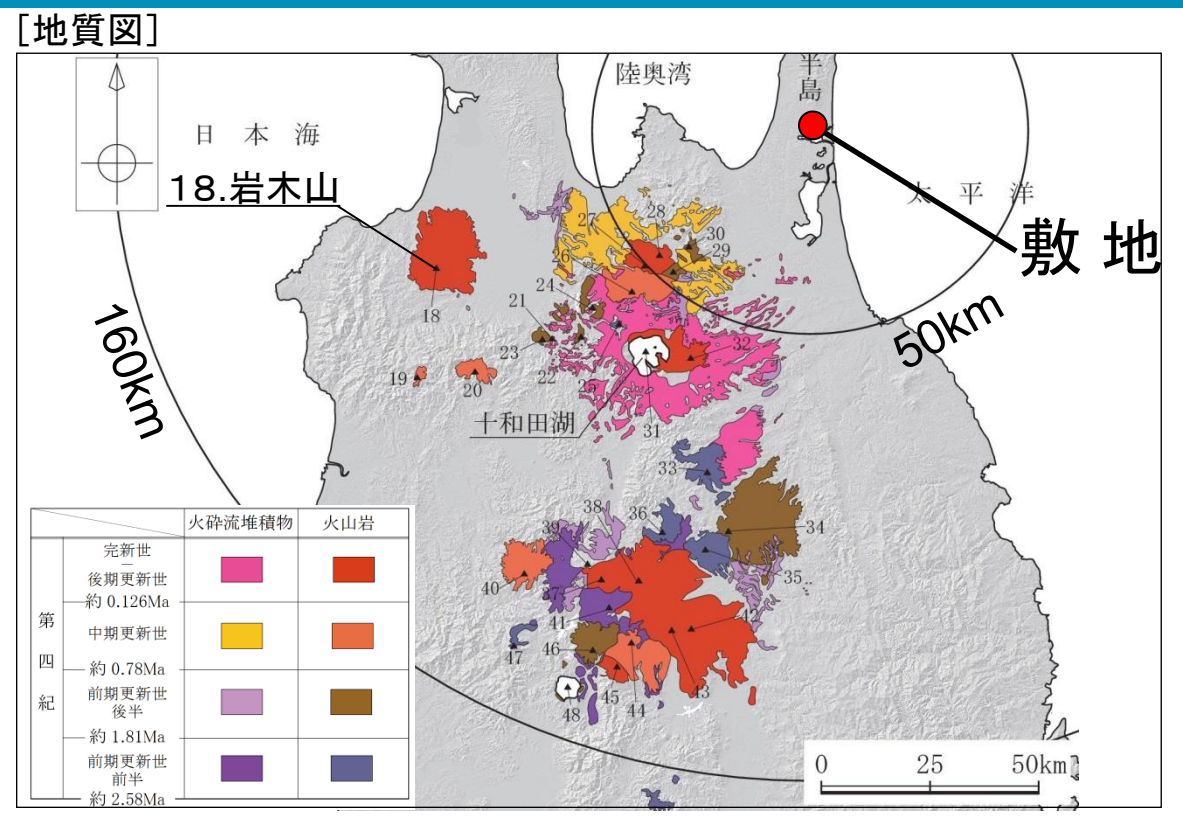
— : 噴出量の累積(km³)
— : 噴出量(km³)

※ 四角は, 個別文献に基づく年代幅及び噴出量を表す。

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【18. 岩木山】

火山名	岩木山
敷地からの距離	約93km
火山の形式	複成火山, 溶岩ドーム
活動年代	約65万年前～最新噴火:AD.1863

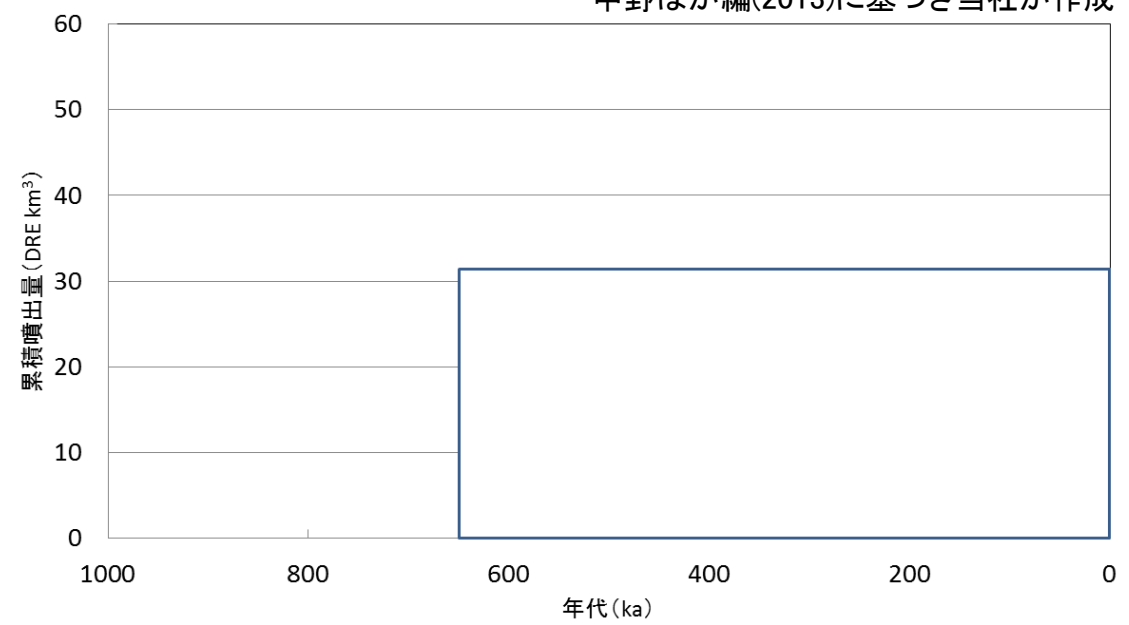
注)火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

岩木山の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献	
AD. 1863	新岩木山	第3期	1863年噴火 鳥海山溶岩ドーム 等	0.012	
		第2期	西法寺森溶岩ドーム 笹森山溶岩ドーム 等		
		第1～2期	Iw-OG1～Iw-OG13		
650 ka	古岩木山	第1期	十腰内岩屑なだれ 柴柄沢溶岩流 等	23.6	佐々木(2001) 斎藤・鈴木(2004) 井村(1995) 三村・金谷(2001) 西来ほか編(2014)



岩木山の噴出量－年代階段ダイアグラム

※ 四角は中野ほか編(2013)における年代幅及び個別文献に基づく噴出量を表す。

完新世に活動を行った火山であることから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【19. 太良駒ヶ岳】

火山名	太良駒ヶ岳
敷地からの距離	約109km
火山の形式	複成火山
活動年代	約20万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

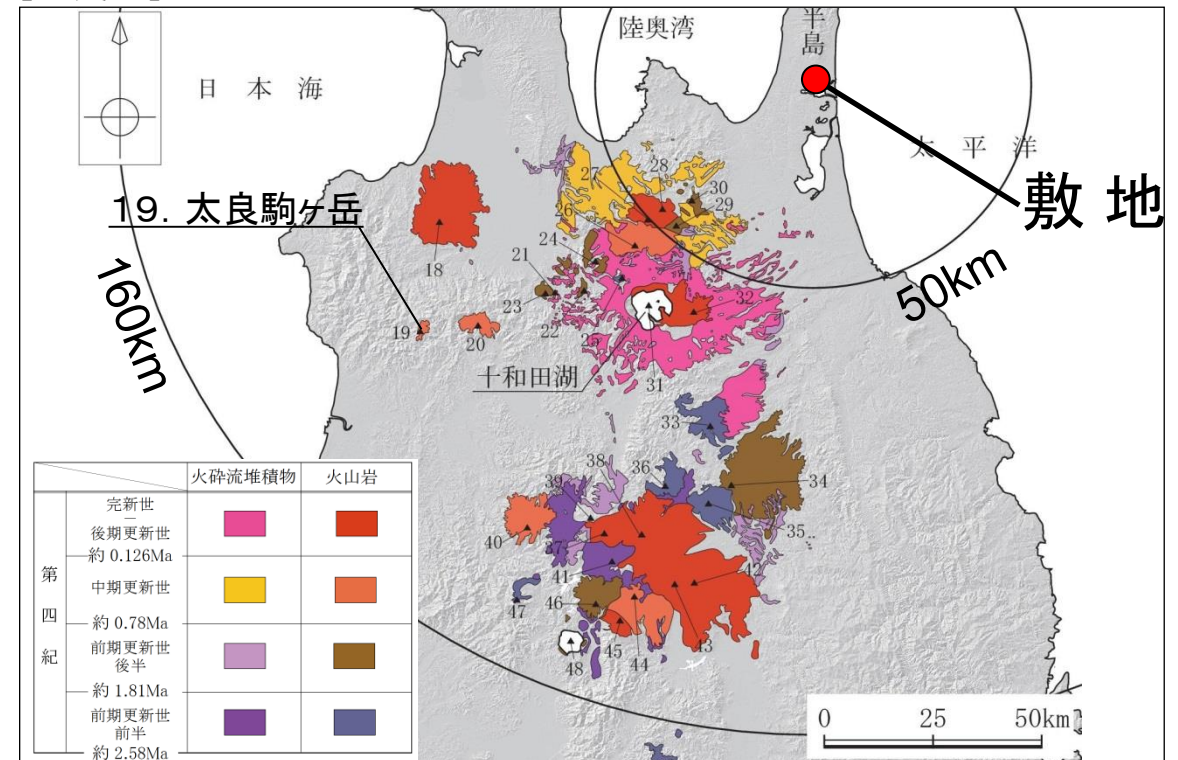
太良駒ヶ岳の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
200 ~ 170 ka 200ka	太良駒ヶ岳	樺岱溶岩 駒ヶ岳溶岩 987mピーク溶岩	2	大篠・佐々木(2002) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 角ほか(1962) 西来ほか編(2014)

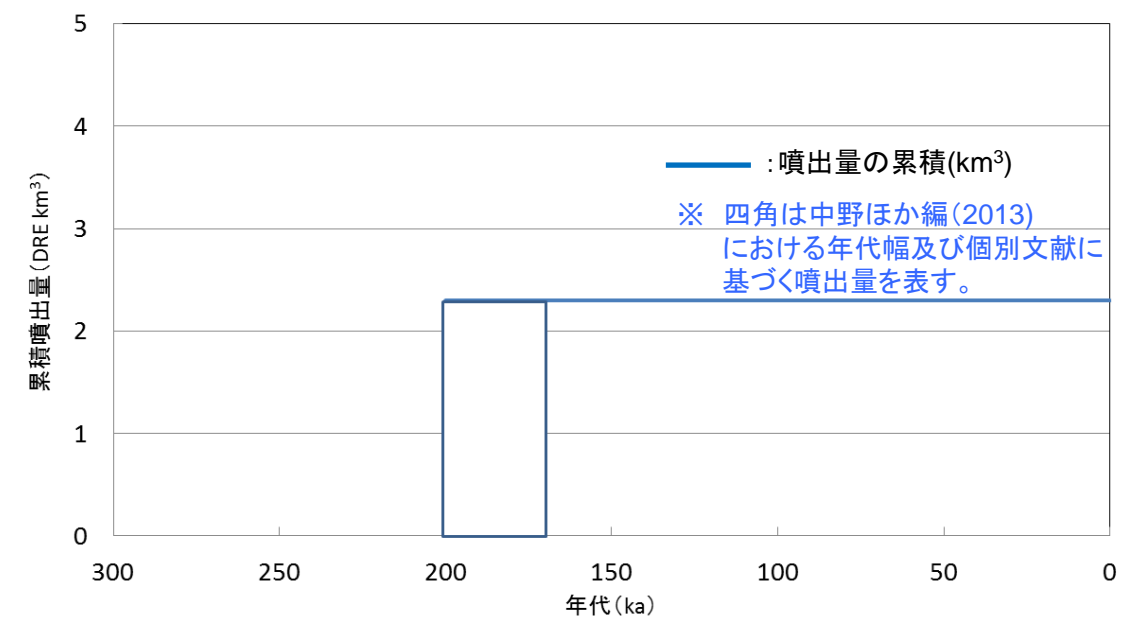
- ・青: 個別文献年代値(活動期間が非常に短く, 最近100万年間*に活動した火山について, 個別に文献を確認)
*島弧の火山の平均的活動期間: 数十万年程度(兼岡・井田, 1997)
- ・中野ほか編(2013)では, 明瞭な活動期間が示されておらず, 十分に長い活動期間は有さないと考えられる。

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

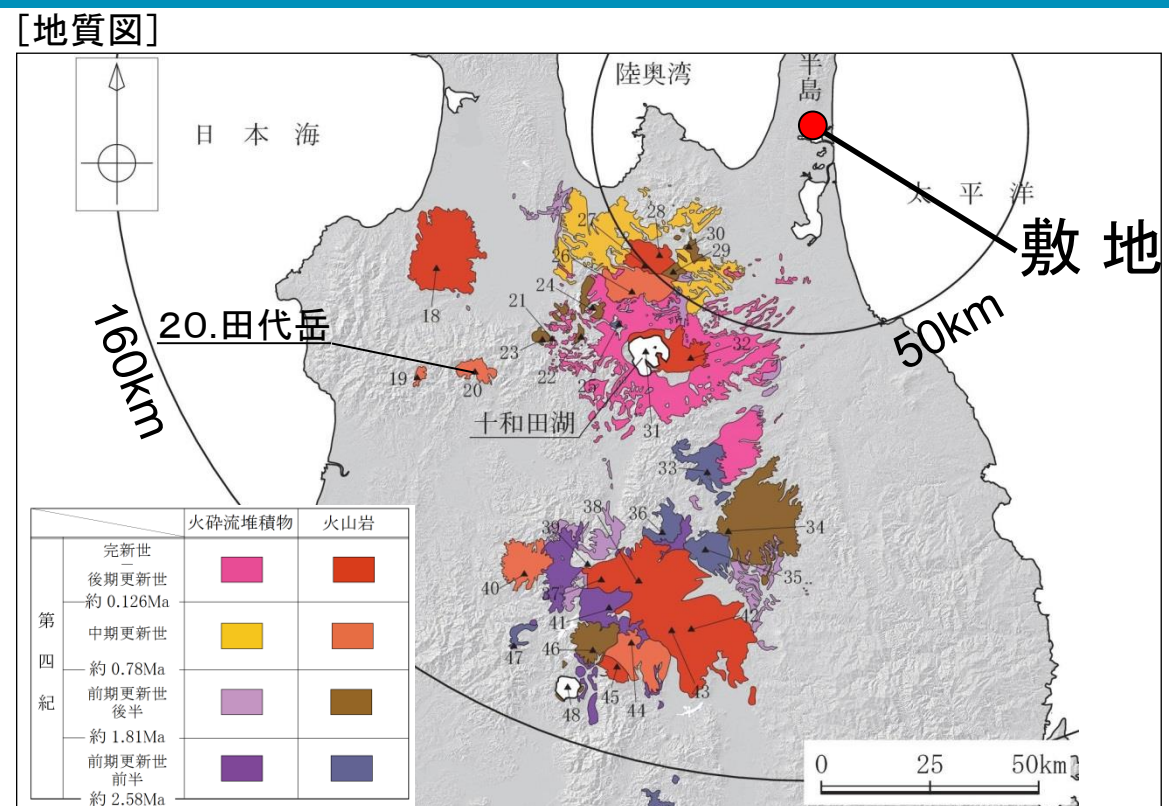


太良駒ヶ岳の噴出量一年代階段ダイアグラム

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【20. 田代岳】

火山名	田代岳
敷地からの距離	約98km
火山の形式	複成火山, 溶岩ドーム
活動年代	約60万年前もしくは60万年前以降

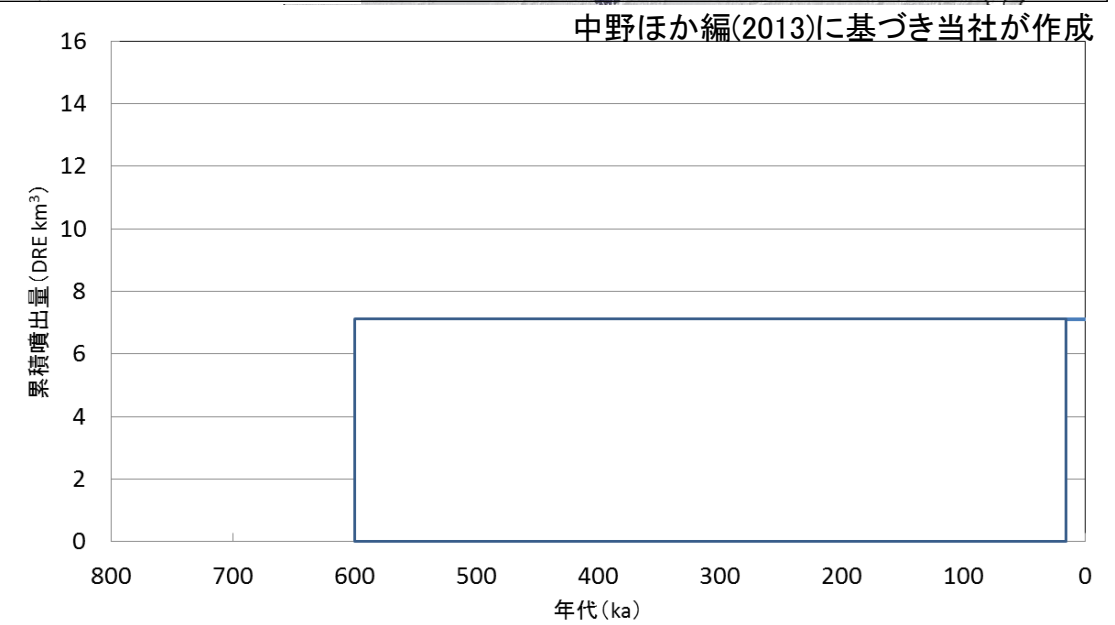
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく



田代岳の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献	
35ka~ 15.5ka	田代岳	平滝熱雲堆積物	平滝熱雲堆積物	0.3	宝田(1991) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 角ほか(1962) 阿部・山元(1990) 大篠・佐々木(2002) 工藤(2011) 西来ほか編(2014)
		岩屑なだれ	雨池岩屑流堆積物 岩瀬川岩屑流堆積物	-	
600 ka	主火山体噴出物	田代岳安山岩Ⅱ	7		
		古期成層火山噴出物等			

・青: 宝田(1991) によれば, 平滝熱雲堆積物が層序的に十和田大不動火砕流と十和田八戸火砕流の間にあるとされ, また, その年代は, 工藤ほか(2011)において, 十和田大不動火砕流を35ka, 十和田八戸火砕流を15.5kaとされているため, 当堆積物を35ka~15.5kaと当社が想定した。



田代岳の噴出量一年代階段ダイアグラム

— : 噴出量の累積(km³)
※ 四角は中野ほか編(2013)及び個別文献に基づく年代幅及び個別文献に基づく噴出量を表す。

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも短いことから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)
【21. 碓ヶ関カルデラ】

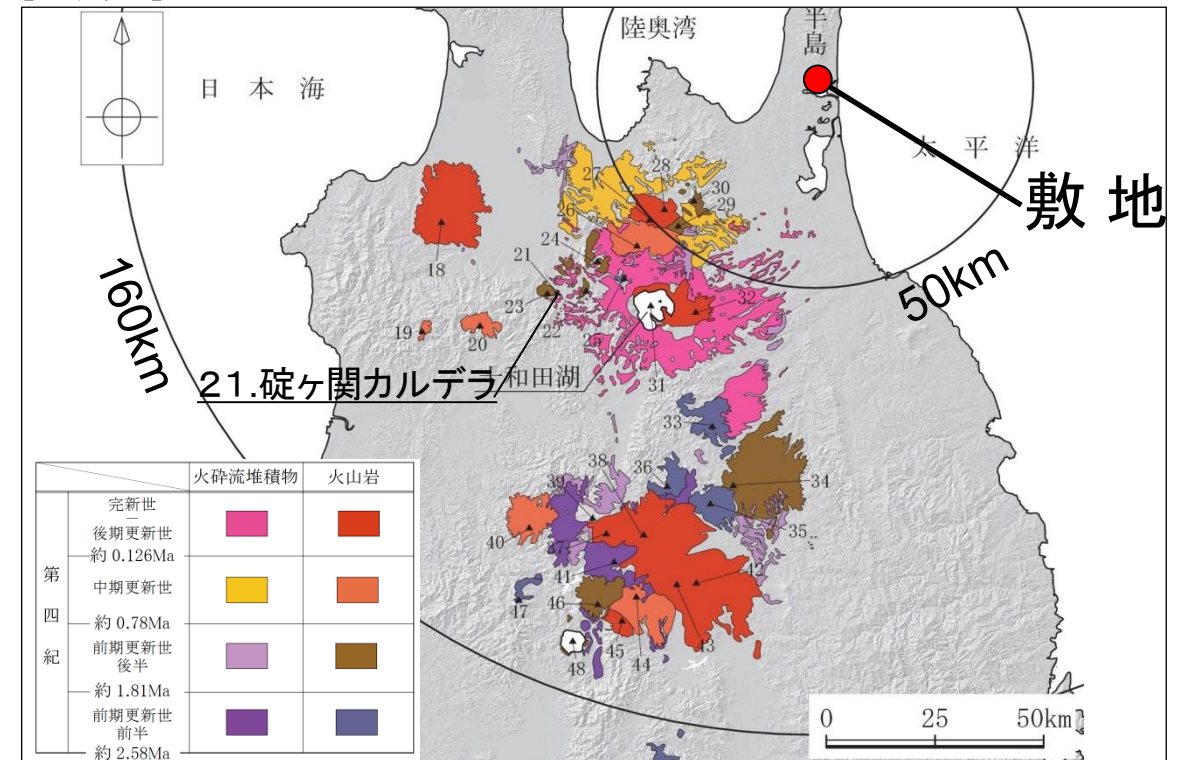
火山名	碓ヶ関カルデラ
敷地からの距離	約79km
火山の形式	カルデラ-火砕流
活動年代	約260万年前～230万年前

注)火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

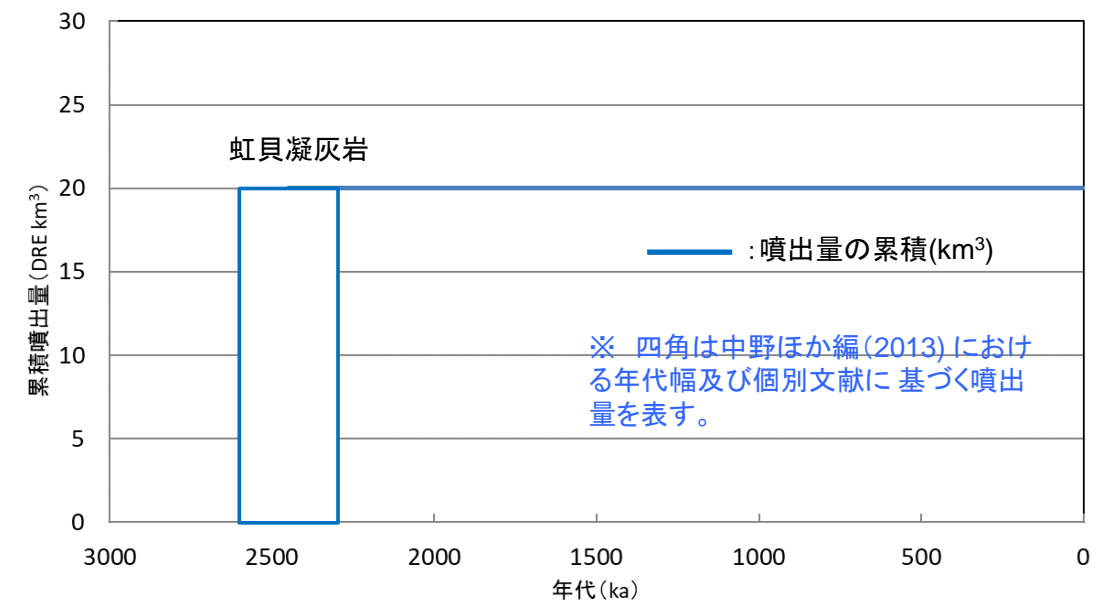
碓ヶ関カルデラの活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
2300ka 2600ka	碓ヶ関カルデラ	虹貝凝灰岩	20	近藤ほか(2010) 村岡ほか(1991) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 村岡・長谷(1990) NEDO(1985)

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



碓ヶ関カルデラの噴出量一年代階段ダイアグラム

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)

【22. 三ツ森】

火山名	三ツ森
敷地からの距離	約74km
火山の形式	複成火山
活動年代	約190万年前～130万年前

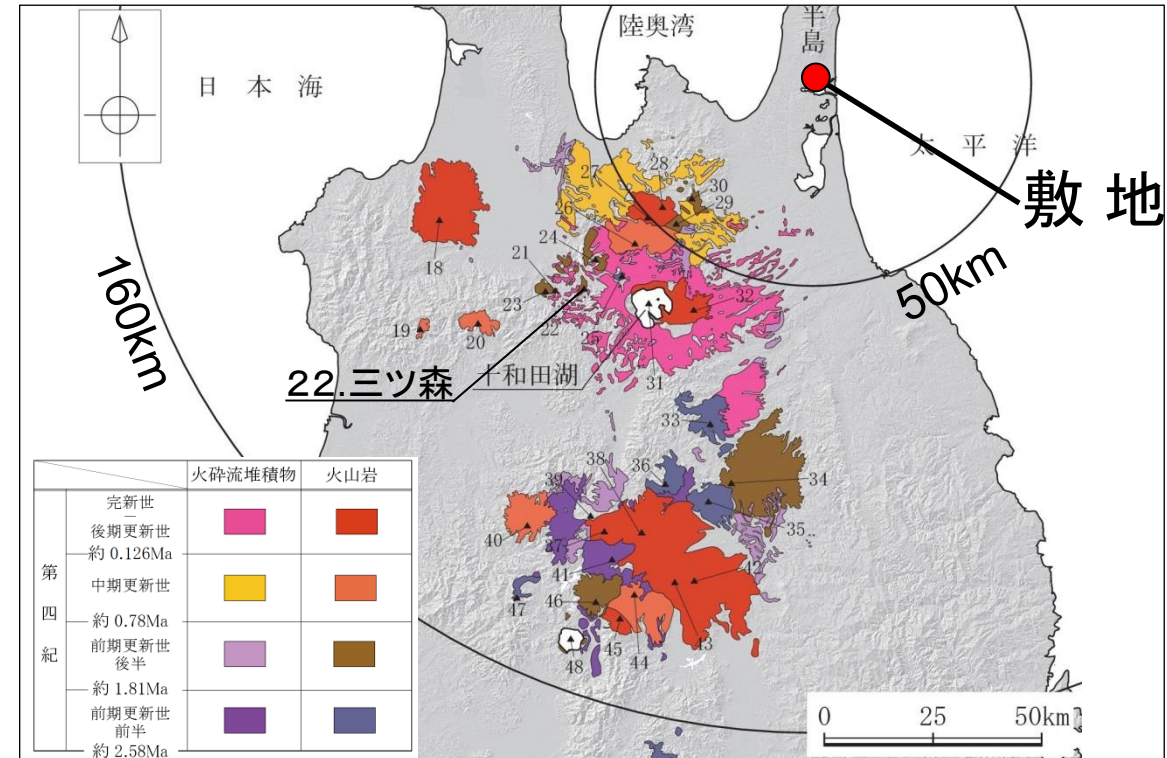
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

三ツ森の活動履歴

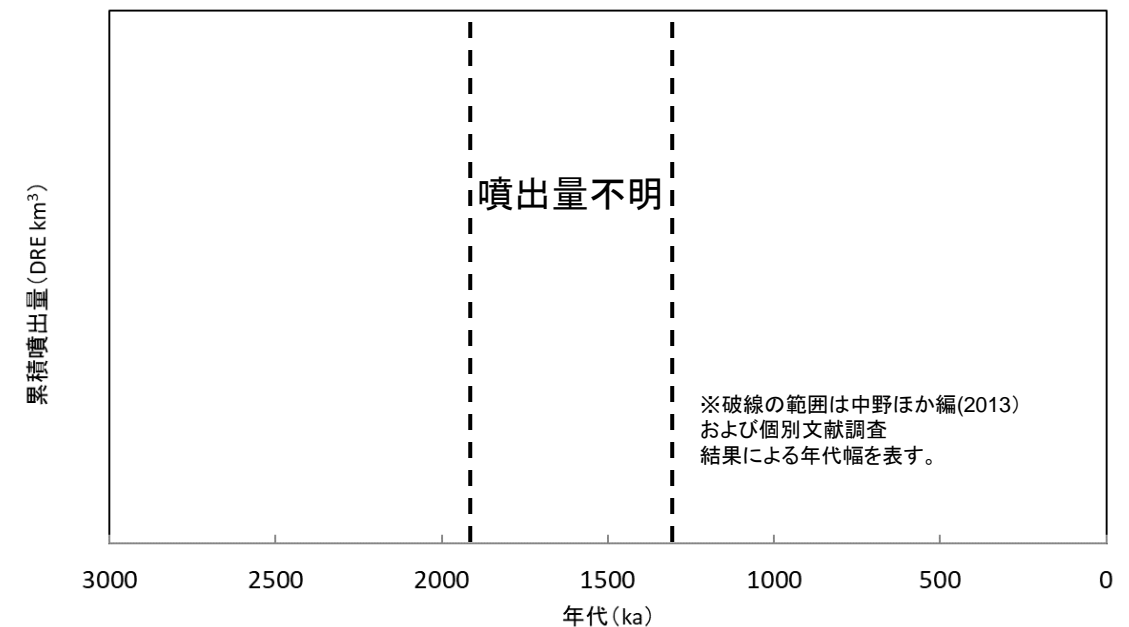
年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1300ka	三ツ森安山岩	阿蘇ヶ岳岩体 細野溶岩 等	不明	近藤ほか(2010) 八島(1990) 村岡ほか(1991) 村岡・長谷(1990) 西村ほか(2001)
1900ka				

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



三ツ森の噴出量一年代階段ダイアグラム

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)

【23. 阿闍羅山】

火山名	阿闍羅山
敷地からの距離	約81km
火山の形式	複成(複合)火山
活動年代	約100万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

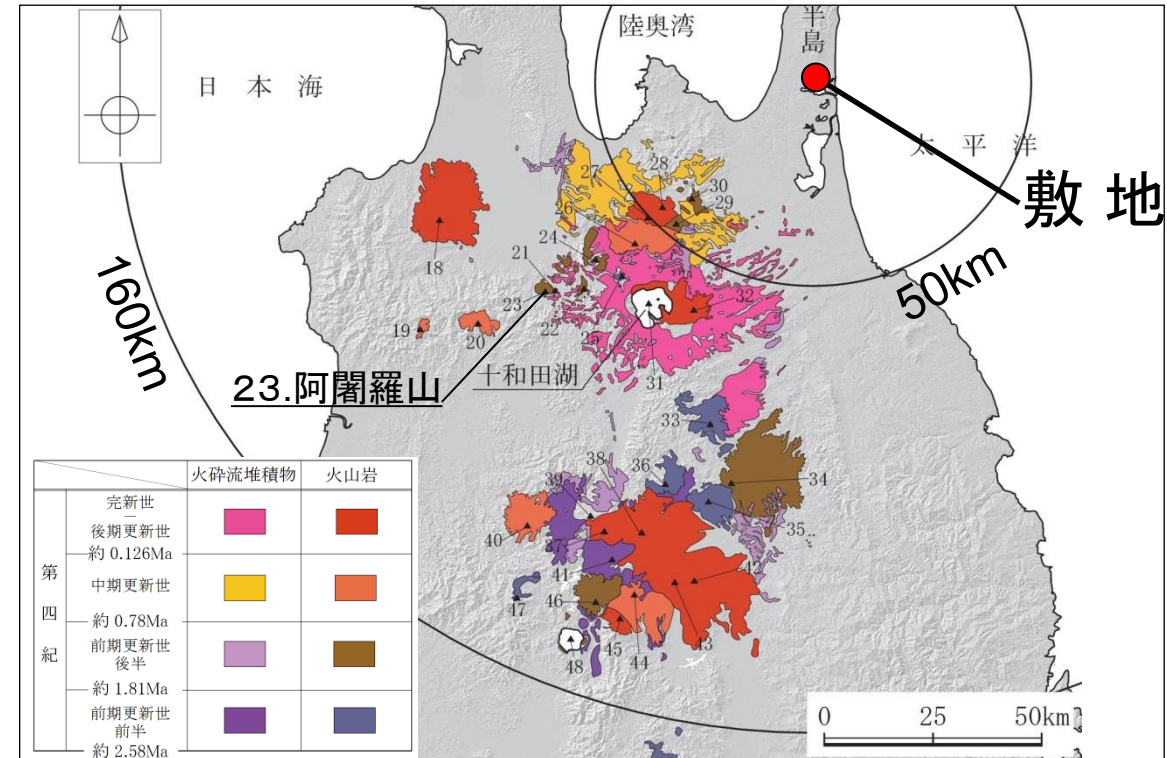
阿闍羅山の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1000ka	阿闍羅山	阿闍羅山安山岩	2.1	近藤ほか(2010) 村岡ほか(1991) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 村岡・長谷(1990)

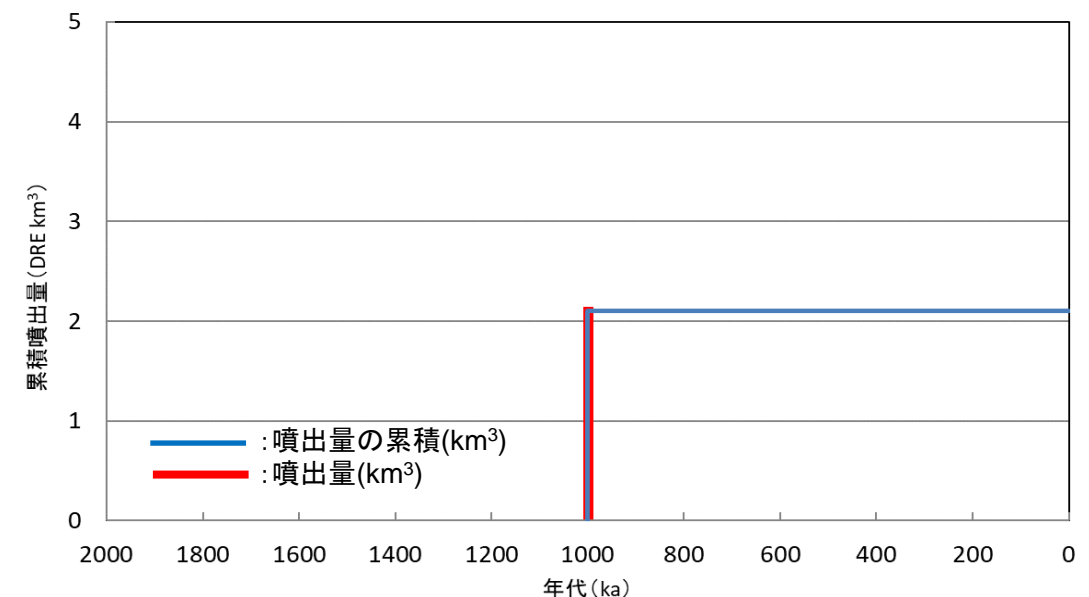
・中野ほか編(2013)では, 明瞭な活動期間が示されておらず, 十分に長い活動期間は有さないと考えられる。
※島弧の火山の平均的活動期間: 数十万年程度(兼岡・井田, 1997)

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



阿闍羅山の噴出量-年代階段ダイアグラム

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【24. 沖浦カルデラ】

火山名	沖浦カルデラ
敷地からの距離	約67km
火山の形式	カルデラー火砕流, 溶岩ドーム
活動年代	約150万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

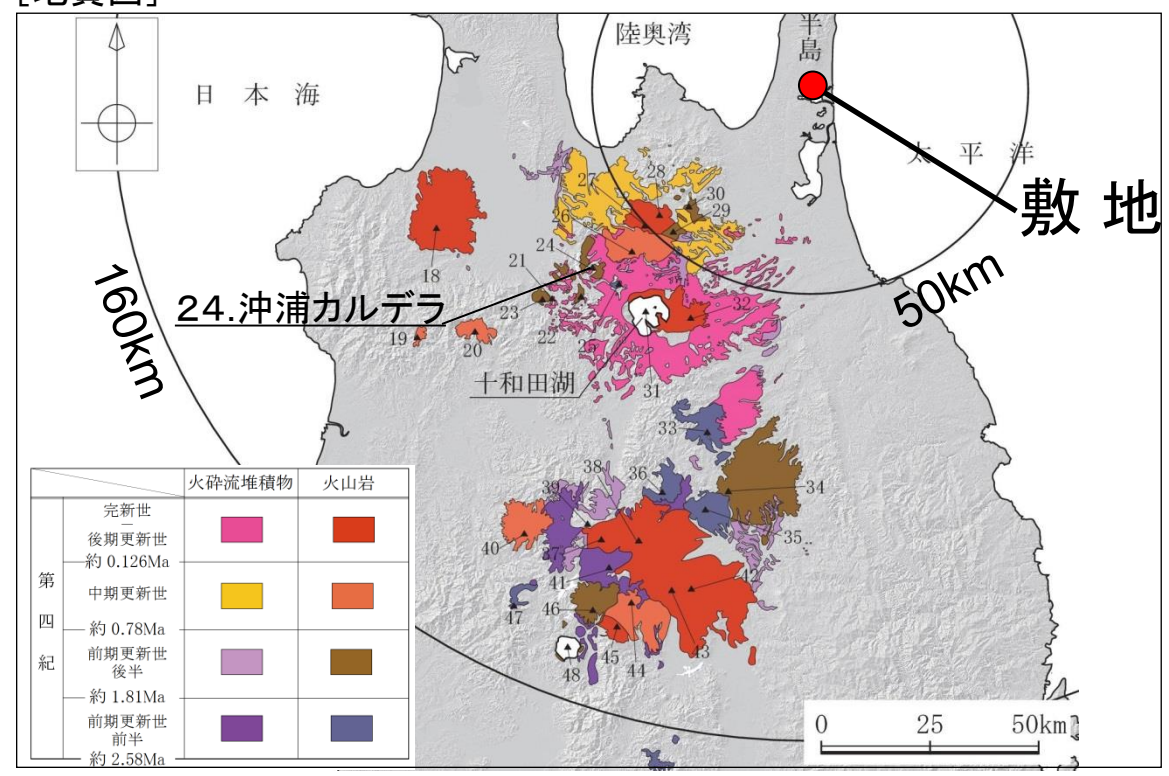
沖浦カルデラの活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
700 ka	後カルデラ火山 沖浦デイサイト	雷山溶岩	2.1	宝田・村岡(2004) 村岡(1986) NEDO(1983) Umeda et al. (2013) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 野澤(2001) 西来ほか編(2014)
900 ka		毛無山溶岩・火砕岩等		
1100 ka	カルデラ形成期 青荷凝灰岩	穴水沢玄武岩	22.2	
1500 ka 1700 ka		高場火砕流堆積物 青荷川火砕流堆積物等		

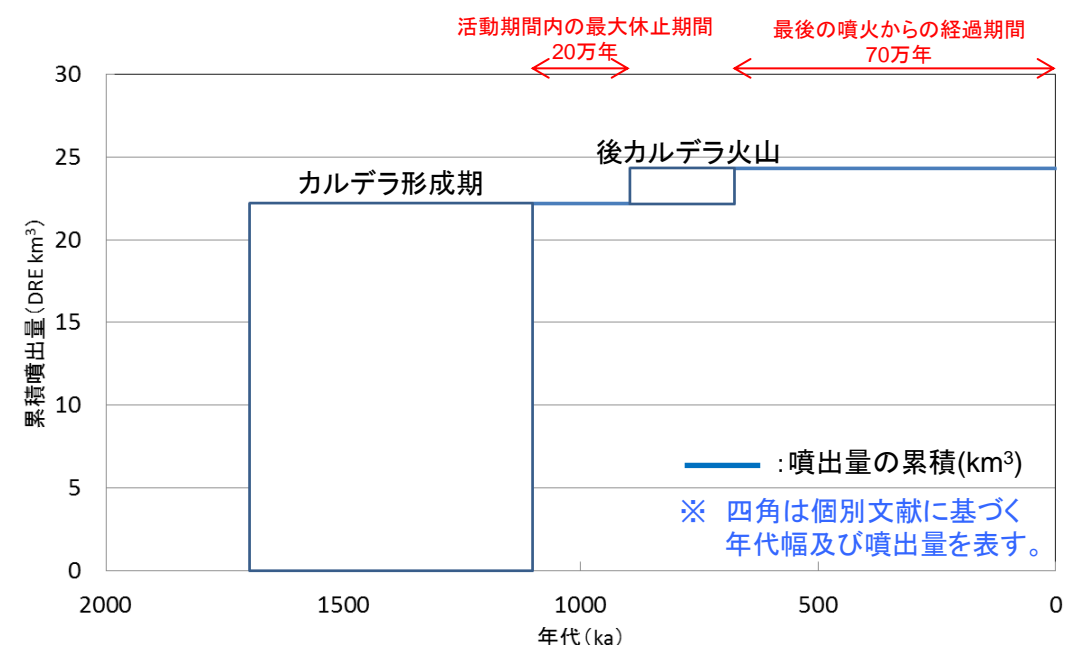
・青: 個別文献年代値

最後の噴火からの経過期間が, 活動期間内の最大休止期間よりも長いことから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



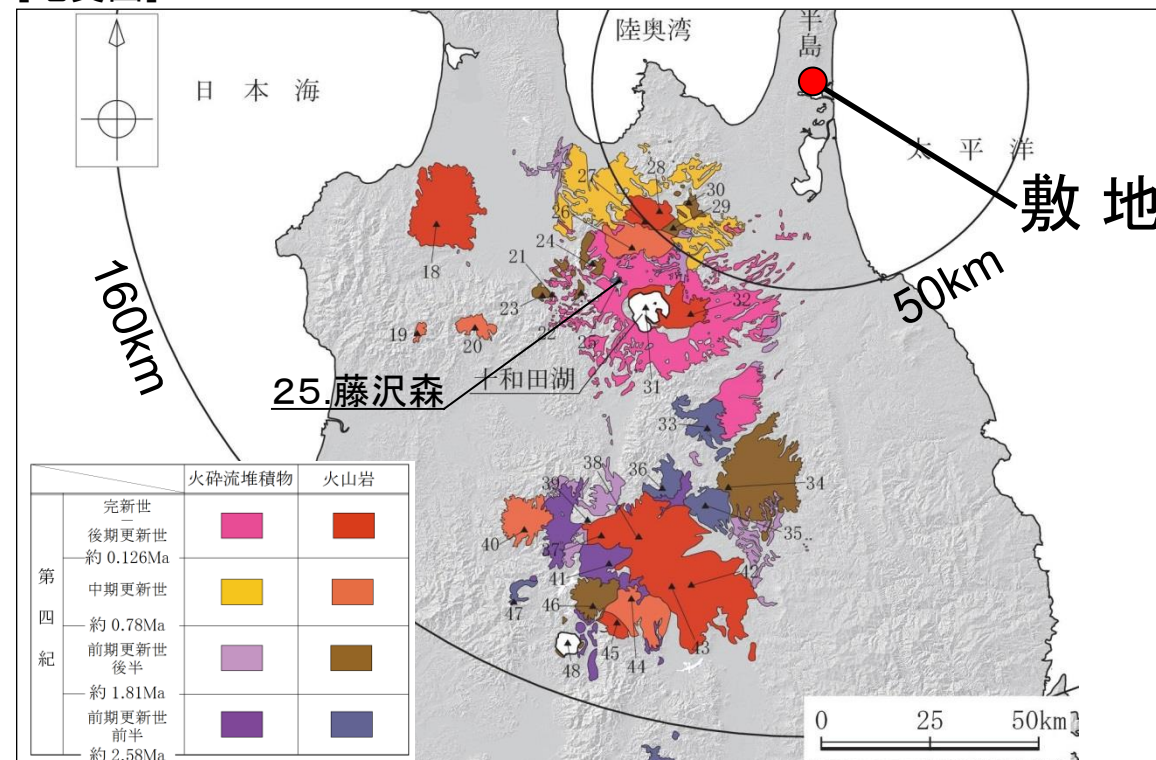
沖浦カルデラの噴出量-年代階段ダイアグラム

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【25. 藤沢森】

火山名	藤沢森
敷地からの距離	約65km
火山の形式	溶岩流
活動年代	約350万年前～170万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

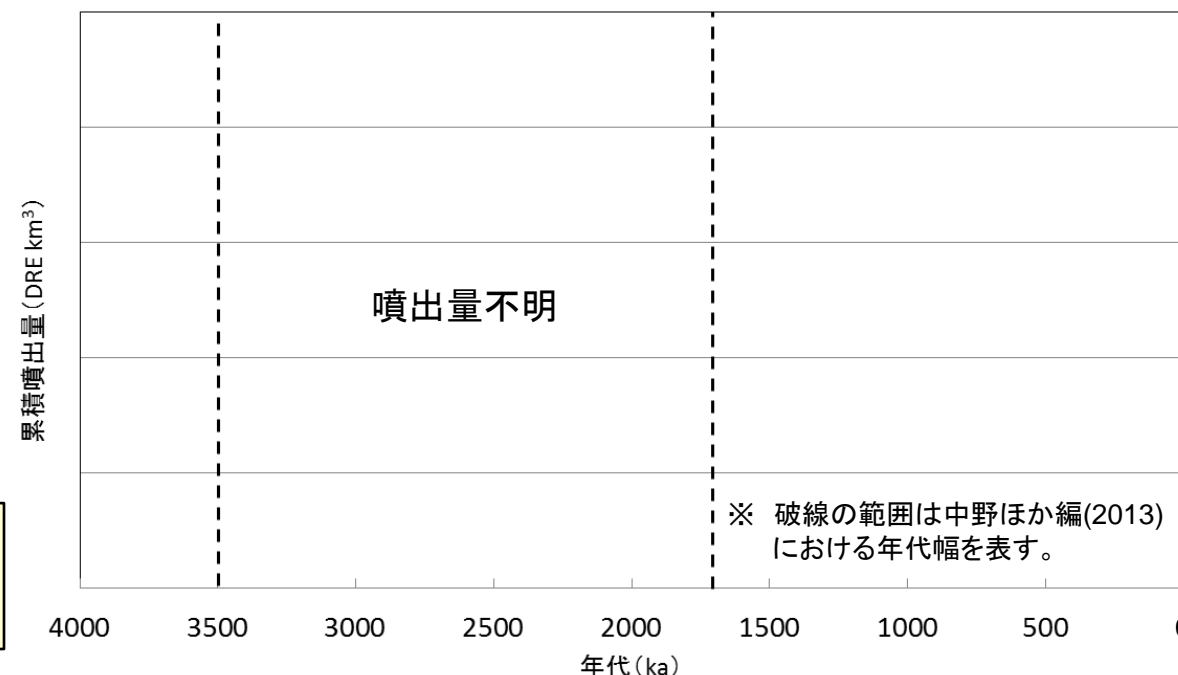
[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

藤沢森の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1700 ka	藤沢森	藤沢森溶岩	不明	宝田・村岡(2004) 西来ほか編(2014)
3500 ka				



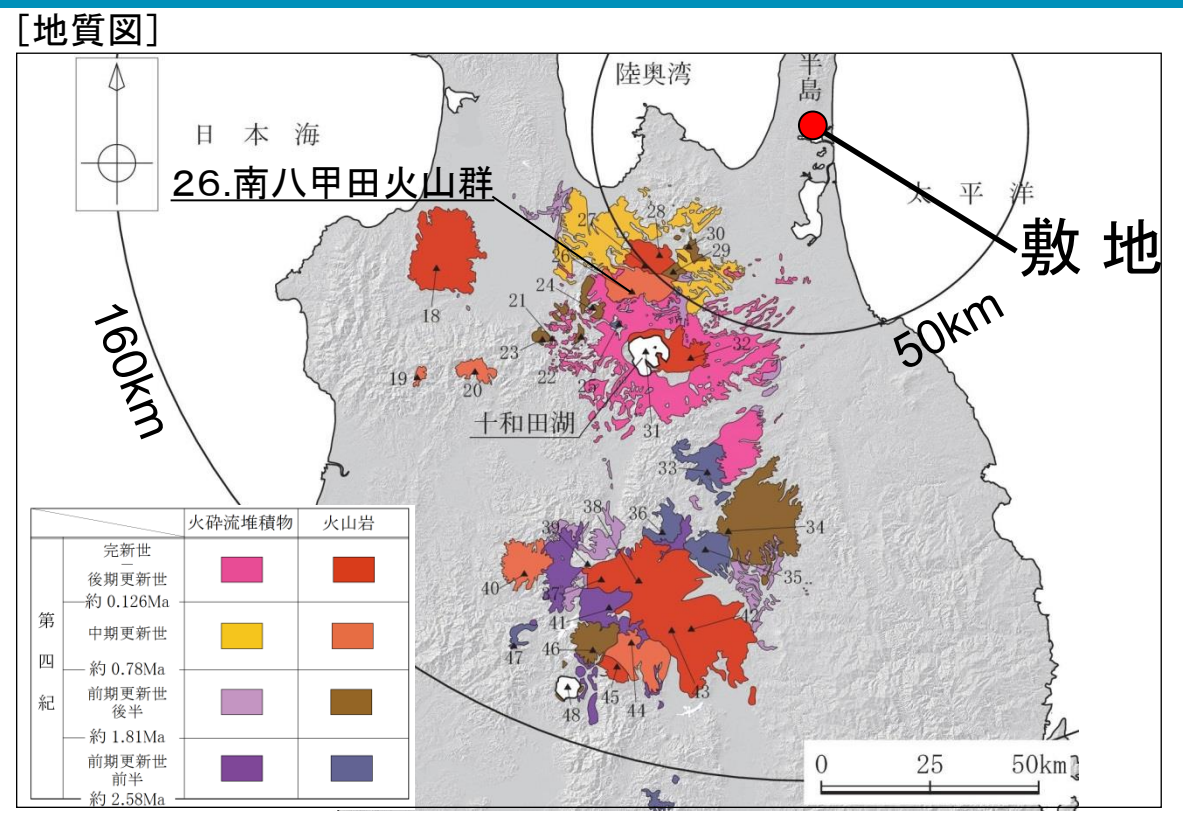
藤沢森の噴出量－年代階段ダイアグラム

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも短いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)
【26. 南八甲田火山群】

火山名	南八甲田火山群
敷地からの距離	約57km
火山の形式	複成火山
活動年代	約110万年前～30万年前

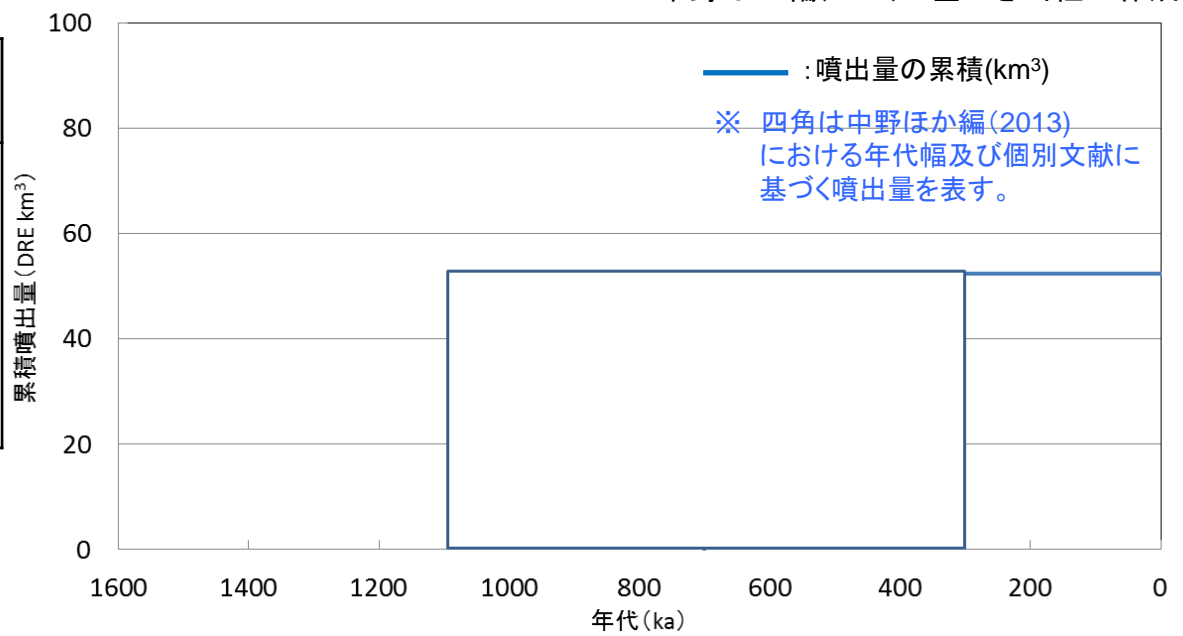
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

南八甲田火山群の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
300 ka	南八甲田火山群	駒ヶ峯溶岩及び火砕岩 南八甲田第1ステージ溶岩 及び火砕岩 等	52	第四紀火山カタログ委員会編(1999) 宝田・村岡(2004) 西来ほか編(2014)
1100 ka				



南八甲田山群の噴出量一年代階段ダイアグラム

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも短いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【27. 北八甲田火山群】

火山名	北八甲田火山群
敷地からの距離	約51km
火山の形式	複成火山, 溶岩ドーム
活動年代	約40万年前～最新噴火: 約600年前～400年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

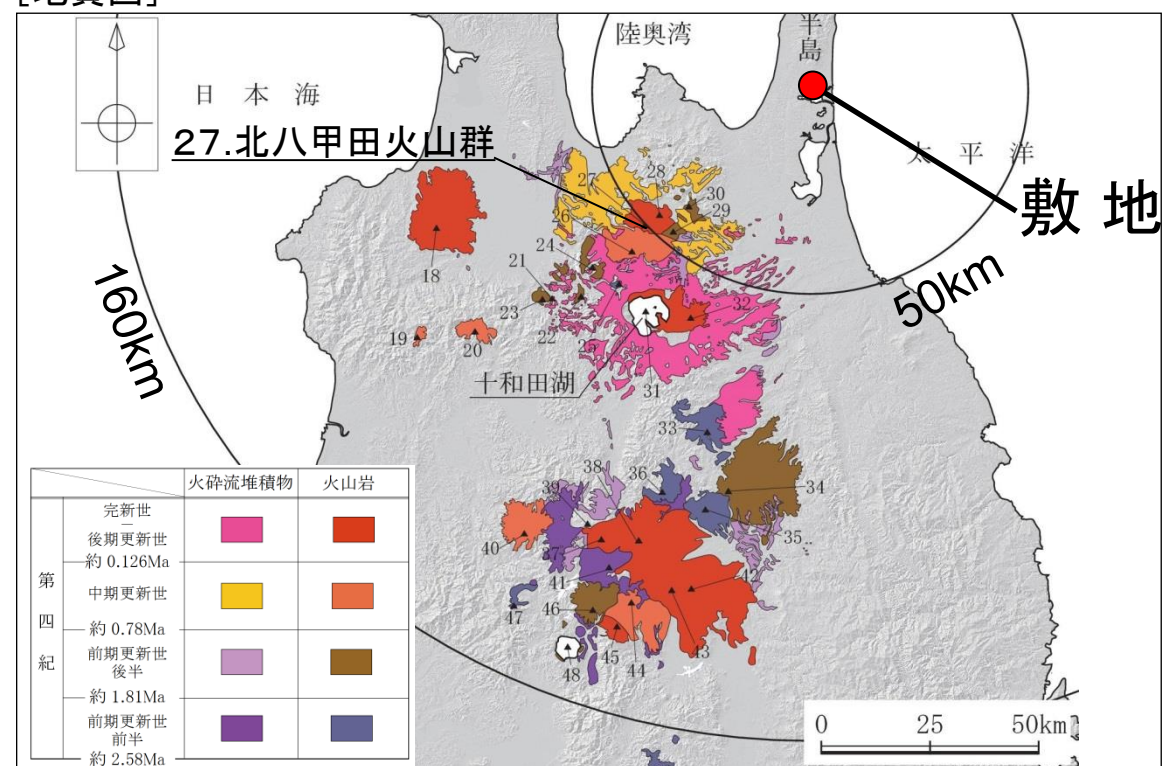
北八甲田火山群の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
0.4～4.8ka 現在～200ka 100ka以降～200ka 170ka	北八甲田火山群	Hk-J1, Hk-5等	0.005	工藤ほか(2000) 工藤ほか(2003) 工藤ほか(2004) 西来ほか編(2014)
100ka以降～300ka 100～300ka		大岳	1.3	
100～300ka		井戸岳	0.25	
100～300ka		T-7	0.1	
100～300ka		赤倉岳	1.6	
100～300ka		小岳	0.45	
100～300ka		硫黄岳	0.43	
100～300ka		仙人岱	0.51	
100～300ka		鳴沢台地	1.4	
210～230ka		T-3	0.3	
150～300ka		前嶽	0.91	
150～300ka		田茂菴岳	2.9	
270ka		甲地軽石	3.3	
200～400ka		高田大岳	3.2	
300～400ka		雛岳	2.1	

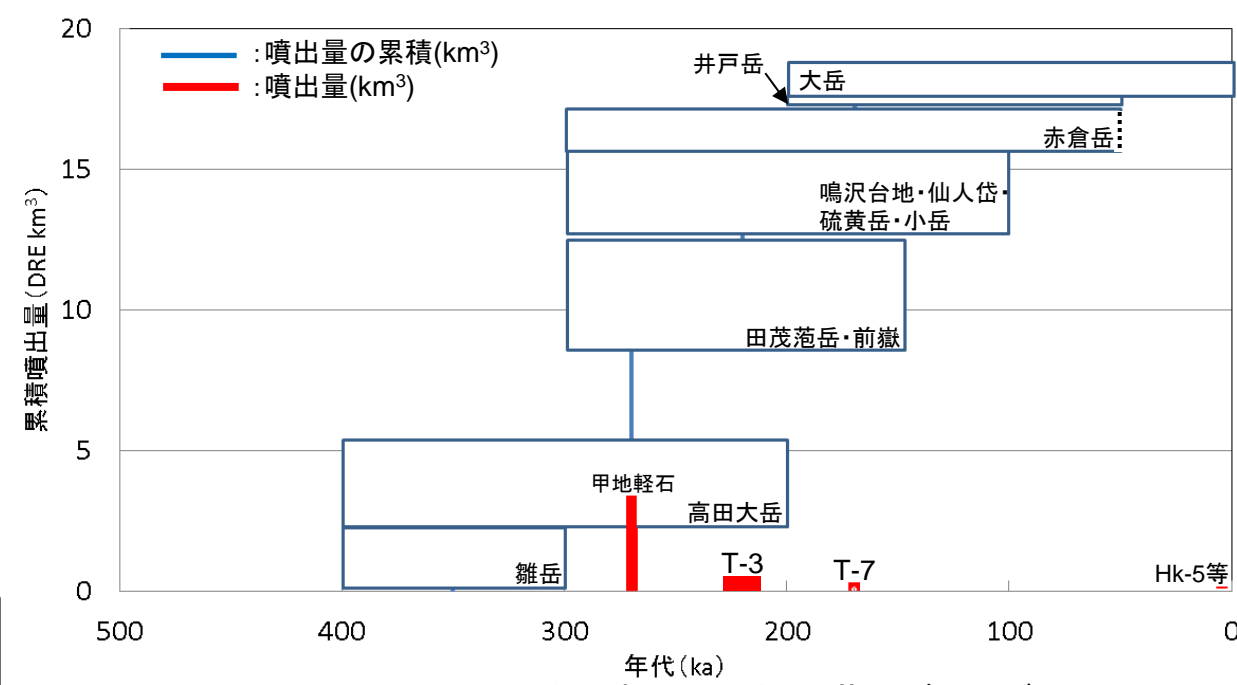
・青: 個別文献年代値

完新世に活動を行った火山であることから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



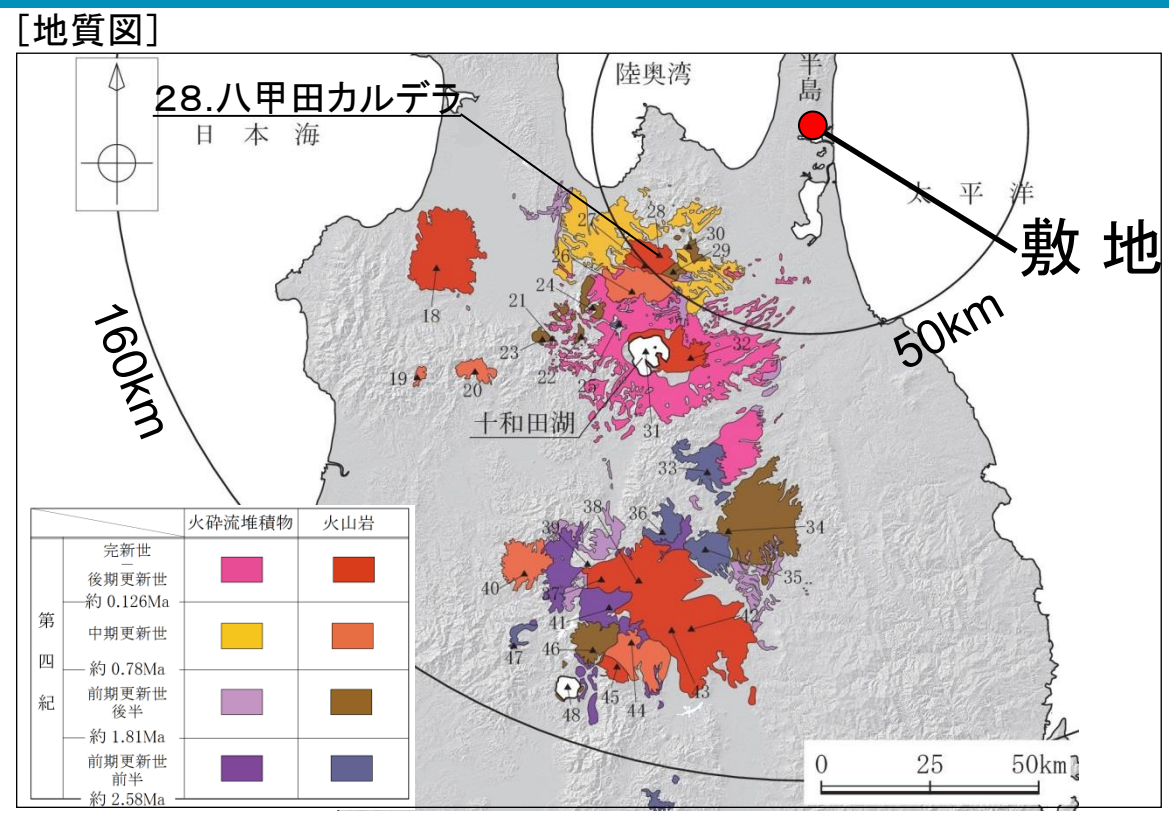
北八甲田火山群の噴出量一年代階段ダイアグラム

※四角は工藤ほか(2004)における年代幅及び噴出量を表す。

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【28. 八甲田カルデラ】

火山名	八甲田カルデラ
敷地からの距離	約46km
火山の形式	カルデラー火砕流
活動年代	約90万年前, 約76万年前, 約40万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく



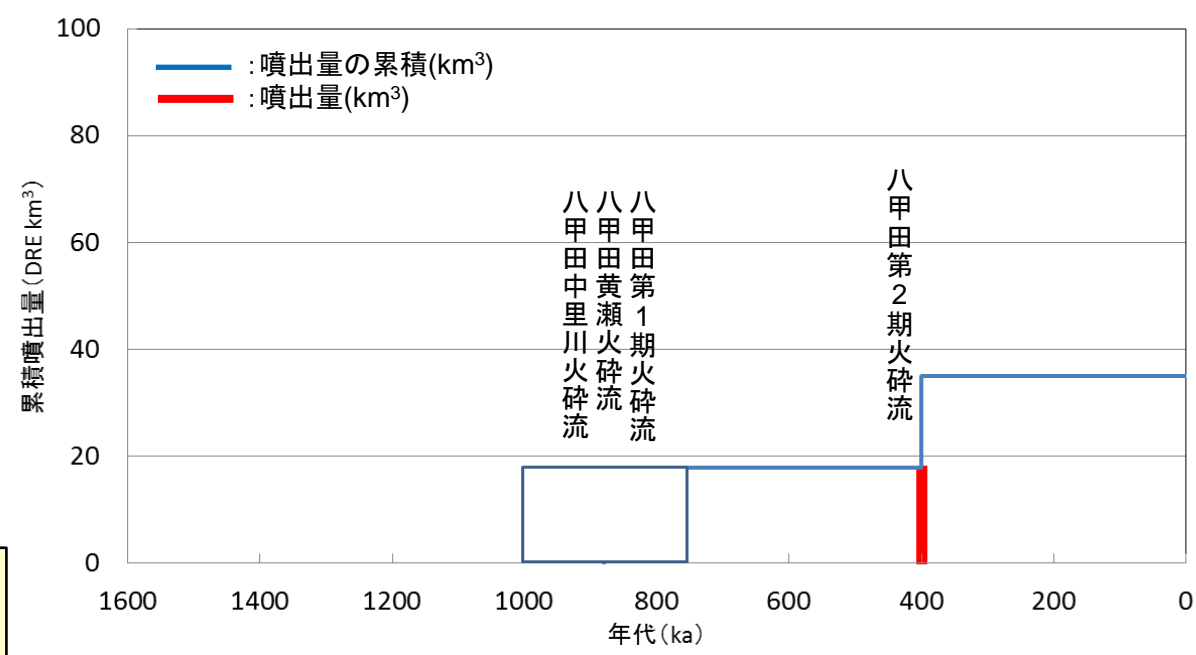
中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

八甲田カルデラの活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
400 ka	八甲田カルデラ	八甲田第2期火砕流	17	第四紀火山カタログ委員会編(1999) 宝田・村岡(2004) 工藤ほか(2011) 西来ほか編(2014)
760 ka		八甲田第1期火砕流	18	
900 ka		八甲田黄瀬火砕流		
1000 ka		八甲田中里川火砕流		

・青: 個別文献年代値

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも短いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価



八甲田カルデラの噴出量—年代階段ダイアグラム

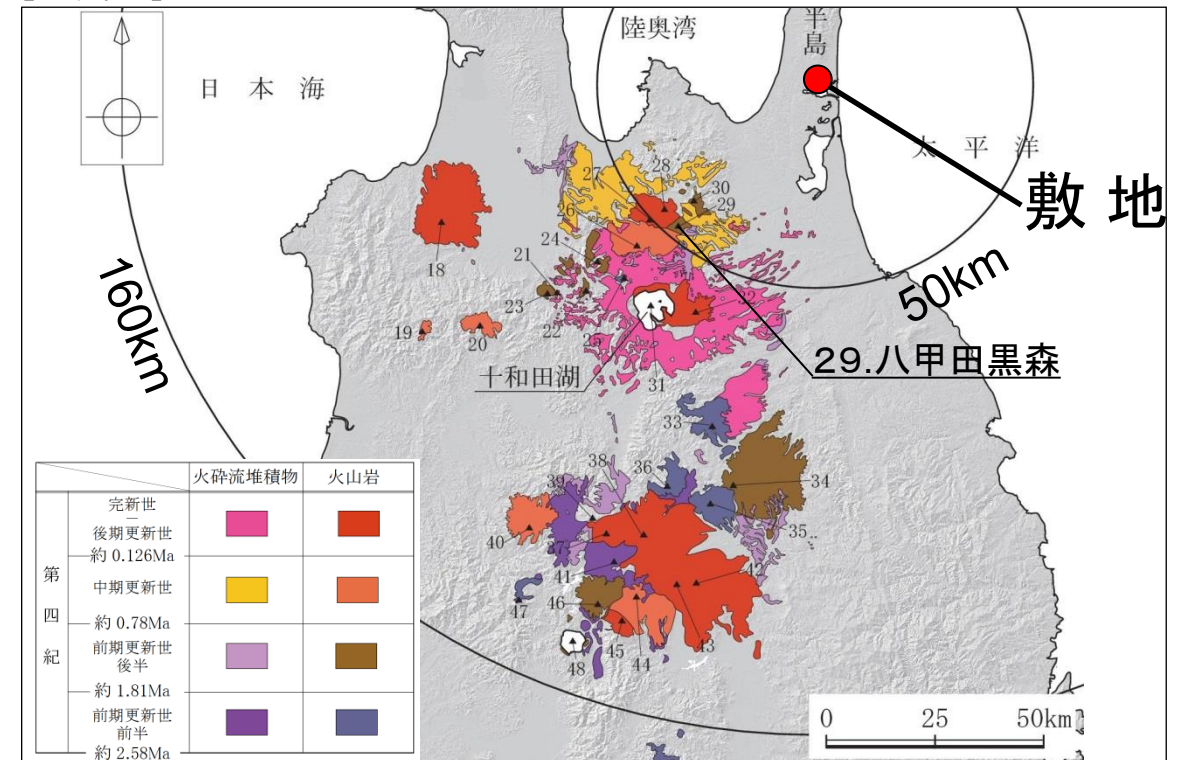
※ 四角は、中野ほか編(2013)及び個別文献に基づく年代幅を表し、また、個別文献に基づく噴出量を表す。

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)
【29. 八甲田黒森】

火山名	八甲田黒森
敷地からの距離	約47km
火山の形式	複成火山
活動年代	約175万年前～160万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

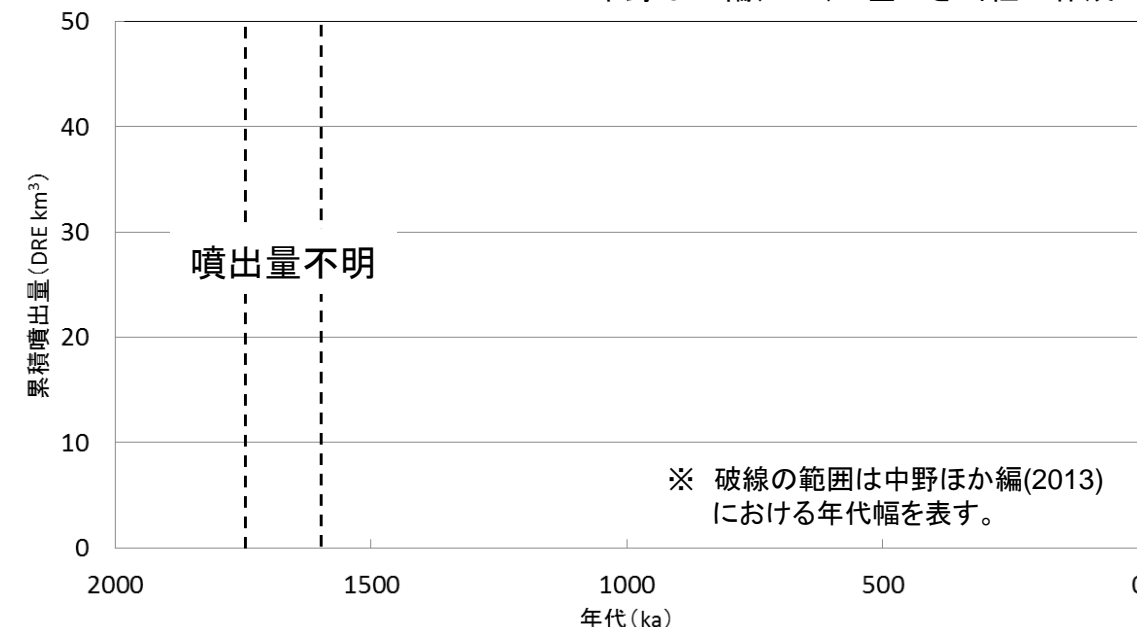
[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

八甲田黒森の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1600 ka 1750 ka	八甲田黒森	黒森溶岩	不明	工藤ほか(2004) NEDO(1987) 宝田・村岡(2004) 西来ほか編(2014)



八甲田黒森の噴出量-年代階段ダイアグラム

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)
【30. 八甲田八幡岳】

火山名	八甲田八幡岳
敷地からの距離	約40km
火山の形式	複成火山
活動年代	約180万年前～160万年前

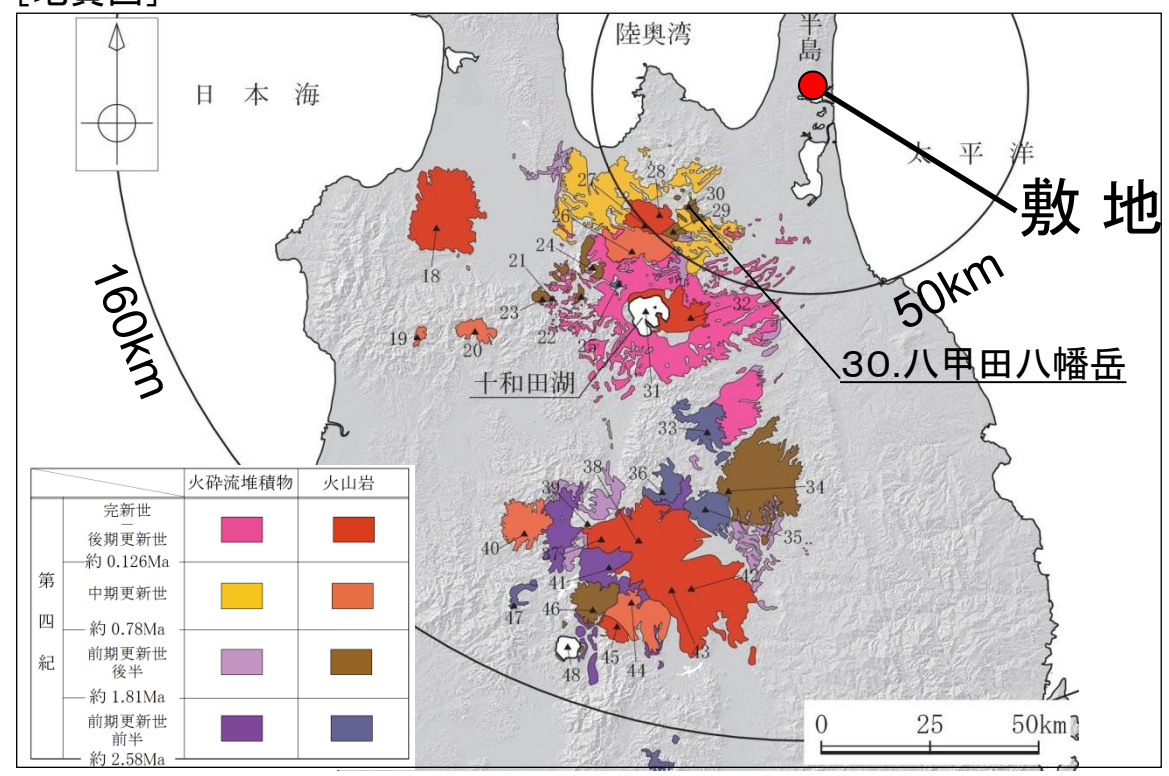
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

八甲田八幡岳の活動履歴

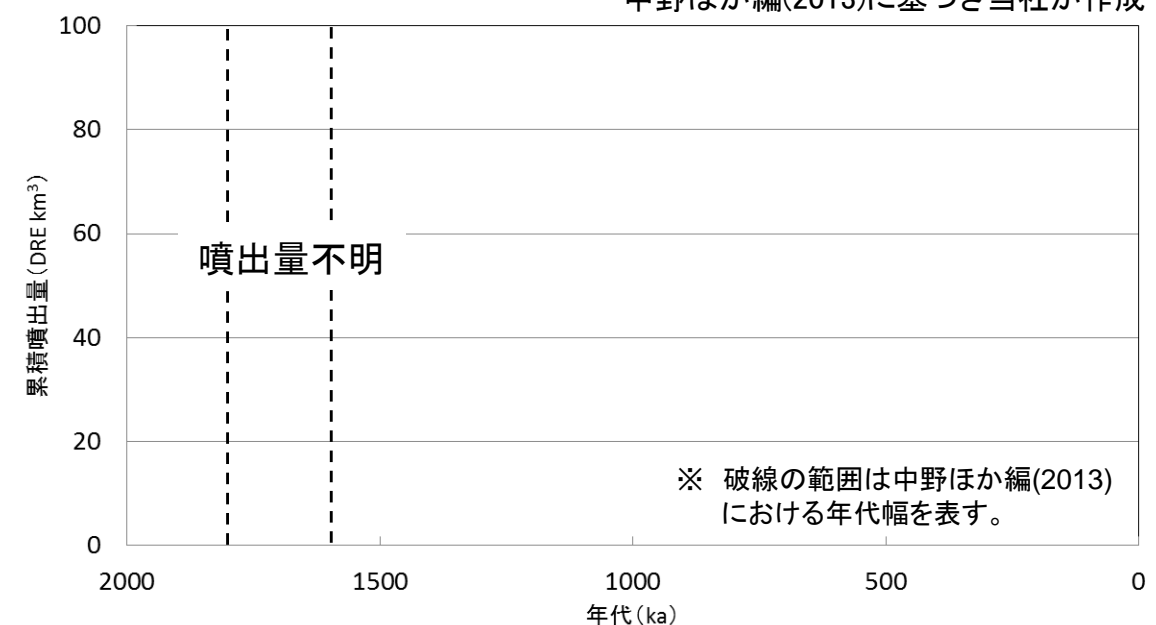
年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1600 ka	八甲田八幡岳	高森山溶岩	不明	工藤ほか(2004) 西来ほか編(2014) 工藤(2005)
		八幡岳溶岩		
		大中台溶岩		
1800 ka		法量北溶岩		

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



八甲田八幡岳の噴出量一年代階段ダイアグラム

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【31. 十和田】

火山名	十和田
敷地からの距離	約66km
火山の形式	カルデラー火砕流, 溶岩ドーム
活動年代	約20万年前～最新噴火:AD.915

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

十和田の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
AD.915	後カルデラ期	毛馬内火砕流, 十和田aテフラ	2.27	Yamamoto et al.(2018) 工藤ほか(2011) 山元(2015) 工藤(2016) 工藤ほか(2019)
6.2 ka~15.5 ka		中撮テフラ 二の倉テフラ群・五色岩火山等	8.74	
15.5 ka 21* ka 36 ka 49.8*, 53.8* ka 61* ka	カルデラ形成期	八戸火砕流, 八戸テフラ ビスケット2テフラ	20.34 3.1*	
		大不動火砕流, 切田テフラ 合同テフラ, キビダングテフラ 奥瀬火砕流, レッドテフラ	17.87 2.6(1.4+1.2) 4.76	
61*~174 ka	先カルデラ期	アオスジテフラ, カステラテフラ, ヌカミノテフラ 等	13.02 (読み取り値を含む)	
200 ka		発荷山	1.4	
60~190 ka 60~260 ka		青撫山, 御鼻部山	8.9	

・青: 個別文献年代値

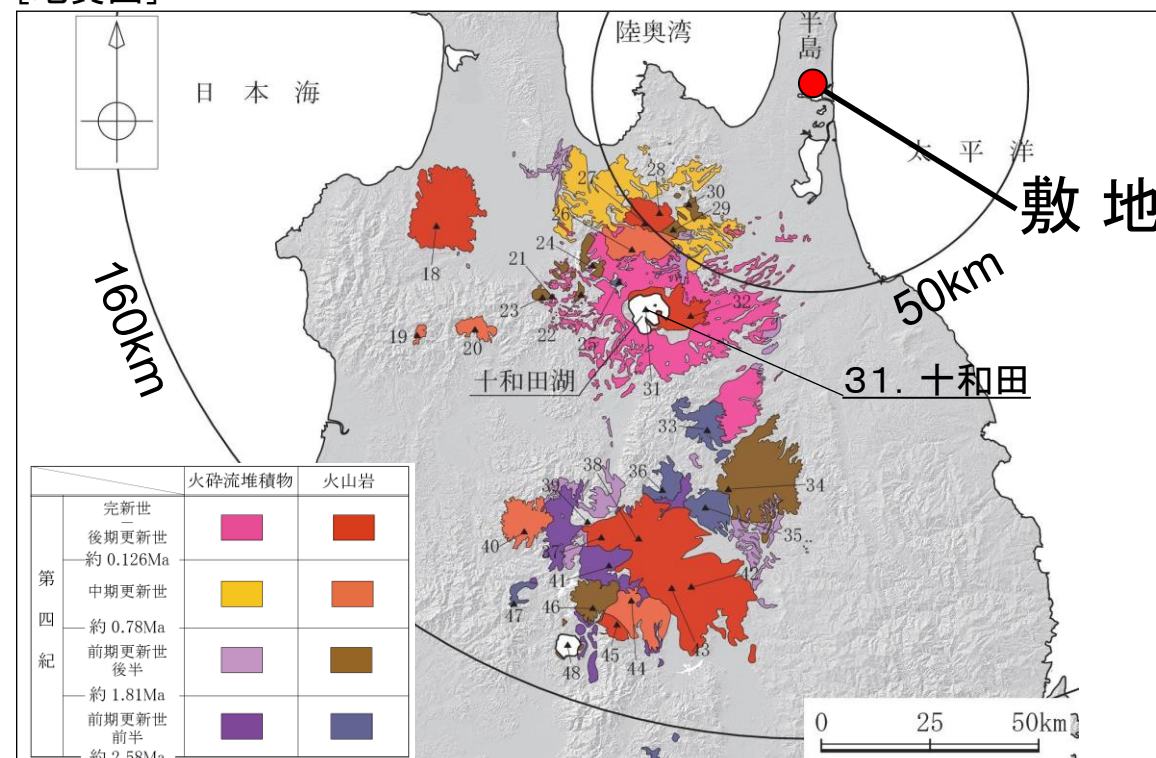
注) 山元(2015)に基づき作成。

約12万前以降の活動については, Yamamoto et al.(2018)を参照し整理

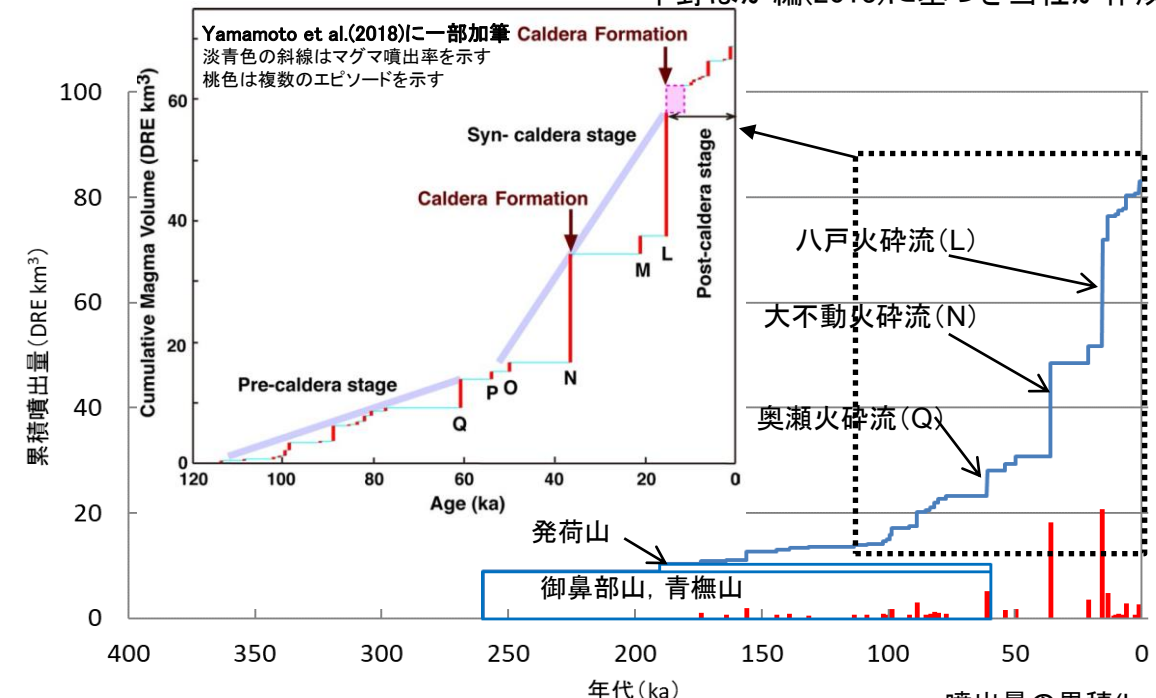
※: Yamamoto et al.(2018)の階段ダイアグラムから読み取った値

完新世に活動を行った火山であることから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



十和田の噴出量一年代階段ダイアグラム
—: 噴出量の累積(km³)
—: 噴出量(km³)

※右下図は山元(2015)及びYamamoto et al.(2018)に基づき作成。
四角は山元(2015)における年代幅及び噴出量を表す。

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)

【32. 先十和田】

火山名	先十和田
敷地からの距離	約63km
火山の形式	複成(複合)火山
活動年代	62万年前～45万年前

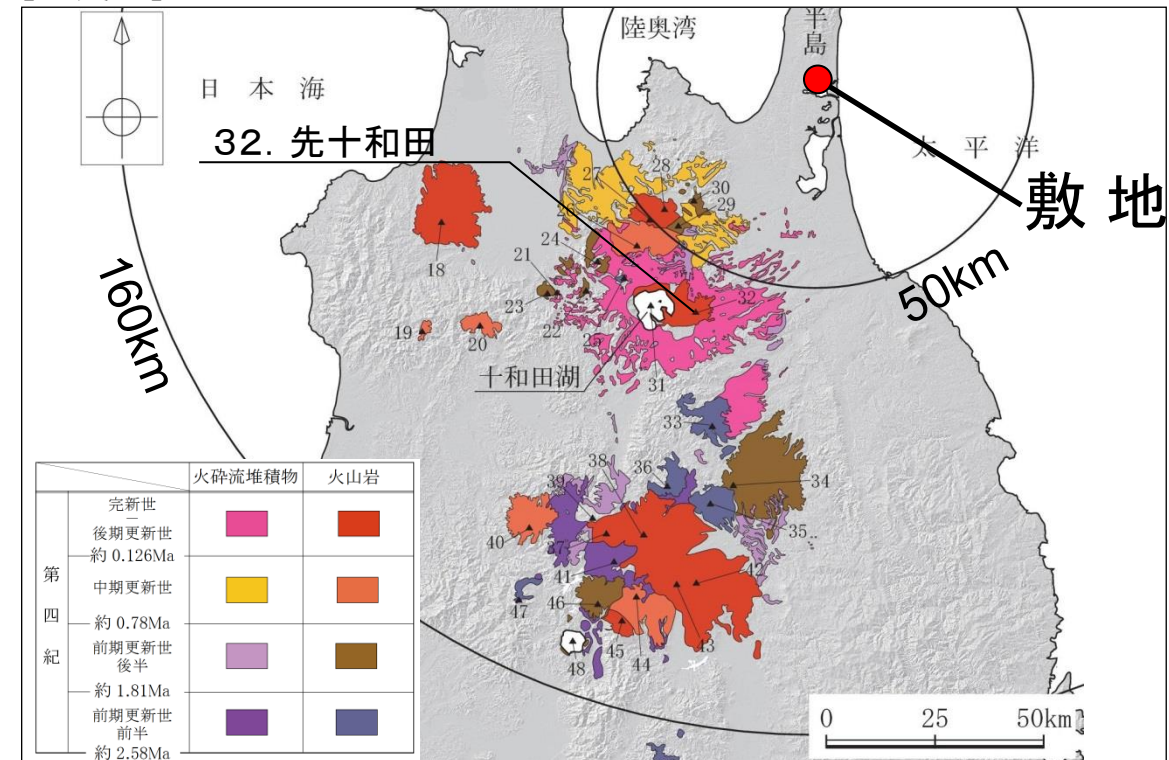
注)火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

先十和田の活動履歴

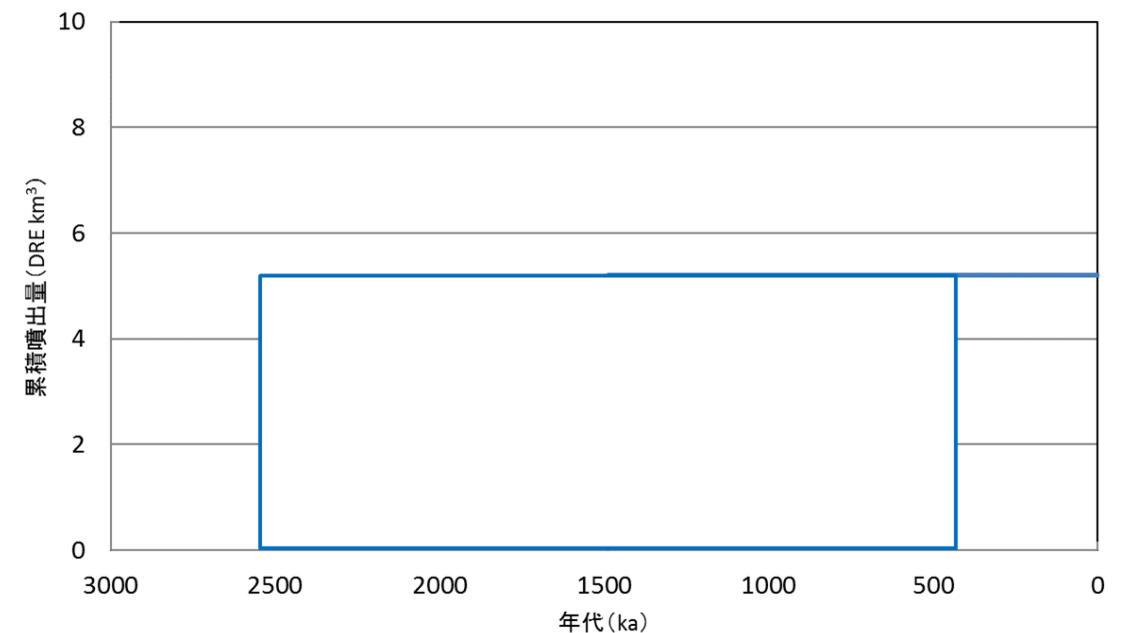
年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
450ka 620ka 2530ka	先十和田	爺倉岬溶岩・火山碎屑岩 高山溶岩・火山碎屑岩等	5.2 (噴出量不明含む)	工藤(2018) 第四紀火山カタログ委員会編(1999)

・青: 個別文献年代値

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



先十和田の噴出量—年代階段ダイアグラム —: 噴出量の累積(km³) (噴出量不明を含む)

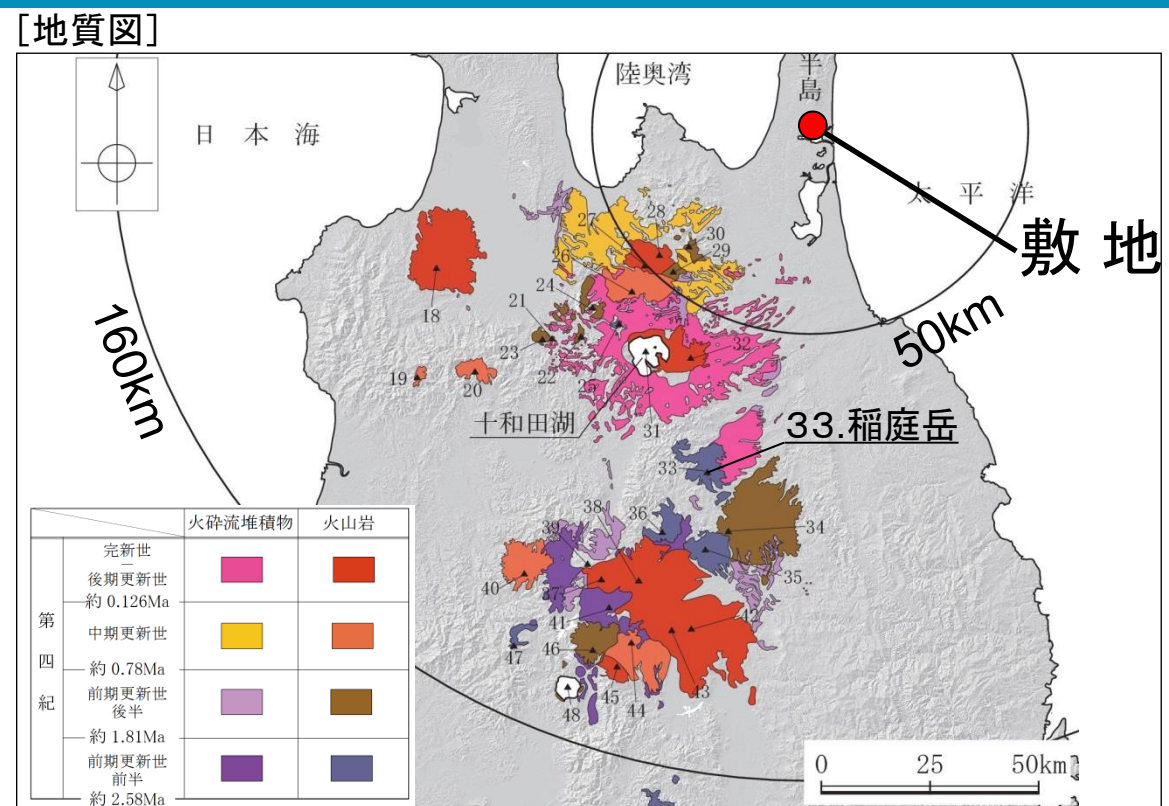
※四角は中野ほか編(2013) 及び個別文献に基づく年代幅及び噴出量を表す。

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも短いことから、
原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【33. 稲庭岳】

火山名	稲庭岳
敷地からの距離	約88km
火山の形式	複成火山
活動年代	約300万年前～260万年前

注)火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

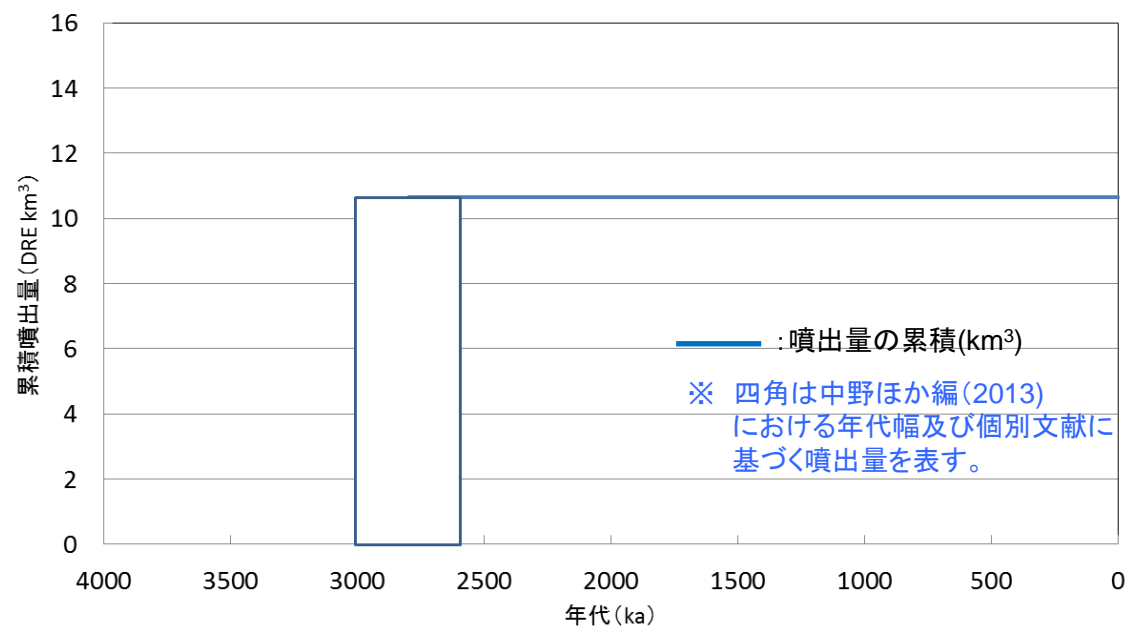


中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

稲庭岳の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
2600 ka	稲庭岳層	高曲原玄武岩部層	11	安井・山元(2000) 中嶋ほか(1995) 八島ほか(2001) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 西来ほか編(2014)
3000 ka		花小袖峰玄武岩部層		
	高曲沢玄武岩部層			

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価



稲庭岳の噴出量—年代階段ダイアグラム

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【34. 七時雨山】

火山名	七時雨山
敷地からの距離	約101km
火山の形式	複成火山, 溶岩ドーム, カルデラー火砕流
活動年代	約110万年前～90万年前

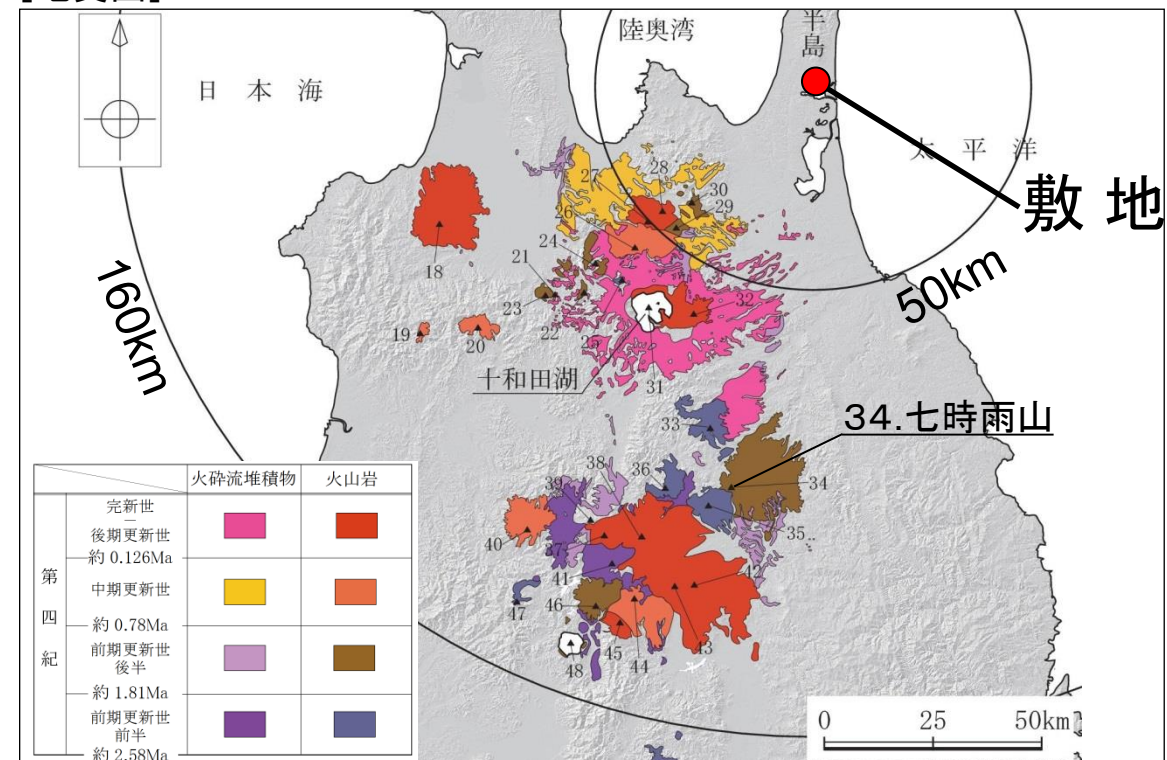
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

七時雨山の活動履歴

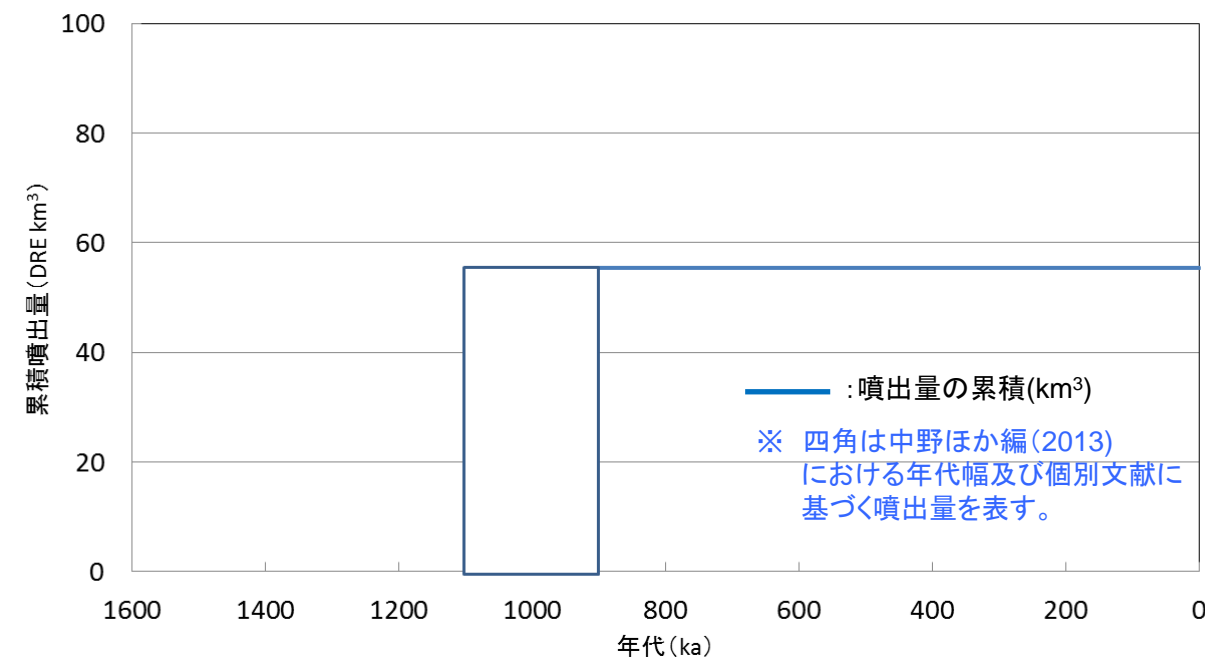
年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
900ka	後期	毛無森溶岩円頂丘 染田川層 等	55	伴ほか(1992) 石川ほか(1985) 照井(2006) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 西来ほか編(2014)
	中期	カルデラ形成期 西岳溶岩・豊岡火砕岩 鉢森溶岩 等		
前期	成層火山体形成期 寺沢溶岩 奥中山軽石 等			
1100ka				

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



七時雨山の噴出量一年代階段ダイアグラム

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)
【35. 荒木田山】

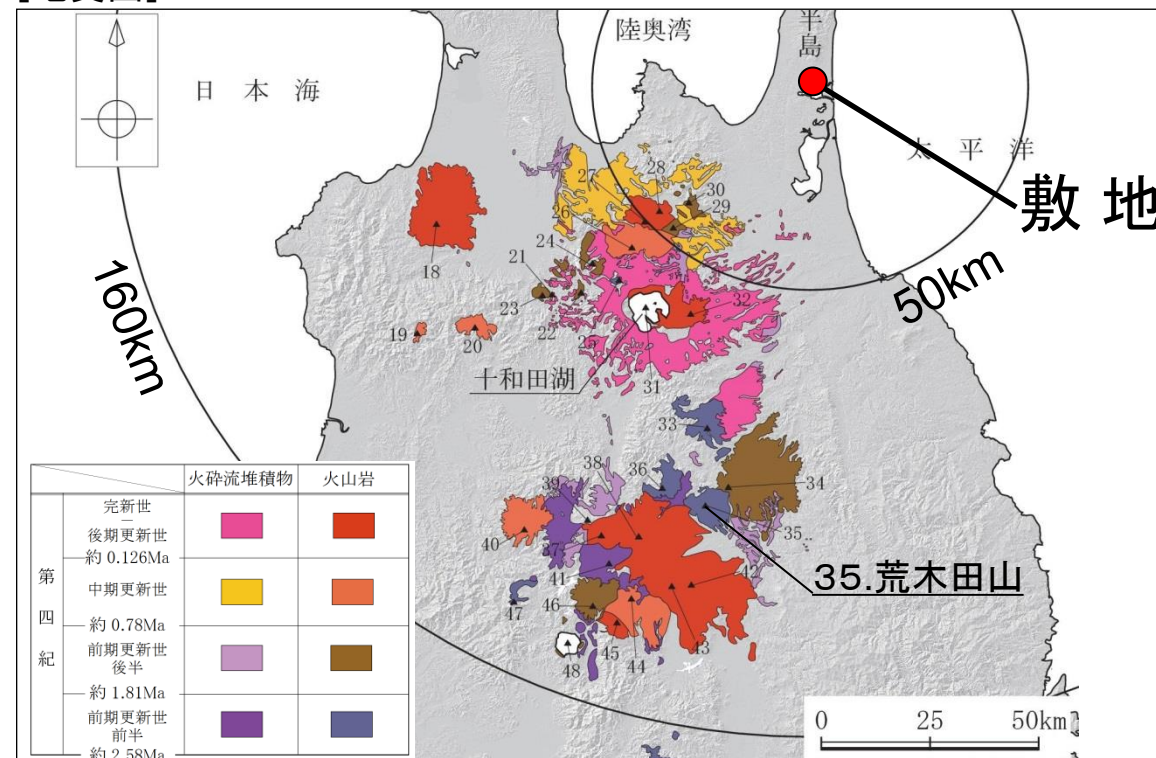
火山名	荒木田山
敷地からの距離	約107km
火山の形式	複成火山
活動年代	約210万年前～190万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

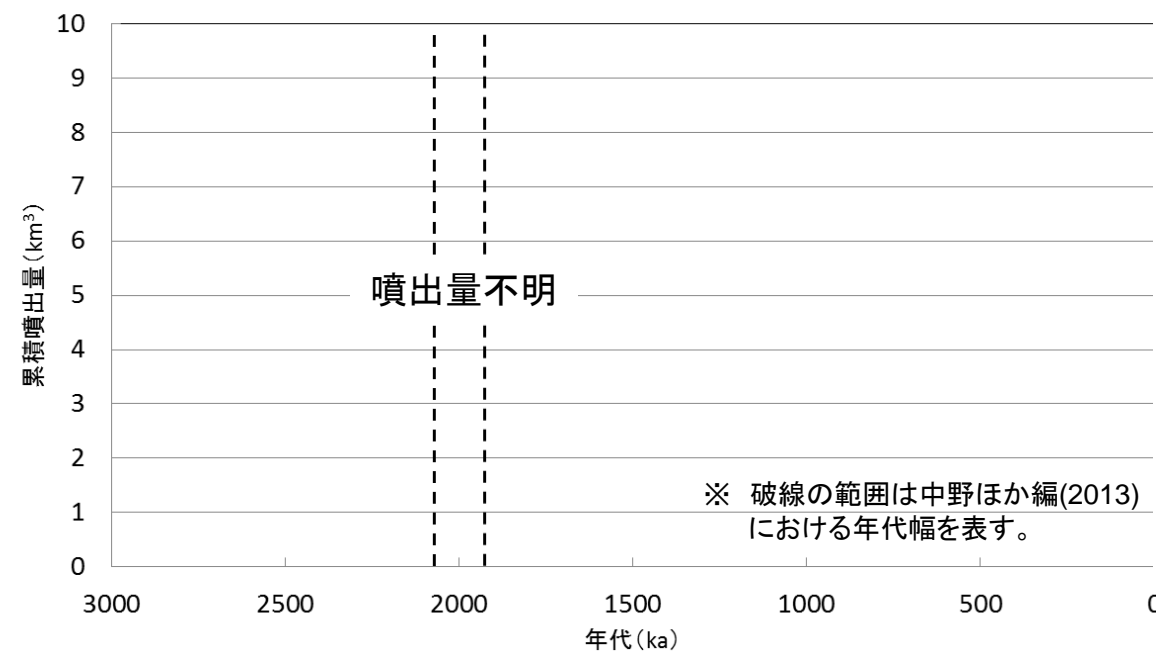
荒木田山の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1900 ka	荒木田山	深沢山安山岩	不明	大口ほか(1986) 八島ほか(2001) 西来ほか編(2014)
2100 ka		荒木田山安山岩		

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



荒木田山の噴出量－年代階段ダイアグラム

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)
【36. 高倉・黒森】

火山名	高倉・黒森
敷地からの距離	約105km
火山の形式	複成火山
活動年代	約320万年前～250万年前

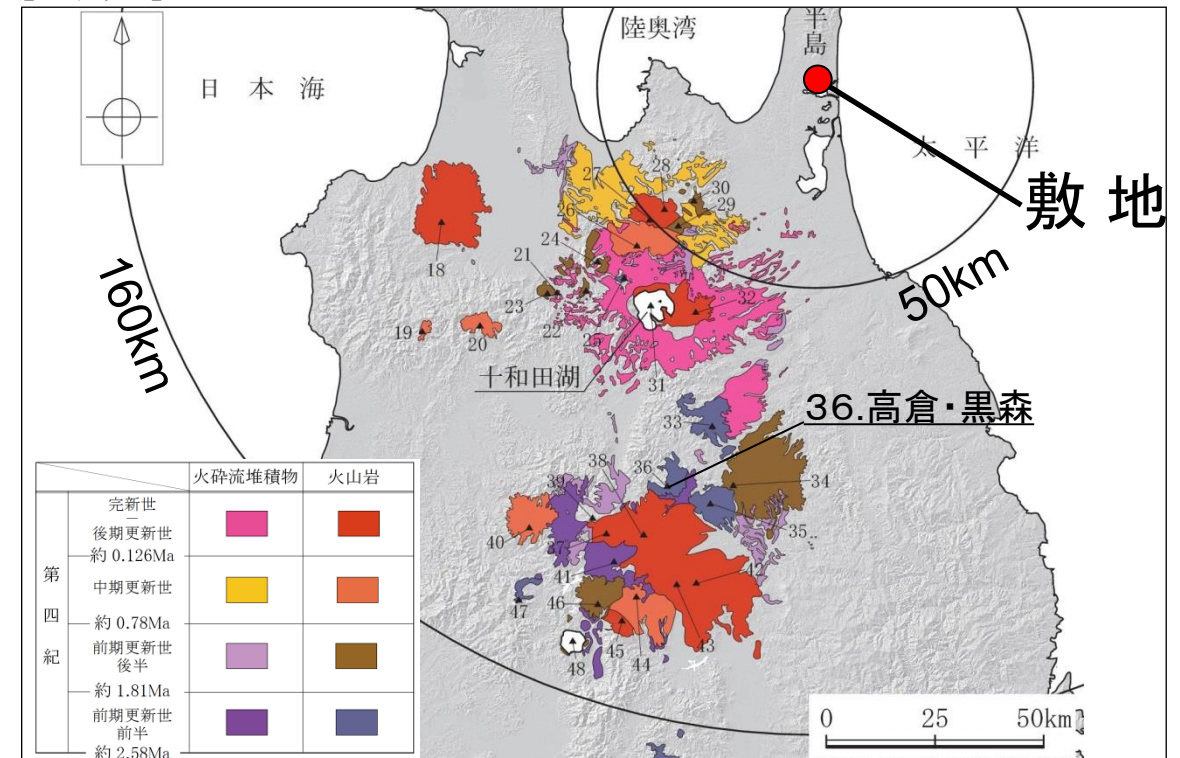
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

高倉・黒森の活動履歴

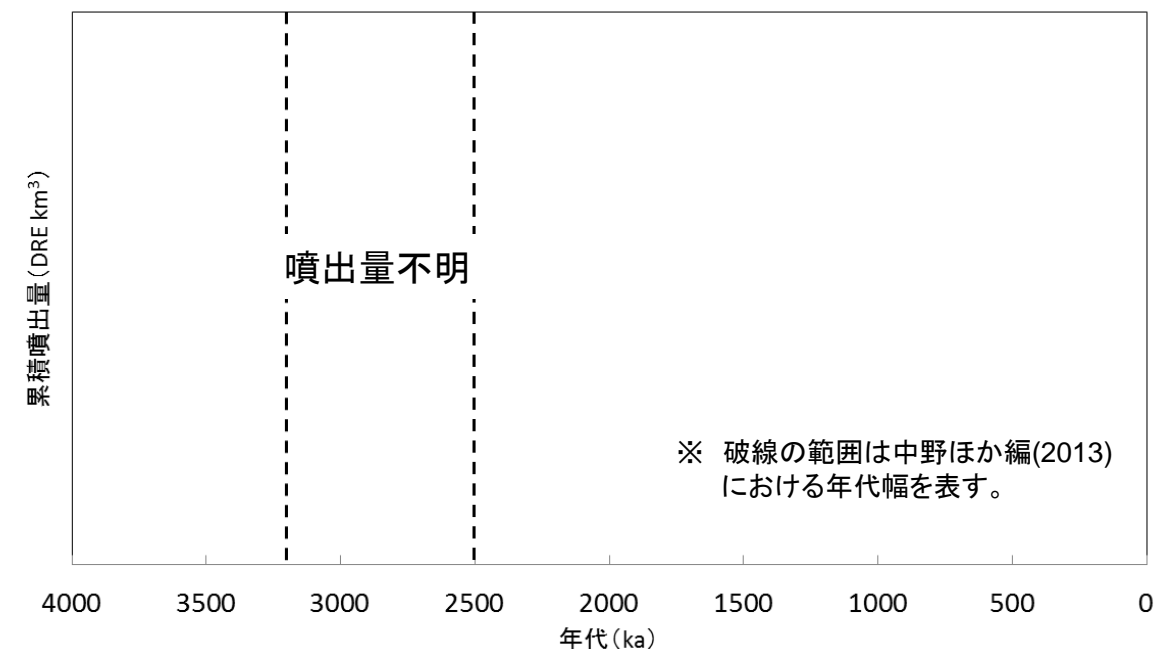
年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
2500 ka	高倉・黒森	黒森山溶岩	不明	八島ほか(2001) 上村ほか(1985) 資源エネルギー庁(1985) 西来ほか編(2014)
3200 ka		高倉山溶岩		

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



高倉・黒森の噴出量一年代階段ダイアグラム

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【37. 秋田焼山】

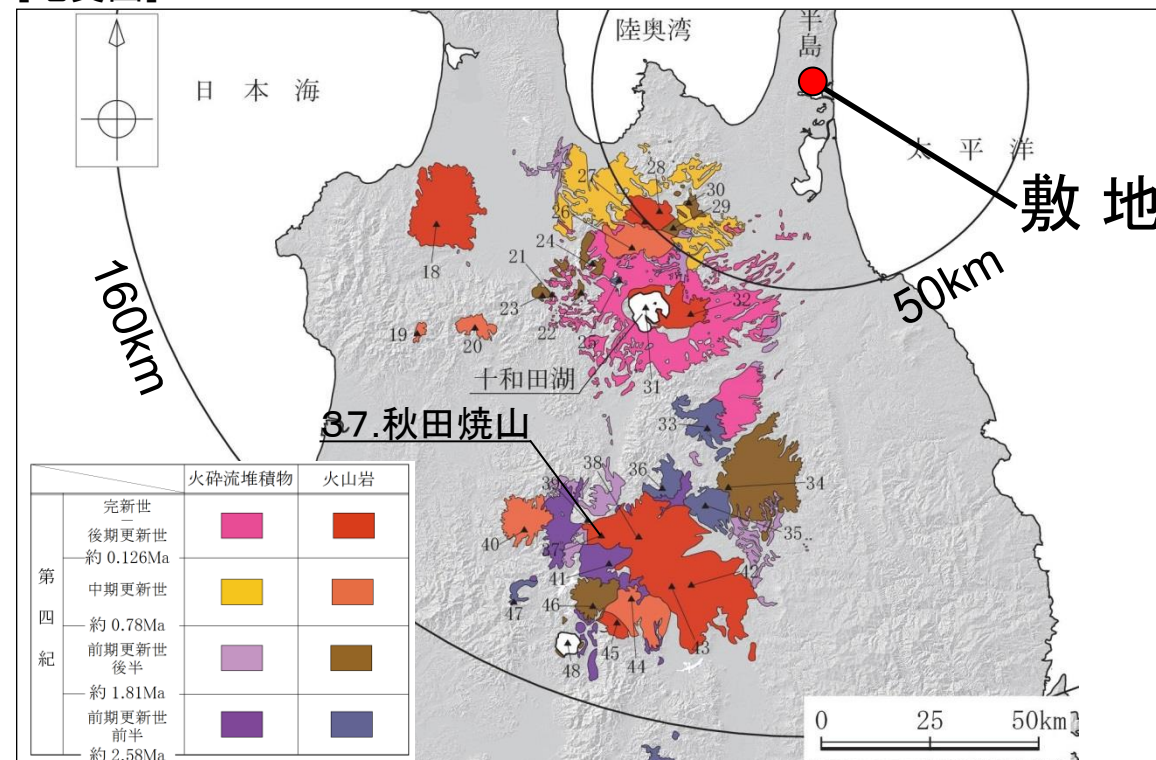
火山名	秋田焼山
敷地からの距離	約121km
火山の形式	複成火山, 溶岩ドーム
活動年代	約50万年前～最新噴火:AD.1997

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

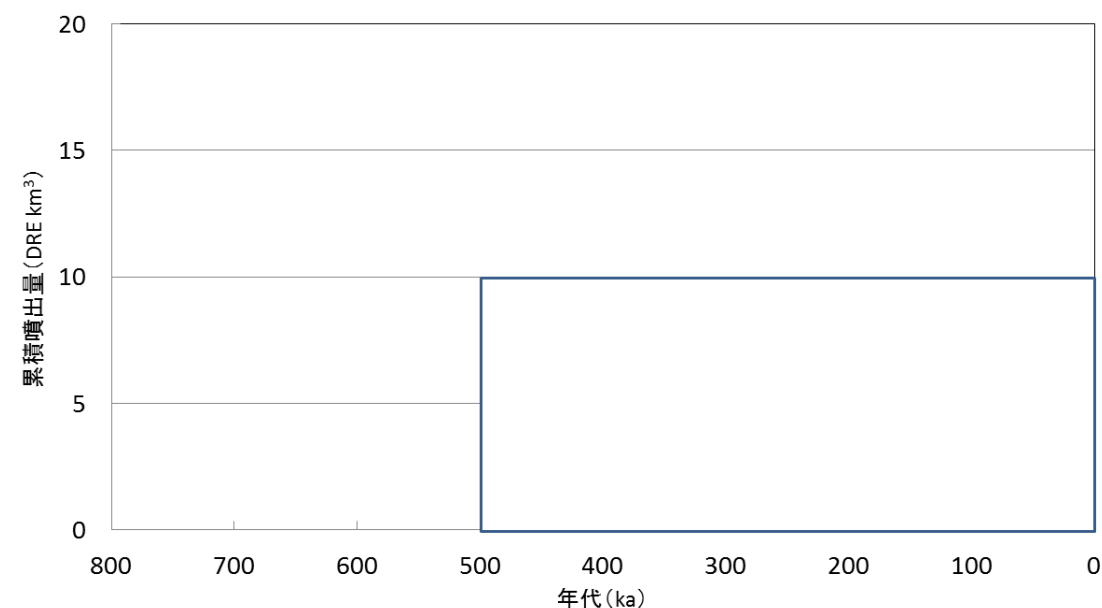
秋田焼山の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
AD.1997	新期噴出物	1997年水蒸気噴火 名残峠火砕岩類 等	10	須藤(1986) 大場(1991) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 筒井ほか(2002) 内海ほか(1990) 西来ほか編(2014)
	中期噴出物	山頂火口壁北溶岩 山頂火口壁火砕岩類 等		
	古期噴出物	曾利の滝溶岩類 榎沢溶岩類 等		
500 ka				

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



秋田焼山の噴出量－年代階段ダイアグラム

※ 四角は中野ほか編(2013)における年代幅及び個別文献に基づく噴出量を表す。

完新世に活動を行った火山であることから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)
【38. 八幡平火山群】

火山名	八幡平火山群
敷地からの距離	約118km
火山の形式	複成火山
活動年代	約120万年前～最新噴火: 7,000年前

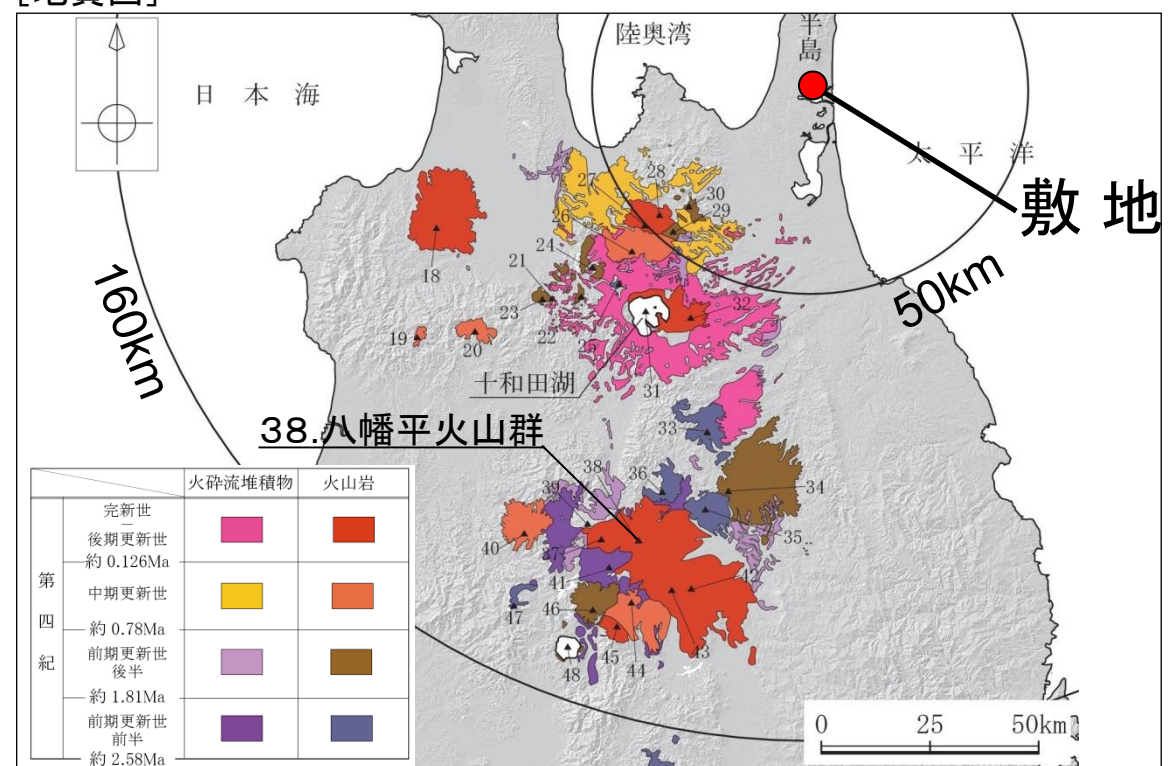
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

八幡平火山群の活動履歴

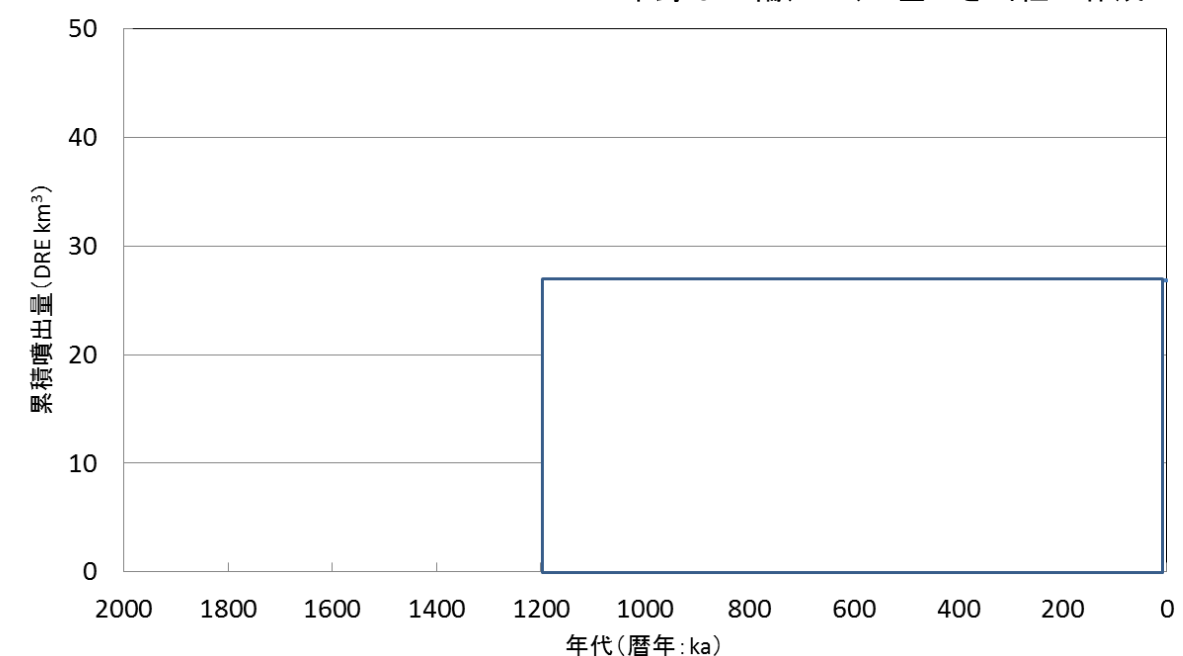
年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
7 ka	八幡平火山群	前森山火山噴出物 茶臼山火山噴出物 諸楡岳溶岩 ケンソ森溶岩 等	26.8	大場・梅田(1999) 大場ほか(2003) 須藤(1992) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 和知ほか(2002) 西来ほか編(2014)
1200 ka				

完新世に活動を行った火山であることから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



八幡平火山群の噴出量一年代階段ダイアグラム

— : 噴出量の累積(km³)

※ 四角は中野ほか編(2013)における年代幅及び個別文献に基づく噴出量を表す。

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)

【39. 柴倉岳】

火山名	柴倉岳
敷地からの距離	約119km
火山の形式	複成(複合)火山
活動年代	約260万年前～120万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

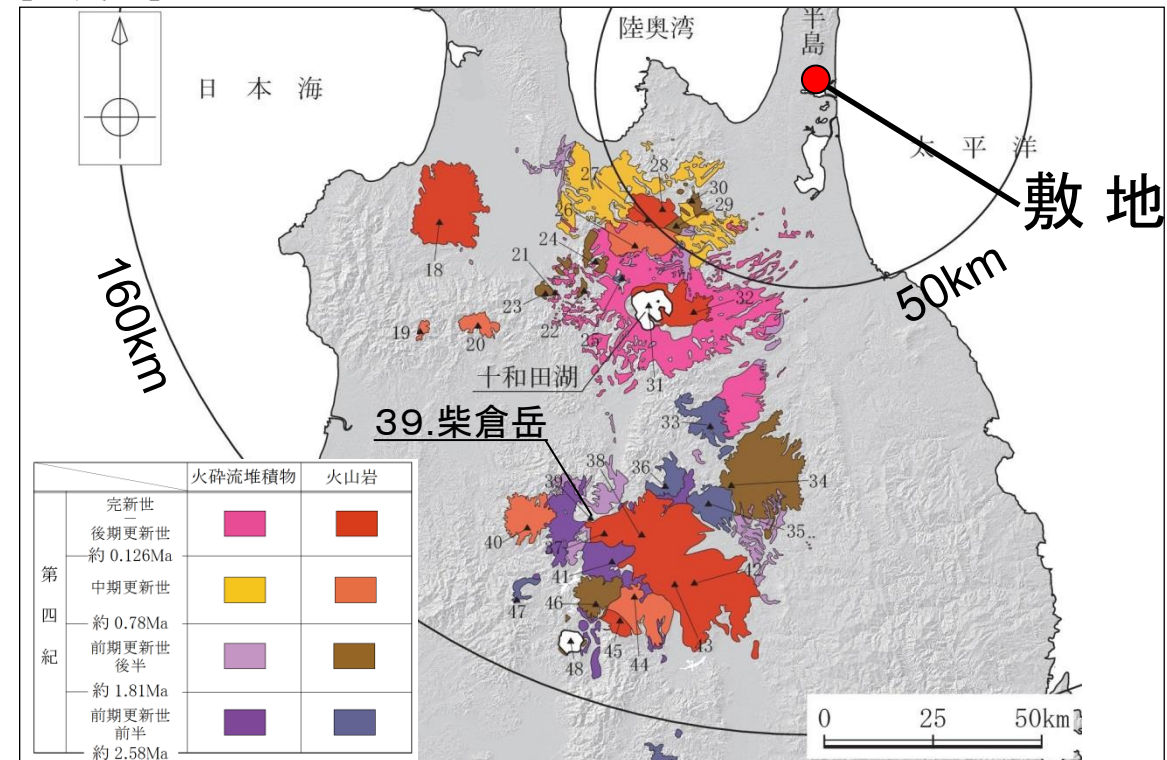
柴倉岳の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1200 ka	榑森	榑森火山噴出物	0.08	須藤(1992) 第四紀火山カタログ委員会編(1999)
2000 ka	柴倉岳	柴倉岳火山噴出物	3.3	
2600 ka				

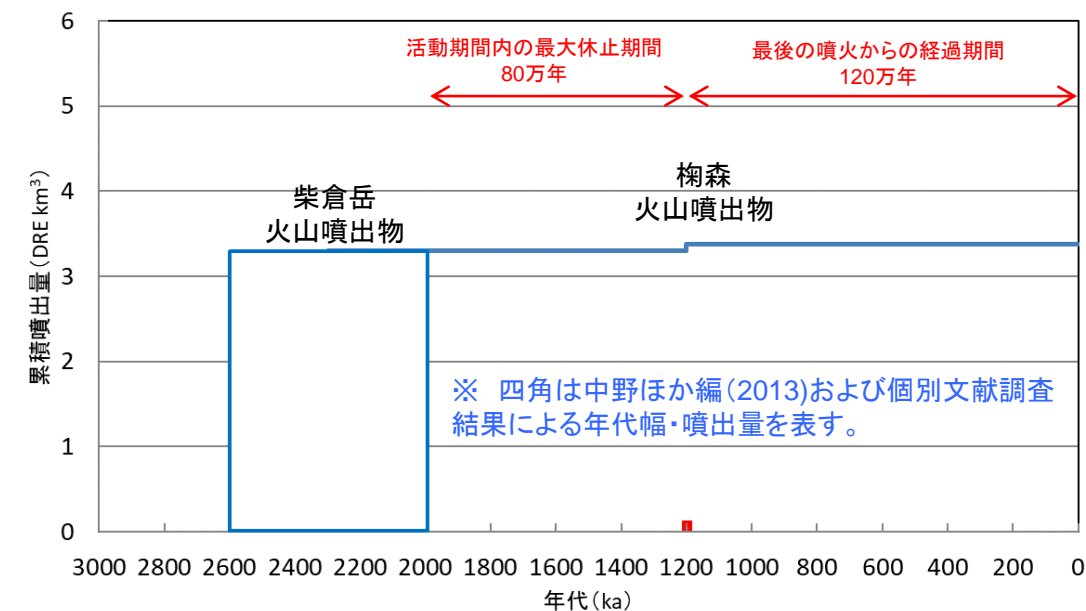
・青: 個別文献年代値

最後の噴火からの経過期間が, 活動期間内の最大休止期間よりも長いことから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



柴倉岳の噴出量—年代階段ダイアグラム

— : 噴出量の累積(km³)
— : 噴出量(km³)

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【40. 森吉山】

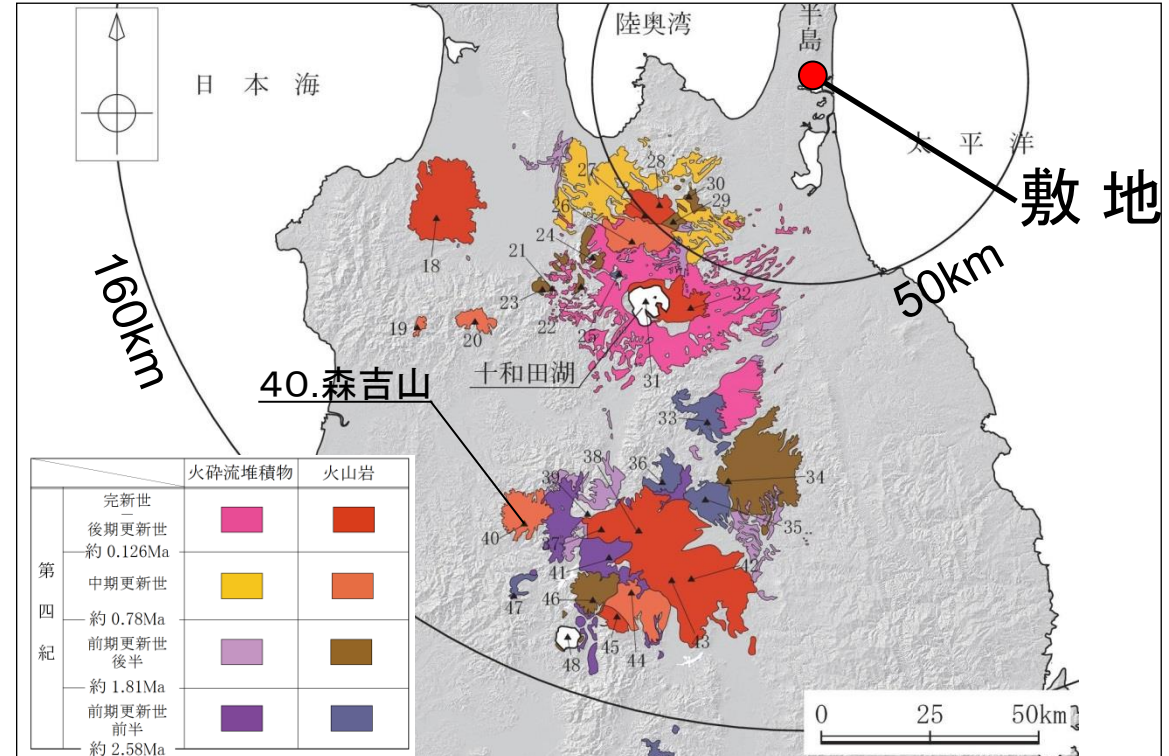
火山名	森吉山
敷地からの距離	約128km
火山の形式	複成火山, 溶岩ドーム
活動年代	約110万年前～70万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

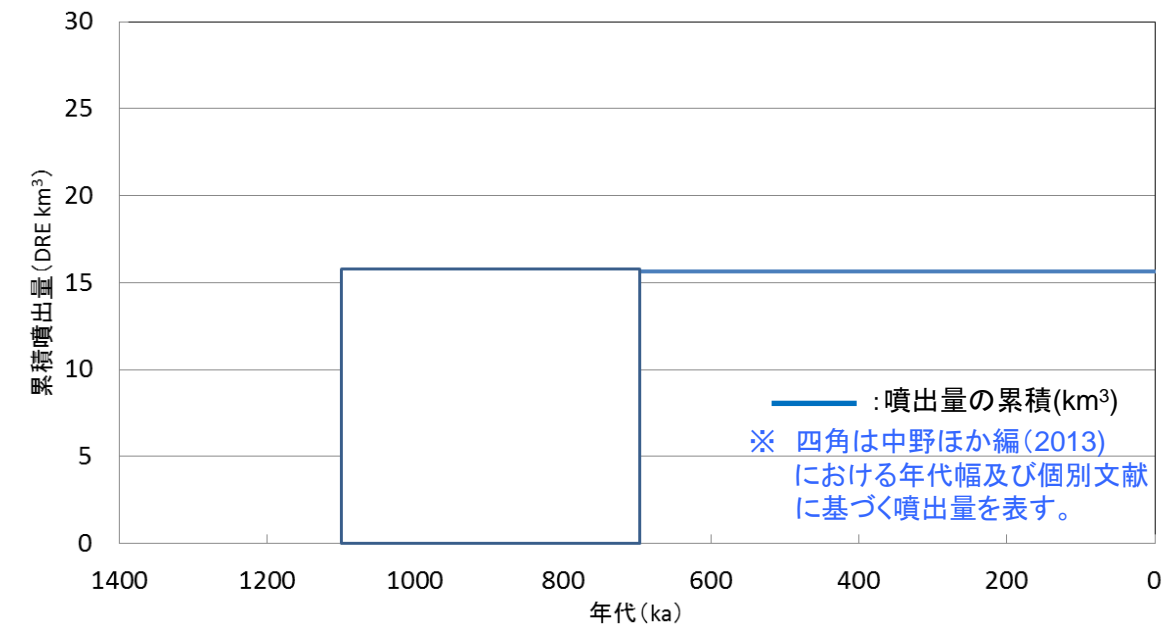
森吉山の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
700 ka	後期 L期	奥岳中央火口丘 石森山溶岩 等	1.3	須藤ほか(1989) 中川(1983) 西来ほか編(2014)
	前期 E-3期	千本杉沢スコリア流 等	14	
E-2期		大熊沢溶岩 阿仁松倉沢溶岩類 等		
E-1期		時戸沢下部溶岩 不帰沢火砕流 等		
1100 ka				

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



森吉山の噴出量—年代階段ダイアグラム

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)
【41. 玉川カルデラ】

火山名	玉川カルデラ
敷地からの距離	約127km
火山の形式	カルデラー火砕流
活動年代	約200万年前, 約100万年前

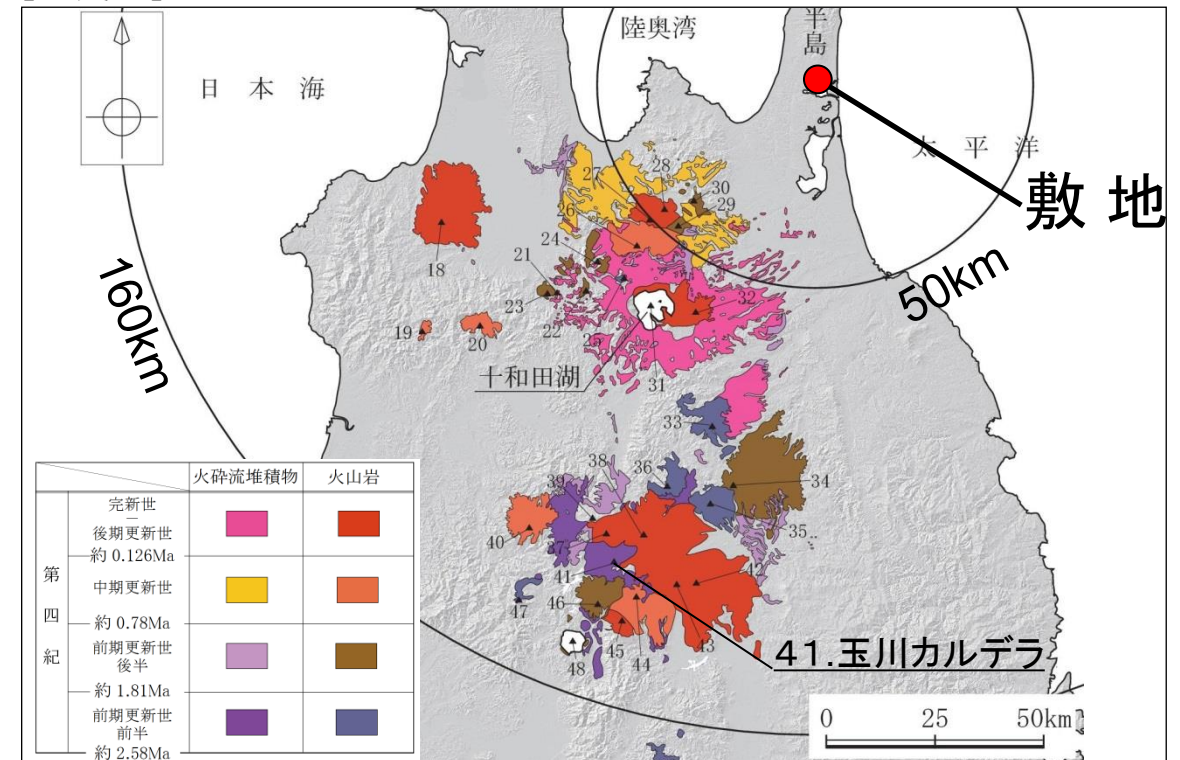
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

玉川カルデラの活動履歴

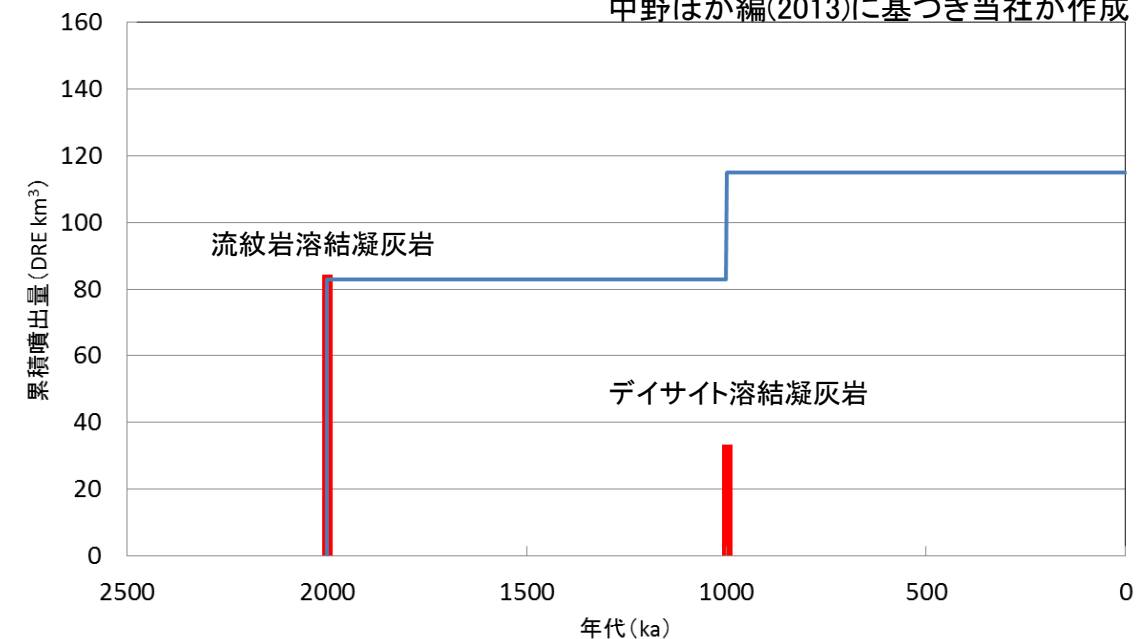
年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1000 ka	玉川カルデラ	玉川溶結凝灰岩 (デイサイト溶結凝灰岩)	32	須藤(1987) 須藤(1982) 須藤・石井(1987) 小嶋・山崎(2013) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 西来ほか編(2014)
		玉川溶結凝灰岩 (流紋岩溶結凝灰岩)	83	
2000 ka				

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも短いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価。

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



玉川カルデラの噴出量一年代階段ダイアグラム

— : 噴出量の累積(km³)
— : 噴出量(km³)

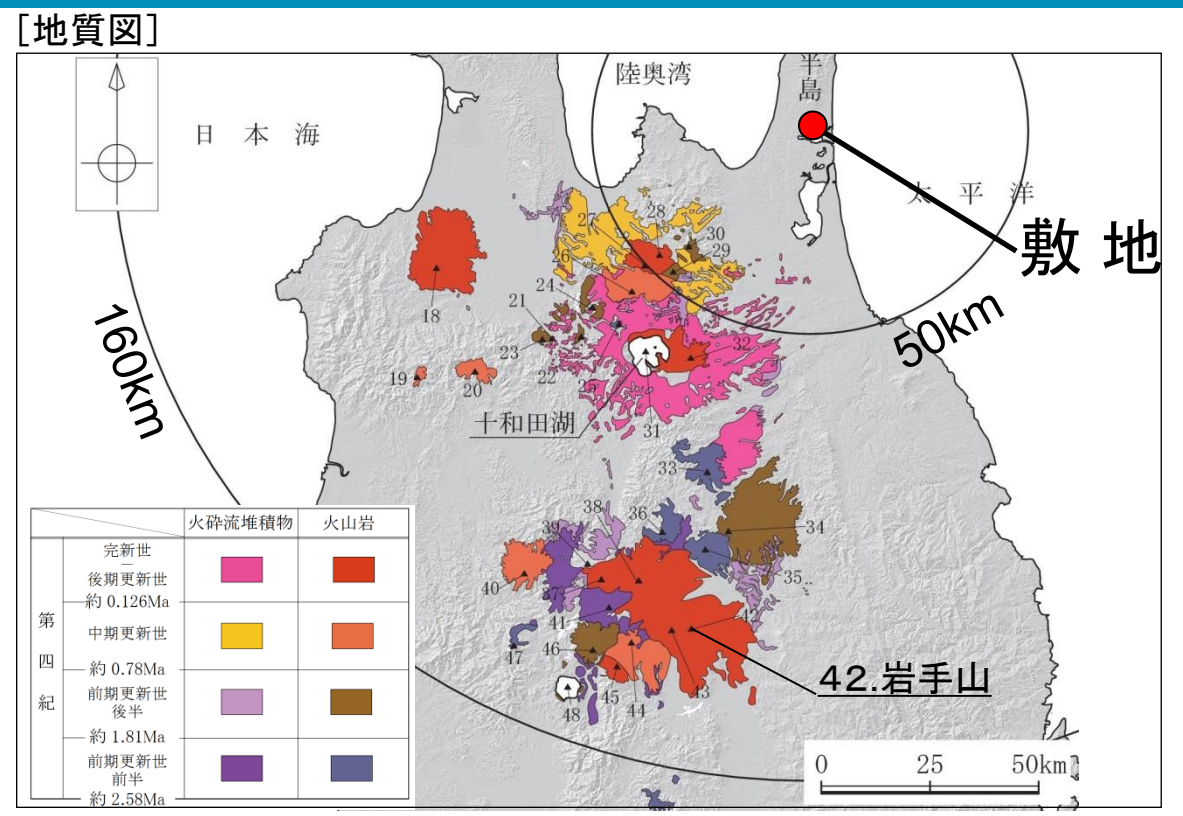
(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)

【42. 岩手山】

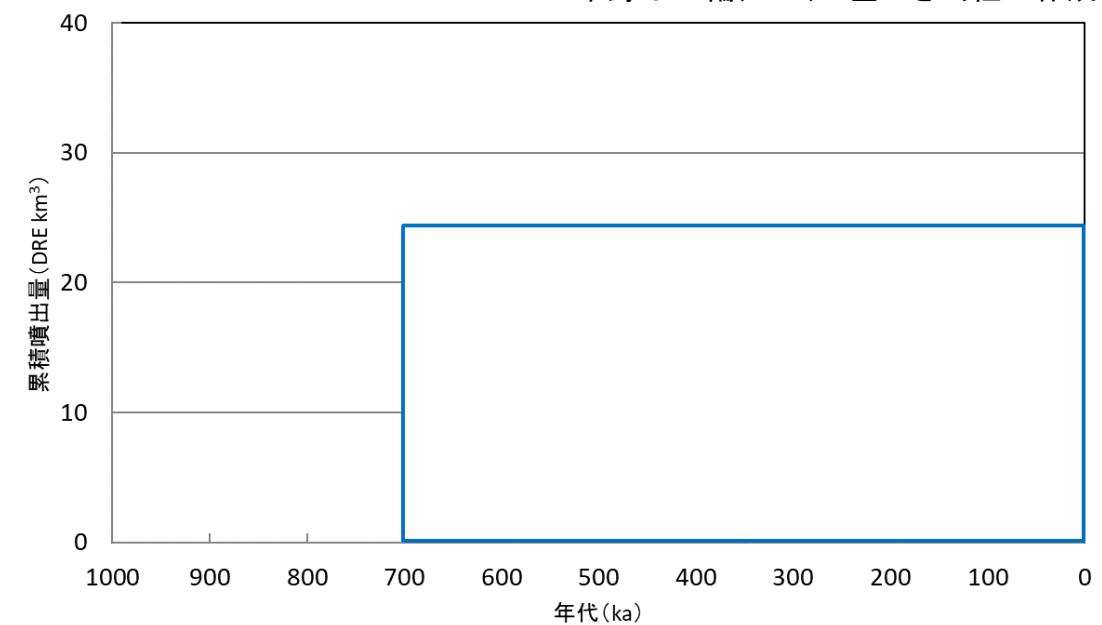
火山名	岩手山
敷地からの距離	約126km
火山の形式	複成火山
活動年代	約70万年前～最新噴火:AD.1919

注)火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく
岩手山の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献	
AD.1919	岩手火山	東岩手-薬師岳ステージ	1919年噴火 薬師岳第1期溶岩 等	1.1	伊藤・土井(2005) 斉藤ほか(2005) 中川(1987) 須藤ほか(1990) 伊藤・住田(2011) 西来ほか編(2014)
		東岩手-平笠不動ステージ	平笠不動火山噴出物 山子沢岩屑なだれ	0.6	
		西岩手-御苗代ステージ	金沢火砕流 大地獄谷溶岩 等	1.0	
		西岩手-御神坂ステージ	篠ヶ森火砕流・雪浦軽石 御神坂火山噴出物	0.1	
		東岩手-鬼又ステージ	鬼又火山噴出物	1.1	
700 ka	西岩手-鬼ヶ城ステージ	黒倉火山噴出物 西岩手主火山体 等	20		



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



岩手山の噴出量-年代階段ダイアグラム

※ 四角は中野ほか編(2013)における年代幅及び個別文献に基づく噴出量を表す。

完新世に活動を行った火山であることから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)

【43. 網張火山群】

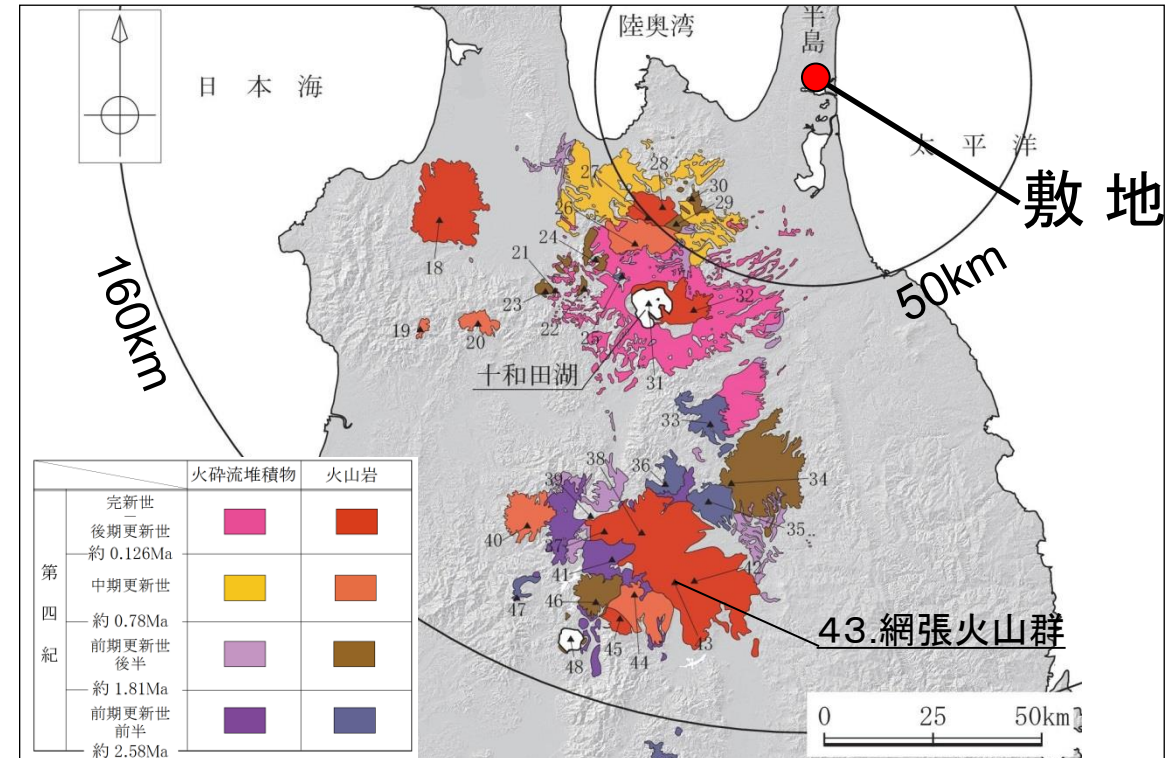
火山名	網張火山群
敷地からの距離	約127km
火山の形式	複成(複合)火山
活動年代	約162万年前～30万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

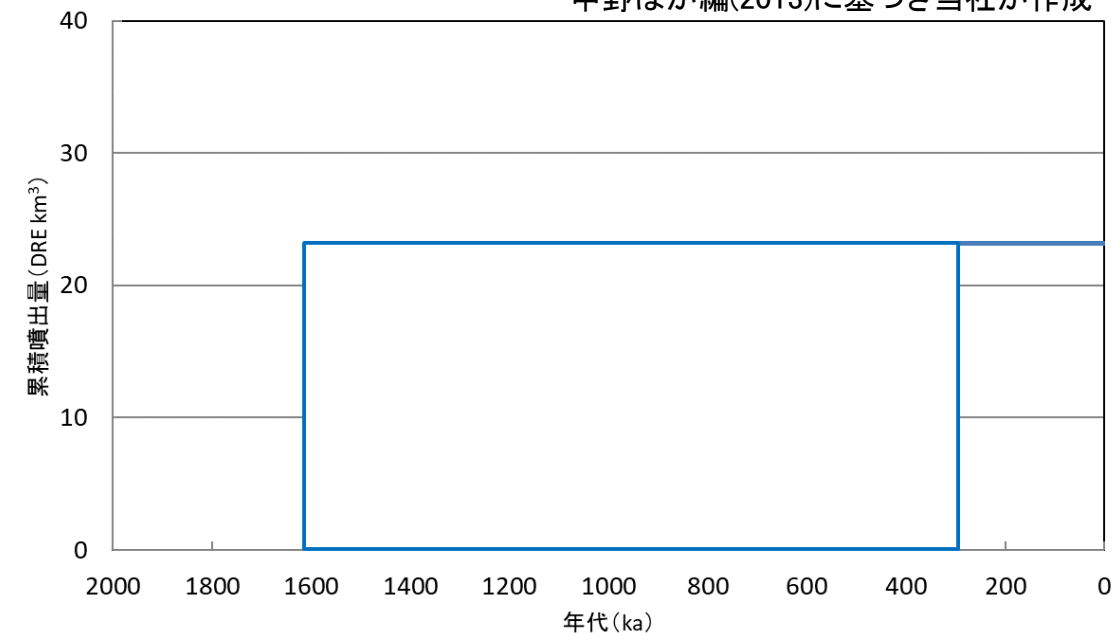
網張火山群の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
300 ka	網張火山群	新期 犬倉溶岩類 1318mピーク溶岩 等	0.2	中川(1987) 須藤ほか(1990)
		旧期 姥倉上部溶岩類 大松倉沢溶岩類 等	11	
1620 ka	—	松川安山岩	12	

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



網張火山群の噴出量一年代階段ダイアグラム

※ 四角は中野ほか編(2013)における年代幅及び個別文献に基づく噴出量を表す。 — : 噴出量の累積(km³)

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも短いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価。

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【44. 乳頭・高倉】

火山名	乳頭・高倉
敷地からの距離	約135km
火山の形式	複成火山, 溶岩ドーム
活動年代	約60万年前～10万年前

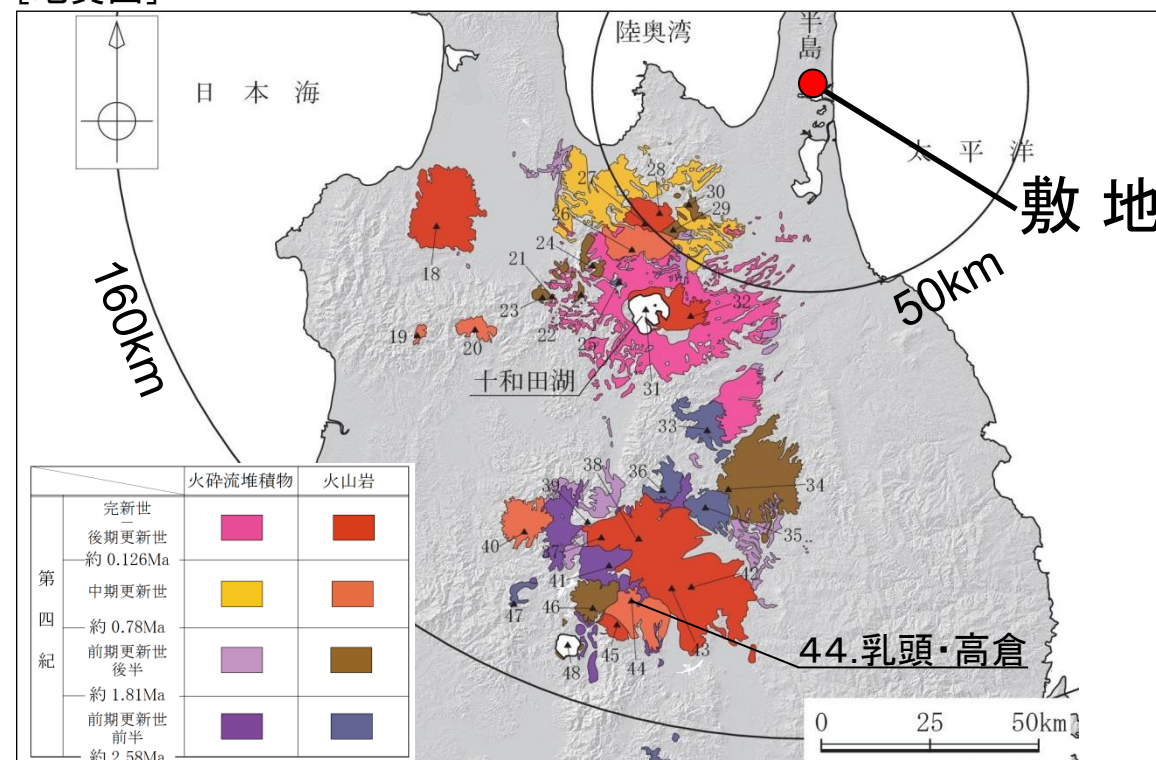
注)火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく
乳頭・高倉の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献	
100ka	乳頭・高倉	笹森山火山	笹森山火山噴出物	0.4	高岡ほか(1988) 須藤ほか(1990) 須藤・石井(1987) 須藤(1985) 中谷ほか(2013) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) NEDO(1991) 西来ほか編(2014)
		平ヶ倉火山	平ヶ倉山火山噴出物	0.12	
		丸森・三角山火山	丸山溶岩円頂丘 三角山溶岩円頂丘 等	3.7	
		湯森山火山	湯森山火山噴出物	0.5	
		笹森山火山	笹森山火山噴出物	0.9	
		乳頭山火山	乳頭山, 乳頭北, 田代平	5.7	
		高倉山・小高倉山火山	小高倉山火山噴出物	1.8	
高倉山火山噴出物	高倉山火山噴出物	5.5			
600ka 1200ka		古期小高倉山	2.7		
2300ka					

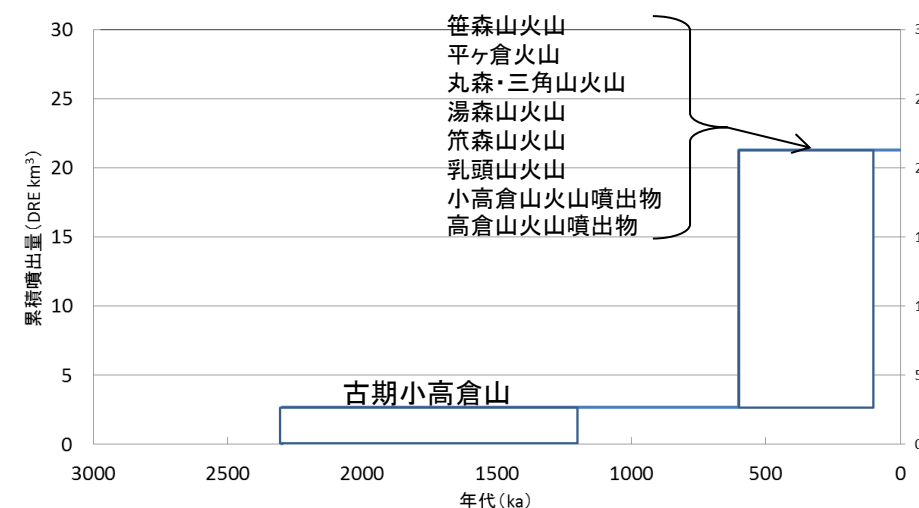
・青: 古期小高倉山の活動年代については, 個別文献年代値を基に当社が想定した。

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも短いことから,
原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価。

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



乳頭・高倉の噴出量一年代階段ダイアグラム

— : 噴出量の累積(km³)

※ 四角は中野ほか編(2013)及び個別文献に基づく年代幅及び個別文献に基づく噴出量を表す。

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【45. 秋田駒ヶ岳】

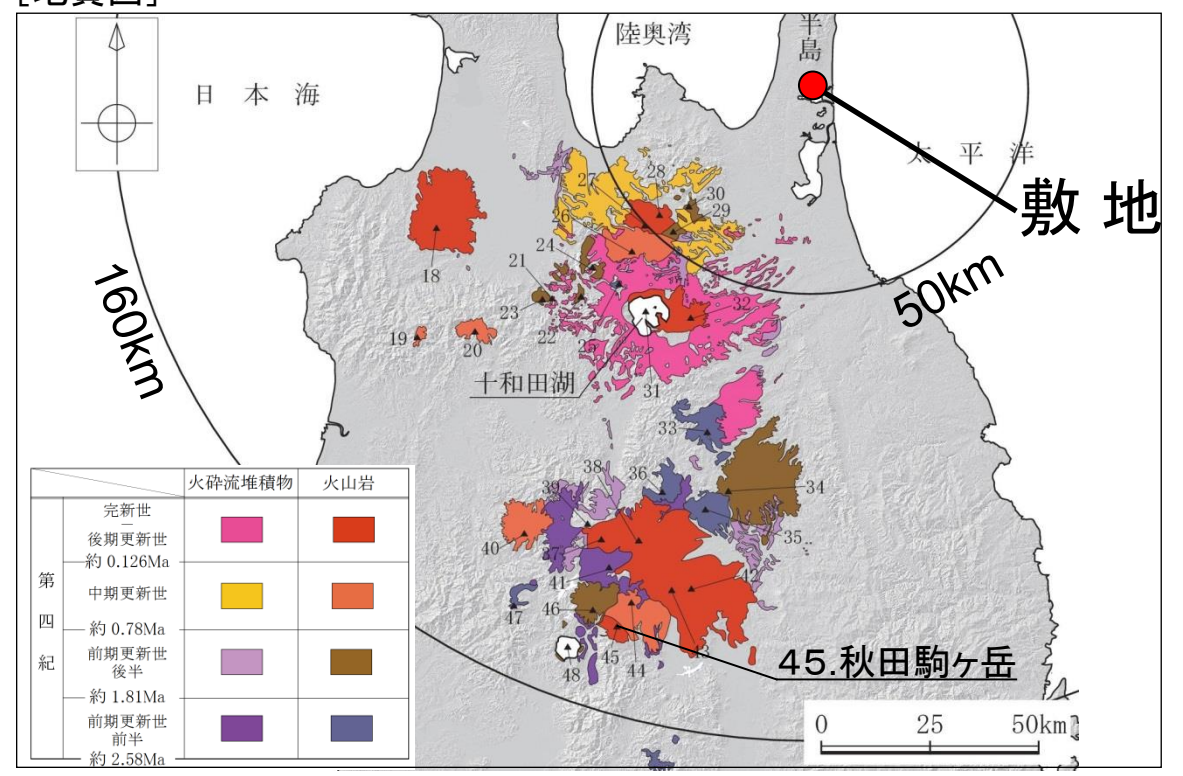
火山名	秋田駒ヶ岳
敷地からの距離	約141km
火山の形式	複成火山, 溶岩流, 小型楕状火山
活動年代	約10万年前より新しい, 最新噴火: AD.1971

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

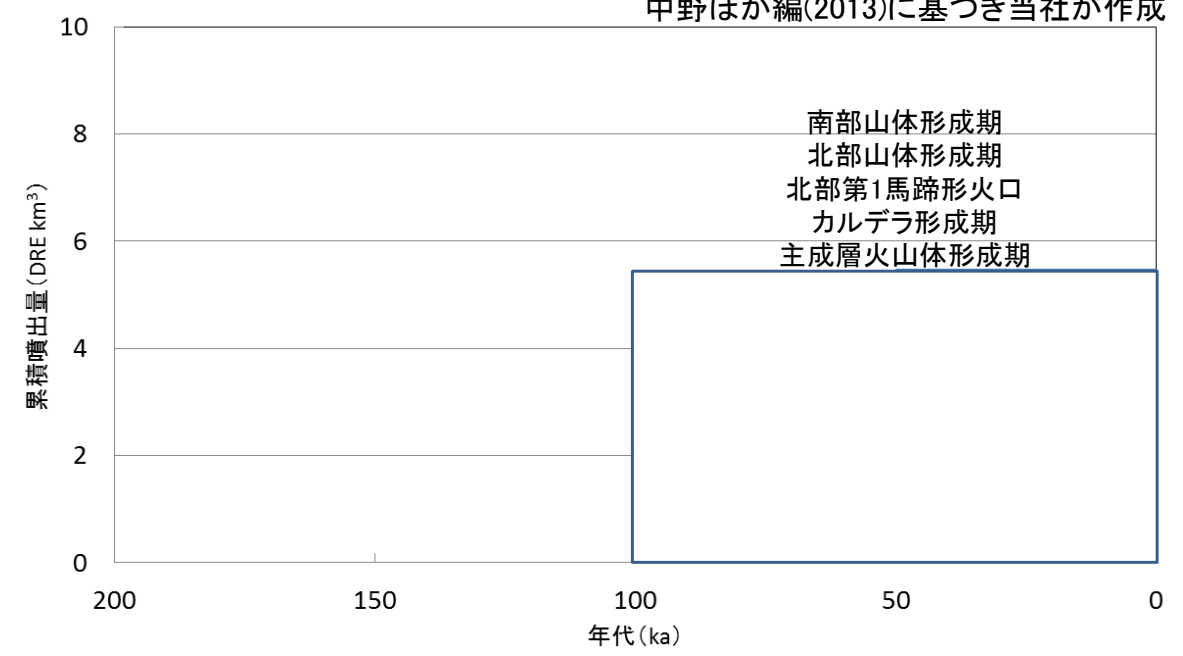
秋田駒ヶ岳の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
AD. 1971	後カルデラ活動期	南部山体形成期	0.08	須藤・石井(1987) 和知ほか(1997) 高岡ほか(1988) 小坂・平林(1971) 藤縄ほか(2004) 西来ほか編(2014)
		北部山体破碎期	不明	
		北部山体形成期	0.24	
		(北部第1馬蹄形火口)	0.23	
カルデラ形成期	(カルデラ北部の段差形成)	0.9		
	南部カルデラ	0.64		
100ka	主成層火山体形成期	3.3		

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



秋田駒ヶ岳の噴出量一年代階段ダイアグラム

※ 四角は中野ほか編(2013)における年代幅及び個別文献に基づく噴出量を表す。
[噴出量不明を除く]

完新世に活動を行った火山であることから, 原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム) 【46. 荷葉岳】

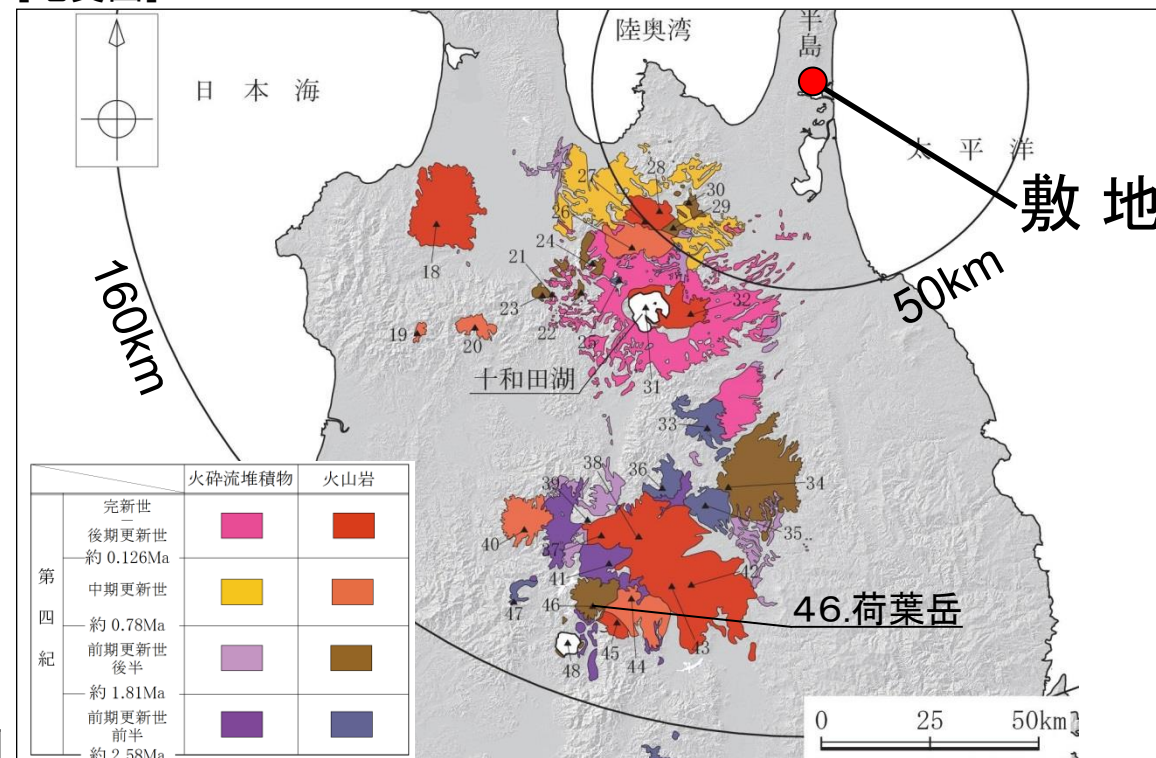
火山名	荷葉岳
敷地からの距離	約138km
火山の形式	複成火山, 溶岩流, 溶岩ドーム, 小型楕状火山
活動年代	約220万年前～90万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

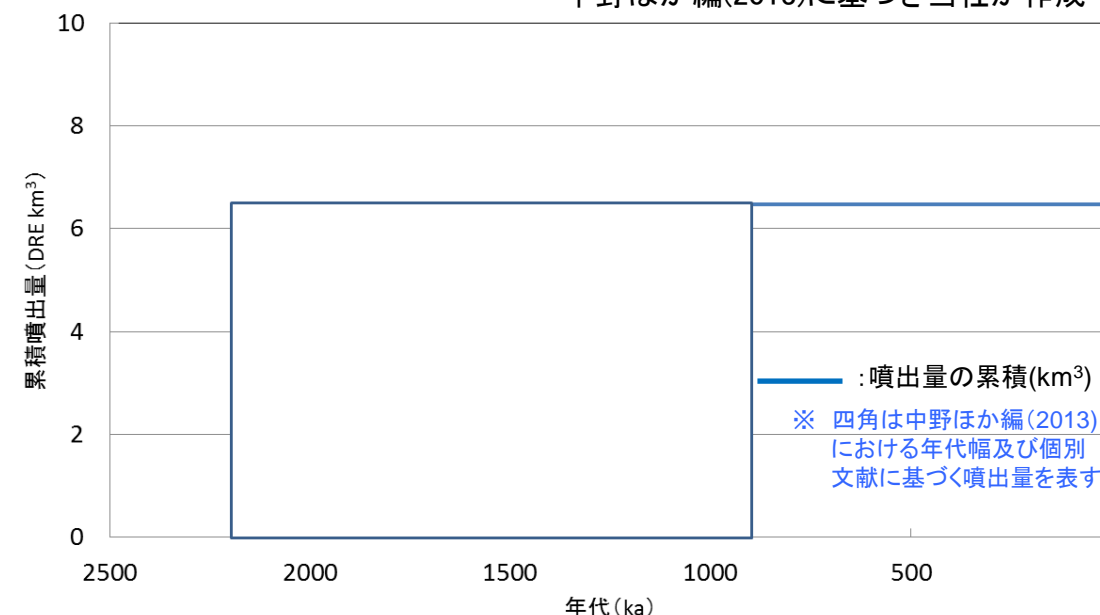
荷葉岳の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
900 ka	3期	小白森溶岩	6.5	須藤(1984) 須藤(1985) 須藤・石井(1987) 須藤ほか(1989) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 小針(1974) 高岡ほか(1988) NEDO(2001) 西来ほか編(2014)
		大白森溶岩		
	赤沢溶岩類 等			
2200 ka	2期	安森溶岩		
	1期	前郷溶岩類 大黒溶岩類		

[地質図]



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



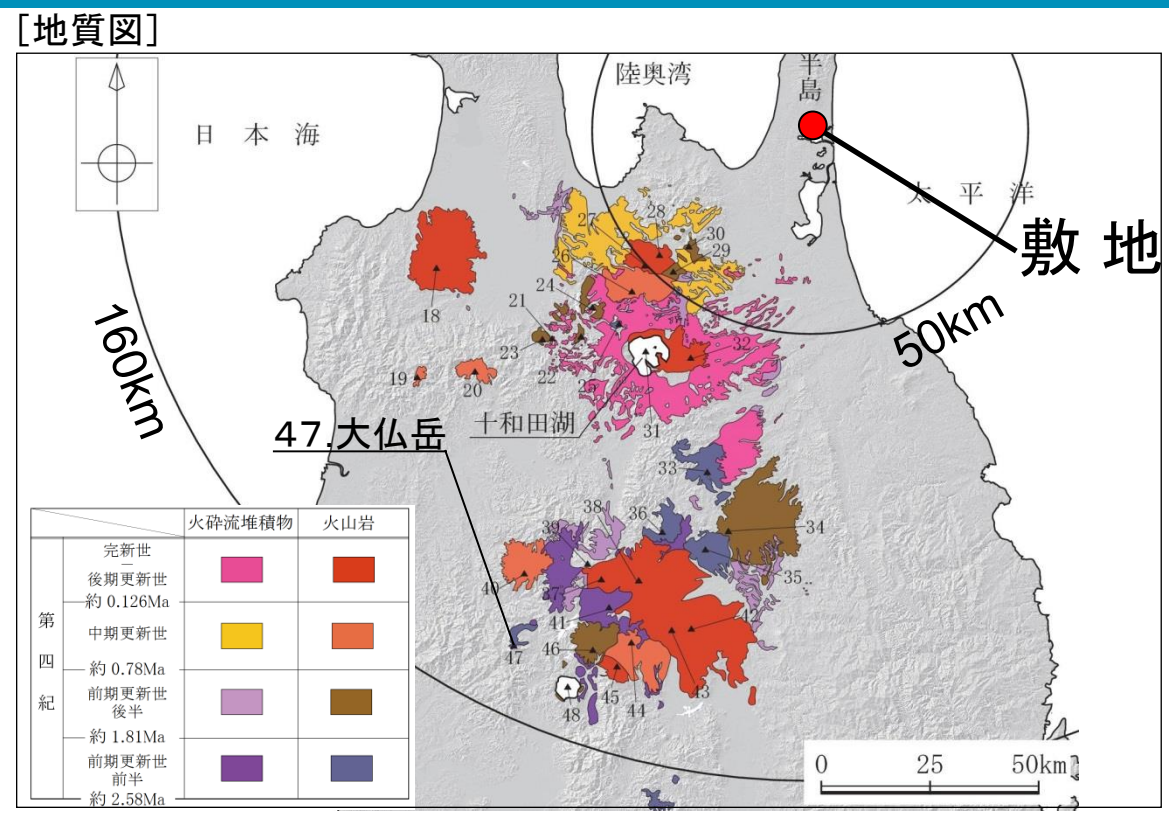
荷葉岳の噴出量一年代階段ダイアグラム

最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも短いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山と評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)
【47. 大仏岳】

火山名	大仏岳
敷地からの距離	約145km
火山の形式	複成火山
活動年代	約300万年前～210万年前

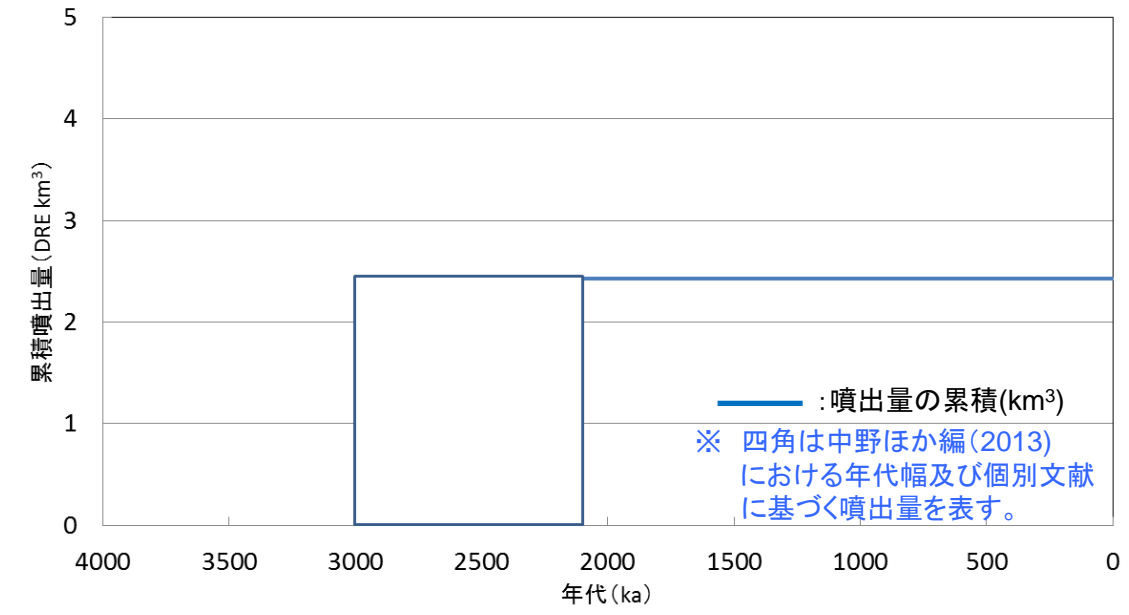
注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく



中野ほか編(2013)に基づき当社が作成

大仏岳の活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
2100 ka	大仏岳	大仏火山噴出物	2.4	須藤(1987) 大沢ほか(1958) NEDO(1981) 第四紀火山カタログ委員会編(1999) 西来ほか編(2014)
3000 ka				



大仏岳の噴出量一年代階段ダイアグラム

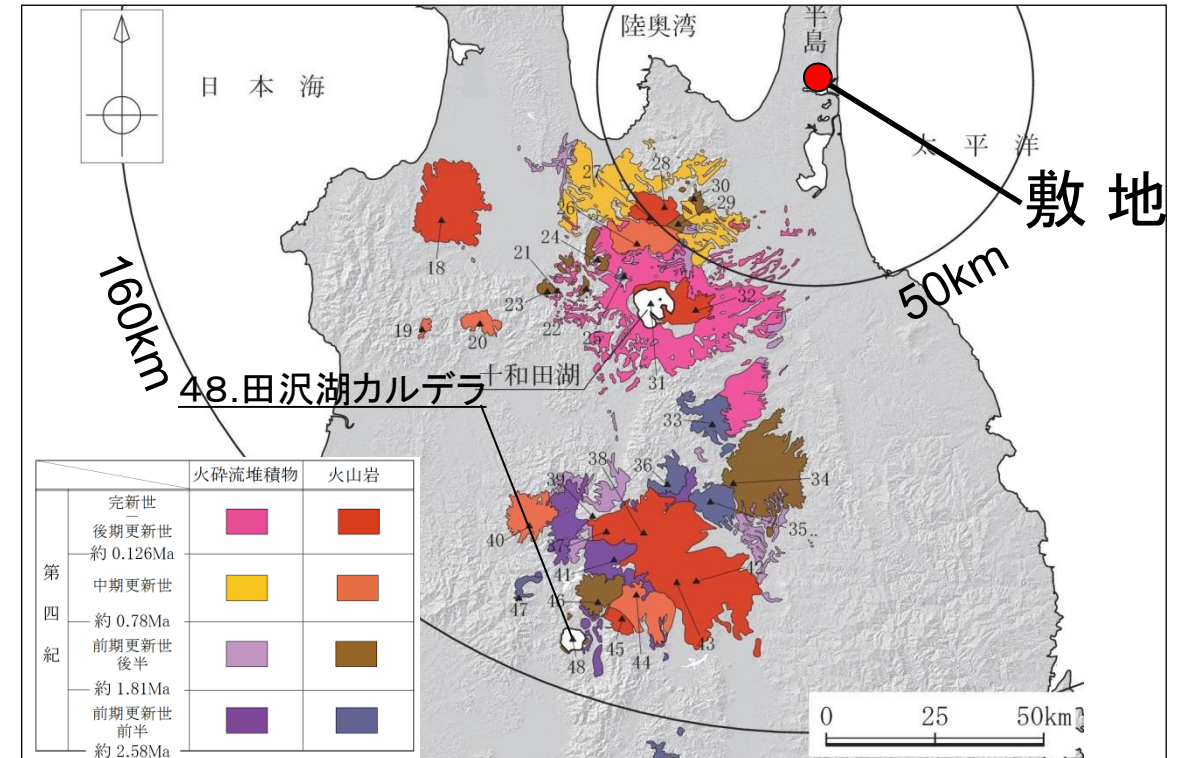
最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

(参考1) 原子力施設に影響を及ぼし得る火山の抽出(階段ダイアグラム)
【48. 田沢湖カルデラ】

火山名	田沢湖カルデラ
敷地からの距離	約149km
火山の形式	カルデラ, 複成火山, 溶岩ドーム
活動年代	約180万年前~140万年前

注) 火山名, 火山の形式, 活動年代は中野ほか編(2013)に基づく

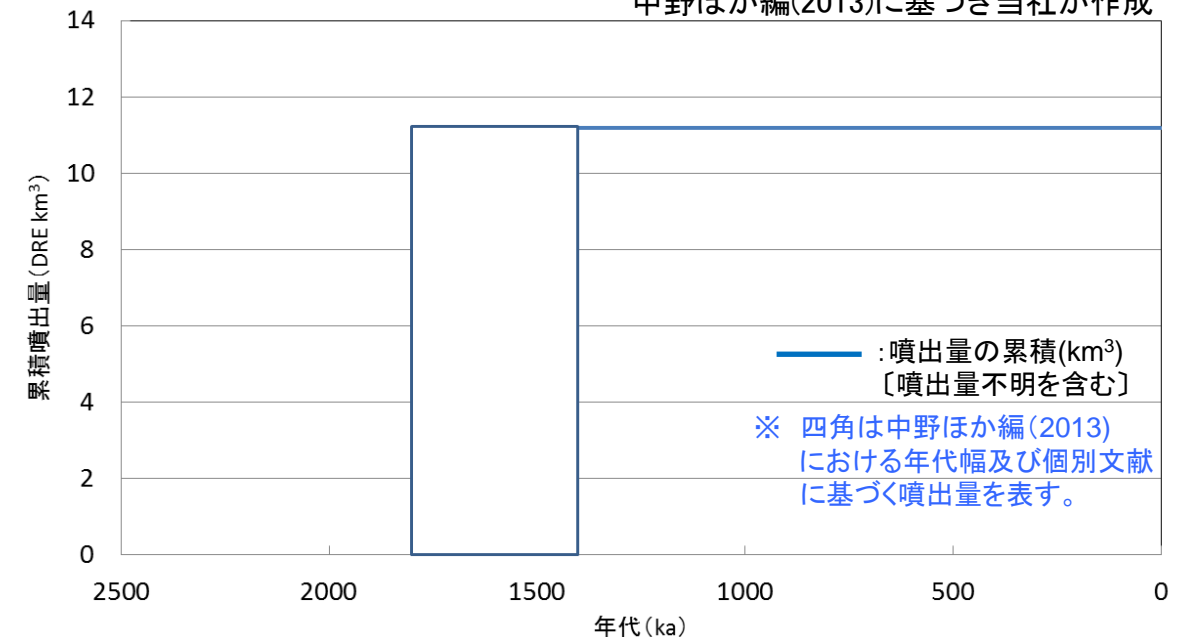
[地質図]



田沢湖カルデラの活動履歴

年代 (ka)	活動期, 火山名	主要噴出物名	噴出量 (DRE km ³)	参考文献
1400 ka	(カルデラ形成期噴出物を覆う)	辰子堆 振興堆 院内岳安山岩 高鉢山玄武岩 等	不明	須藤(1987) 鹿野・大口(2004) 鹿野ほか(2007) 鹿野ほか(2008) 小嶋・山崎(2013) 西来ほか編(2014)
1800 ka	カルデラ形成期	太平湖火砕堆積物 春山火砕堆積物	11.2	

中野ほか編(2013)に基づき当社が作成



最後の噴火からの経過期間が全活動期間よりも長いことから、原子力施設に影響を及ぼし得る火山ではないと評価

田沢湖カルデラの噴出量一年代階段ダイアグラム

(参考2) 噴火規模に関する参考資料

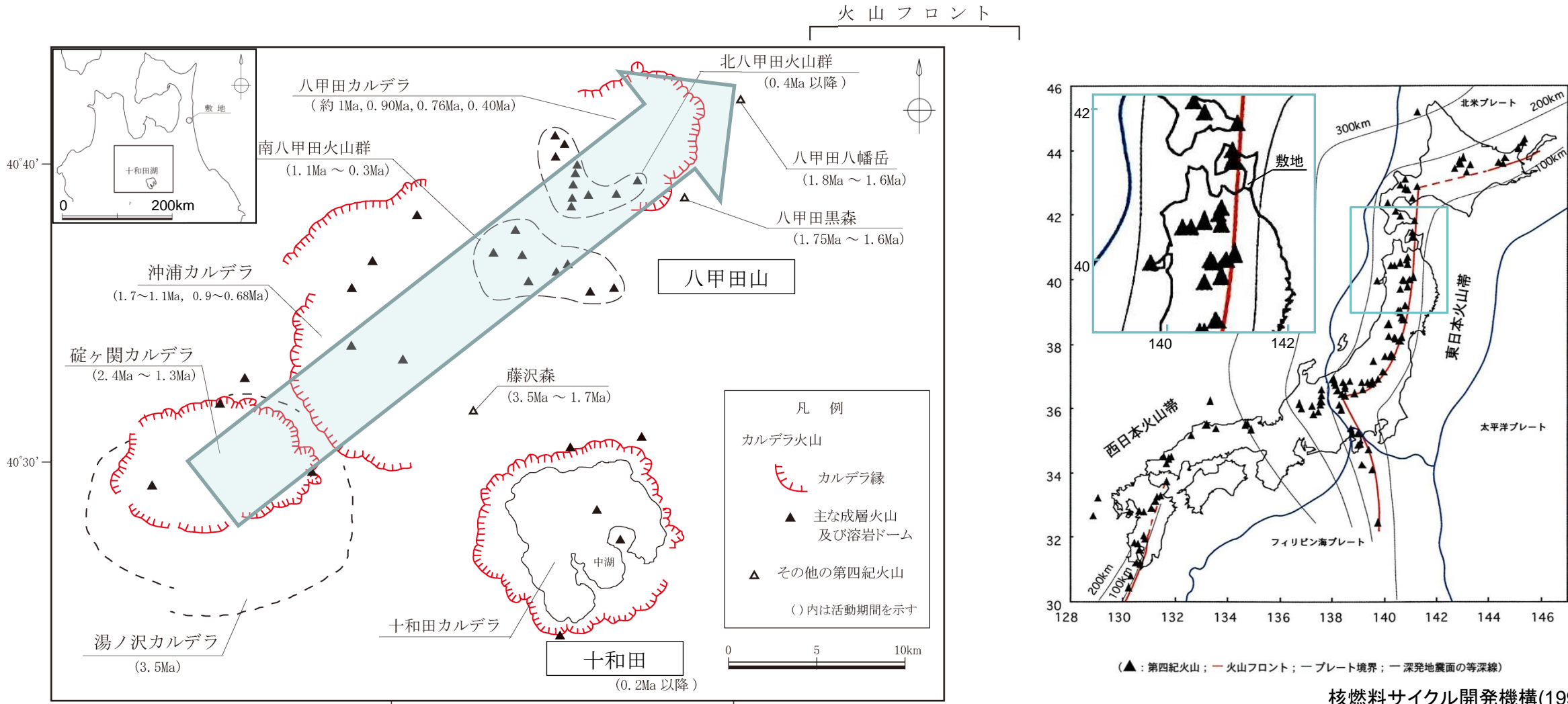
火山爆発指数 ^{※1}	VEI1	VEI2	VEI3	VEI4	VEI5	VEI6	VEI7	VEI8
噴出物量 ^{※1} (km ³)	0.0001~0.001	0.001~0.01	0.01~0.1	0.1~1	1~10	10~100	100~1,000	1,000~
噴煙柱高度 ^{※1} (km)	0.1~1	1~5	3~15	10~25	25~			
噴火のタイプ ^{※2}	← ストロンボリ式 →		← →		プリニー式 →		← →	
	← ハワイ式 →	← →		ブルカノ式 →		← →		← →
頻度 ^{※1}	← → 高頻度						← → 低頻度	
主な噴火	浅間 2004年	浅間山 1973年	霧島新燃岳 2011年	桜島昭和 1946年	St.Helens 1980年	Pinatubo 1991年	Tambora 1815年	Toba 約7.4万年前
	有珠 2000年	霧島新燃岳 1959年	三宅島 1983年	駒ヶ岳 1929年	桜島大正 1914年	桜島薩摩 約1.3万年前	鬼界アカホヤ 約0.7万年前	Yellow stone 約200万年前
	北海道駒ヶ岳 1996年		有珠 1977年		富士 1707年	十和田八戸 約1.55万年前	始良Tn噴火 約3万年前	
	雲仙火砕流 1991年				十和田a 915年	十和田大不動 約3.5万年前	支笏第一噴火 約4.4万年前	
						八甲田第2期 約40万年前		

赤字: 十和田
青字: 八甲田山

※1: 町田・新井(2011)による。
 ※2: 宇井編(1997)による

(参考3) 十和田及び八甲田地域におけるカルデラ火山の活動の時空間分布

- 十和田及び八甲田地域におけるカルデラ火山の活動の時空間分布は、下図により、次のように整理できる。
- 十和田及び八甲田地域におけるカルデラ火山の活動が火山フロント側に収束(図中の矢印のイメージ)。
湯ノ沢カルデラ⇒碓ヶ関カルデラ⇒沖浦カルデラ⇒十和田・八甲田山
 - 十和田の活動は20万年前から開始し、火山活動が現在も継続。
 - 八甲田山は110万年前から活動を開始し、南八甲田火山群及び八甲田カルデラの活動後、最近30万年間では、北八甲田火山群のみ活動が継続。



中野ほか編(2013), 工藤ほか(2011), Kudo et al.(2007)等に基づき当社が作成

核燃料サイクル開発機構(1999)に加筆
日本列島周辺の第四紀火山フロント

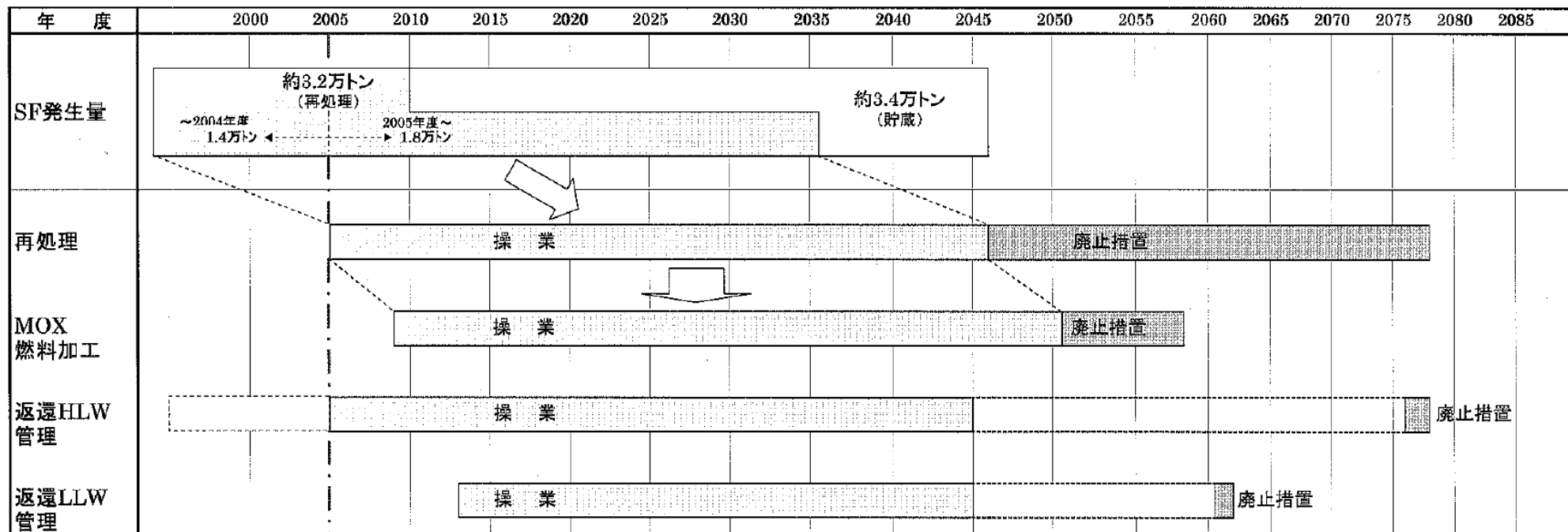
(参考4) 施設の運用期間について

「バックエンド事業全般にわたるコスト構造, 原子力発電全体の収益性等の分析・評価(平成16年1月23日)」※において示されている, 以下の当社各施設のスケジュールを各施設の運用期間と想定する。

- 再処理施設 : 操業～廃止措置 = 約 80年
- MOX燃料加工施設: 操業～廃止措置 = 約 50年
- 廃棄物管理施設 : 操業～廃止措置 = 約 80年

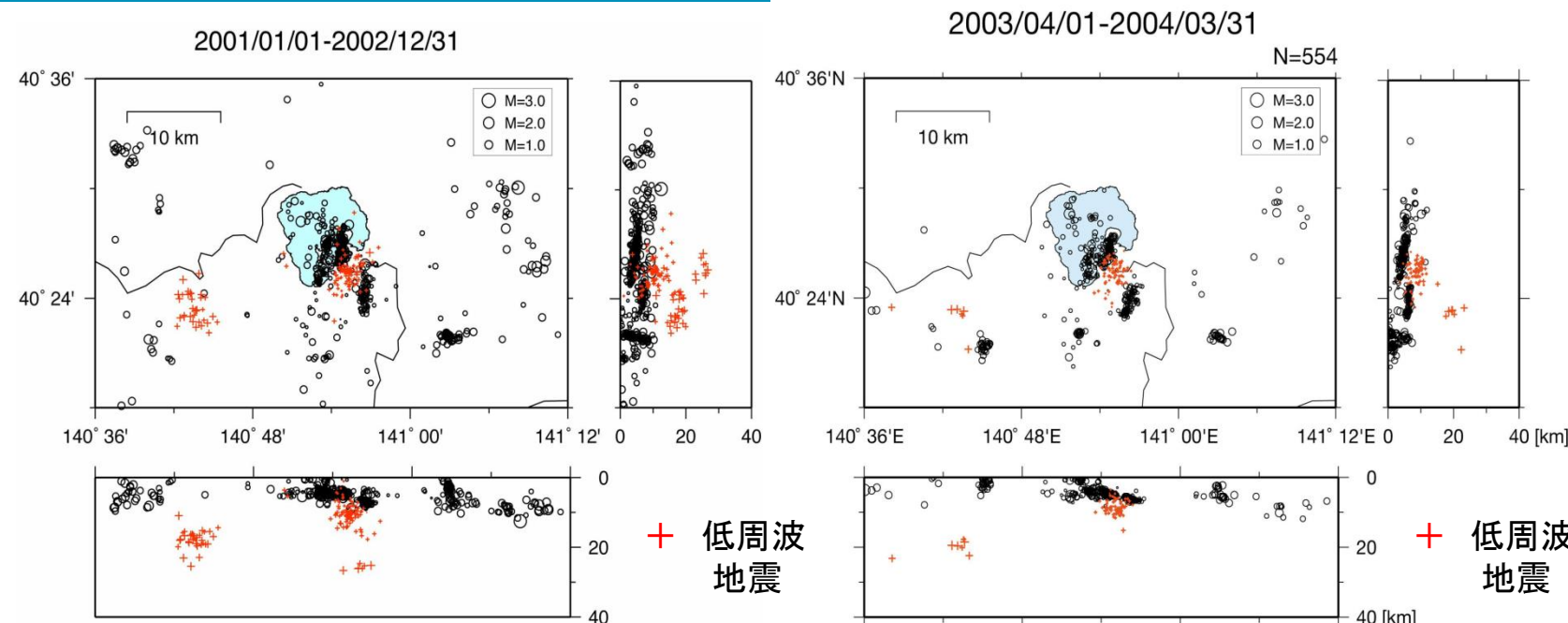
※総合資源エネルギー調査会, 電気事業分科会, コスト等検討小委員会資料

資料2 原子燃料サイクルバックエンド事業の想定スケジュール



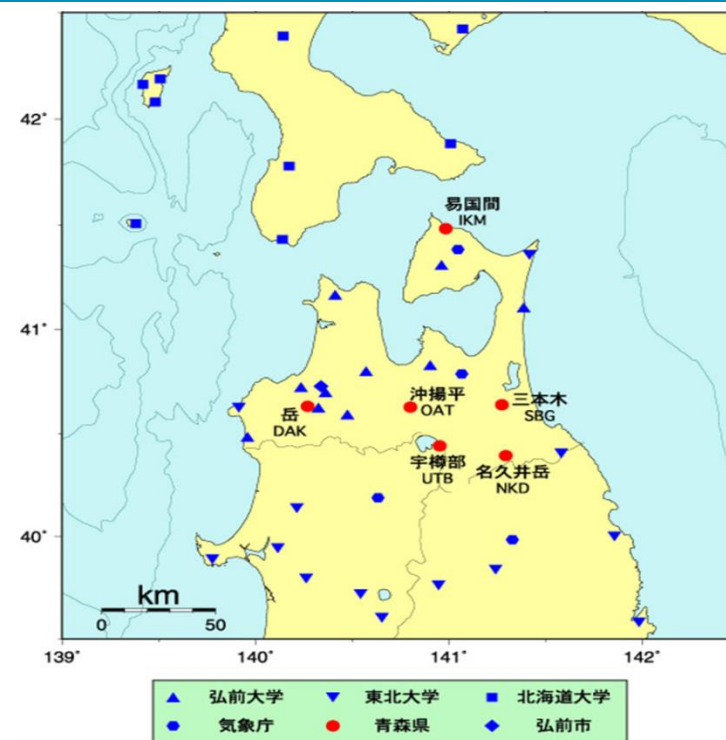
総合資源エネルギー調査会, 電気事業分科会, コスト等検討小委員会資料より抜粋して加筆

(参考5) 十和田周辺の地震活動に関する知見

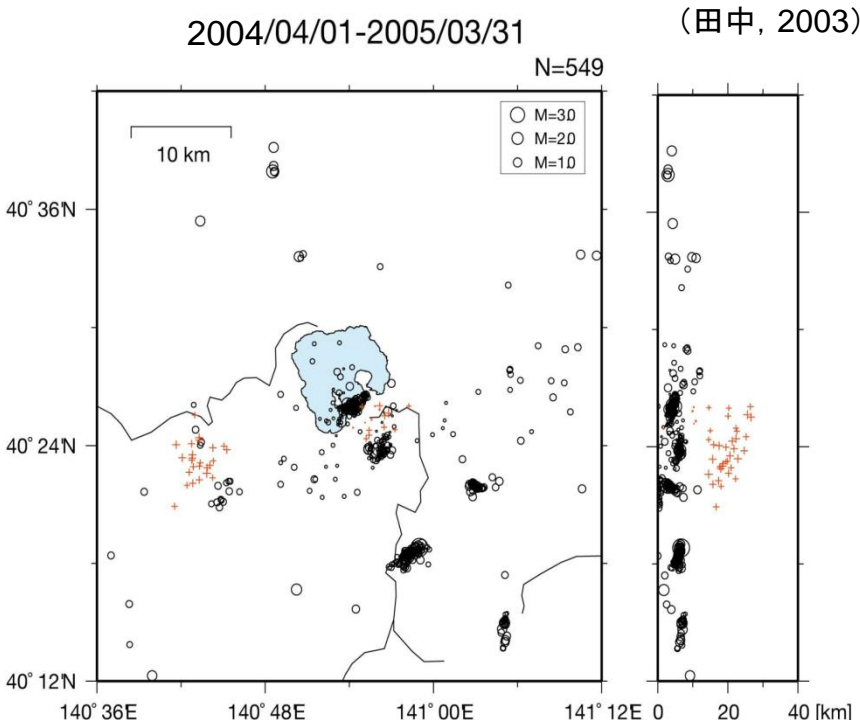


+ 低周波地震

+ 低周波地震



本解析に用いられた観測点
(岳観測点は除く)



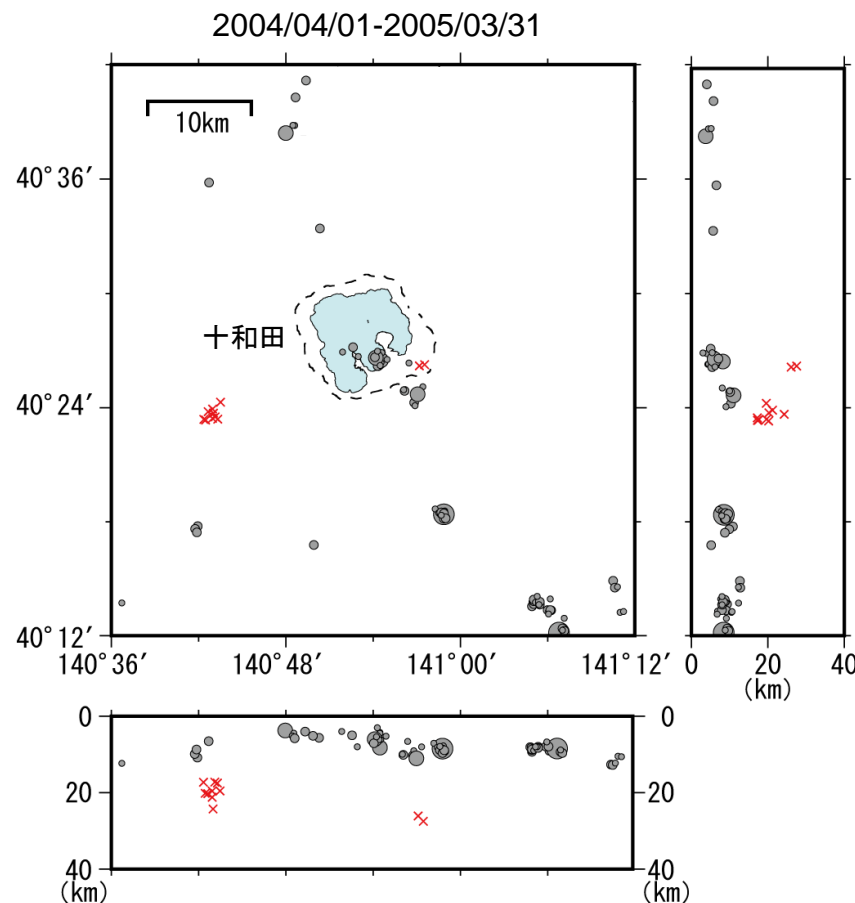
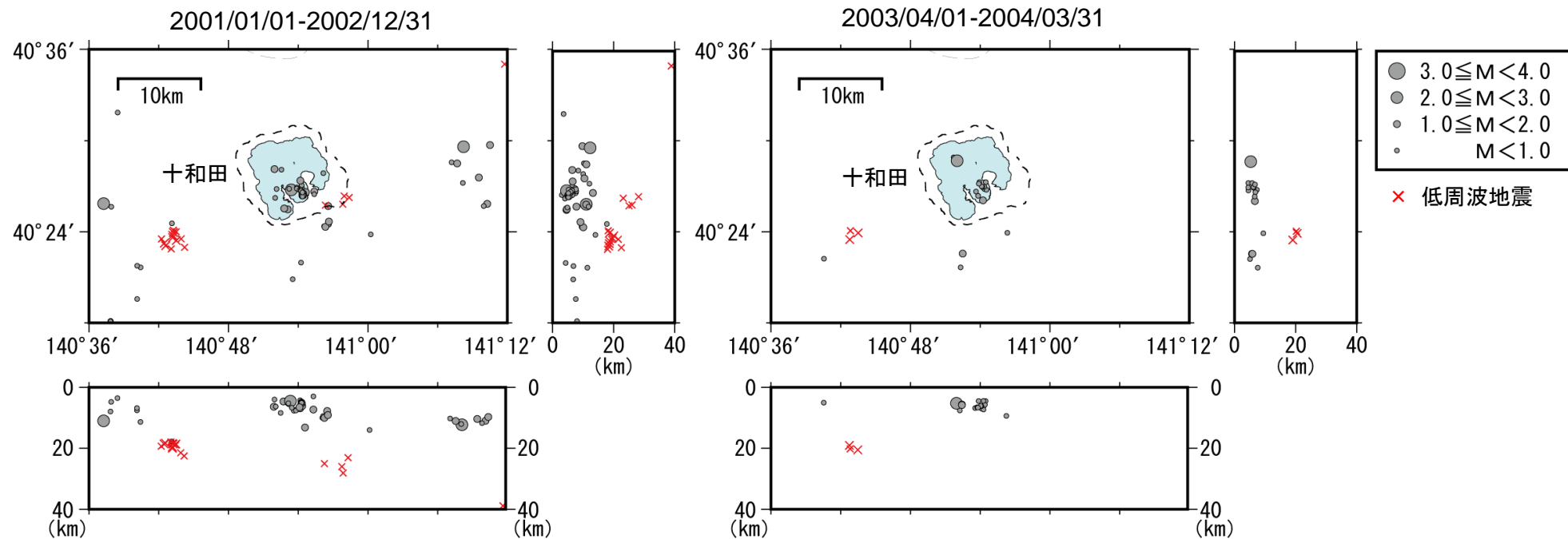
+ 低周波地震

・田中(2003,2004,2005)が示す青森県地震観測システムを含む観測結果を用いた2001年1月～2005年3月まで(2003年1月～3月は含まれない)の十和田湖周辺の地震活動は、十和田湖南岸の御倉半島と中山半島付近及びその周辺に集中する。また、低周波地震も概ね同様の位置で数多く発生している。

・なお、田中(2003,2004,2005)の観測は、先行的研究である大谷ほか(2002)において「十和田湖付近で生じた深さ20km以浅の浅発地震を対象とし、その震源分布を明らかにすることを第一の目的としている。この目的を達成するためには、従来の弘前大学の観測網ではトリガーされないような、マグニチュード1.0以下の微小地震についても解析対象とする必要がある」としていることから、マグニチュード1.0以下の浅発地震について詳細に解析しているものと考えられる。

注) 青森県地震観測システムの観測データは、2004年度に、防災科学技術研究所(茨城県つくば市)に伝送されるようになった。(田中ほか, 2005に基づく)
気象庁HP上の地震月報の地震観測点一覧によると、青森県の地震観測点のうち、「三本木」「沖揚平」「宇樽部」「名久井岳」は2004年8月に、「易国間」は2004年6月に、気象庁一元化震源の処理に取り込まれた。
(気象庁HP) <http://www.data.jma.go.jp/svd/eqev/data/bulletin/catalog/appendix/staomori.html>

(参考5) 十和田周辺の地震活動に関する知見

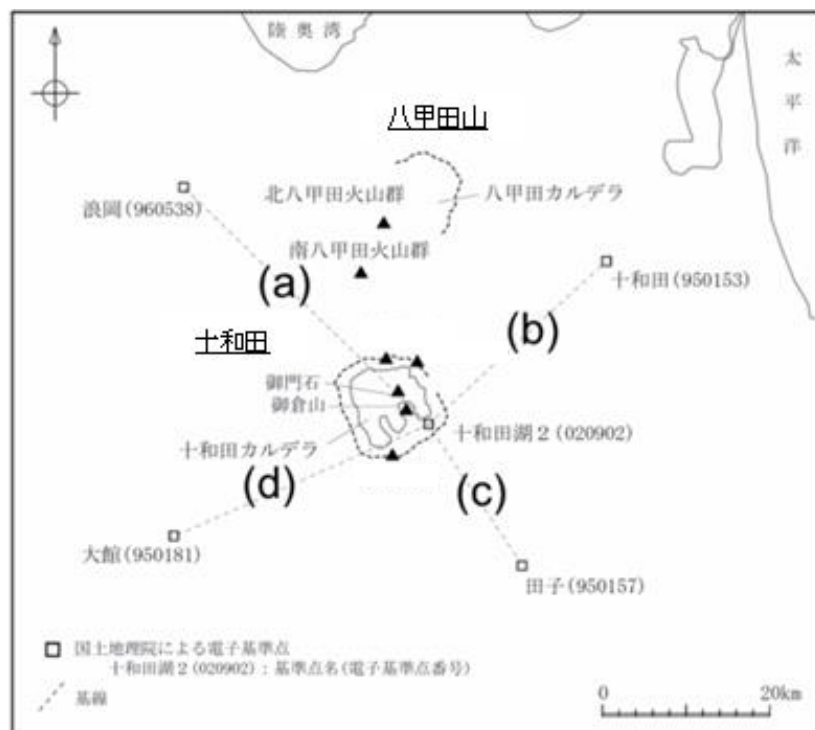


- ・比較として前頁と同期間・同範囲における気象庁一元化震源の分布を示す。
- ・田中(2003,2004,2005)の地震数の方が、気象庁一元化震源の地震数よりも多い。この要因として次の2点が考えられる。
 - ・田中(2003,2004,2005)ではマグニチュード1.0以下の浅発地震を詳細に解析している。
 - ・気象庁一元化震源では、2004年度以前は十和田湖直近の宇樽部等の地震計のデータが用いられていない。
- ・なお、西村・井口(2006)によると低周波地震の発生領域は流体を示唆するとされているが、同範囲では大規模なマグマの存在は示唆されないこと※1、同期間で地殻変動が認められないこと※2から、田中(2003,2004,2005)に示された地震活動は、現時点での大規模なマグマ溜まりを示すものではないと評価した。

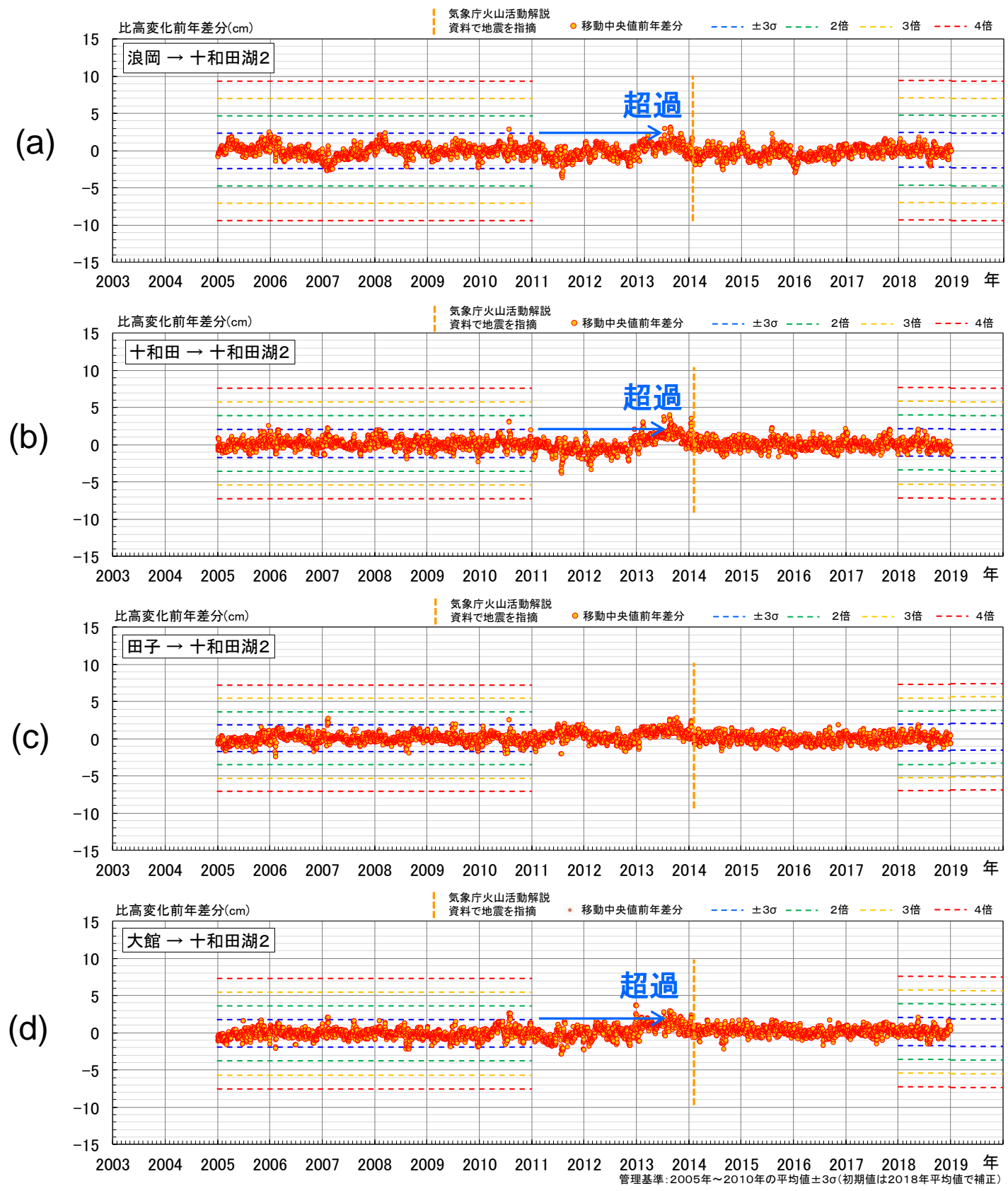
※1:「2.2.1巨大噴火の可能性評価 地球物理学的調査」参照

※2:「2.2.1巨大噴火の可能性評価 地震及び地殻変動データ」参照

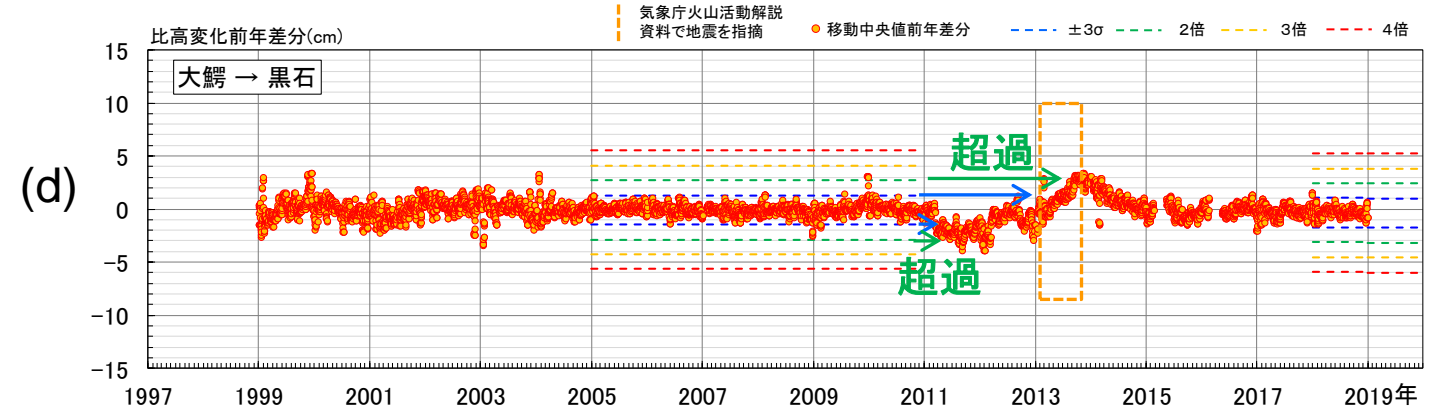
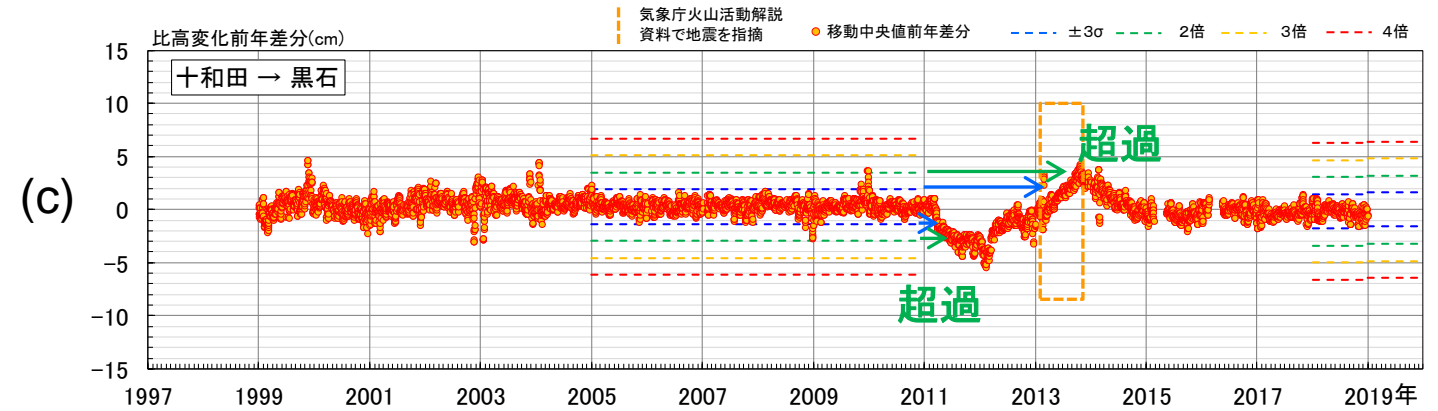
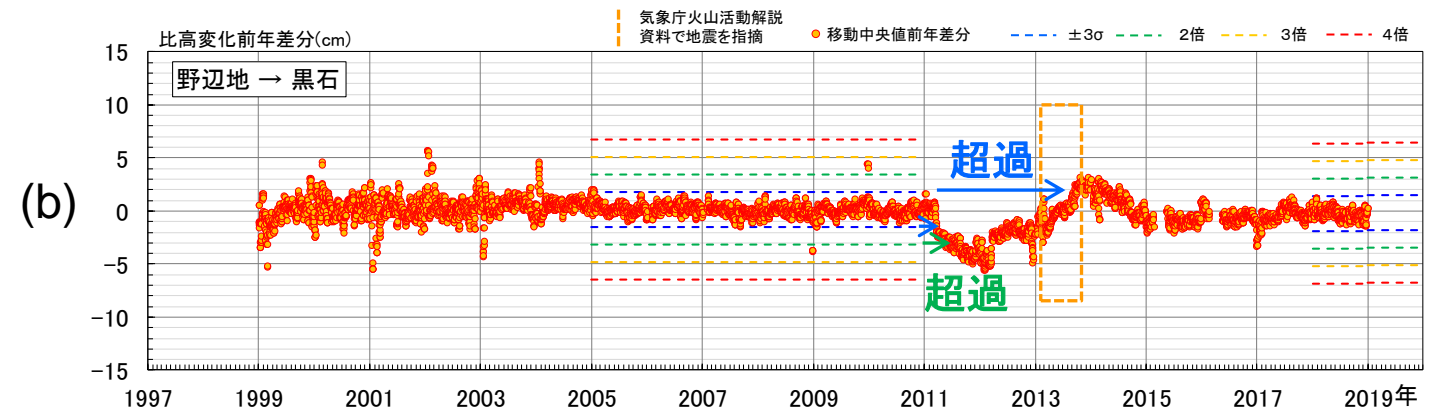
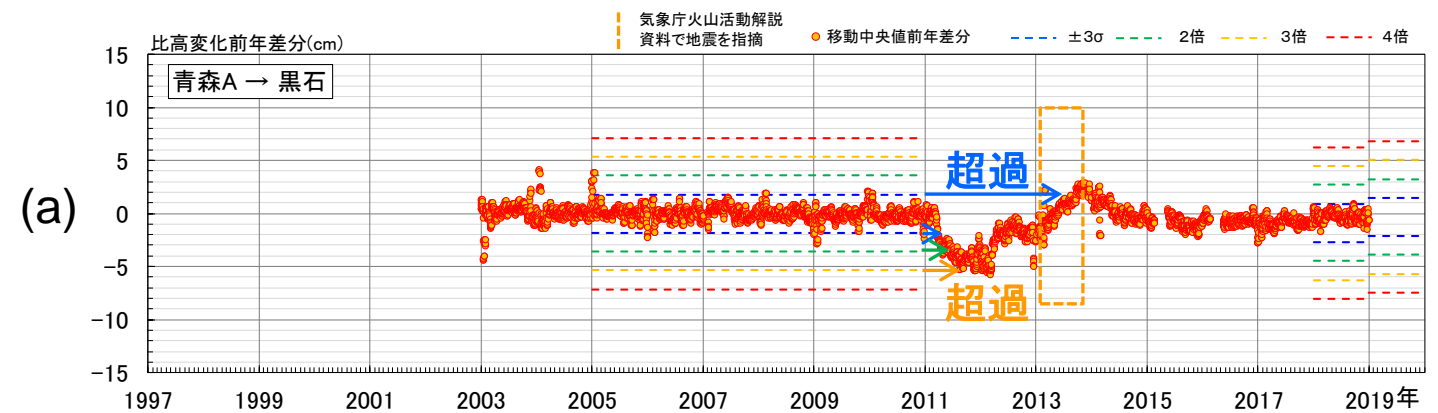
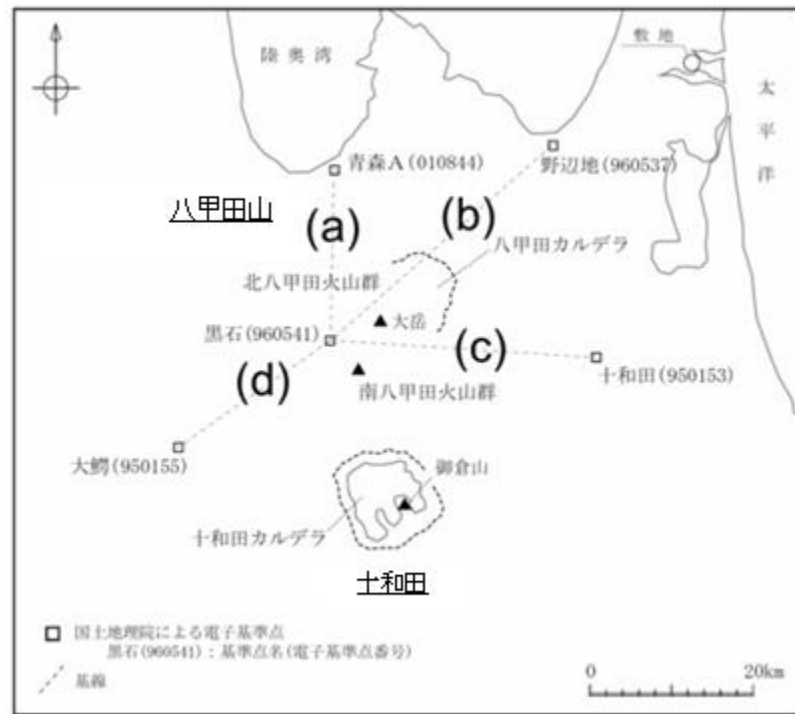
(参考6) 地殻変動の管理基準の倍数の過去への適応 【十和田(比高)】



	2基線以上同時7日間超過 (◎) 1基線7日間超過 (○)			
	±3σ	2倍	3倍	4倍
(a)浪岡-十和田湖2	◎	-	-	-
(b)十和田-十和田湖2	◎	-	-	-
(c)田子-十和田湖2	-	-	-	-
(d)大館-十和田湖2	◎	-	-	-



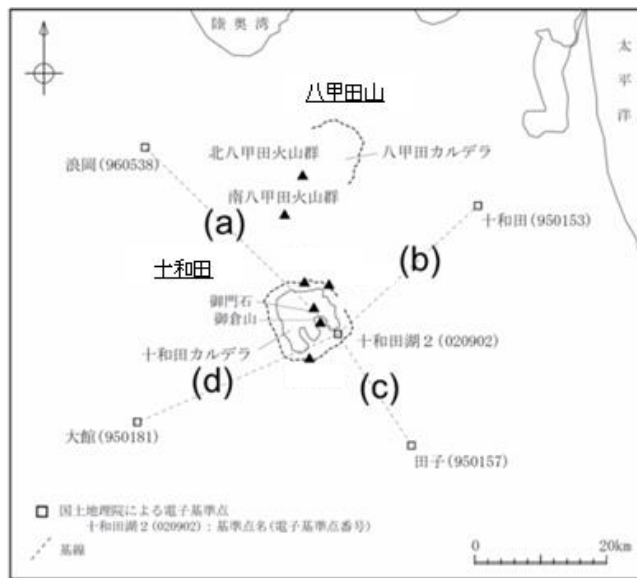
(参考6) 地殻変動の管理基準の倍数の過去への適応 【八甲田山(比高)】



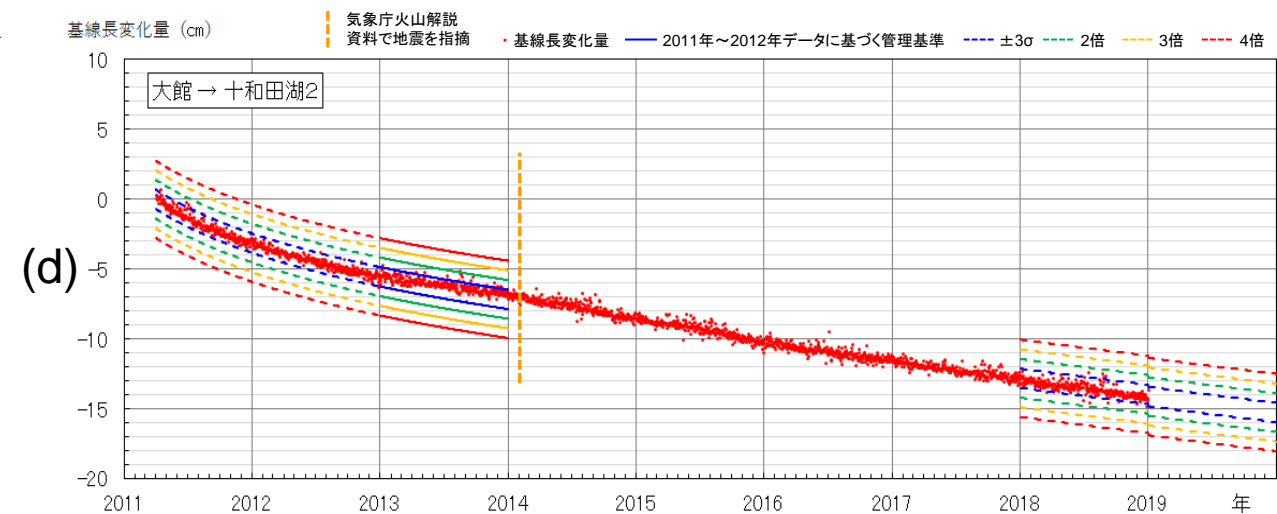
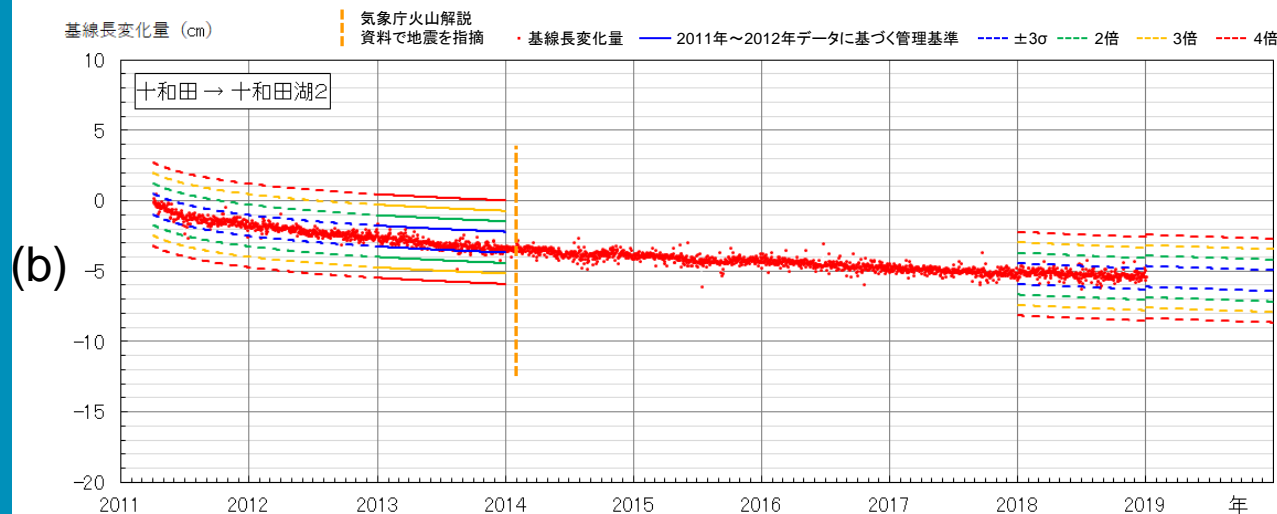
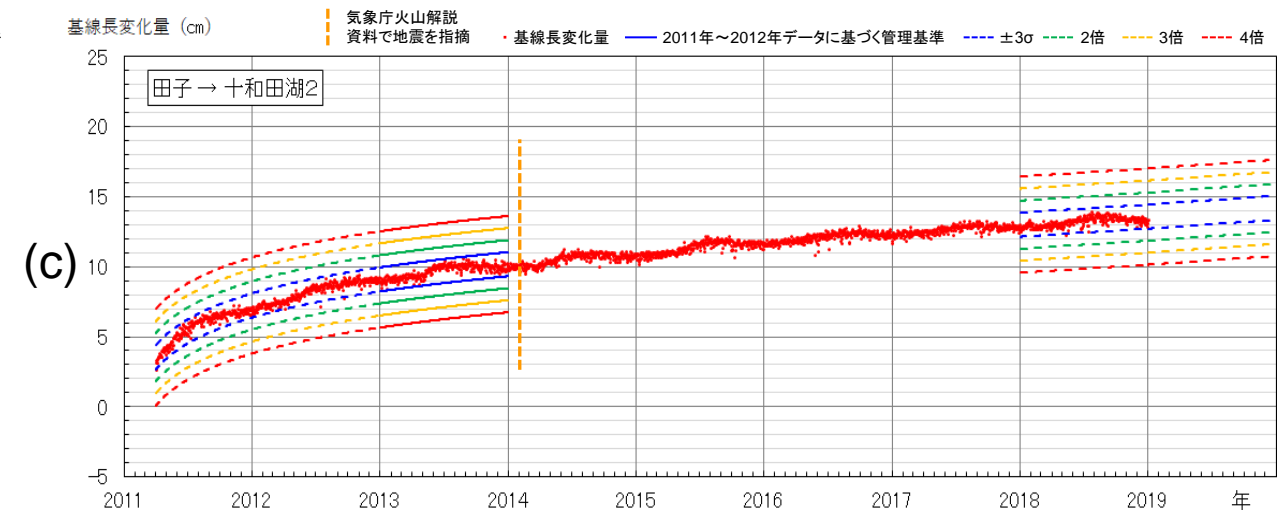
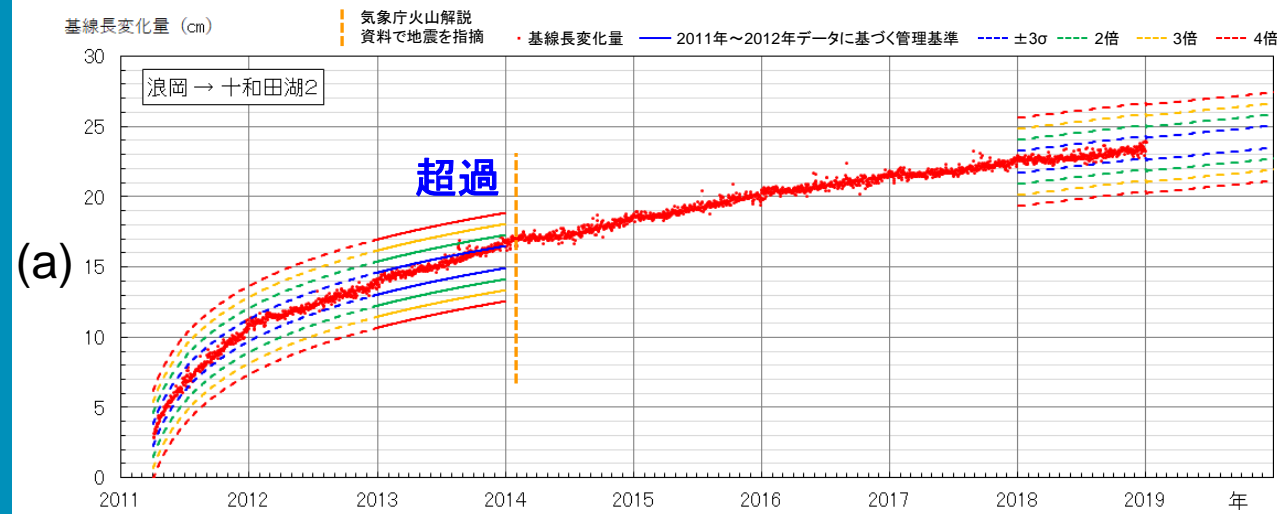
	2基線以上同時7日間超過 (◎)			
	1基線7日間超過 (○)			
	±3σ	2倍	3倍	4倍
(a)青森A-黒石	◎	◎	○	—
(b)野辺地-黒石	◎	◎	—	—
(c)十和田-黒石	◎	◎	—	—
(d)大鱈-黒石	◎	◎	—	—

管理基準: 2005年~2010年の平均値±3σ(初期値は2018年平均値で補正)

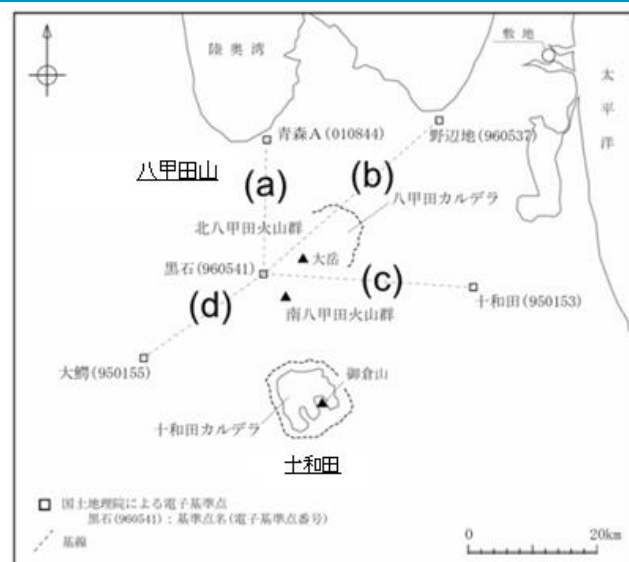
(参考6) 地殻変動の管理基準の倍数の過去への適応 【十和田(基線長)】



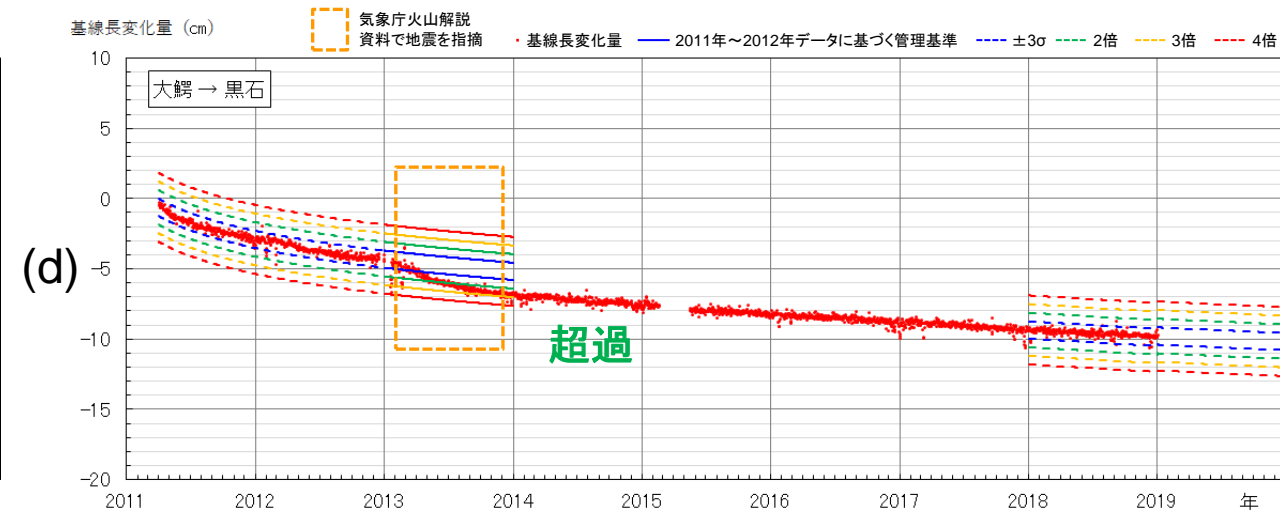
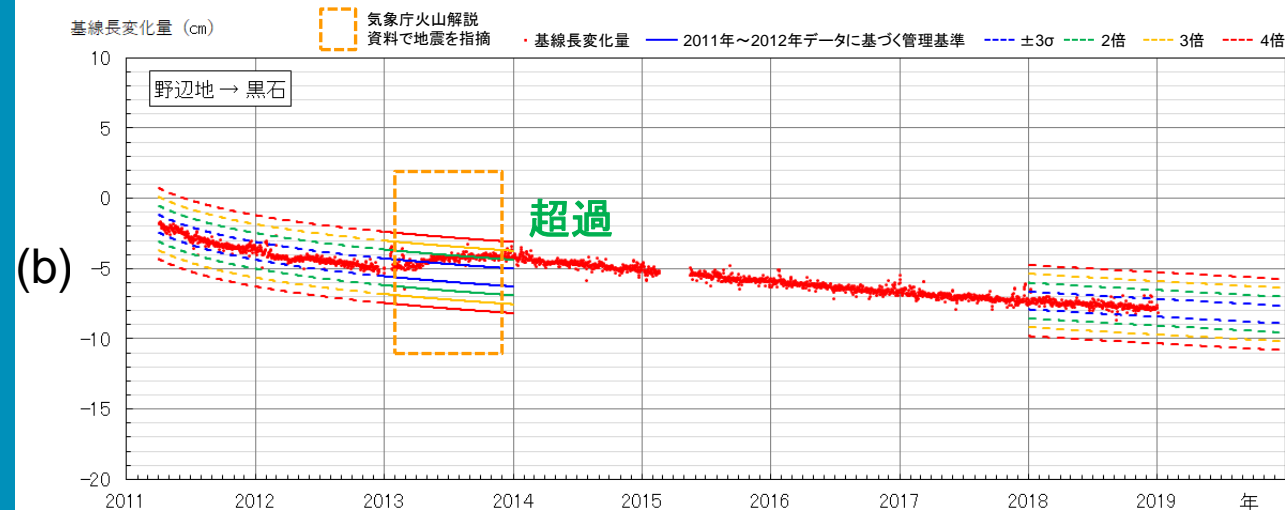
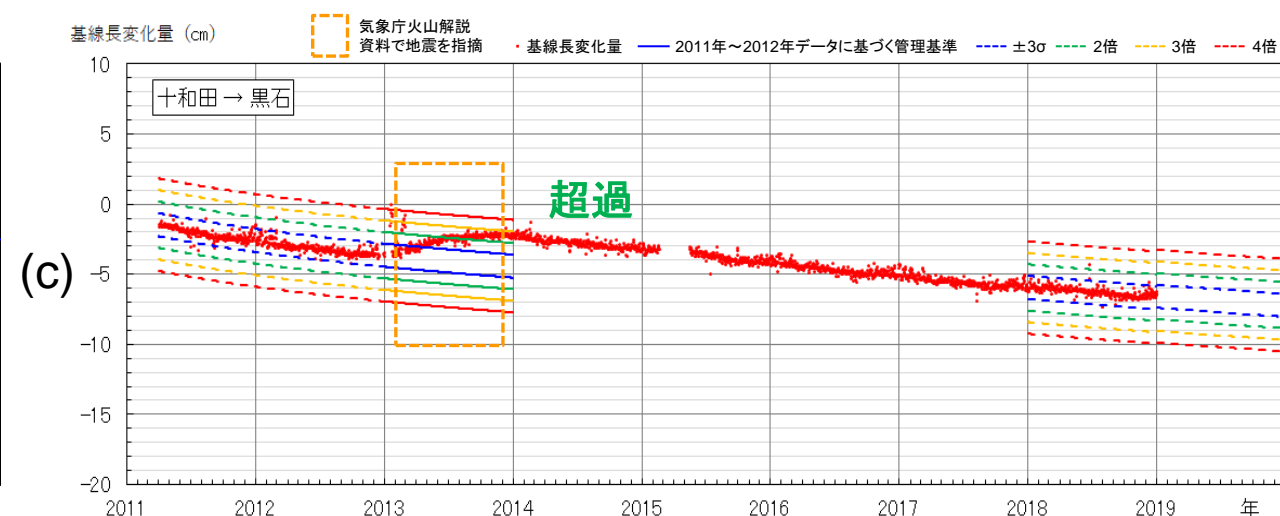
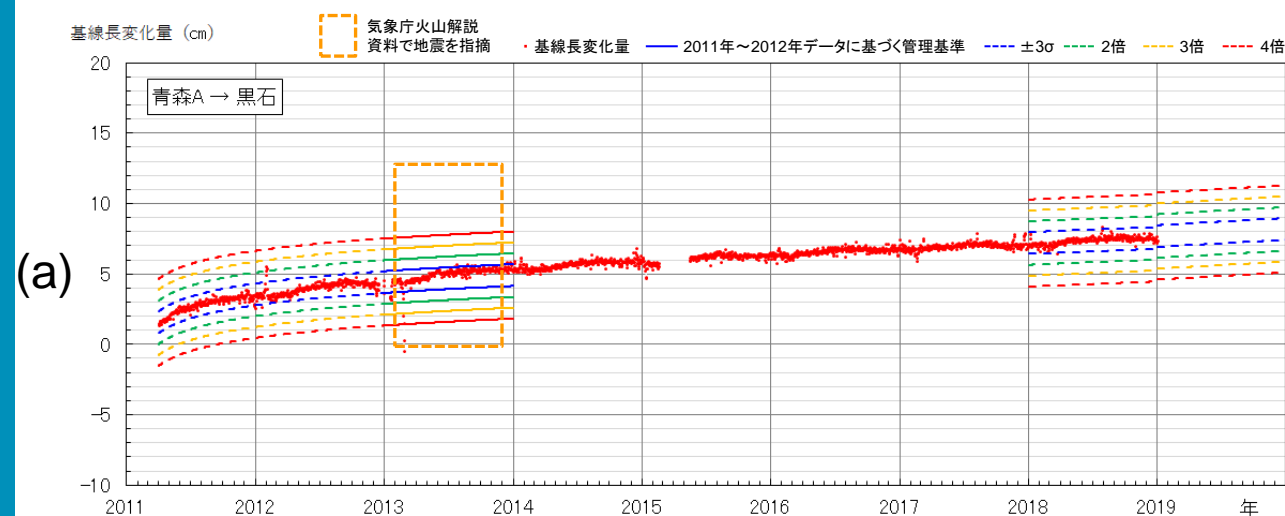
十和田	2基線以上同時7日間超過 (◎) 1基線7日間超過 (○)			
	±3σ	2倍	3倍	4倍
(a)浪岡→十和田湖2	○	—	—	—
(b)十和田→十和田湖2	—	—	—	—
(c)田子→十和田湖2	—	—	—	—
(d)大館→十和田湖2	—	—	—	—



(参考6) 地殻変動の管理基準の倍数の過去への適応 【八甲田山(基線長)】

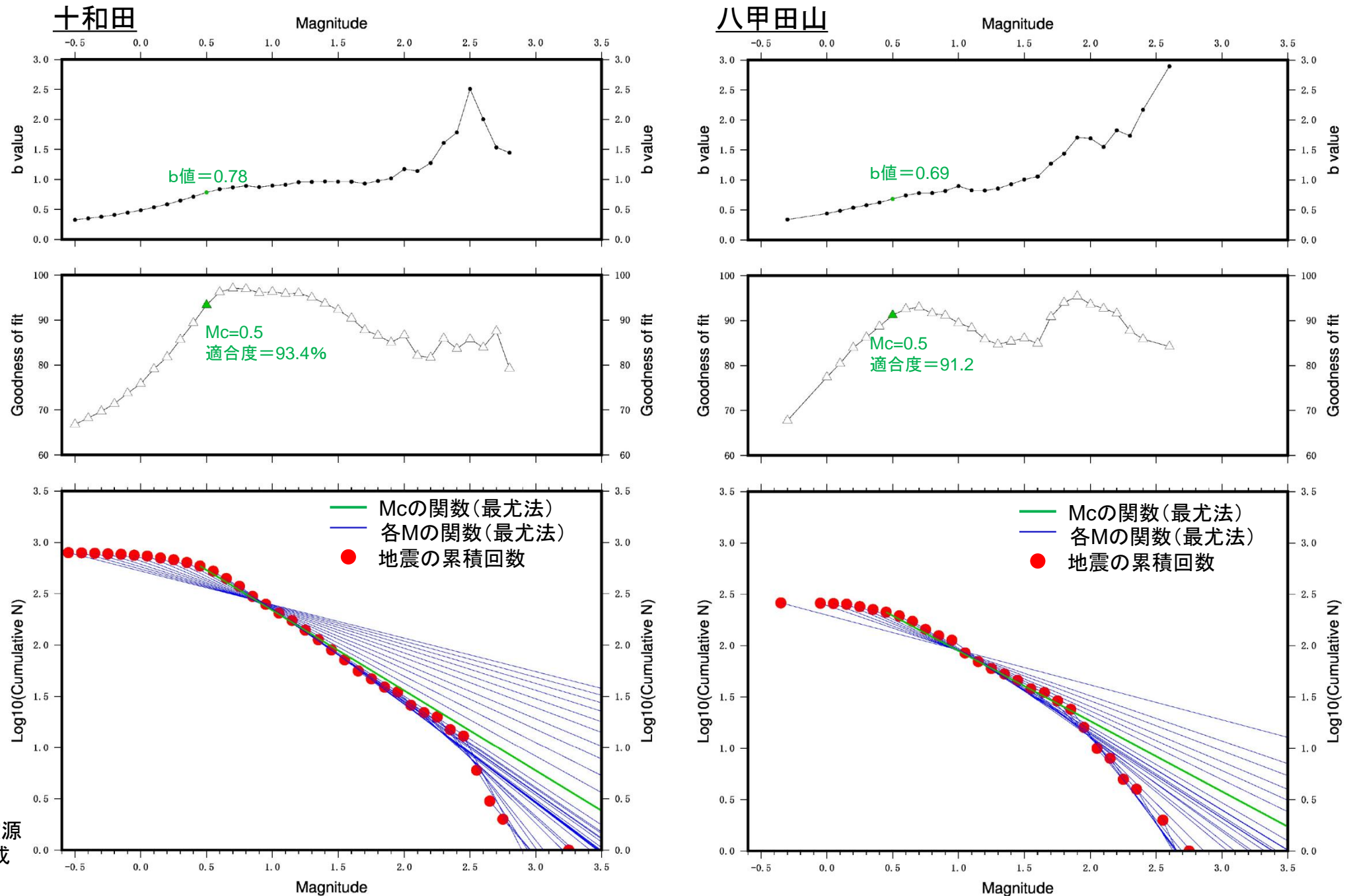


八甲田	2基線以上同時7日間超過 (◎) 1基線7日間超過 (○)			
	±3σ	2倍	3倍	4倍
(a)青森A—黒石	—	—	—	—
(b)野辺地—黒石	◎	◎	—	—
(c)十和田—黒石	◎	◎	—	—
(d)大鰐—黒石	◎	◎	—	—



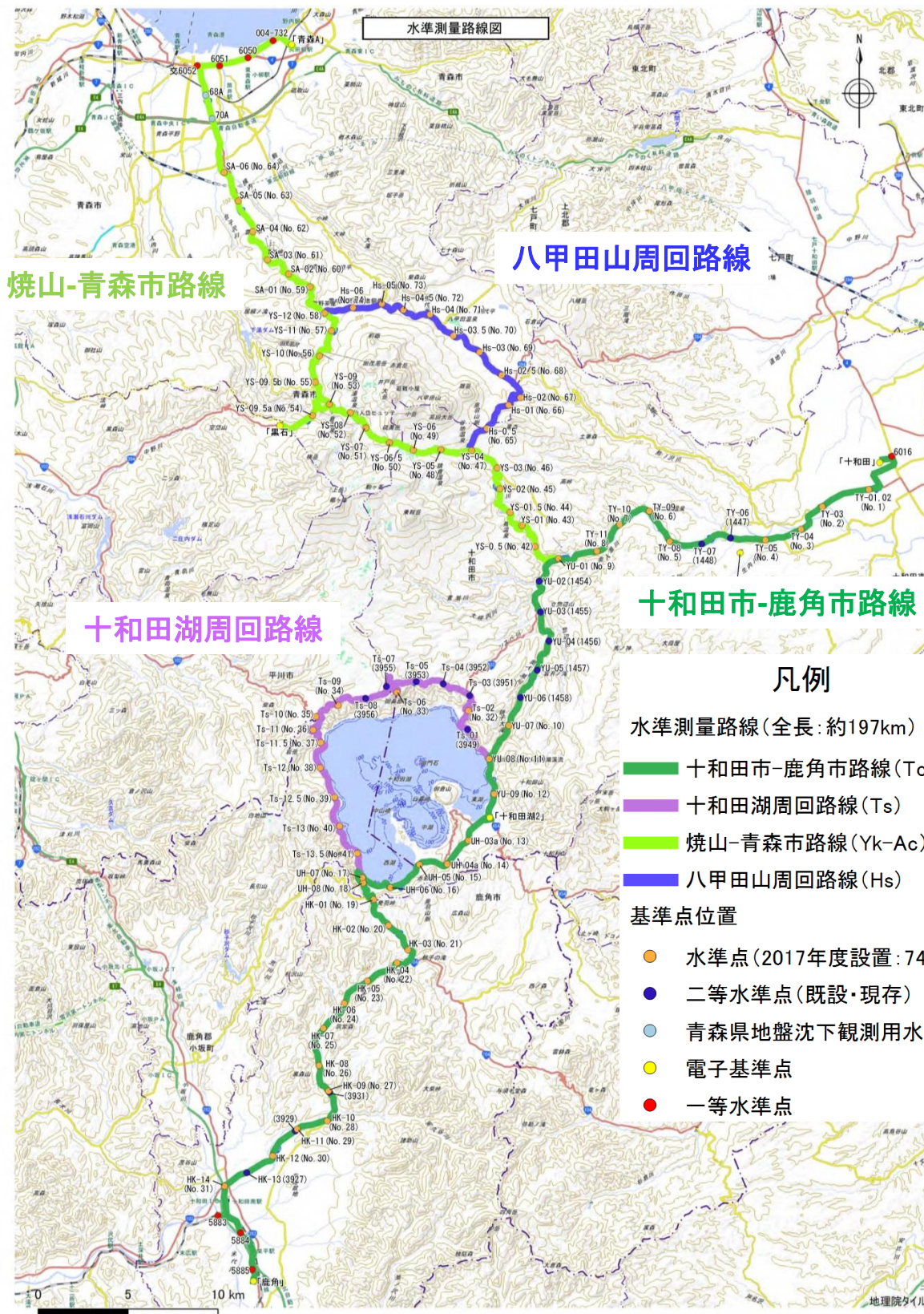
(参考7) 地震の管理基準に係る検知能力の考え方について

- ・地震の管理基準は実績回数から策定するが、その際、地震の検知能力に左右されない基準とするため、検討に用いる十和田及び八甲田山周辺の気象庁一元化処理震源データを対象に、漏れなく地震を検知しているマグニチュードの下限(Mc)を検討した。
- ・宇津(2001)に基づき、最尤法を用いてG-R式のb値を検討し、Wiemer and Wyss(2000)に基づきMcを算出した。
- ・その結果、十和田はM=0.5、八甲田山もM=0.5で最尤法に基づく計算値と実測値の適合度が90%を超えた。
- ・したがって、漏れなく地震を検知しているマグニチュードの下限を示すMcは、十和田・八甲田山ともに0.5となる。
- ・なお、低周波地震については、観測期間中の累積回数が十和田で48回、八甲田山で25回と統計的な検討には不十分なため、対象外とした。



※気象庁一元化処理震源データから当社が作成

(参考8) 水準測量の実施に向けた水準点の設置状況



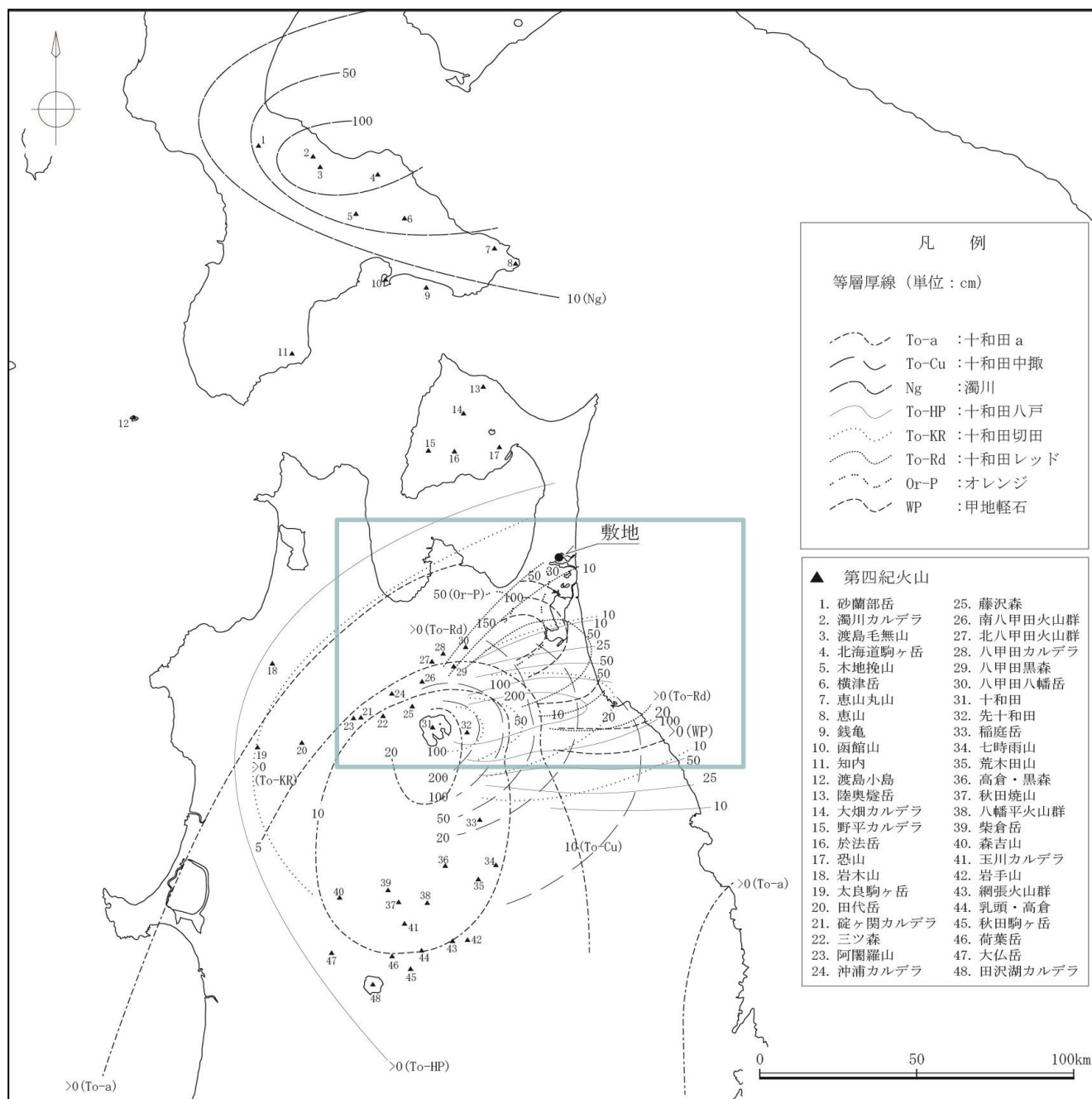
- ・当社は、モニタリング精度の向上を目的として、水準測量を実施することとしている。
- ・水準測量の実施に先立ち、十和田・八甲田山の近傍を横断する路線における既存の国土地理院の水準点等の現存調査を実施した。その結果、29点の既存の一等水準点，二等水準点（電子基準点含む）等を確認した。
- ・加えて、当社が74点の水準点を2017年度に新設し、合わせて、103点・約197kmの測量路線を設定した。
- ・2018年度より、水準測量を実施している。

(参考9) 火山ガスに関する知見について (八甲田山, 恐山)

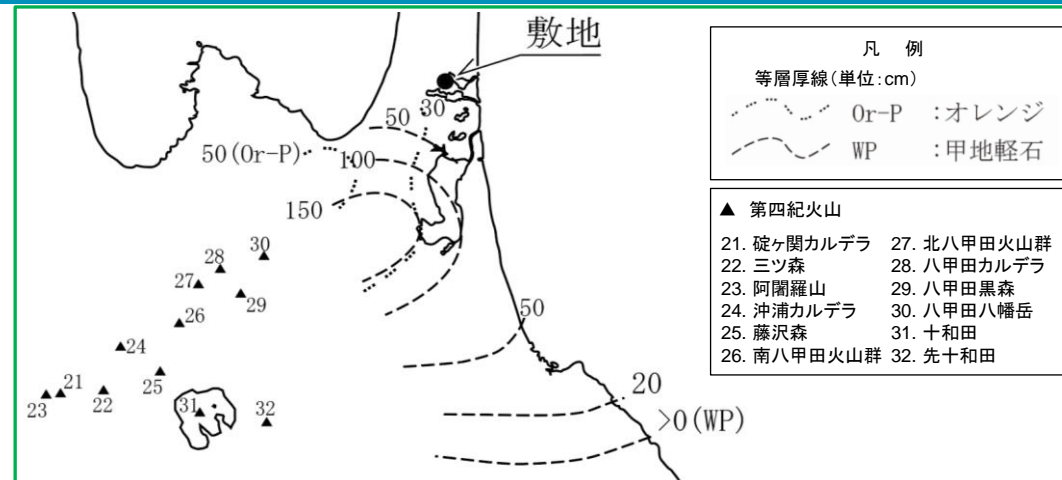
火山	年月	地点	火山ガス			関連する事故	参照資料
			組成	温度	その他		
八甲田山	平成24年7月 (2010年)	地獄沼東	—	—	植物の枯死(H ₂ Sの影響と推測)	—	仙台管区気象台(2014)
	平成22年6月 (2010年)	酸ヶ湯付近	CO ₂ , H ₂ S	気温より 5℃~10℃高い	—	山菜採り中の女子中学生が死亡 (H ₂ Sによる)	気象庁編(2013), 鶴見(2011)
	平成9年7月 (1997年)	田代平	CO ₂	—	—	レンジャー訓練中の陸上自衛隊員3名が死亡 (CO ₂ による)	気象庁編(2013), 気象庁(1997), 平林(1997)
	平成6年7月 (1984年)	山頂付近 (地獄湯ノ沢)	CO ₂ , H ₂ S	20℃(地中20cm)	黄色昇化物を伴う	—	仙台管区気象台(1995)
		酸ヶ湯付近 (三十三観音)	CO ₂ , H ₂ S	23℃(地中20cm)	黄色付着物を伴う	—	
		賽の河原	CO ₂ , H ₂ S	97℃(地中10cm)	黄色付着物を伴う	—	
		地獄沼北西方	CO ₂ , H ₂ S	98℃(地中10cm) 74℃(地中20cm)	黄色昇化物を伴う	—	
		地獄沼東方	CO ₂ , H ₂ S	76℃ 65℃(地中20cm)	黄色付着物を伴う	—	
	昭和63年8月~9月 (1988年)	山頂付近 (地獄湯ノ沢)	CO ₂ , H ₂ S	14℃(地中30cm) 14℃(地中40cm)	昆虫の死骸あり	—	仙台管区気象台(1989)
		酸ヶ湯付近 (三十三観音)	CO ₂ , H ₂ S, SO ₂	20℃(地中40cm) 20℃(地中70cm)	—	—	
		賽の河原	—	91℃(地中5cm)	—	—	
昭和39年 (1964年)	田代平	CO ₂	—	—	—	平林(1997)	
恐山	平成元年9月 (1989年)	地獄谷	CO ₂ , H ₂ S	99℃(地中10cm)	黄色昇化物を伴う	—	仙台管区気象台(1990)
		花染	CO ₂ , H ₂ S	58℃(地中100cm) 78℃(地中20cm)	—	—	
		正津川左岸	CO ₂ , H ₂ S	90℃(地中10cm)	噴気孔に黄色昇化物が付着	—	
		境内北部 (花染北方)	CO ₂ , H ₂ S	93℃(地中20cm)	黄色昇化物を伴う	—	
		地藏岳南西	CO ₂ , H ₂ S	68℃(地中10℃)	黄色昇化物を伴う	—	
		剣山南東	CO ₂ , H ₂ S	21℃(地中40cm) 20℃(地中30℃)	きつねの死骸あり	—	
	昭和54年10月 (1979年)	地獄谷	CO ₂ , H ₂ S	100℃~102℃	—	—	気象庁観測部(1981)
		花染	CO ₂ , H ₂ S	—	—	—	
極楽ヶ浜		CO ₂ , H ₂ S	—	—	—		

(参考10) 敷地及び敷地近傍で確認される降下火砕物(文献調査)①

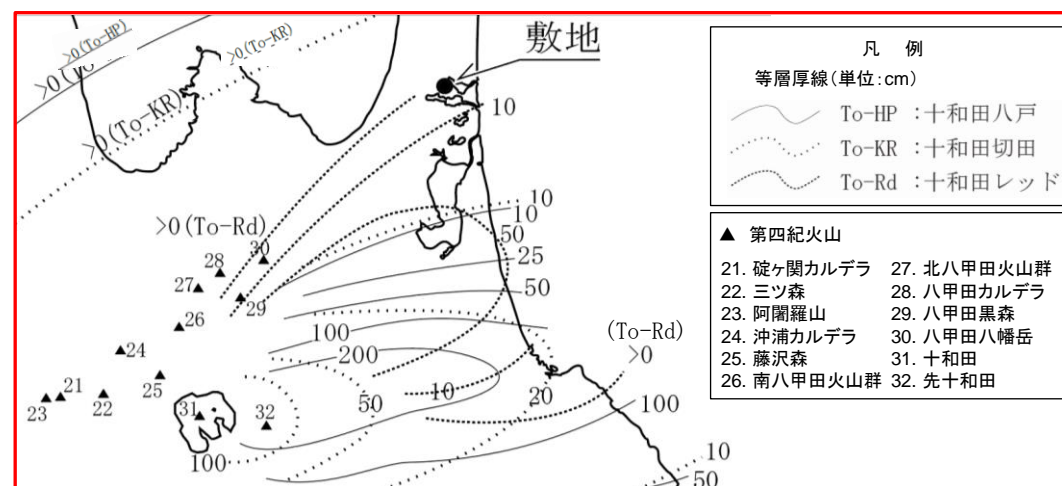
[半径160km内の第四紀火山]



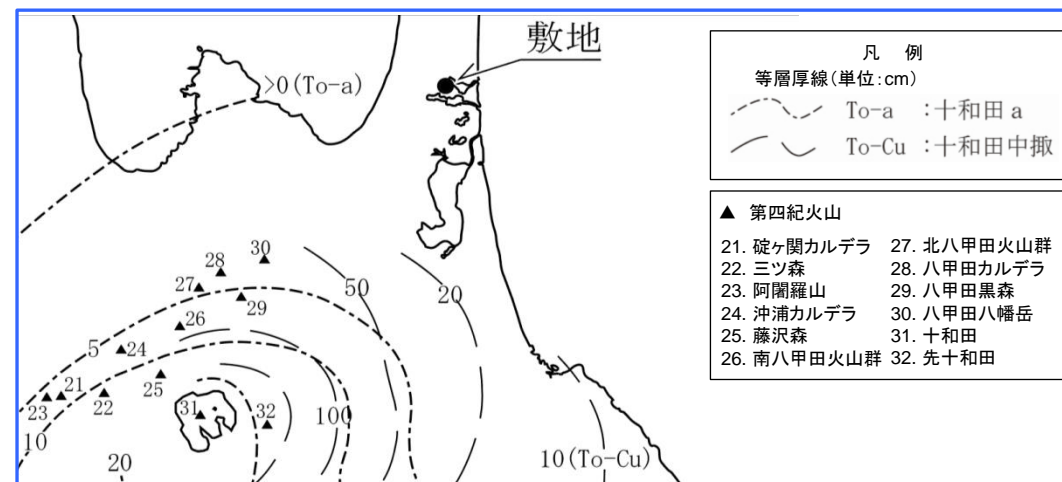
第四紀火山の位置及び名称は中野ほか編(2013)による
降下火山灰の名称及び等層厚線は町田・新井(2011), 工藤ほか(2004)による



十和田(先カルデラ期)及び八甲田山(甲地軽石)

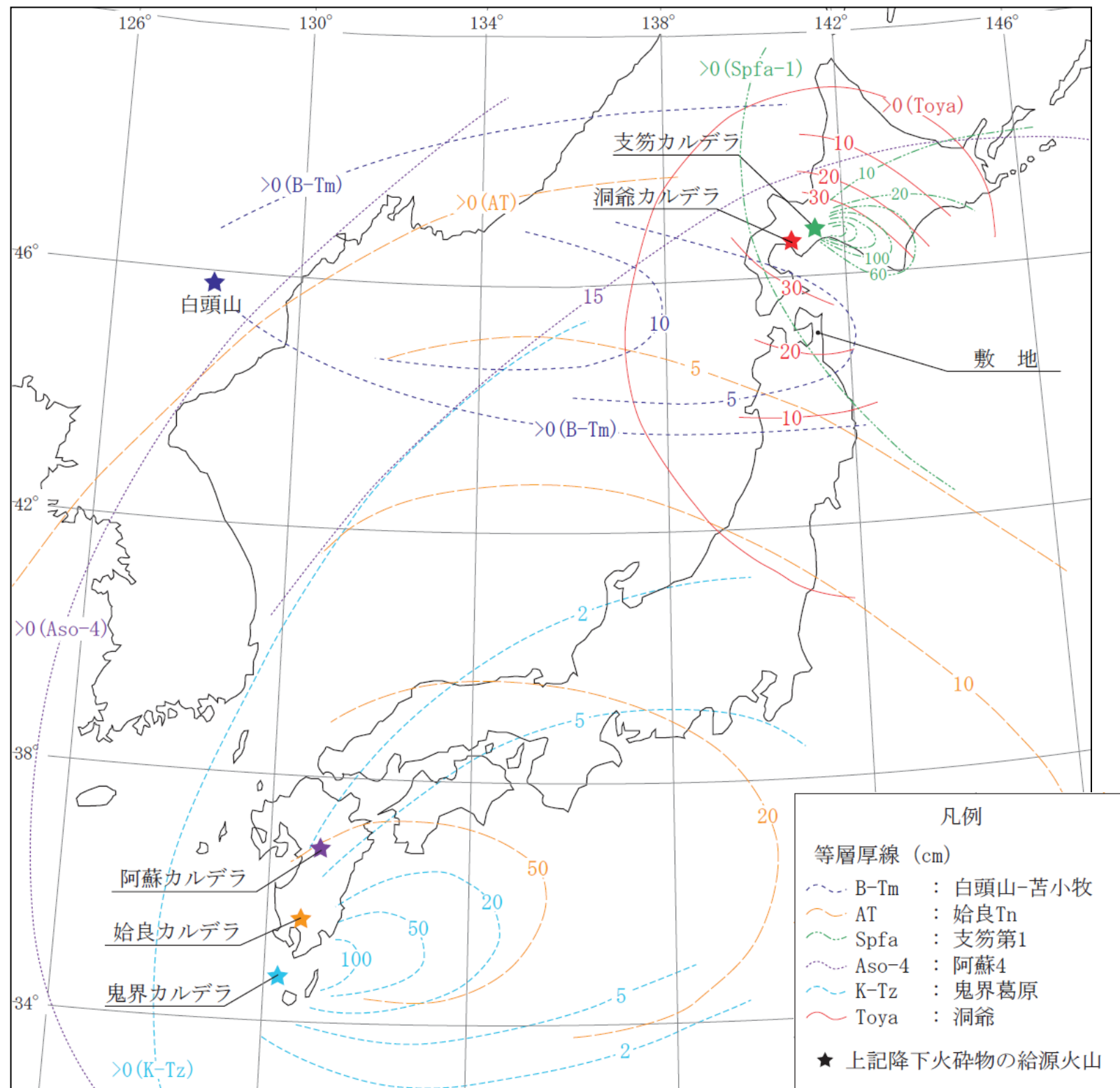


十和田(カルデラ形成期)



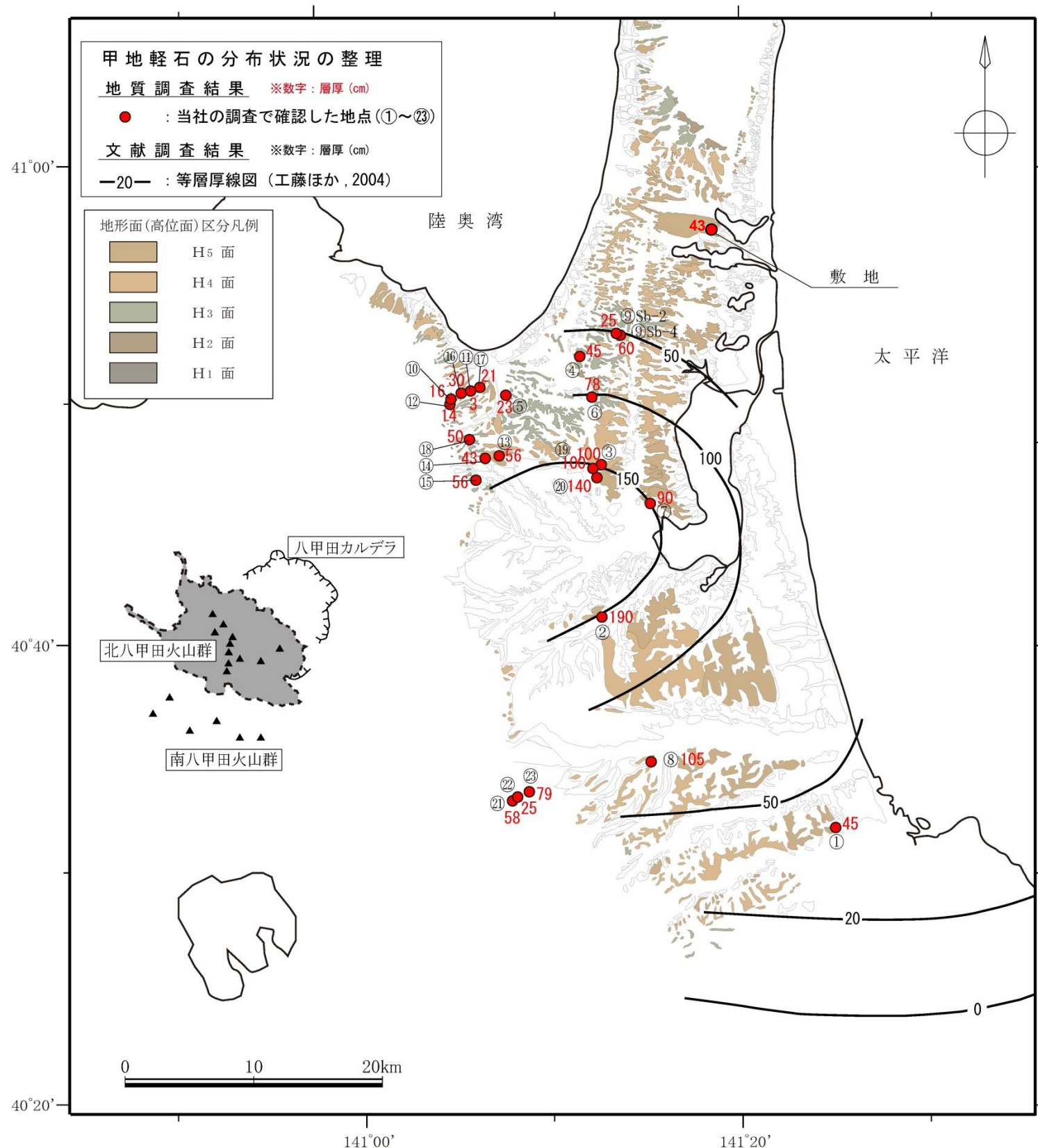
十和田(後カルデラ期)

(参考10) 敷地及び敷地近傍で確認される降下火砕物(文献調査)②
〔半径160km内の第四紀火山〕



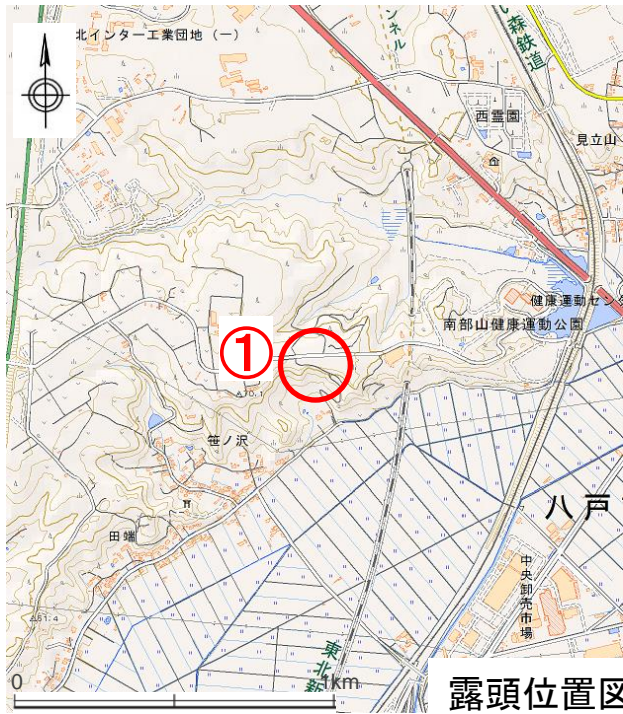
(町田・新井 (2011) より抜粋・加筆)

(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況



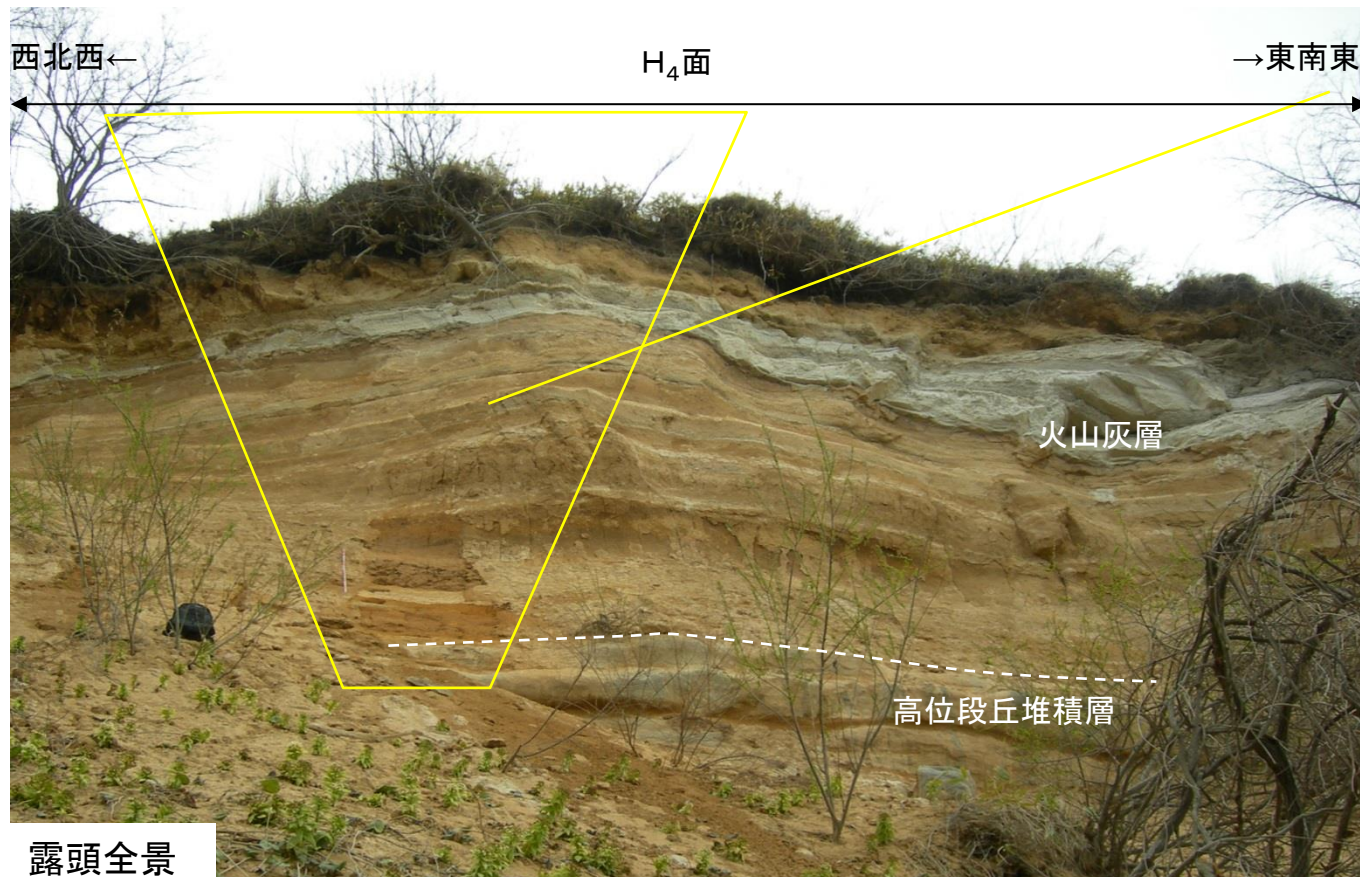
No.	地点	甲地軽石 層厚(cm)
①	八戸市南部山公園	約45
②	十和田市大沢田1	約190
③	東北町乙供	約100
④	東北町淋代2	約45
⑤	東北町長者久保西方	約23
⑥	東北町輝ヶ丘北方	約78
⑦	東北町甲地	約90
⑧	十和田市伝法寺	約105
⑨	東北町豊畑南方 (オーガー)	Sb-2: 約25 Sb-4: 約60
⑩	野辺地町枇杷野付近 (ボーリング)	約16
⑪	野辺地町枇杷野付近 (ボーリング)	約3
⑫	野辺地町枇杷野付近 (ボーリング)	約14
⑬	七戸町字菩提木付近 (ボーリング)	約56
⑭	七戸町字菩提木付近 (ボーリング)	約43
⑮	七戸町字菩提木付近 (ボーリング)	約56
⑯	野辺地町枇杷野付近	約30
⑰	野辺地町枇杷野付近	約21
⑱	東北町字秋取山付近	約50
⑲	東北町乙部南方	約60~100
⑳	東北町緑町付近	約140
㉑	十和田市切田付近 (ボーリング)	約58
㉒	十和田市切田付近 (ボーリング)	約25
㉓	十和田市切田付近 (ボーリング)	約79

(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況
〔①八戸市南部山公園 露頭〕

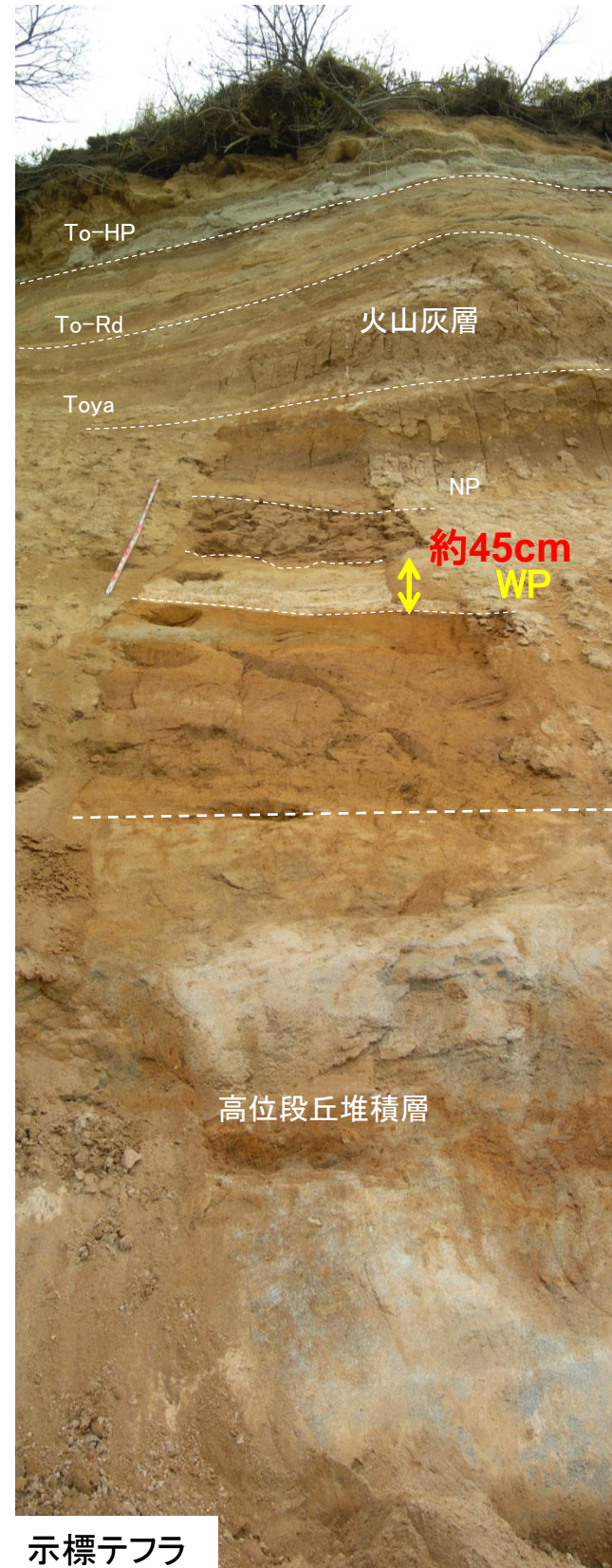


露頭位置図

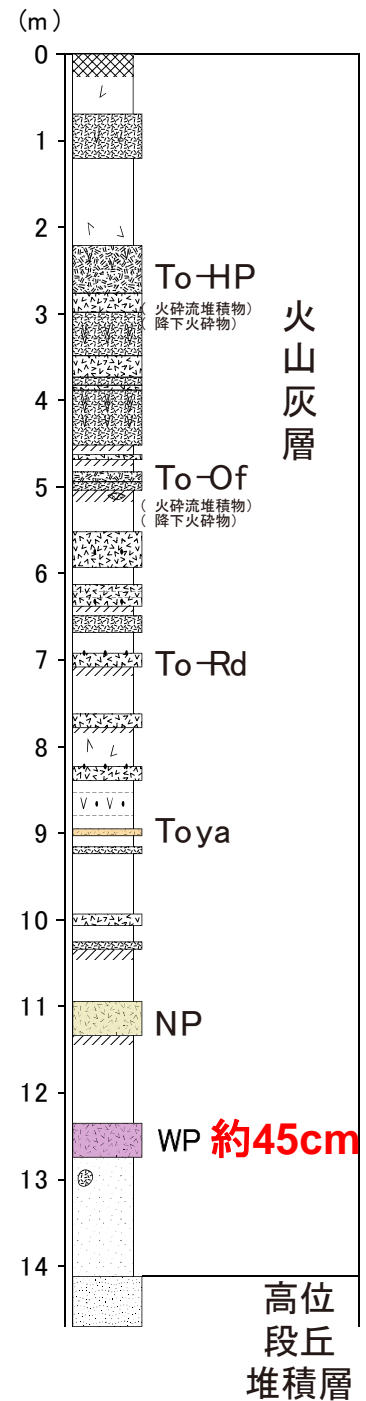
粘土化し黄白色を呈する軽石からなる。軽石径は不明瞭だが、長径20mm程度。径1~6mmの火山岩片が散在する。風化した長石粒子が目立つ。



露頭全景



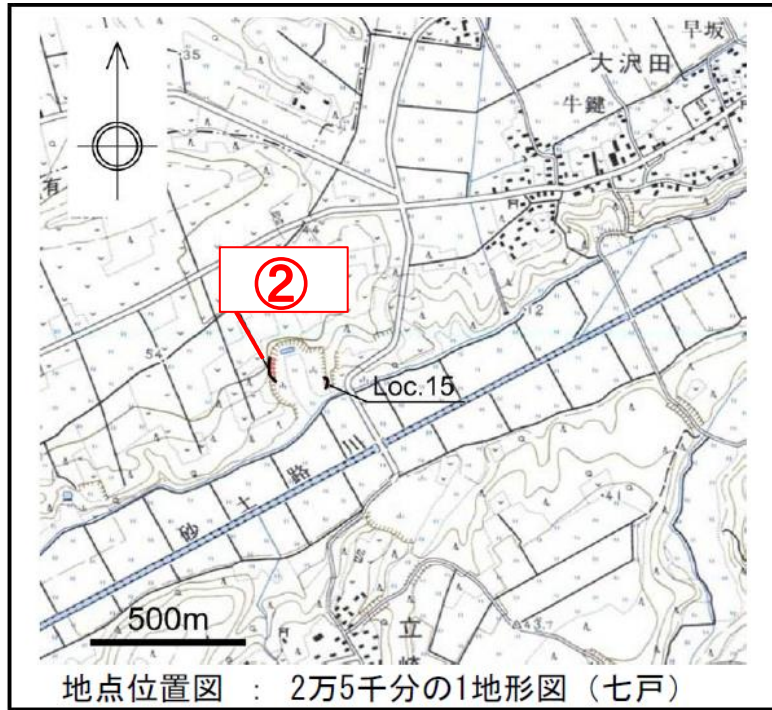
示標テフラ



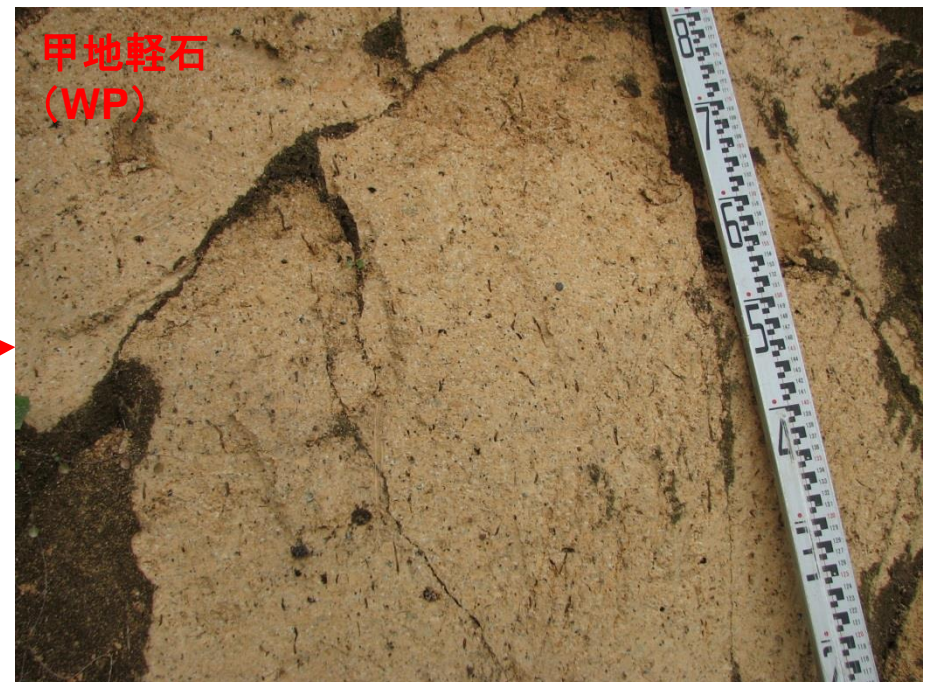
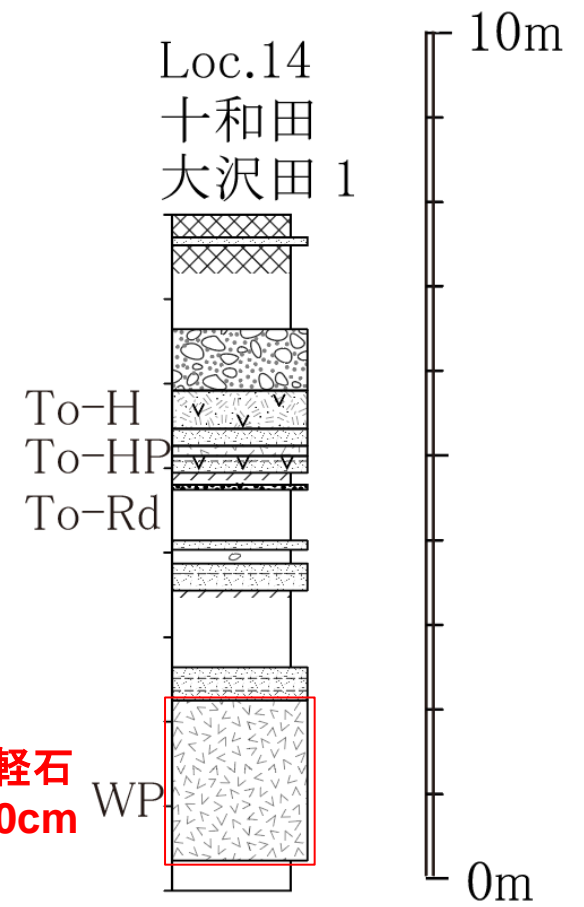
火山灰層

高位段丘堆積層

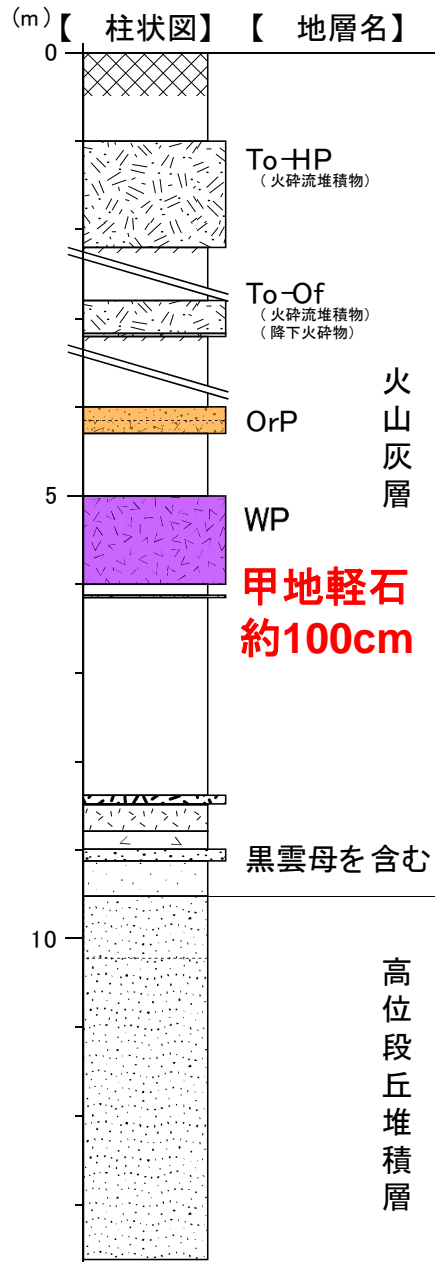
(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況 〔②十和田市大沢田1 露頭〕



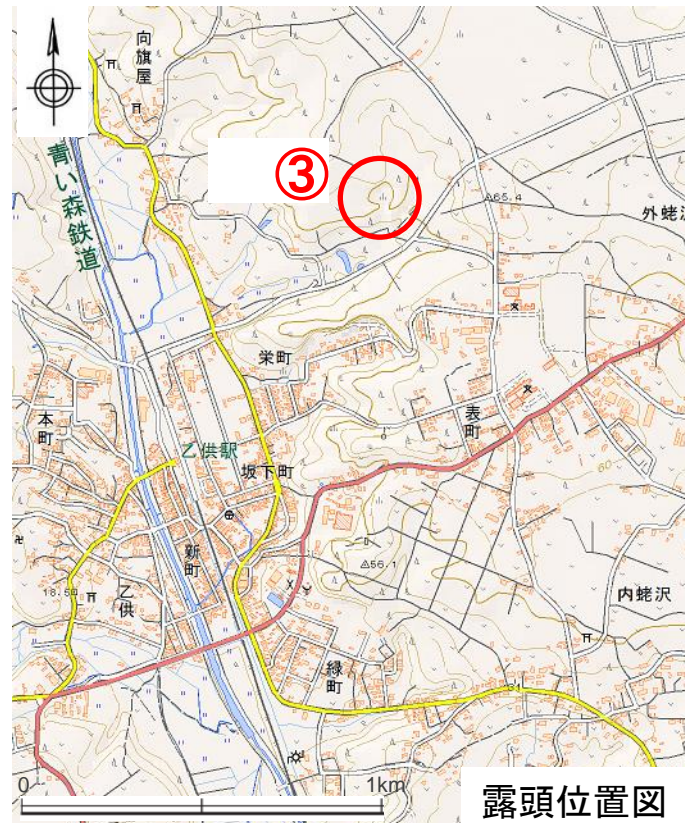
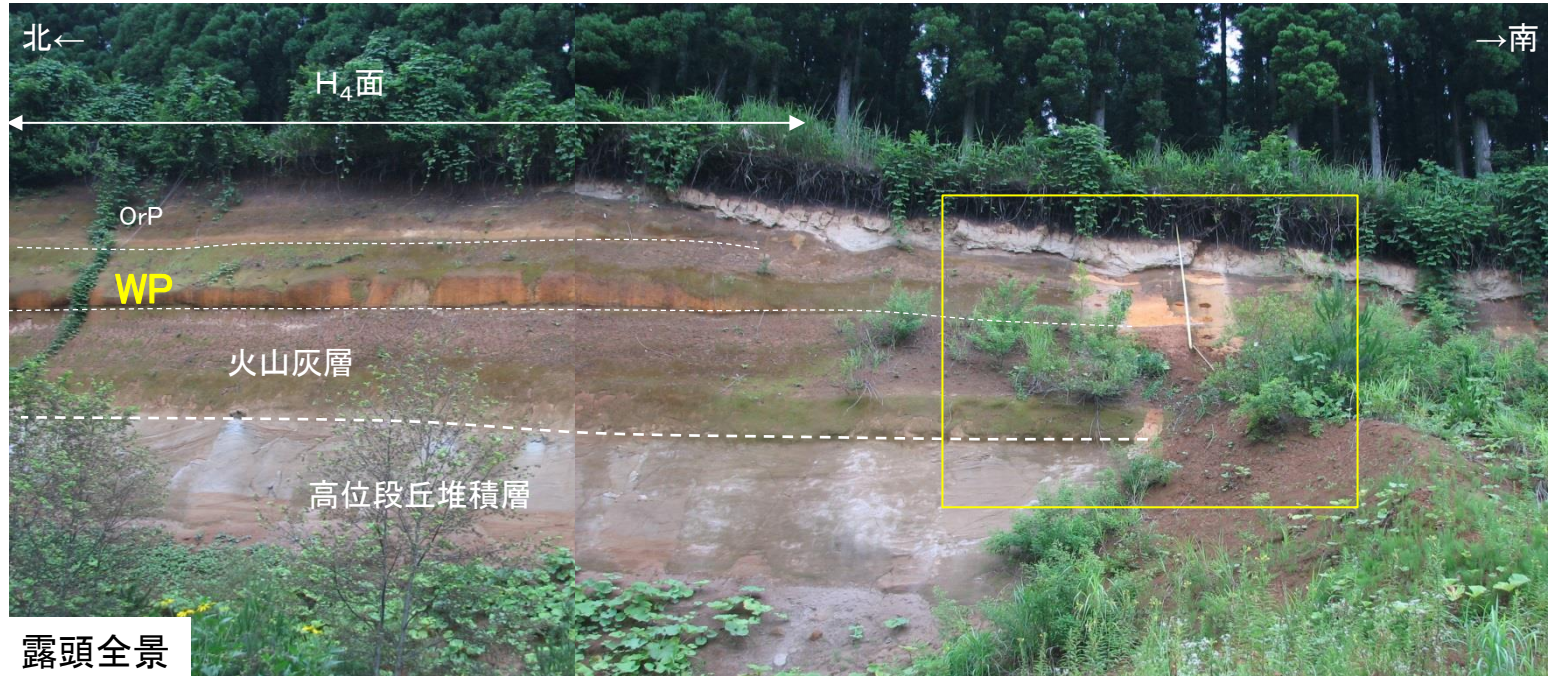
粘土化し黄白色を呈する軽石からなる。軽石径は不明瞭だが、長径20mm程度。径1~6mmの火山岩片が散在する。風化した長石粒子が目立つ。



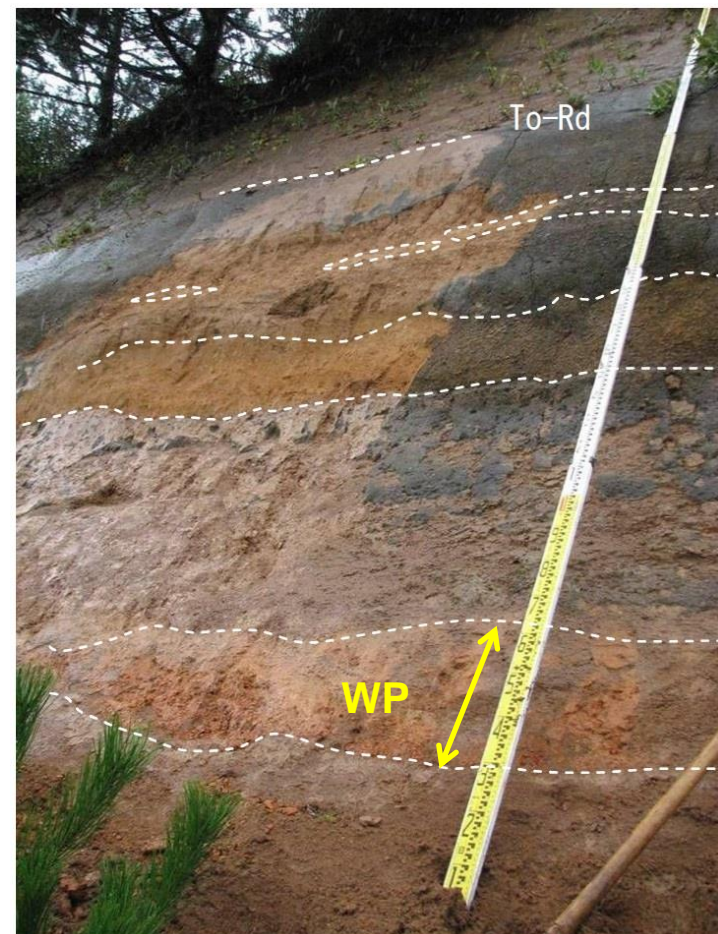
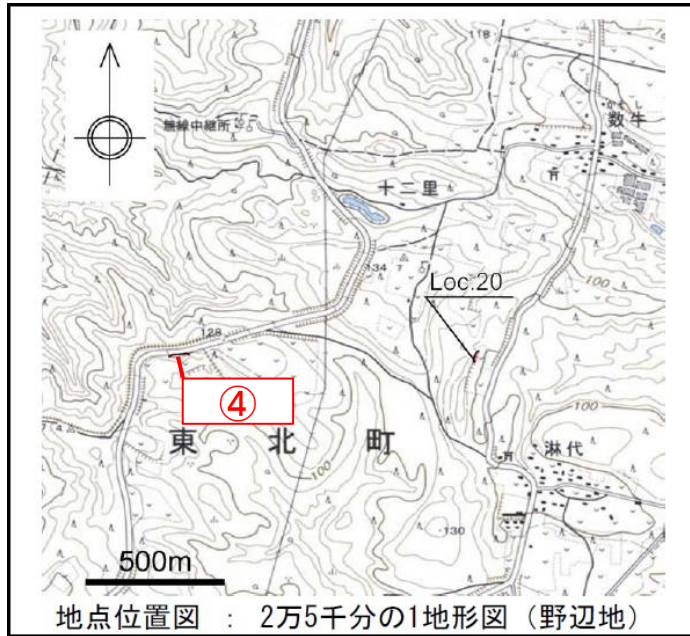
(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況 〔③東北町乙供 露頭〕



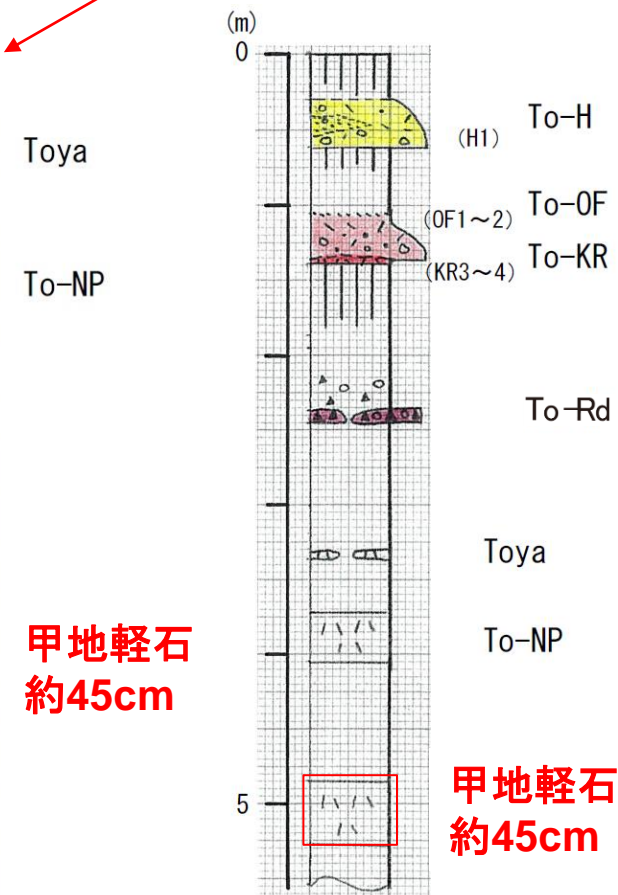
粘土化し黄褐色を呈する粗粒な軽石からなる。火山岩片が散在する。基底部付近は不規則に白色を呈する。



(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況
〔④東北町淋代2 露頭〕



粘土化し橙色を呈する粗粒な軽石からなる。火山岩片が散在する。基底部付近の一部は白色を呈する。



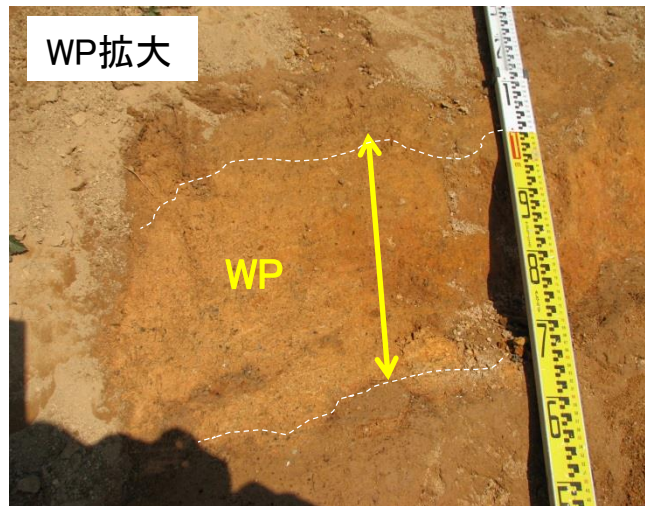
↑ 赤枠 露頭拡大写真

(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況
〔⑤東北町長者久保西方 露頭〕

露頭位置図



露頭全景

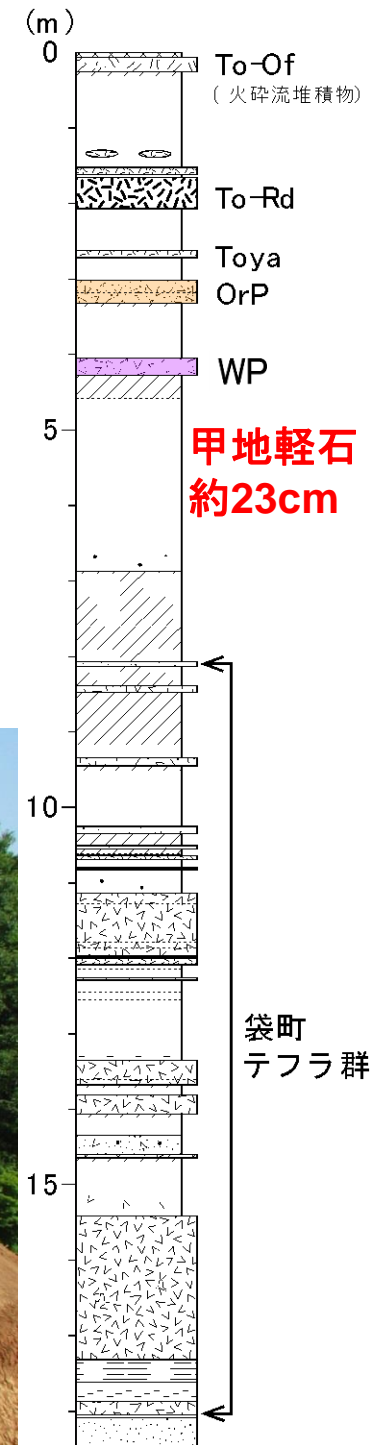


WP拡大

粘土化し橙～黄白色を呈する軽石からなる。軽石径は不明瞭だが、長径20mm程度。径4～8mmの火山岩片が散在する。

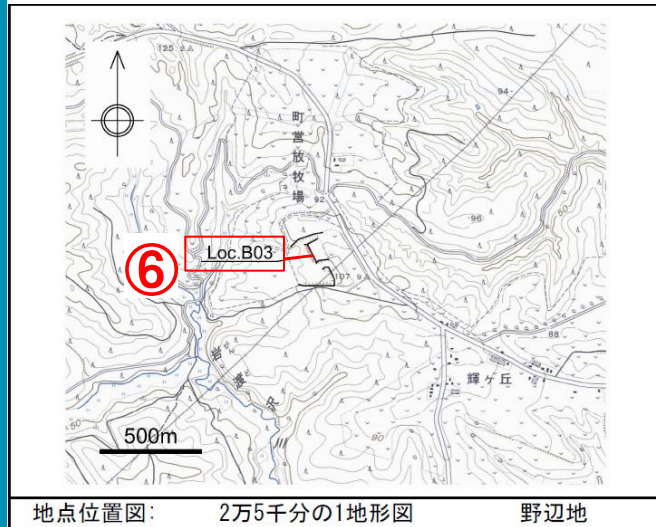


示標テフラ



袋町
テフラ群

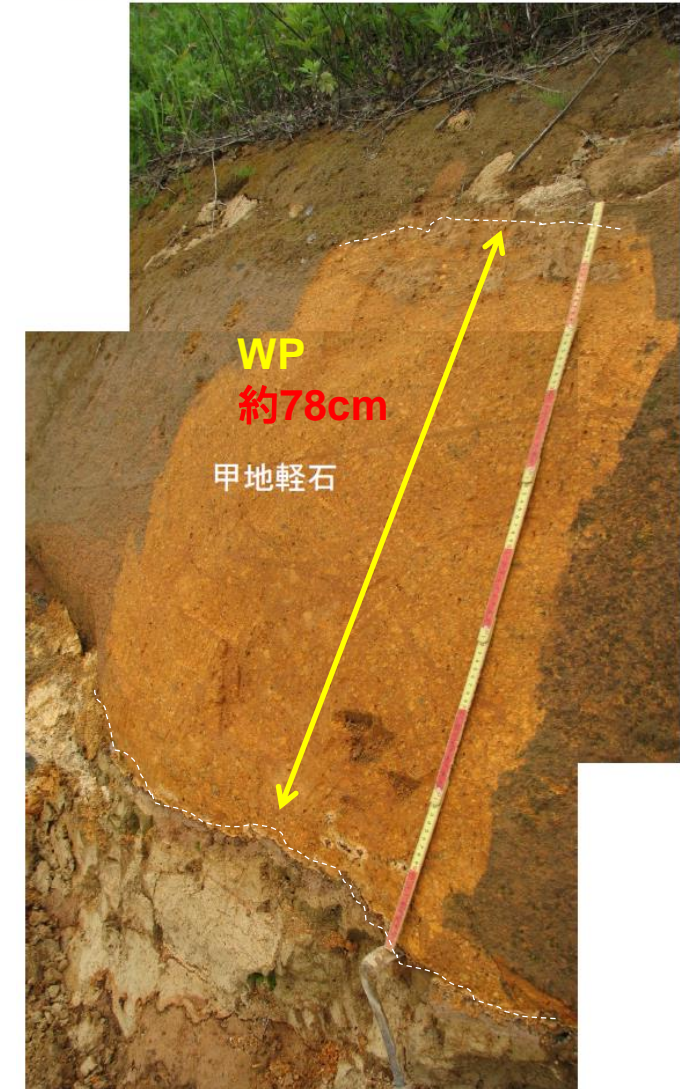
(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況
〔⑥東北町輝ヶ丘北方 露頭〕



黄橙色を呈する粗粒な軽石からなる。基底部付近は白色を呈する。



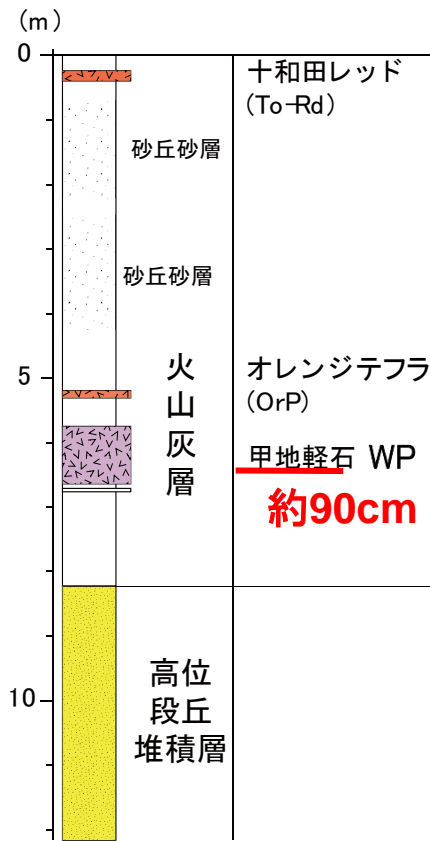
露頭拡大部
【拡大部a】



露頭全景写真

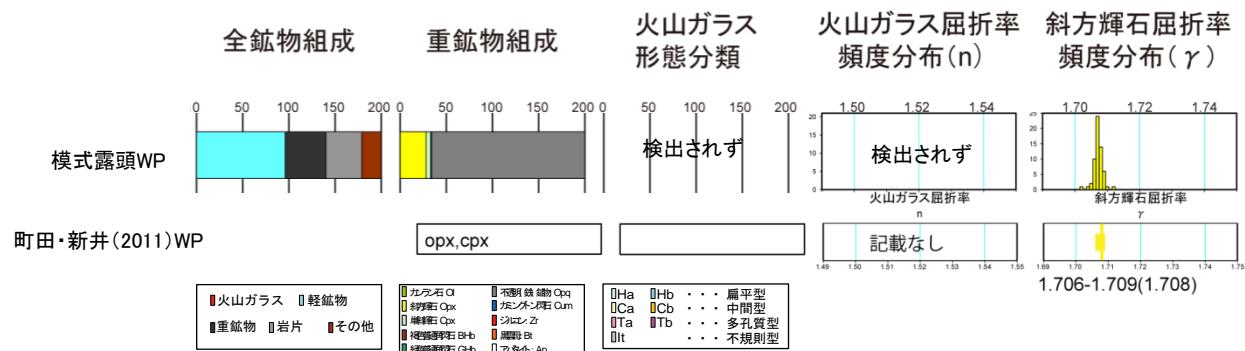


(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況
〔⑦東北町甲地 露頭〕



粘土化し橙～黄白色を呈する軽石からなる。軽石径は不明瞭。径5mm以下の火山岩片が下部に多く散在する。

甲地軽石 (WP) の火山灰分析結果

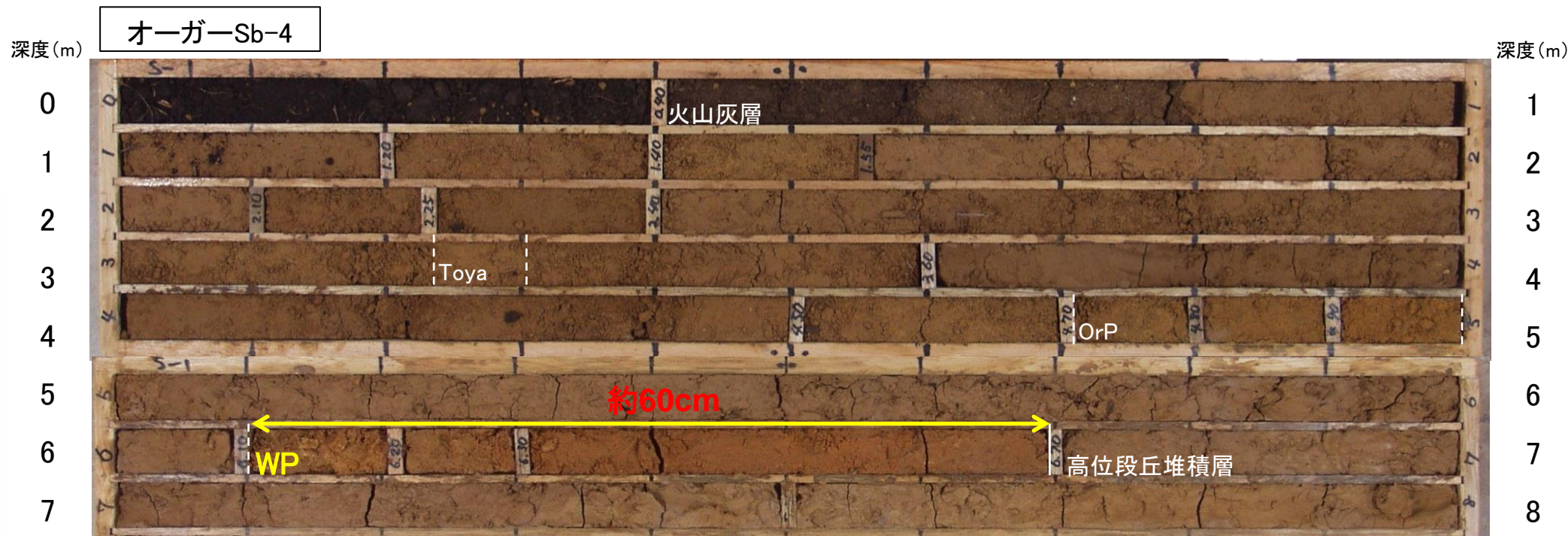
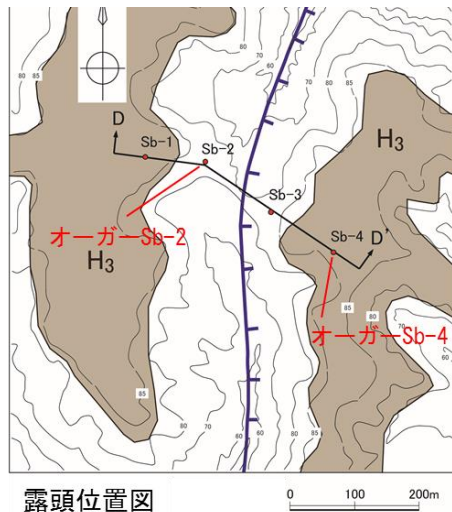
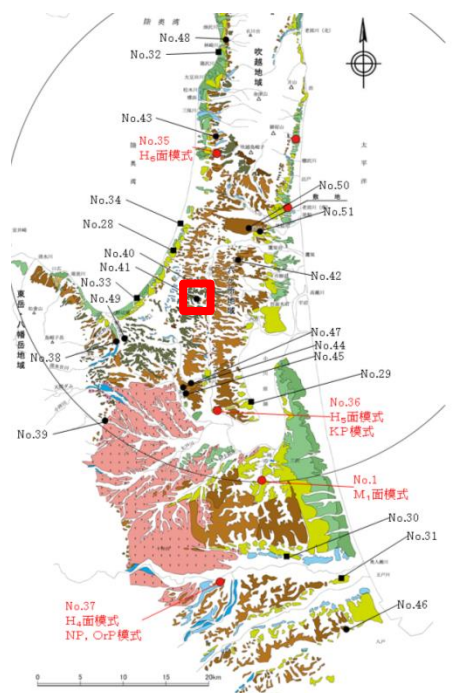


(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況 〔⑧十和田市伝法寺 露頭〕



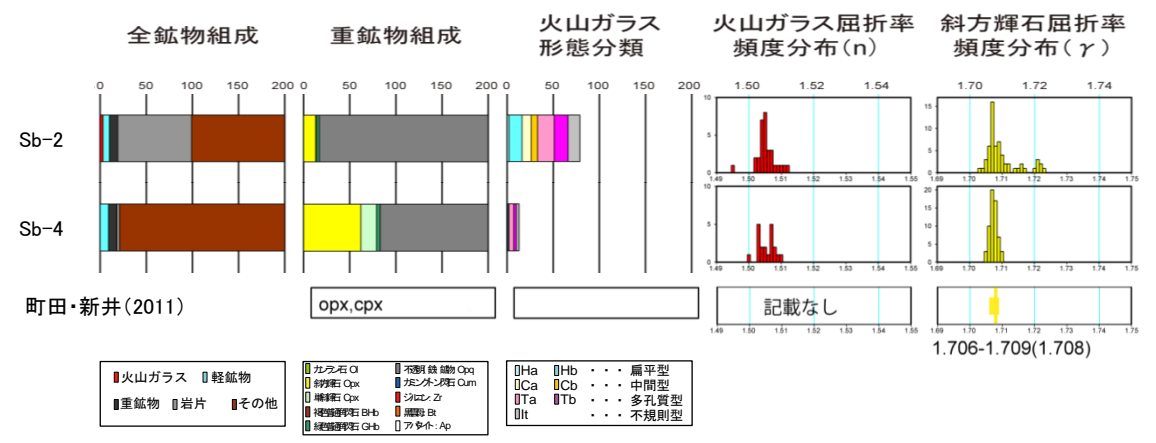
粘土化し橙～黄白色を呈する軽石からなる。複数のユニットからなり、軽石径は不明瞭だが、長径5～20mm程度。径10mm以下の火山岩片が散在する。

(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況
〔⑨東北町豊畑南方 オーガーコア〕



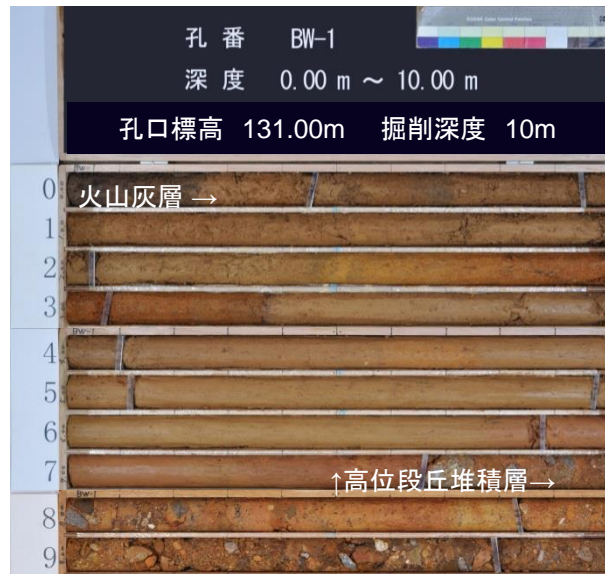
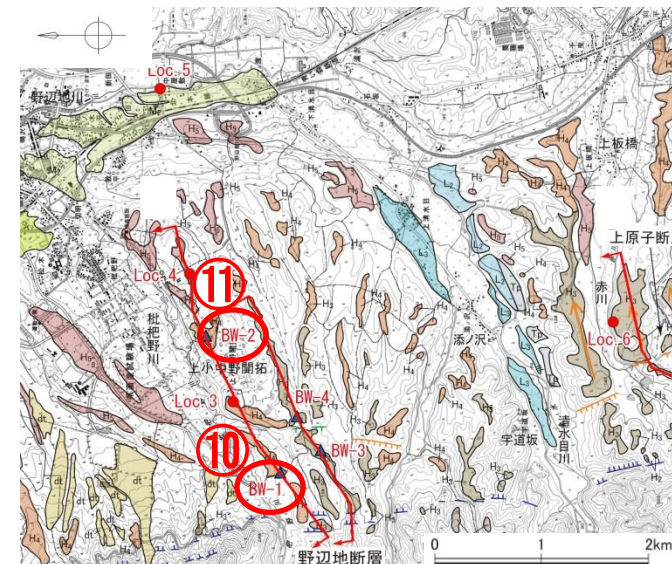
粘土化し橙白色を呈する軽石からなる。

甲地軽石(WP)の火山灰分析結果

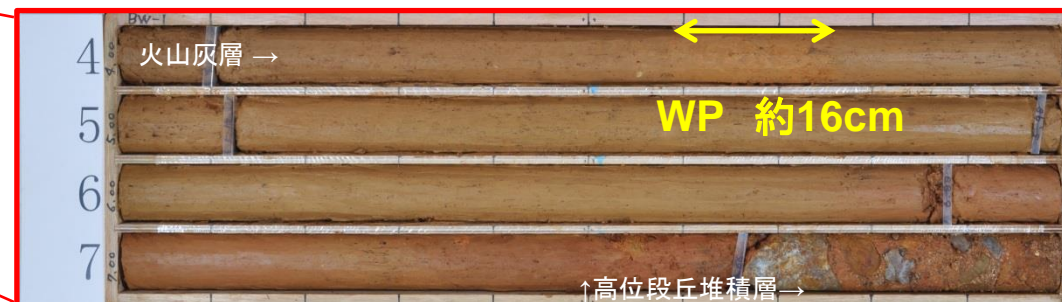


(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況 〔⑩, ⑪野辺地町(BW-1孔, BW-2孔) ボーリングコア〕

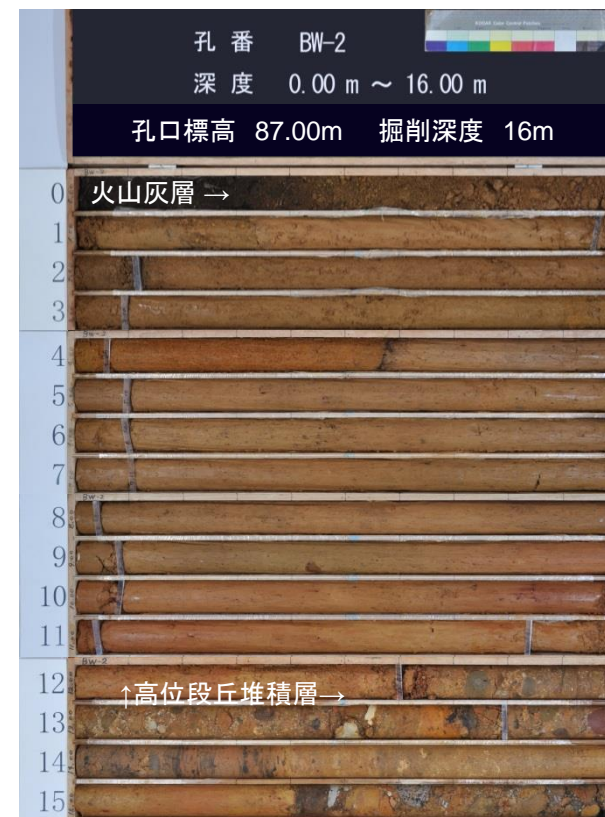
ボーリング位置図



標高	深度	層厚	地質柱状図	地質層名	地質相	色調	主要テフラ	記事
130.75	0.25							0.00~7.50m ・主として粘土質ロームからなり、軽石などのテフラを挟む。 0.65~0.71m ・径1~3mmの灰色火山灰が密集している (To-Rd)。 1.52~1.56m ・黄灰色の細粒火山灰をパッチ状に挟む (Toya)。
128.52	2.48	2.45		火山灰層 (Ia)	軽石	橙	OrP	2.48~3.36m ・角閃石を含む橙色軽石からなる (OrP)。
127.64	3.38	0.88					WP	4.59~4.75m ・粘土化した橙色軽石からなり、径2~5mmの火山礫を少量含む WP。
124.20	6.80							6.00~7.50m ・赤色土壌化している。 ・下端境界は漸移的である。
123.50	7.50	4.14		高位段丘堆積層 (H ₂)	明赤褐			7.50~10.00m ・主として砂礫からなり、砂質シルトを挟む。 ・砂礫は径10~50mm (最大径100mm) の安山岩、珪質岩の粗粒礫と基質の砂質シルト~シルト質砂からなる。 ・安山岩礫の多くは岩芯まで風化している。 7.50~7.66m ・強風化部で、礫の多くが粘土化している。 8.30~8.80m ・砂質シルトを挟む。



粘土化した橙色軽石からなる。
径2~5mmの火山礫を少量含む。



標高	深度	層厚	地質柱状図	地質層名	地質相	色調	主要テフラ	記事
86.65	0.25	0.25						0.00~0.35m ・表層のクロボク土からなる。
86.30	0.70	0.35		軽石流堆積物	黄褐	To-H		0.35~0.70m ・黄灰色軽石を含む軽石流堆積物からなる (To-H)。
85.91	1.09	0.39		ローム		To-Of		0.70~1.10m ・主として粘土質ロームからなり、軽石などのテフラを挟む。
85.67	1.33	0.24		軽石流堆積物		To-Rd		1.09~1.33m ・黄灰色軽石を含む軽石流堆積物からなる (To-Of)。
83.10	3.90	2.57		ローム	明褐			2.05~2.14m ・径2~3mm (最大径10mm) の灰色火山礫の密集層を挟む (To-Rd)。
82.44	4.56	0.66		火山灰層 (Ia)	軽石	橙	OrP	3.90~4.56m ・角閃石を含む橙色軽石からなる (OrP)。 ・下端面は15°傾斜している。 ・直下のロームは幅10mmにわたり、褐鉄鉱が付着している。
77.30	9.70						WP	5.75~5.78m ・粘土化した軽石を挟む WP。
76.30	10.70							10.70~11.44m ・赤色土壌化している。 ・下端境界は漸移的である。
75.56	11.44							
74.90	12.10	7.54		高位段丘堆積層 (H ₂)	明赤褐			12.10~16.00m ・砂礫およびシルトからなる。 ・砂礫およびシルトは、15.41~16.00m ・径10~50mmの安山岩の亜円礫を多量に含む砂礫からなる。 ・礫の多くは岩芯まで風化している。
74.53	12.47	0.37		砂礫	黄褐			
72.70	14.30	1.83						
71.59	15.41	1.11		シルト	明赤褐			14.30~15.41m ・主として塊状・無層理なローム質シルトからなる。 ・最上部では砂層を挟み、葉理がみられる。
71.00	16.00	0.59		砂礫	黄褐			

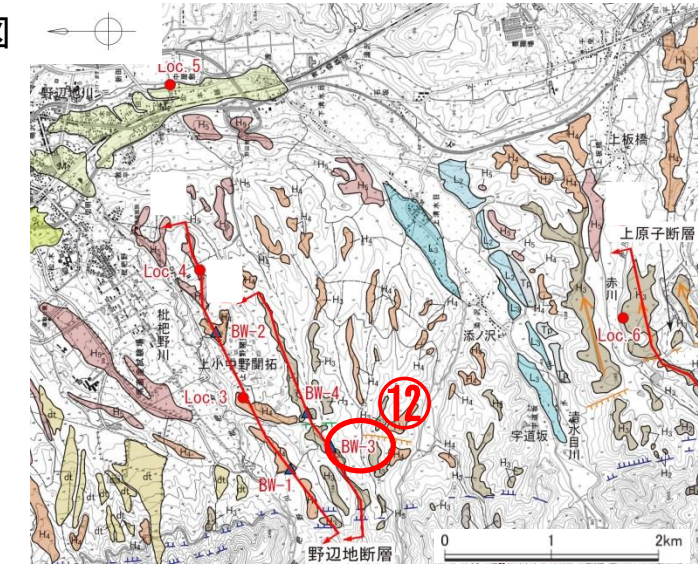


粘土化した軽石からなる。

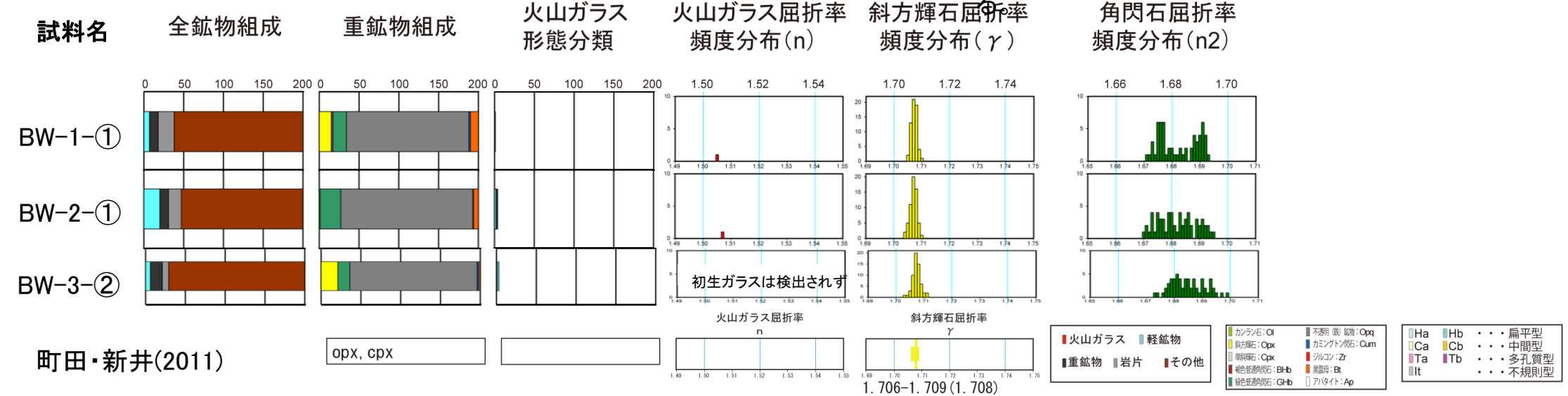
(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況 〔⑫野辺地町(BW-3孔) ボーリングコア〕



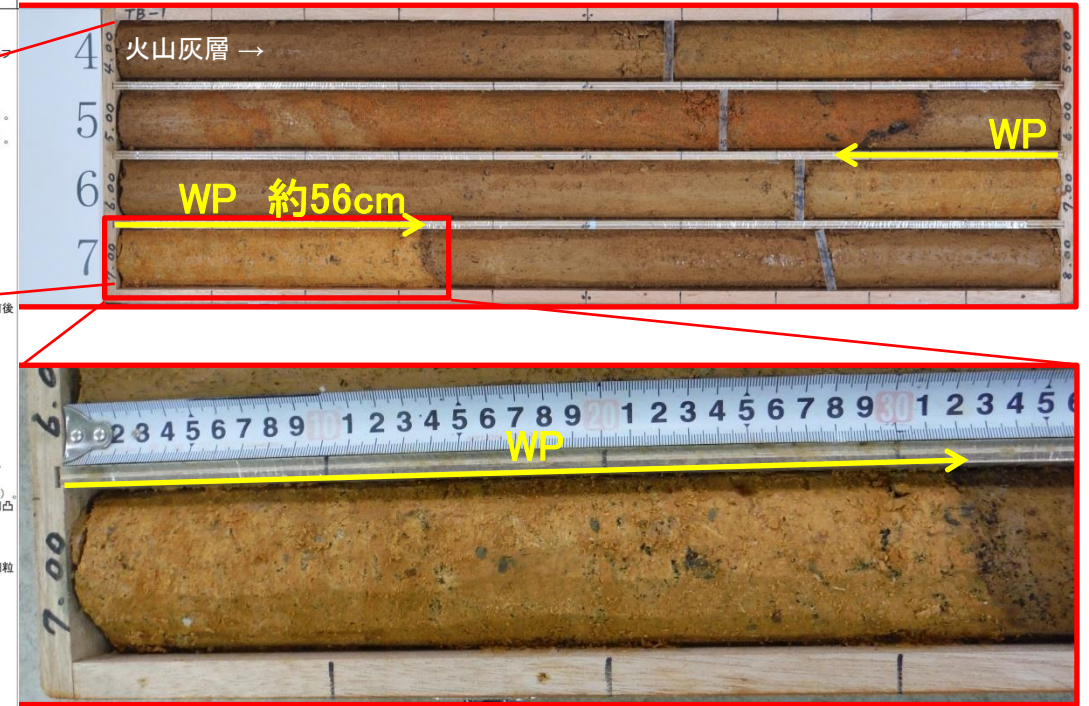
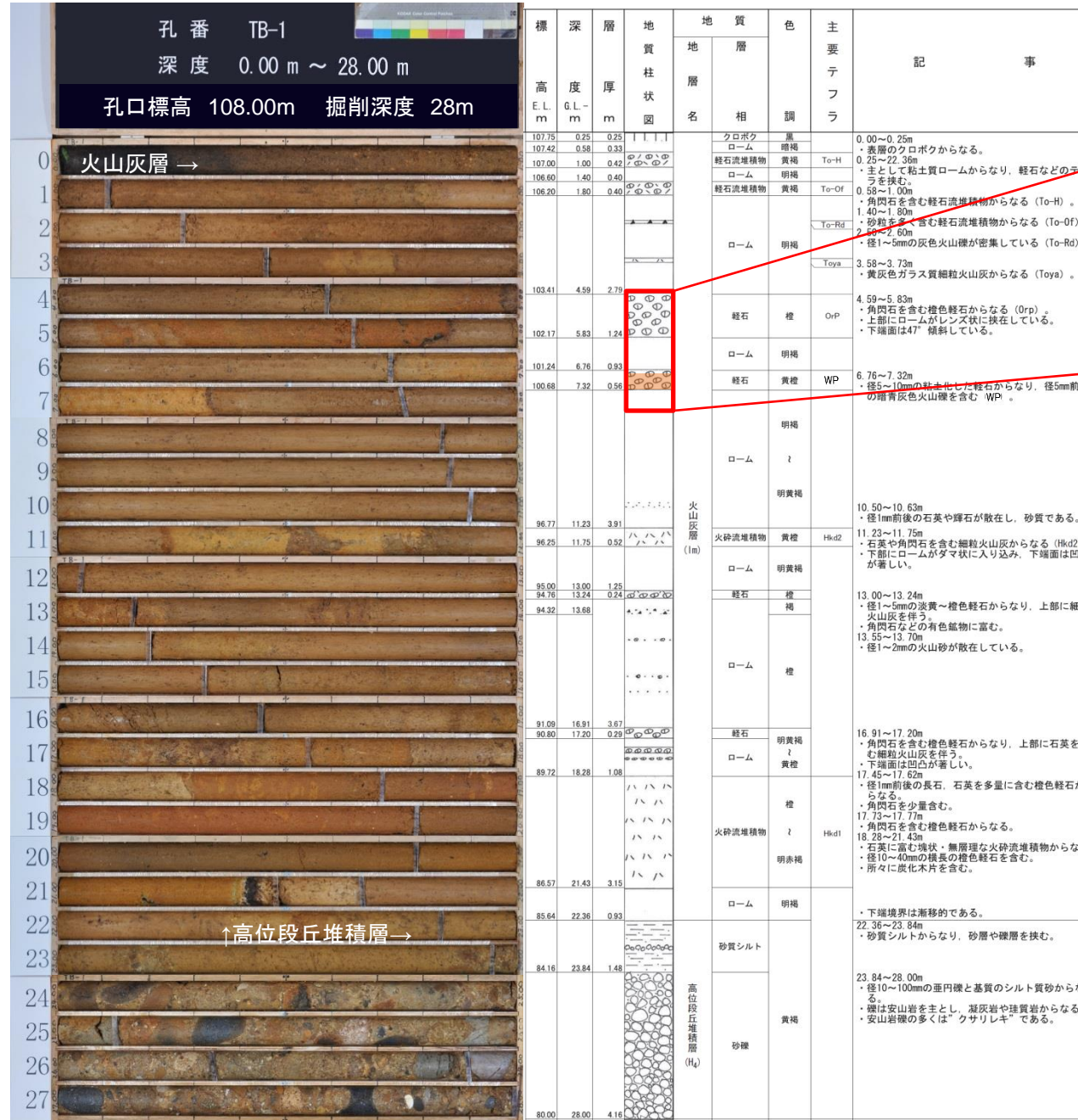
ボーリング位置図



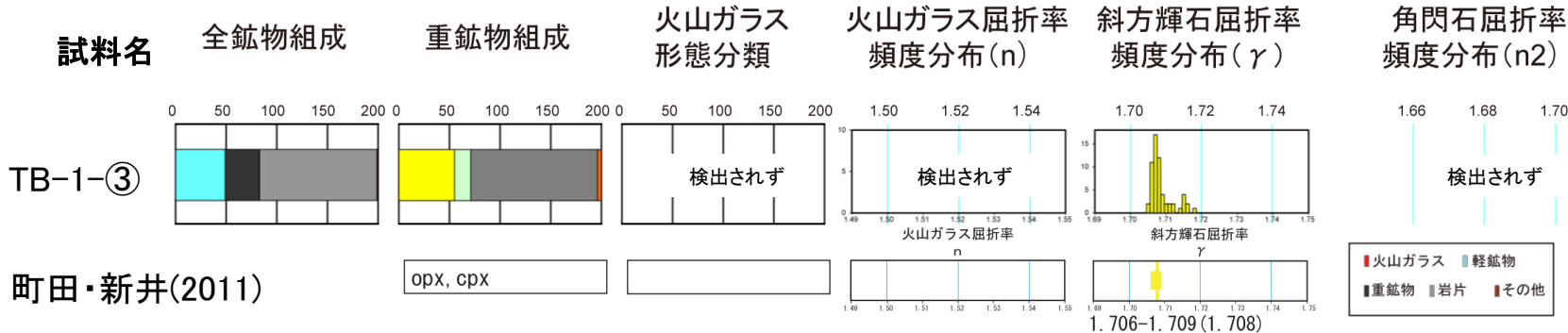
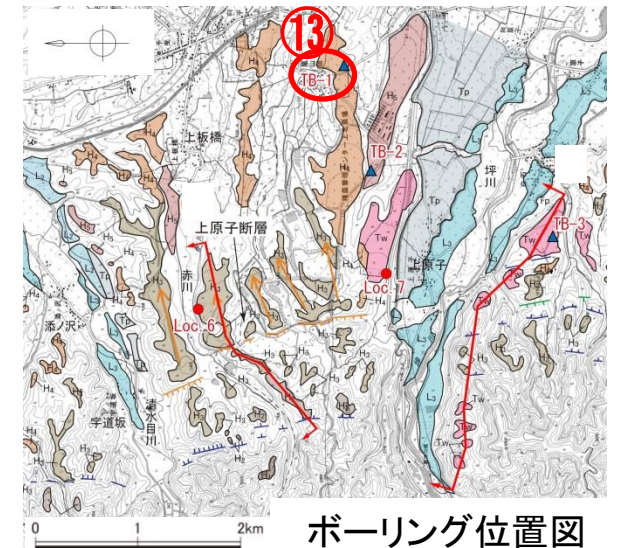
黄橙色の粘土化軽石からなる。
火山岩片を少量含む。上下端面は不明瞭である



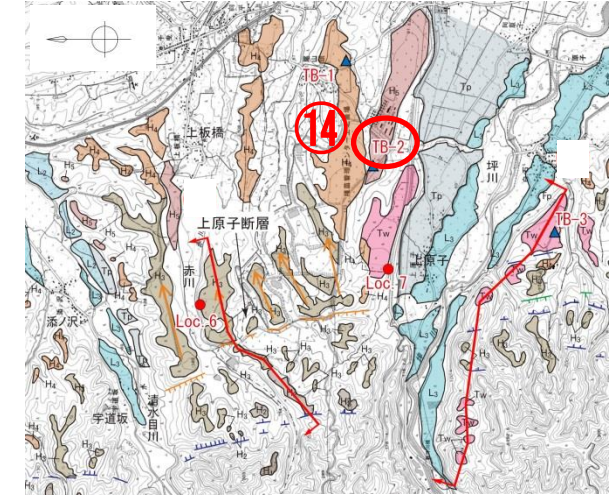
(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況 〔⑬七戸町(TB-1孔) ボーリングコア〕



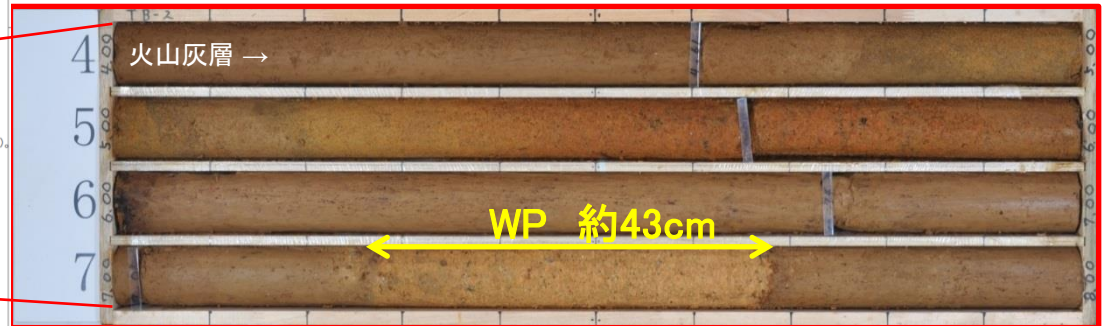
径5~10mmの粘土化した軽石からなる。
径5mm前後の暗青灰色火山礫を含む。



(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況
〔⑭七戸町(TB-2孔) ボーリングコア〕

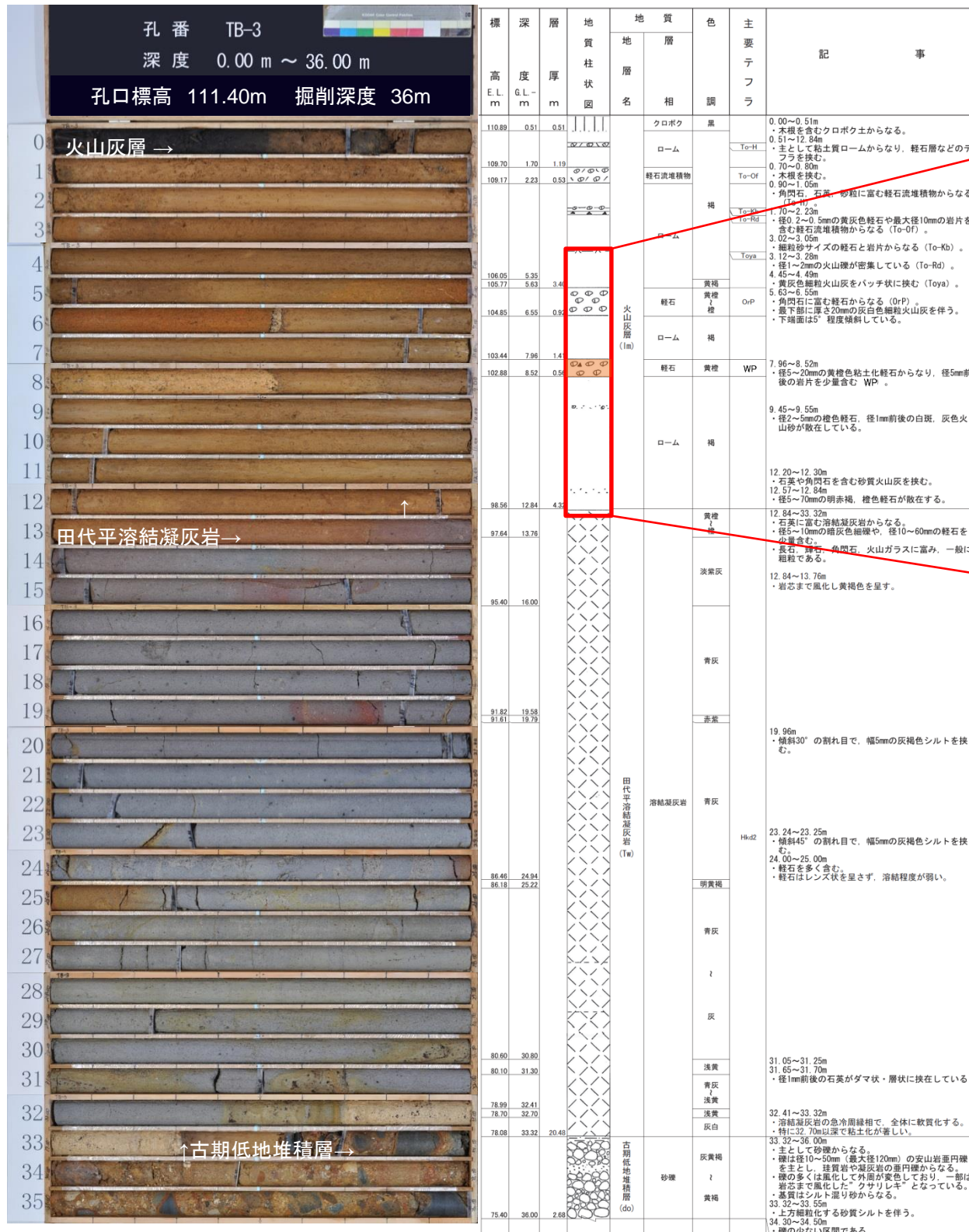


ボーリング位置図

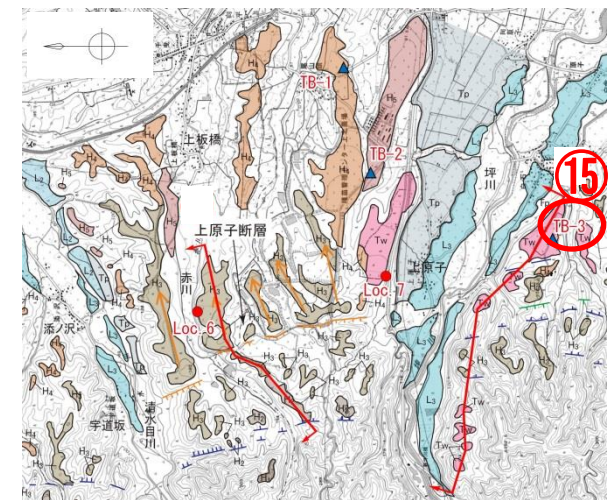


径5~10mmの粘土化した軽石からなる。
径5mm前後の灰色火山礫を少量含む。

(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況 〔⑮七戸町(TB-3孔) ボーリングコア〕



径5~20mmの黄橙色粘土化軽石からなる。
径5mm前後の岩片を少量含む。

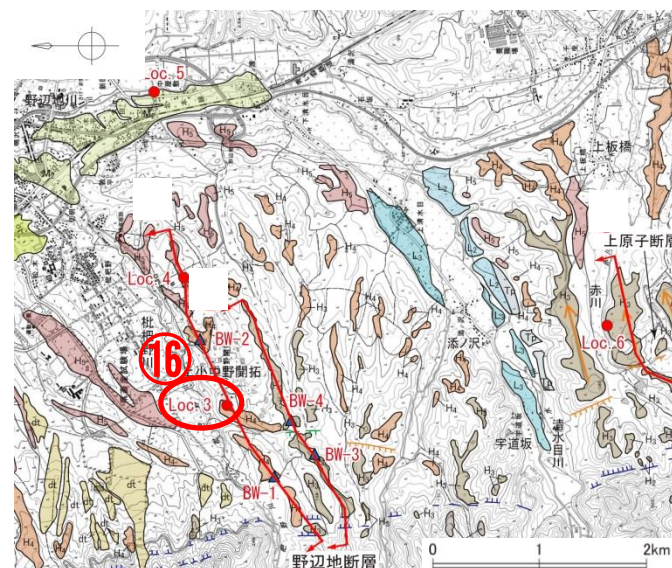


ボーリング位置図

(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況
〔①⑥野辺地町 露頭〕

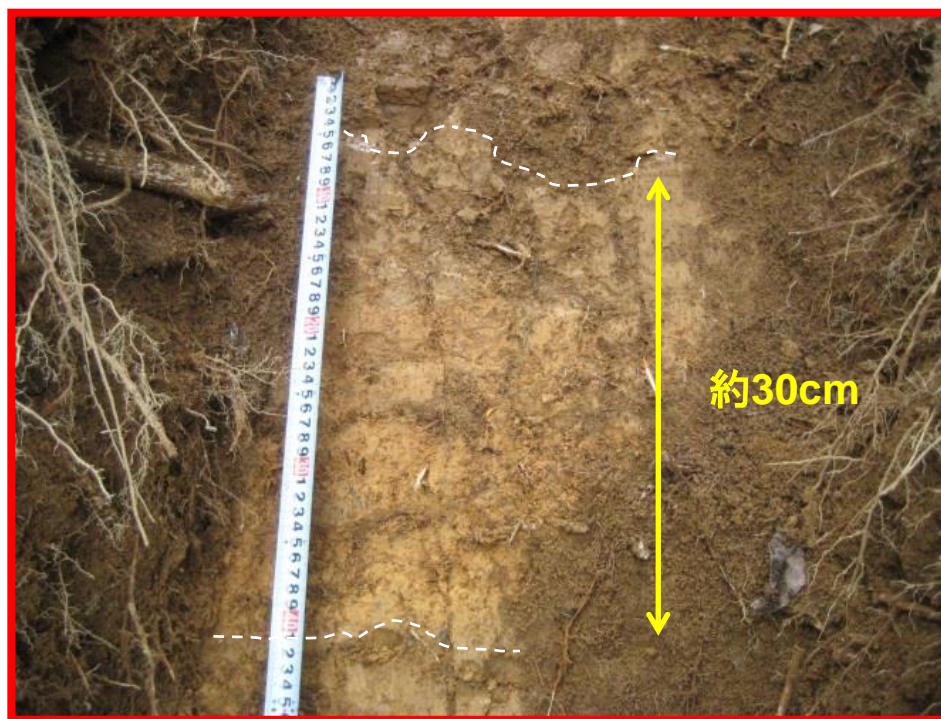


露頭全景



露頭位置図

粘土化した軽石からなる。
火山礫を含む。



示標テフラ(WP)

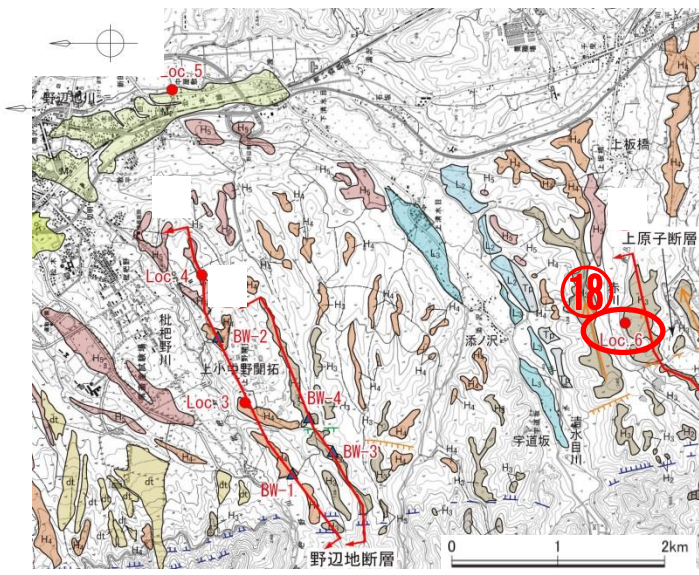
標尺 m	標高 E. L. +m	深度 G. L. -m	柱状 図	地質		色調	観察記事
				地層名	層相		
1	105.70	0.30		火山灰層	クロボク	黒褐	0.00~0.30m ・クロボク。
	105.30	0.70			ローム	黄褐	0.30~5.35m ・テフラを挟むローム。
	104.90	1.10	▲▲▲		To-Rd		0.70~1.10m ・径1~5mmの火山礫を含む。
	104.50	1.50			ローム		1.50~1.70m ・ガラス質細粒火山灰。
2	104.30	1.70	^^^	Toya	黄褐	・パッチ状に挟在。	
	103.45	2.55		ローム		2.55~3.15m ・角閃石に富む橙色軽石。	
3	102.85	3.15	○○○	オレンジテフラ (OrP)	橙		
	101.65	4.35		ローム	黄褐	4.35~4.65m ・火山礫を含む粘土化した軽石。	
5	101.35	4.65	○○○	甲地軽石 (WP)			
		100.65	5.35		ローム		

露頭柱状図

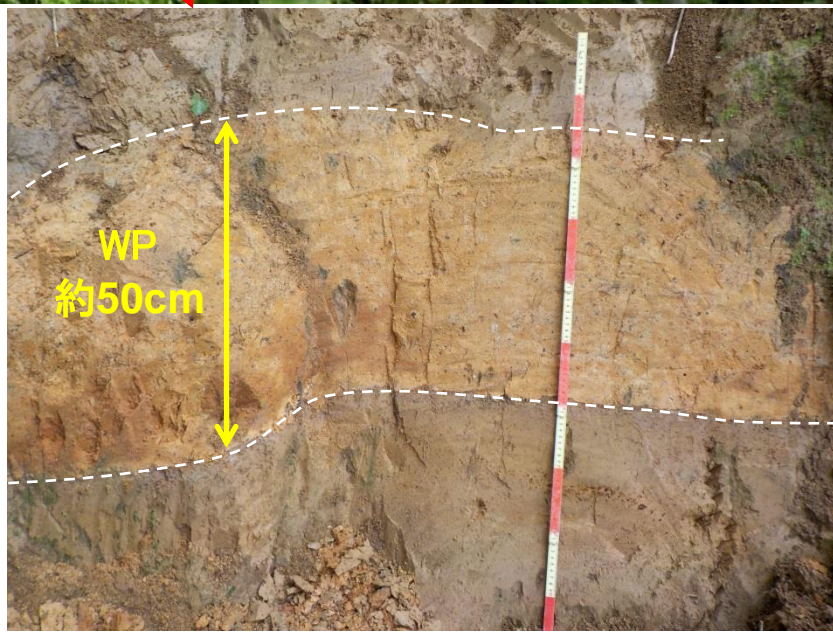
(参考11) 甲地軽石の火山から敷地にかけての堆積状況
〔⑱東北町 露頭〕



露頭全景



露頭位置図



粘土化した軽石からなる。
上部に径5mmの火山礫を含む。

標高 m	標高 E.L. +m	深度 G.L. -m	柱状 図	地質		色調	観察記事
				地層名	層相		
1	137.05	0.95		ローム	褐	0.00~11.00m ・テフラを挟むローム。	
	137.00	1.00				Taya	
	136.4	1.60	⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙	オレンジテフラ (OrP)	黄橙	1.60~2.60m ・径5mmの橙色軽石。 ・角閃石に富む。 ・最下部に厚さ10cmの 細粒火山灰を伴う。	
2	135.40	2.60					
3				ローム	褐		
4	133.80	4.20					
	133.30	4.70	⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙	甲地軽石 (WP)	橙	4.20~4.70m ・粘土化した軽石。 ・上部に径5mmの火山 角礫を含む。	
5				山灰層			
6				ローム	灰褐		
7							
8	129.70	8.30		八甲田第二期 火砕流堆積物 (Hkd2)	赤褐 黄橙	8.30~9.80m ・石英、斜長石の斑晶を 含む火山灰。 ・最下部に厚さ10cmの 結晶質火山灰を伴う。	
9	129.70	9.80				溶結 灰平	
10				ローム	褐灰	9.80~10.00m 腐植が混る。	
11	127.00	11.00					
12	126.00	12.00	⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙ ⊙	砂礫	黄褐	11.00~15.00m ・径3~5cm(最大10cm) の安山岩円礫を主とする 砂礫。 ・岩芯まで風化が及んだ クサリ礫を伴う。 ・シルトや軽石層を挟む	
	125.50	12.50		高位段丘堆積層	軽石	橙	12.00~12.50m ・径3~5mmの橙色軽石
13				砂礫	黄褐		
14							
15	123.00	15.00					

露頭柱状図